

よし　たけ
吉武遺跡群

XI

飯盛・吉武圃場整備事業関係調査報告書 5

—弥生時代墓地の調査報告 2 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 600 集

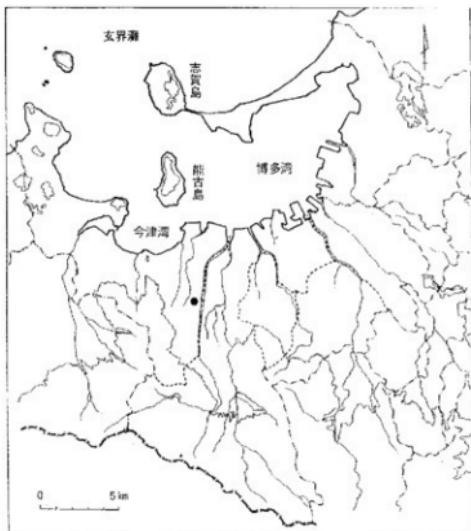
1999

福岡市教育委員会

よし たけ
吉 武 遺 跡 群
XI

飯盛・吉武圃場整備事業関係調査報告書 5

福岡市埋蔵文化財調査報告書第600集



遺跡略号: Y S T
1・2・4・6・8・9次
調査番号: 8102, 8234, 8335
8416, 8518, 8535

1999

福岡市教育委員会



桶渡墳丘墓全景（西から）



墳丘内斎棺墓出土状況（南から）

序

古来より人陸の門戸であった福岡市域には、アジアとの交流を示す多くの文化財が市内各所に残されています。

この中でも特に、市西郊の室見川左岸に広がる吉武遺跡群は、弥生～奈良時代にわたる長期の遺跡が数多く分布する地域として知られています。

さて、この地域では昭和56年度より飯盛・吉武地区農業基盤整備事業の施工に伴い、工事によってやむなく消滅する埋蔵文化財について、事前に発掘調査による記録保存が必要となり、当年度より事業が完結する昭和60年度まで調査を継続しました。

発掘調査の結果、紀元前二世紀に遡る弥生時代の豊富な青銅器を多く副葬した特定集団の墓地や大型建物群、紀元前後の弥生時代の墳丘墓、古墳時代中期の前方後円墳・円墳群及び集落址、奈良時代末～平安時代にかけての官衙あるいは寺院址など各時代の遺構が検出されました。

本書は弥生時代の墓地を収録したのですが、あまりにも出土数が多いため今回は弥生時代中期～後期の墓地の一部を収録しました。本書が埋蔵文化財への理解と認識を深める手助けとなり、また学術研究や学校、社会教育の分野において役立てていただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査にかかる飯盛・吉武土地改良組合、地元作業員および市農林水産局の方々、報告書にかかわった方々をはじめ、本遺跡の史跡指定について強力なご理解とご協力をいただきました地権者の方々に対し、心より感謝申し上げる次第です。

平成11年3月30日

福岡市教育委員会

教育長 町 田 英 俊

例　　言

1. 本書は飯盛・吉武地区土地改良事業（圃場整備）に伴い発掘調査を実施した福岡市西区大字飯盛・吉武地内に所在する古武遺跡群の弥生時代中期～後期にかけての墓地についての発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は福岡市教育委員会文化課埋蔵文化財課が昭和56年度から昭和60年度にわたって実施した。
3. 発掘調査で検出した各遺構は、その種類毎に記号を付し、土壙を S K、溝状遺構を S D、堅穴住居址を S C、掘立柱建物を S B、ピットを S P、慶棺墓を K と表記した。
4. 本書は調査された各時代遺構の内、弥生時代の墓地（中期～後期）を中心に報告するものである。
5. 本書に使用した遺構実測図の作成は、調査担当者の他に別記の調査員が行い、また、遺物実測は担当者のほかに大庭友子が行った。
6. 本書に使用した図面類の整岡および製図は、安野良、副田則子、大庭友子が行った。
7. 本書に使用した写真は、空中写真を（有）空中写真企画に委託し、他は二宮忠司（第一～二次）、下村智（第三～四次）、横山邦継（第五次）、力武卓治（第六次）が行った。
8. 本書で使用した方位は、すべて磁北である。真北は西偏に6°21'である。
9. 本書の執筆は、第一章～第三章を二宮忠司・大庭友子、第四章を横山邦継、第五章を力武卓治が担当し、それぞれが編集した。
10. 発掘調査によって出土した遺物や図面・写真等の記録類は収蔵要項に基づき整理し、埋蔵文化財センターに保管・管理する予定である。
11. 採図・図版内に記した番号は遺物登録番号を示す。又、写真図版内にある番号は遺物登録番号・採図番号・写真番号である。
12. 表紙題字は杉山悦子氏にお願いした。記して感謝いたします。

本文目次

第一章はじめに	1
第二章第一次調査—弥生時代の墓地の調査—	9
第一節第一次調査の概要	9
1. II区検出の中期甕棺墓	18
(1) 甕棺墓	18
(2) 出土遺物	18
2. III区検出の中期甕棺墓	23
(1) 甕棺墓	23
(2) 出土遺物	25
3. IV区検出の甕棺墓と石蓋土壙	28
(1) 甕棺墓	28
(2) 石蓋土壙	59
(3) 出土遺物	61
第三章第二次調査—弥生時代の墓地の調査—	77
第一節第二次調査の概要	77
1. VII区検出の弥生時代遺構	80
(1) 甕棺墓	80
第一・二次調査のまとめ	82
第四章第三次調査—植波墳丘墓の調査—	85
1. 甕棺墓	86
2. 土壙	104
3. 石棺墓	104
4. おわりに	108
第五章第六次調査(大石地区)	109
(1) 甕棺墓	109

挿 図 目 次

Fig. 1	吉武遺跡群位置図(縮尺1/50,000)	6
Fig. 2	吉武遺跡群と周辺遺跡(縮尺1/8,000)	7
Fig. 3	調査区配置図(第一～第六次調査)(縮尺1/4,000)	8
Fig. 4	第一次調査遺構全体図	14・15
Fig. 5	第一次調査弥生時代遺構配置図(II区)	16
Fig. 6	第一次調査II区甕棺墓配置図(縮尺1/80)	17
Fig. 7	第一次調査II区甕棺墓出土状況・配列・甕棺尖削図(縮尺1/6, 1/20, 1/40)	19
Fig. 8	第一次調査III区全体図(縮尺1/500)	20
Fig. 9	第一次調査III区甕棺墓配置図-1(縮尺1/100)	21
Fig.10	第一次調査III区甕棺墓配置図-2(縮尺1/50)	22
Fig.11	第一次調査III区甕棺墓実測図-1(縮尺1/30)	24
Fig.12	第一次調査III区甕棺墓実測図-2(縮尺1/30)	25
Fig.13	第一次調査III区甕棺尖削図(縮尺1/10)	26
Fig.14	第一次調査IV区遺構配置図(縮尺1/300)	27
Fig.15	第一次調査IV区甕棺墓グループ図-1(Aグループ)(縮尺1/80)	29
Fig.16	第一次調査IV区甕棺墓グループ図-2(Bグループ)(縮尺1/100)	30
Fig.17	第一次調査IV区甕棺墓グループ図-3(Cグループ)(縮尺1/100)	31
Fig.18	第一次調査IV区甕棺墓グループ図-4(Dグループ)(縮尺1/100)	32
Fig.19	第一次調査IV区甕棺墓グループ図-5(Eグループ)(縮尺1/100)	33
Fig.20	第一次調査IV区甕棺墓実測図-1(縮尺1/30)	34
Fig.21	第一次調査IV区甕棺墓実測図-2(縮尺1/30)	36
Fig.22	第一次調査IV区甕棺墓実測図-3(縮尺1/30)	38
Fig.23	第一次調査IV区甕棺墓実測図-4(縮尺1/30)	40
Fig.24	第一次調査IV区甕棺墓実測図-5(縮尺1/30)	42
Fig.25	第一次調査IV区甕棺墓実測図-6(縮尺1/30)	44
Fig.26	第一次調査IV区甕棺墓実測図-7(縮尺1/30)	46
Fig.27	第一次調査IV区甕棺墓実測図-8(縮尺1/30)	48
Fig.28	第一次調査IV区甕棺墓実測図-9(縮尺1/30)	50
Fig.29	第一次調査IV区甕棺墓実測図-10(縮尺1/30)	52
Fig.30	第一次調査IV区甕棺墓実測図-11(縮尺1/30)	54
Fig.31	第一次調査IV区甕棺墓実測図-12(縮尺1/30)	56
Fig.32	第一次調査IV区甕棺墓実測図-13(縮尺1/30)	58
Fig.33	第一次調査IV区甕棺墓実測図-14(縮尺1/30)	60
Fig.34	甕棺尖削図-1(縮尺1/10)	62
Fig.35	甕棺尖削図-2(縮尺1/10)	64
Fig.36	甕棺尖削図-3(縮尺1/6)	65
Fig.37	甕棺尖削図-4(縮尺1/10)	66
Fig.38	甕棺尖削図-5(縮尺1/6, 1/10)	68
Fig.39	甕棺尖削図-6(縮尺1/6, 1/10)	69
Fig.40	甕棺尖削図-7(縮尺1/6)	72
Fig.41	甕棺尖削図-8(縮尺1/6)	73
Fig.42	甕棺尖削図-9(縮尺1/6)	74
Fig.43	甕棺尖削図-10(縮尺1/10)	76
Fig.44	第二次調査弥生時代遺構配置図(VII区)(縮尺1/300)	78
Fig.45	第二次調査VII区甕棺墓配置図・甕棺墓・甕棺尖削図(縮尺1/10, 1/30, 1/100)	79
Fig.46	形式分類-1(縮尺1/8, 1/20)	81
Fig.47	形式分類-2(縮尺1/12, 1/20)	83
Fig.48	横渡墳丘位置図(1/5,000)	85
Fig.49	横渡墳丘出土状況全体図(1/100, 1/150)(コンタ-は黒色バンド除去後に測量)折込み	
Fig.50	K03・04・63・66・68・69・87号甕棺墓出土状況実測図(1/30)	87
Fig.51	K03・04・63・66・68・69・87号甕棺墓実測図(1/8)	88
Fig.52	K01・02・70・73号甕棺墓出土状況実測図(1/30)	89
Fig.53	K01・02・70・73号甕棺墓実測図(1/12)	90
Fig.54	K90号甕棺出土状況実測図(1/30)	91
Fig.55	K79・92号甕棺墓出土状況尖削図(1/30)	91
Fig.56	K79・90・92号甕棺尖削図(1/8, 1/12)	92
Fig.57	K72・76・86・89号甕棺墓出土状況実測図(1/30)	93
Fig.58	K72・76・86・89号甕棺実測図(1/12)	95

Fig.59	K65・78・91号墓棺墓出土状況実測図(1/30)	96
Fig.60	K65・78・91号墓棺実測図(1/12)	97
Fig.61	K67・71・88号墓棺墓出土状況実測図(1/30)	98
Fig.62	K67・71・88号墓棺実測図(1/12)	99
Fig.63	SK93土塼出土状況実測図(1/30)	100
Fig.64	SK93上塼出土土器実測図(1/6)	101
Fig.65	S013号棺墓出土状況実測図(1/30)	102
Fig.66	墳丘墓出土墓棺一覧図	106
Fig.67	九州発見墳丘墓集成	107
Fig.68	大石地区弥生墓地平面図(1/300)	110
Fig.69	K37号墓棺墓出土状況図(1/30)	116
Fig.70	K37号墓棺実測図(1/10)	115
Fig.71	K38号墓棺墓出土状況図(1/30)	116
Fig.72	上塼の底部	116
Fig.73	K38号墓棺実測図(1/10)	116
Fig.74	K41号墓棺墓出土状況図(1/30)	117
Fig.75	K41号墓棺実測図(1/10)	117
Fig.76	K42号墓棺墓出土状況図(1/30)	118
Fig.77	K42号墓棺実測図(1/10)	118
Fig.78	K59号墓棺墓出土状況図(1/30)	119
Fig.79	K59号墓棺墓実測図(1/10)	119
Fig.80	大石地区的発掘作業	119
Fig.81	K113号墓棺墓出土状況図(1/30)	120
Fig.82	K113号墓棺実測図(1/10)	120
Fig.83	K115号墓棺墓出土状況図(1/30)	121
Fig.84	K115号墓棺墓実測図(1/10)	121
Fig.85	K119号墓棺墓出土状況図(1/30)	122
Fig.86	K119号墓棺墓実測図(1/10)	122
Fig.87	K125号墓棺墓出土状況図(1/30)	123
Fig.88	K125号墓棺実測図(1/10)	123
Fig.89	K132号墓棺墓出土状況図(1/30)	124
Fig.90	K132号墓棺墓実測図(1/10)	124
Fig.91	K132号墓棺出土状況	124
Fig.92	K134号墓棺墓出土状況図(1/30)	125
Fig.93	K125号墓棺実測図(1/10)	125
Fig.94	K146号墓棺墓出土状況図(1/30)	126
Fig.95	K146号墓棺墓実測図(1/10)	126
Fig.96	K148号墓棺墓出土状況図(1/30)	127
Fig.97	K148号墓棺墓実測図(1/10)	127
Fig.98	K151号墓棺墓出土状況図(1/30)	128
Fig.99	K151号墓棺墓実測図(1/10)	128
Fig.100	K154号墓棺墓出土状況図(1/30)	129
Fig.101	K154号墓棺墓実測図(1/10)	129
Fig.102	墓棺蓋の実測作業	129
Fig.103	K162号墓棺墓出土状況図(1/30)	130
Fig.104	K162号墓棺墓実測図(1/10)	130
Fig.105	K180号墓棺墓出土状況図(1/30)	131
Fig.106	K180号墓棺墓実測図(1/10)	131
Fig.107	K181号墓棺墓出土状況図(1/30)	132
Fig.108	K181号墓棺墓実測図(1/10)	132
Fig.109	K185号墓棺墓出土状況図(1/30)	133
Fig.110	K185号墓棺墓実測図(1/10)	133
Fig.111	K185号墓棺蓋出土状況	133
Fig.112	K186号墓棺墓出土状況図(1/30)	134
Fig.113	K186号墓棺墓実測図(1/10)	134
Fig.114	K188号墓棺墓出土状況図(1/30)	135
Fig.115	K188号墓棺墓実測図(1/10)	135
Fig.116	K188号墓棺蓋出土状況	135
Fig.117	大石地区弥生墓地の変遷	136
Fig.118	視察中の森吉次郎先生	136

図 版 目 次

巻頭図版 桶渡墳丘墓全景（西から） 墳丘内甕棺墓出土状況（南から）

- | | |
|--|--------------------------|
| PL. 1 第一次II・III区検出甕棺墓出土状態 | PL. 2 第一次III区検出甕棺墓出土状態-1 |
| PL. 3 第一次IV区検出甕棺墓出土状態-2 | PL. 4 第一次IV区検出甕棺墓遺景 |
| PL. 5 第一次IV区検出甕棺墓出土状態-1 | PL. 6 第一次IV区検出甕棺墓出土状態-2 |
| PL. 7 第一次IV区検出甕棺墓出土状態-3 | PL. 8 第一次IV区検出甕棺墓出土状態-4 |
| PL. 9 第一次IV区検出甕棺墓出土状態-5 | PL. 10 第一次IV区検出甕棺墓出土状態-6 |
| PL.11 瓢形土器-1 | PL.12 瓢形土器-2 |
| PL.14 1. 調査前の桶渡墳丘墓全景(東から) 2. 桶渡墳丘墓横川状況(東から) | |
| PL.15 1. 桶渡墳丘墓周辺空撮(北西から) 2. 桶渡墳丘墓全景(北から) | |
| PL.16 1. 桶渡墳丘墓立派景(南から) 2. 桶渡墳丘墓東西土層断面(北から)
3. 桶渡墳丘墓西側土層断面(南西から) | |
| PL.17 1. K64~68号甕棺墓・木棺墓出土状況(南から) 2. K69~73号甕棺墓出土状況(東から) | |
| PL.18 1. K77号甕棺墓出土状況(東から) 2. K90号甕棺墓出土状況(西から) | |
| PL.19 1. K77号甕棺墓出土状況(南から) 2. 桶渡墳丘墓西側土層断面(北西から) | |
| PL.20 1. K63号甕棺墓出土状況(北から) 2. K79号甕棺墓出土状況(北から) 3. K87号甕棺墓出土状況(西から)
4. K92号甕棺墓出土状況(南から) | |
| PL.21 1. K88号甕棺墓出土状況(西から) 2. K89号甕棺墓出土状況(東から) | |
| PL.22 1. K91号甕棺墓出土状況(東から) 2. S01石棺墓及びSK93土塙出土状況(北から) | |
| PL.23 K02・04・65・67・70号甕棺 | |
| PL.24 K71・72・73・76号甕棺 | |
| PL.25 K78・79・86・87号甕棺 | |
| PL.26 K88・89・91号甕棺 | |
| PL.27 K63・66・68・90・03号甕棺 | |
| PL.28 K69・92号甕棺 | |
| PL.29 SK93土塙出土土器 | |
| PL.30 発掘調査前の大石地区 大石地区弥生墓地 | |
| PL.31 大石地区甕棺墓出土状況 | |
| PL.32 大石地区甕棺墓出土状況 | |
| PL.33 祭祀土壠 | |
| PL.34 K38 K42 K113 K115 | |
| PL.35 K119 K125 K146 K151 | |
| PL.36 K148 K162 K181 K186 | |
| PL.37 K37 K41 K59 K154 K185 K188 | |

表 目 次

Tab. 1 吉武遺跡群調査一覧	2
Tab. 2 古武道跡第一・二次調査検出甕棺墓・木棺墓一覧	11
Tab. 3 吉武遺跡第一・二次調査弥生時代中期以降検出甕棺墓一覧-1	12
Tab. 4 吉武遺跡第一・二次調査弥生時代中期以降検出甕棺墓一覧-2	13
Tab. 5 桶渡墳丘墓検出甕棺一覧表	103
Tab. 6 墳丘墓出土甕棺法量表	105
Tab. 7 吉武遺跡第六次調査出土甕棺墓一覧-1	111
Tab. 8 吉武遺跡第六次調査出土甕棺墓一覧-2	112
Tab. 9 吉武遺跡第六次調査出土甕棺墓一覧-3	113
Tab.10 吉武遺跡第六次調査出土甕棺墓一覧-4	114

第一章　はじめに

1. 調査に至る経過

吉武遺跡群発掘調査のきっかけとなったのは、昭和55(1980)年6月11日に農林水産局農業構造改善部農業土木課より教育委員会文化部文化課に提出された福岡市西区の『飯盛・吉武団体営園場整備事業』計画である。

当初の整備計画では、対象面積46.4haの内、昭和55年度—3.6ha・昭和56年度—9.0ha・昭和57年度以降—33.8haを整備するものであった。このうち昭和55年度対象地区は、地形的に明らかに東側を流れる宝見川の比較的新しい氾濫源であることと工事施工の上で殆ど影響を受けないために本調査からは除外した。

昭和56年度以降の対象地は、昭和44年に行われた九州大学による分布調査やその後の市教育委員会の遺跡分布調査によって、全域に弥生～古墳時代の遺物が散布することがしらべていた。

教育委員会文化課では、昭和56年度事業地(対象7.5ha)について試掘調査(56年6月16～19日・7月8～10日)を実施して遺構内容の把握を行ったところ、弥生時代前期～後期にかけての竪棺墓群や竪穴式住居址・溝・柱穴群など弥生時代～古墳時代にかけての遺構が、全体に広がっていることが明らかとなった。この後、この成果をもとに対象地のうち、造成工事に伴って遺構の失われる切土・構造物(道路・水路)部分などの範囲を確定するために事業者と協議を重ね昭和56年11月1日より本格的な調査を開始した(第一次調査)。

第一次調査以降、工事施工と発掘調査が時期的に重複するため、各事業年度での発掘調査規模を設計変更などで調査面積を最低に押さえるための協議が土地改良組合、文化課、事業指導課(農業土木課)と定期的にもたれ、事業の円滑な推進が計られた。

また、園場整備で六次にわたって調査された吉武遺跡群のうち、豊富な青銅製武器・鏡・玉などの副葬品を伴う古武高木弥生墓地(第四・五次)や古武大石弥生墓地(第六次)の一部は、弥生時代の墓制を考える上で学術的に非常に価値が高く、地権者の理解をえて国史跡『吉武遺跡』として永久に保存されることとなった。

2. 調査の組織

昭和56年度の調査関係者は下記の通りである。

【調査委託】 農林水産局農業土木課、飯盛・吉武地区土地改良組合

【調査主体】 福岡市教育委員会 教育長 西津茂美

【調査総括】 文化課 甲能貞行

埋蔵文化財係長 柳田純孝

【調査庶務】 文化課 岡島洋一

【調査担当】 発掘調査 二宮忠司、田中壽夫、小林義彦 試掘調査 横山邦雄

【整理調査員】 大庭友子

【整理作業員】 牛尾美保子、海内美也子、尾崎京子、齊藤美紀枝、真名子順子、太田順子、武田祐子

【調査作業員】 青柳弘子、石橋輝江、伊藤みどり、牛尾秋子、牛尾シキヲ、牛尾准一、牛尾二三子、牛尾波美江、大内文恵、大穂朝子、大穂栄子、尾崎達也、

Tab.1 吉武遺跡群調査一覧(平成11年1月現在)

次次	調査番号	遺跡名	調査地地図	分布地図番号	調査区域	調査面積	調査期間	調査担当者	既刊報告書
1次	8102	YST 1	飯盛地区 (廻場整備一次)	092-A-12 (0405)	83,000	12,000	1981.11.1~ 1982.3.5	二宮忠司 田中義夫 小林義彦	福岡市埋蔵文化財 調査報告書第437集 第514集、第580集、 第600集
2次	8234	YST-2	飯盛地区 (廻場整備二次)	092-A-12 (0405)	79,000	21,000	1982.9.1~ 1983.2.15	二宮忠司	調査報告書第437集 第514集、第580集、 第600集
3次	8235	YST-3	飯盛地区 (田・飯盛株一次)	092-A-12 (0405)	5,200	5,200	1982.9.22~ 1983.2.12	山崎龍雄 二宮忠司	福岡市埋蔵文化財 調査報告書第127集
4次	8335	YST 4	吉武字高木 (廻場整備三次)	092-A-12 (0405)	101,000	25,000	1983.9.12~ 1984.3.24	下村 智 横山邦雄	調査報告書第143集 第437集、第461集、 第514集、第580集、 第600集
5次	8415	YST-5	飯盛地区 (田・飯盛株二次)	093-A-10 (0405)	1,600	1,600	1984.4.13~ 1984.5.31	横石哲也 二宮忠司	福岡市埋蔵文化財 調査報告書第194集
6次	8416	YST 6	吉武字高木 (廻場整備四次)	093-A-10 (0405)	70,000	36,000	1984.7.1~ 1985.3.20	下村 智 横山邦雄 青松幹雄	調査報告書第143集 第437集、第461集、 第514集、第580集、 第600集
7次	8426	YST-7	吉武地区 (野方・金武経) (第一次)	093-A-7 (0405)	1,200	1,050	1985.3.26~ 1985.5.5	下村 智 横山邦雄	調査報告書第187集
8次	8518	YST-8	吉武字高木 (廻場整備五次)	093-A-10・ 12 (0405)	70,000	470	1985.7.2~ 1985.7.24	横山邦雄	調査報告書第437集 第461集、第514集、 第580集、第600集
9次	8535	YST-9	古武地区 (廻場整備六次)	093 A-10 (0405)	106,000	23,000	1985.7.2~ 1986.3.31	力武卓治 下村 智 青松幹雄 加藤良彦	調査報告書第437集 第461集、第514集、 第580集、第600集
10次	8650	YST-10	吉武地区 (廻場整備)	092-A-12 (0405)	5,000	5,000	1986.11.17~ 1987.2.27	力武卓治 青松幹雄	調査報告書第437集
11次	8662	YST-11	吉武地区 (野方・金武経) (第二次)	093-A-2 (0405)	4,320	3,780	1987.3.1~ 1987.5.10	二宮忠司 佐藤一郎	調査報告書第303集

尾崎八重、金子ヨシ子、菊池栄子、菊池キミ、菊池ミツヨ、倉光千鶴子
 倉光三保、倉光ユキエ、萩田洋子、柳スマ子、柳太郎、柳光雄、柴田大正、
 白坂フサヲ、新町ナツ子、悠慶トミ子、高原ナヲ、高地幸枝、典略初、
 中牟田カエ、鍋山千鶴子、西島タミエ、西島初子、能美八重子、浜田澄美枝、
 林嘉子、平田タマエ、平田政子、平野ミサオ、藤タケ、藤崎友記、細川ミサヲ、
 又野栄子、真名子千恵子、真名子時雄、八尋君代、山下サノエ、結城君江、

結城千賀子、結城信子、横溝恵美子、横溝ユキエ、吉岡あつ子、吉岡アヤ子、吉岡貞代、吉岡竹子、吉岡タヤ子、吉岡蓮江、吉岡フサエ、吉岡文子、米島ハツネ、藤坂ミサヲ

昭和57年度の調査関係者は下記の通りである。

【調査委託】 農林水産局農業土木課、飯盛・吉武地区土地改良組合

【調査主体】 福岡市教育委員会 教育長 西津茂美

【調査総括】 文化課 生田征生

埋蔵文化財係長 柳田純孝

【調査庶務】 文化課 岡島洋一

【調査担当】 発掘調査 二宮忠司、山崎龍雄

【整理調査員】 大庭友子

【整理作業員】 牛尾美保子、海内美也子、尾崎京子、齊藤美紀枝、真名子順子

太田順子、武田祐子

【調査作業員】 青柳弘子、石橋輝江、伊藤みどり、牛尾秋子、牛尾シキヲ、牛尾準一、牛尾二三子、牛尾波美江、大内文恵、大穂朝子、大穂栄子、尾崎達也、尾崎八重、金子ヨシ子、菊池栄子、菊池キミ、菊池ミツヨ、倉光千鶴子、倉光三保、倉光ユキエ、小林ツチエ、蘿田洋子、柳スミ子、柳太郎、柳光雄、坂田セイ子、柴田大正、柴田常人、清水フミ代、白坂フサヲ、新町ナツ子、惣慶トミ子、高田マサエ、高原ナヲ、高地幸枝、典略初、舍川春江、中牟田サカエ、錦山千鶴子、西島タミエ、西島初子、西納トシエ、西納テル子、能美八重子、浜田澄美枝、林嘉子、平田タマエ、平田政子、平野ミサオ、藤タケ、藤崎友記、細川ミサヲ、又野栄子、松尾鈴子、松尾キミ子、松尾久代、真名子千恵子、真名子時雄、真鍋チエ子、八尋君代、山下サノエ、山西人美、結城君江、結城千賀子、結城信子、横溝恵美子、横溝ユキエ、吉岡あつ子、吉岡アヤ子、吉岡貞代、吉岡竹子、吉岡タヤ子、吉岡蓮江、吉岡フサエ、吉岡文子、米島ハツネ、藤坂ミサヲ

昭和58年度の調査関係者は下記の通りである。

【調査委託】 農林水産局農業土木課、飯盛・吉武地区土地改良組合

【調査主体】 福岡市教育委員会 教育長 西津茂美

【調査総括】 文化課長 生田征生

埋蔵文化財第2係長 折尾 学

【調査庶務】 埋蔵文化財第1係 岡島洋一、古藤国生

【調査担当】 発掘調査 下村智、横山邦継 試掘調査 田中壽夫

【調査・整理調査員】 田中克子、緒方俊輔

【調査作業員】 村本健二、溝口武司、中山章、牧重幸、川田初、橋哲也、大賀敏明、青柳貴子、青柳弘子、青柳陽子、池田由美、石橋洋子、井上カズ子、井上喜美子、井上清子、井上千代子、井上トミ子、井上ヒデ子、井上鷹智子、井上ムツ子、鬼尾喜代子、岸田浩、清末シズエ、倉光アヤ子、倉光京子、倉光千鶴子、倉光イワ子、倉光スマ子、倉光ナツ子、倉光信子、倉光初江、小柳和子、

齊藤国子、柴田恵子、柴田タツ子、柴田春代、滝良子、高松美智子、
筒井ひとみ、堤直代、土斐崎つや子、富崎栄子、富崎フミ子、富永ミツ子、
鳥飼タキ子、永井鈴子、中島栄子、中西ヒデ子、中西美由紀、中牟田チエ子、
中山サダ子、西島美千代、西原春子、野下久美子、花畠照子、原幸子、
原口マサ子、平田節子、平田美絵子、三角清子、溝口博子、宮原富代、
宮崎泰子、矢富富士子、柳井順子、柳浦八重子、山口タツエ、結城千代子、
吉岡朱美、吉岡津幾子、吉積ハル子、吉積フサノ、横溝恵美子、横溝チエ子、
脇坂マキノ

【整理作業員】 花畠照子、溝口博子、安野良、副田則子、伊藤美紀、鳥飼悦子、室以佐子、
坂井香代子、持原良子

昭和59年度の調査関係者は下記の通りである。

【調査委託】 農林水産局農業土木課、飯盛・吉武地区土地改良組合

【調査主体】 福岡市教育委員会 教育長 西津茂美

【調査総括】 埋蔵文化財課長 生田征生

埋蔵文化財第2係長 折尾 學

【調査庶務】 埋蔵文化財第1係 関島洋一、松延好文

【調査担当】 発掘調査 下村 智、横山邦繼、常松幹雄 試掘調査 田中壽夫

【調査・整理調査員】 田中克子、岩本陽児、矢野建一、緒方俊輔

【調査作業員】 村本健二、松田定美、溝口式司、池上宏、山下清作、平川謙一、沖浩人、
吉岡勝美、辻繁一郎、川田初、橘哲也、亀井照義、北園諭、藤嶋博明、
甲斐美佐江、末松一馬、青柳貴子、青柳弘子、青柳陽子、池田山美、石橋洋子、
井上カズ子、井上喜美子、井上清子、井上千代子、井上トミ子、井上ヒデ子、
井上廣智子、井上ムツ子、鬼尾喜代子、川口シゲノ岸田浩、木村厚子、
清木シズエ、倉光アヤ子、倉光京子、倉光千鶴子、倉光信子、倉光初江、
小林恵美子、小林ツチエ、小柳和子、齊藤国子、坂田セイ子、柴田常人、
柴田タツ子、柴田春代、白坂フサヨ、末永鶴子、高田マサエ、滝良子、
高松美智子、田中カヨ子、筒井ひとみ、土斐崎つや子、富崎栄子、富崎マチ子、
富永ミツ子、倉川春江、永井鈴子、中島栄子、中牟田チエ子、中山サダ子、
西山秀子、能美須賀子、花畠照子、原ハナエ、原口マサ子、平田千鶴子、
平田美絵子、堀尾久美子、松尾キミ子、松尾鈴子、松本育代、溝口博子、
溝口洋子、宮原富代、宮崎泰子、森山早苗、矢富富士子、柳井順子、
柳浦八重子、山口タツエ、山下アヤ子、山本キクノ、山田トキエ、結城千代子、
吉積エミ子、吉田勝代、横田松ノ、横溝恵美子、横溝カヨ子、横溝チエ子、
吉武早苗、脇坂マキノ、脇山喜代子

【整理作業員】 花畠照子、溝口博子、別府加代子、矢野隆子、安野良、副田則子、伊藤美紀
昭和60年度の調査関係者は下記の通りである。

【調査委託】 農林水産局農業土木課、飯盛・吉武地区土地改良組合

【調査主体】 福岡市教育委員会 教育長 西津茂美

【調査総括】 埋蔵文化財課長 柳田純孝

埋蔵文化財第2係長 飛高憲雄

【調査庶務】 埋蔵文化財第1係 岡島洋一、松延好文

【調査担当】 発掘調査 力武卓治、下村智、常松幹雄 加藤良彦

【調査・整理調査員】 田中克子、岩本陽児、矢野建一、緒方俊輔、樋口秀信、進藤敏雄、
樋口孝司

【調査作業員】 村本健二、松田定美、溝口武司、池上宏、山下清作、平川謙一、沖浩人、
吉岡勝美、辻繁一郎、川田初、橘哲也、亀井照義、北園諭、小路永智明、
藤嶋博明、甲斐美佐江、末松一馬、青柳貴子、青柳弘子、青柳洋子、池田由美、
石橋洋子、井上カズ子、井上喜美子、井上清子、井上千代子、井上トミ子、
井上ヒデ子、井上慶智子、井上ムツ子、鬼尾喜代子、川口シゲノ、岸田浩、
木村厚子、清末シズエ、倉光アヤ子、倉光京子、倉光千鶴子、倉光信子、
倉光初江、小林恵美子、小林ツチエ、小柳和子、齊藤国子、坂田セイ子、
柴田常人、柴田タツ子、柴田春代、白坂フサヨ、木永鶴子、高田マサエ、
滝良子、高松美智子、田中カヨ子、筒井ひとみ、土斐崎つや子、富崎栄子、
富崎マチ子、富永ミツ子、舎川春江、永井鉢子、中島栄子、中牟田チエ子、
中山サダ子、西山秀子、能美須賀子、花畠照子、原ハナエ、原ロマサ子、
平田千鶴子、平田美絵子、堀尾久美子、松尾キミ子、松尾鉢子、松本育代、
溝口博子、溝口洋子、宮原富代、宮崎泰子、森山早苗、矢富富士子、柳井順子、
柳浦八重子、山口タツエ、山下アヤ子、山本キクノ、山田トキエ、結城千代子、
吉積エミ子、吉田勝代、横田松ノ、横溝恵美子、横溝カヨ子、横溝チエ子、
吉武早苗、脇坂マキノ、脇山喜代子

【整理作業員】 花畠照子、溝口博子、別府加代子、矢野隆子、安野良、嗣田則子、伊藤美紀

凡　例

第一・二次調査での遺物登録番号を下記のように定めた。

福岡市では、遺物に対して五桁の番号を与える。そこで今回、第一・二次の遺構と遺物に対して区別を与えるため下記のように記した。

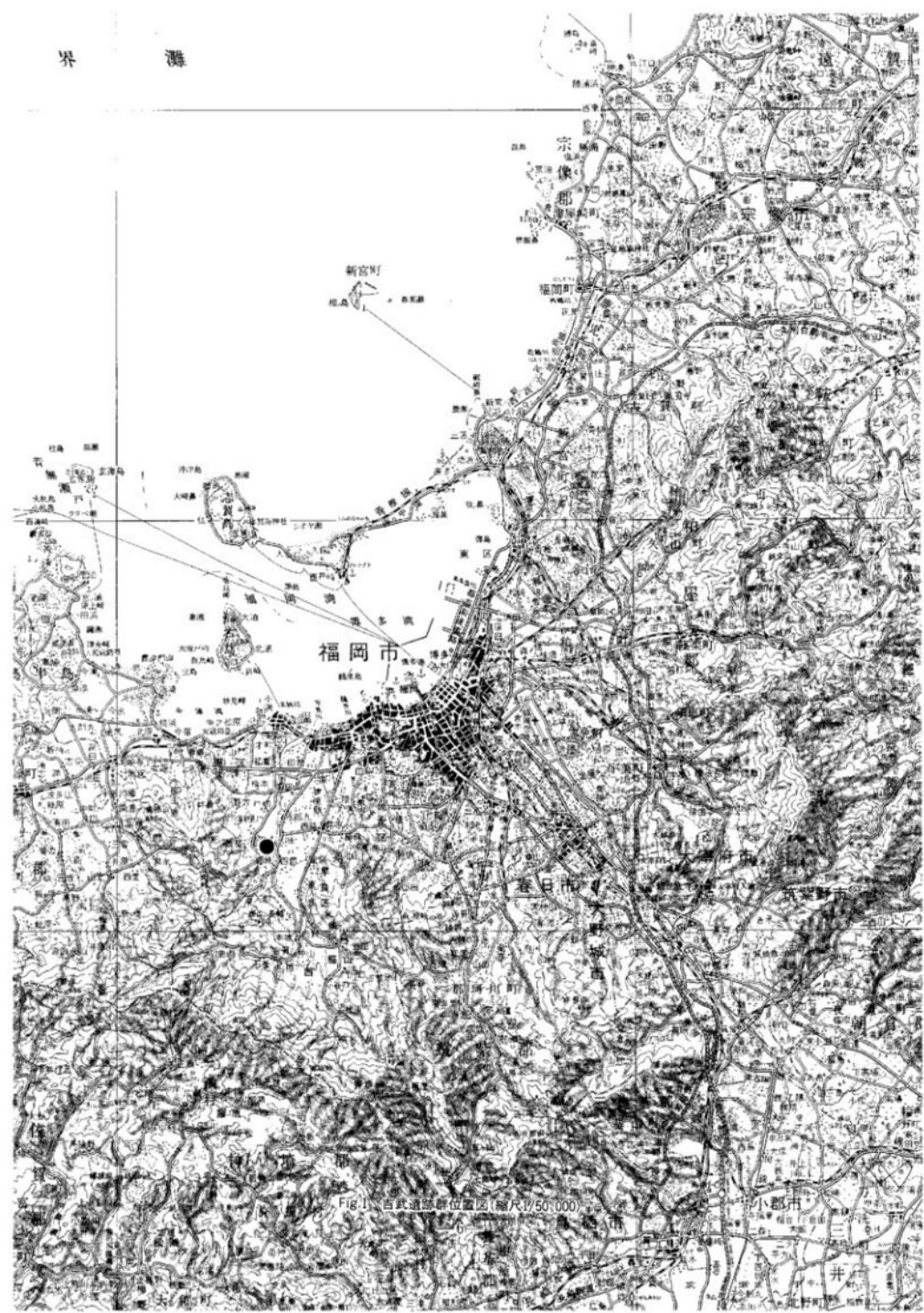
区	遺構	0	0	1

- 遺構は 0 - 挿立柱建物
1 - 住居址内遺物
2 - 溝出土遺物
3 - 壺棺墓及び副葬品
4 - 土壙墓
5 - 井戸
6 - 繩文時代貯蔵穴
7 - 石器
8 - 木製品
9 - 不明土壤

壺棺墓出土のうち、下棺、上棺の順で登録番号を付している。

界

灘



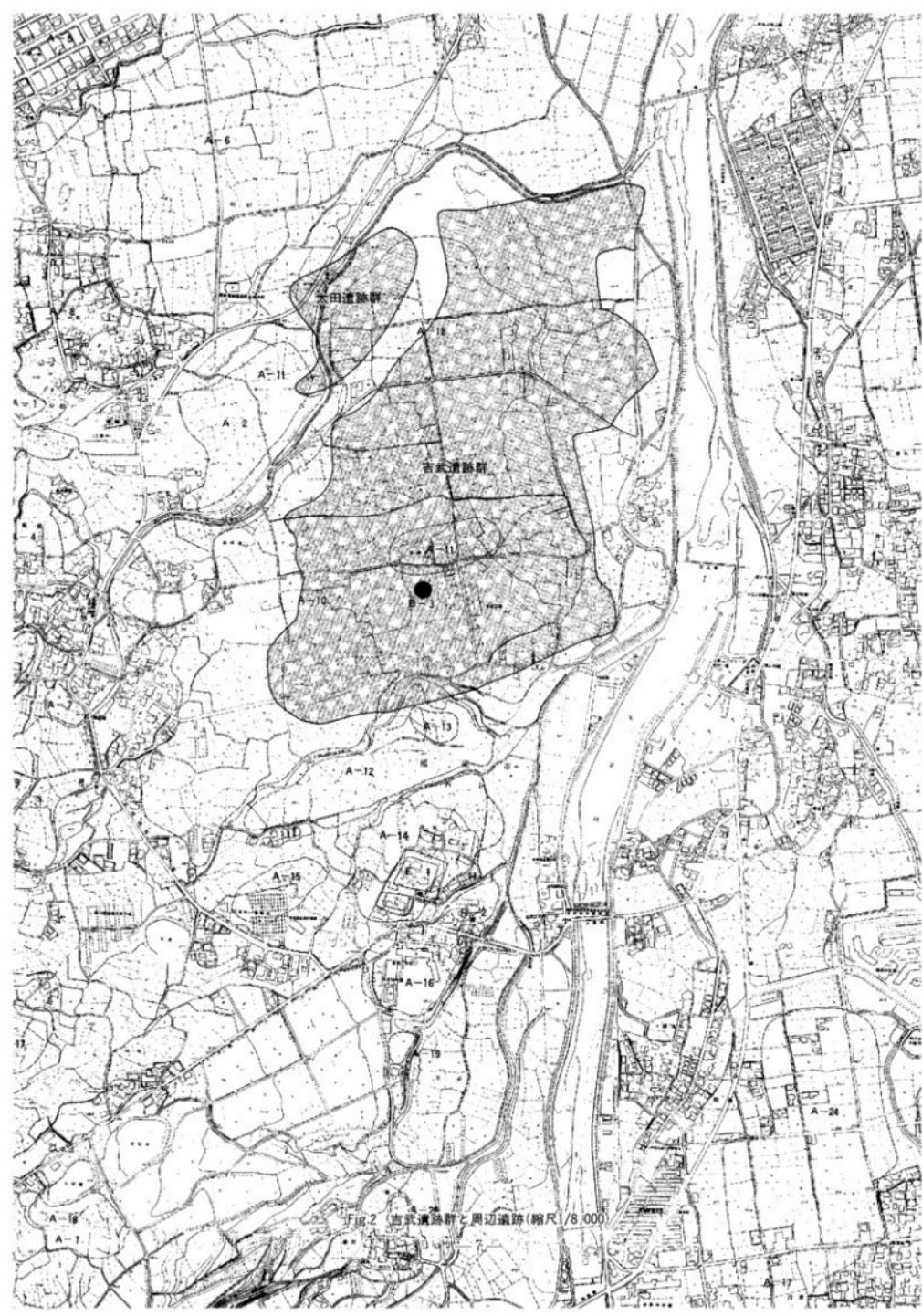


図2 吉武ジャンクションと周辺道路(縮尺1/8,000)



Fig.3 調査区配置図(第一—第六次調査)(縮尺1/4,000)

第二章 第一次調査－弥生時代の墓地の調査－

第一節 第一次調査の概要

飯盛地区圃場整備に伴う発掘調査

所在地 : 福岡市西区飯盛字本名地区
圃場整備面積 : 6ha
発掘調査対象面積 : 2.5ha
発掘調査面積 : 1.2ha
発掘調査年月日 : 昭和56年11月9日～57年3月10日

昭和56年7月に試掘調査を行い、発掘対象面積を盛土する部分を除いた2.5haの中で著しく削平を受ける1.2haを実際の調査面積とした。ただ耕作土排除後にすぐ検出される甕棺墓は破壊を免れないため調査の対象とした。全体の2.5haの内、区割りによりI区からIV区とした。これとは別に磁北を区割りの中心線とし東西・南北に100m単位でグリッドを設定し、将来の基準線とした。

I区の調査

掘立柱建物1棟と柵列を検出した。東側は段落ちとなり、宝見川の氾濫源ともしくは水田の可能性が考えられたが、削平されない所から調査から除外した。

II区の調査

今回の対象区の中でIV区とともに最も削平される部分が多く、8,000m²ある。この内完掘の必要な面積は4,000m²であった。IV区とともにII区も遺構の遺存状態がよく、上層に古墳時代初期の住居址・祭祀遺構等を検出し、下層からは弥生時代後期・中期の住居址等が検出された。また、弥生時代前期末の甕棺墓が44基と木棺墓4基を検出した。

古墳時代初期の住居址を9軒(方形)、祭祀遺構・土器窓が27基検出でき、弥生時代後期の住居址9軒、その内の1軒(SC-06)から石戈・石剣を出土した。弥生時代中期の円形住居址は16軒検出した。遺構の遺存状態は非常によく壁高が40~50cm程度残っているものも少なくない。弥生時代中期の甕棺墓は小児棺を2基検出した。弥生時代前期の甕棺墓は44基検出され、その内の1基は倒置棺であった。成人棺のうち2基から棺外副葬品(板付II式壺形土器、内1点は彩文土器)が出土した。

弥生時代中期に属する掘立柱建物は27棟検出され、弥生時代後期に属する掘立柱建物は6棟、古墳時代に属する掘立柱建物が20棟検出された。

III区の調査

III区全体で表土排除作業を行った面積は、4,000m²であるが、検出した遺構は甕棺墓14基と台地を切断する幅12~20mの河川である。この河川は断面調査の結果、両岸に柵列を検出し、底面付近から弥生時代中期初頭の土器が出土していることから河川を人工的に使用した可能性を持つ。また、人工的に手を加え使用した時期は底面から出土した弥生時代中期の土器を基準と考えてこの前後の可能性がある。ただ最上層から須恵器片が出土しているところから、この河川は急激に埋まったものと考えられ、時期も弥生時代～古墳時代の範疇に納まる。甕棺墓は河川を挟んで弥生時代中期中葉の5基(西側)と東側に弥生時代中期後半の9基が検出された。

IV区の調査

調査対象面積は、6,000m²で表土排除作業面積4,500m²である。検出した遺構は、弥生時代前期末の甕棺墓・住居址・溝・弥生時代前期・中期初頭～後半にかけての住居址・甕棺墓・井戸・掘立柱建物・中世の溝二条・井戸等を検出した。甕棺墓は165基検出し、その内24基が弥生時代前期末の金海式甕棺墓であり、122基が弥生時代中期、19基が後期の時期に属する。

以上のことから一次調査の問題点は

1. 弥生時代前期末の墓域について

一次調査の成果として弥生時代前期末から中期・後期・古墳時代・中世の遺構を検出し、連続した複合遺跡であることが判明した。特にII区に44基、IV区に24基と二ヶ所で弥生時代前期の墓域が検出された。この中でIV区の甕棺墓K-88の1基だけに棺内副葬品（細形銅剣の切先）が出土した点、棺外副葬品も3例しか認められないことに第一次調査の弥生時代前期末の甕棺墓の問題点を集約できる。本報告で弥生時代前期末～後期初頭の甕棺墓について明らかにしたい。

2. 住居址と甕棺墓について

II区の弥生時代中期の住居址群は中央部と東側・南側に位置する。これに対して甕棺墓は北側に東西に長く配列され、あたかも列埋葬を思わせる配置を呈する。

住居址は切合関係がみられるが、これは建替及び増築の要素を持つもので弥生時代中期の範疇に入るもので、その時間的経過も50年前後と考えられる。

IV区の中心部に甕棺墓が約100基ほど集中して検出された。その下層から弥生時代前期末～中期初頭にかけての方形・円形住居址が検出された。甕棺墓は弥生時代中期中葉～後期初頭の時期に限定されることから、住居址が破棄された直後に多量の土砂により完全に埋没し、その後墓域として甕棺墓が埋葬されたものと思われる。

3. II区における遺構の広がり

遺構の遺存状態が非常に良かったII区は上層に古墳時代の住居址・祭祀遺構等を検出し、下層に弥生時代中期・後期の住居址群を検出した。この他に弥生時代前期末の甕棺墓を検出し、II区がほかの地域よりも集中的に遺構が多いことが認められた。遺構の広がりは、西は河川部分まで達し、東はI区の台地段落部分にまで達している。今回遺構上面で終了したII区北側（盛土部分で遺構面まで掘削が達しない範囲）でも數十軒の堅穴式住居址を確認している。

4. I区の水田址の可能性について

I区の中央部に台地が急激に落ちる部分を検出した。これは北から南にほぼ放物線を描くように台地の端が認められた。これは宝見川の氾濫による蛇行時に作られた部分であり、水田址の可能性が高い地点と考えて良い。今回は調査対象外であったため、その実態は不明であるが、II・IV・V・VI区の集落を考えるとき水田の利用地としては、最適な場所であったと思われる。

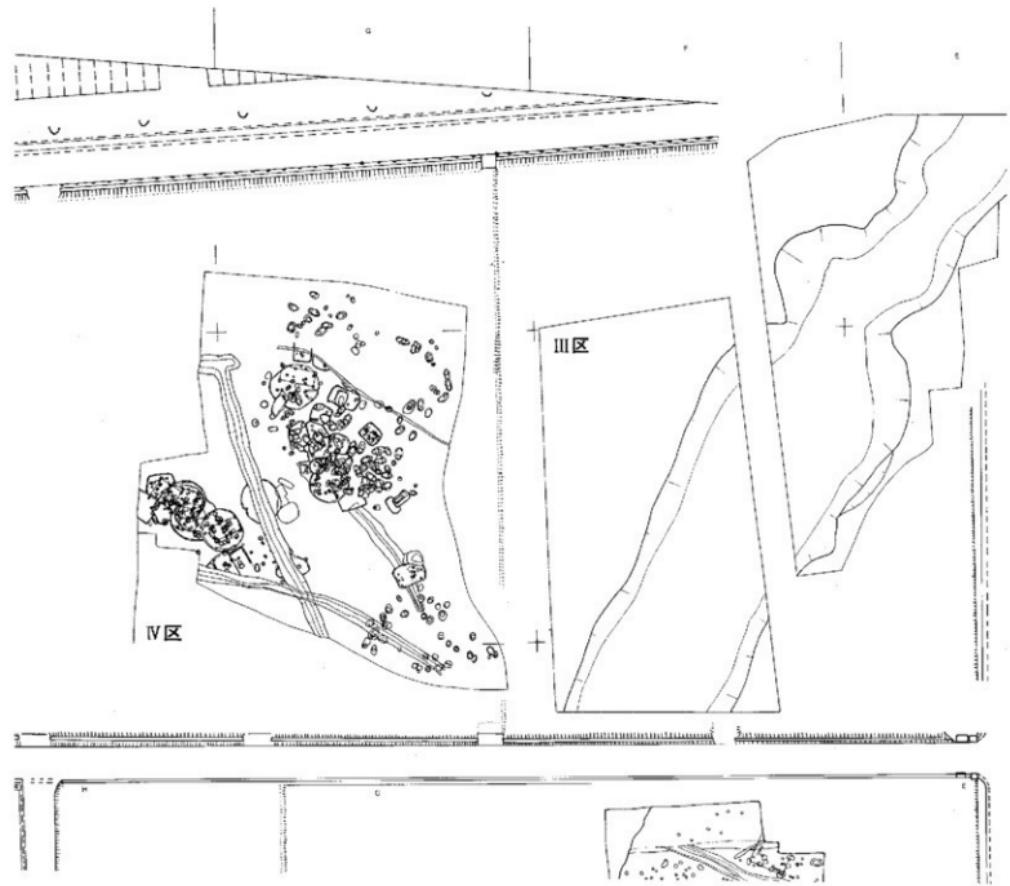


Fig.4 第一次調査遺構全体図



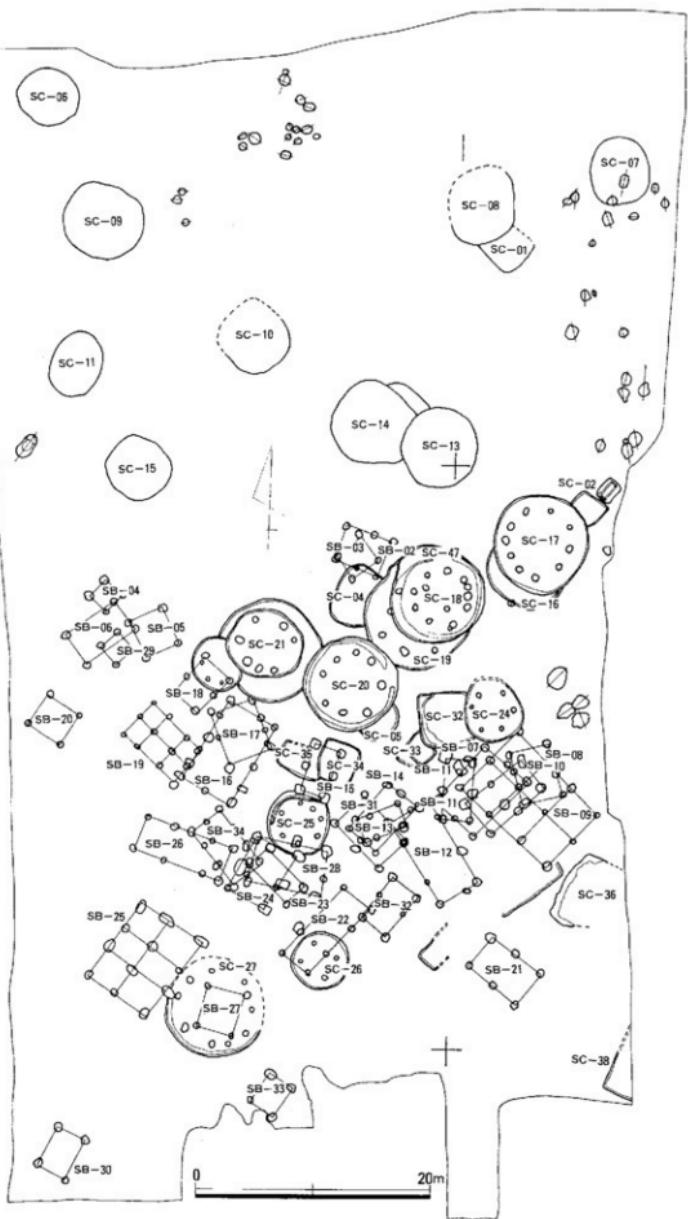


Fig.5 第一次調査弥生時代遺構配置図(II区)

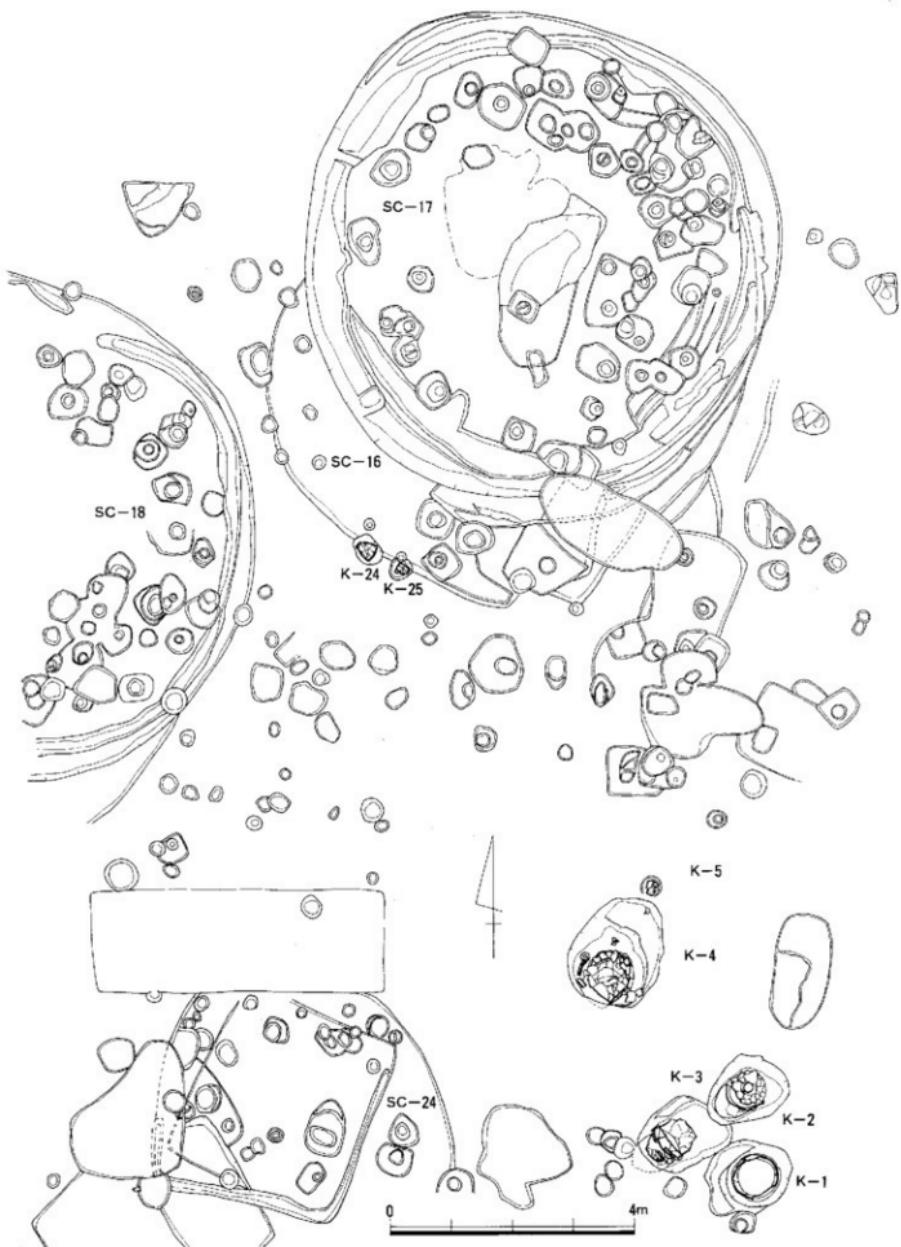


Fig.6 第一次調查II区麥稈基配面圖(縮尺1/80)

1. II区検出の中期甕棺墓

II区は概要に述べたように弥生時代前期から後期の住居址・掘立柱建物・古墳時代の住居址・掘立柱建物が数多く検出されている。調査区の北側半分は削平されない部分であったが、甕棺墓自体は破壊されるため調査対象とした。

(1) 甕棺墓

K-24・25 II区の弥生時代中期墓域としては中央部東側SC-16の壁の上面に造られていた。

K-24(Fig.6・7 PL.1) K-24は検出時は小児の單棺であったが、削平が著しく下甕の遺存状態も約1/3程度しか残っていないため、合口式の小児甕棺墓の可能性も考えられる。墓壙は南側が若干深い楕円形のレンズ状を呈する。大きさは55cm×42cm、深さ13cm、墓壙の長軸はN-54°30'Wを測る。下甕底部傾斜角度は105°を測る。底面に3~5cm程度の暗茶褐色土を敷き詰めている。

K-25(Fig.6・7 PL.1) K-24と25は隣接した関係である。25もSC-16の壁の上面に造られK-24と向かい合うように配置されている。遺存状態は非常に悪く、約1/5程度しか残っていない。全体的に削平されており、単棺か複合かは不明である。しかしながらK-24と同様に非常に小型であること等から複合の可能性が高い。墓壙は柱穴に切られているため、遺存状態は悪く、不整形の楕円を呈している。墓壙の大きさは39cm×35cm、深さ7cm、墓壙の長軸はN-39°E、下甕底部傾斜角度は不明。下甕下には5~7cm程度の暗茶褐色土敷いている。

(2) 出土遺物

II区からは弥生時代中期に属する甕棺墓は2基のみである。II区検出甕棺墓は46基で、44基が前期末に位置づけられる。甕棺墓の内56個体が大型甕形土器を棺として使用し、大型鉢形土器5個体、大型壺形土器3個体が棺として使用されている。中期に属する2基は小児棺であった。

甕形土器 甕棺墓として使用されている甕形土器、2点を図示した。

K-24(810223072)(Fig.7 PL.11)

K-24はSC-16壁面上に埋置された小型小児棺に使用された甕形土器である。底部は平坦で、棱はシャープな造りである。底部からやや内湾しながら僅かに外反し、胴部中央部で立ち上がり頸部付近で内側にやや内湾しながら頸部で大きく外反し、口縁部を折曲げ、平坦部を形成する。さらに口唇部を引き伸ばし逆「L」字状口縁を造り出し、端部を丸く納める。最大径は口縁部にあり、口径27.6cm、器高28.4cm、底径9cmを測る。口縁部と底部付近の一部に縱方向の刷毛目が認められ、内面はナデ仕上げがみられる。胎土は2~3mm程度の石英・金雲母・砂粒を多く含む。焼成は良好で、色調は淡赤褐色を呈する。

K-25(810223073)(Fig.7 PL.11)

K-25はK-24と同様にSC-16壁面上に埋置された小型小児棺に使用された甕形土器である。底部はなく、内湾しながら胴部中位で立ち上がり、さらに内湾しながら口縁部に達し、口縁部を折り曲げ、平坦部を形成する。口縁部端部は内側につまみ出し、さらに口唇部を引き伸ばし端部を丸く納める。口縁部形状は「T」字状を呈し、最大径は口縁部にあり、口径29.1cmを測る。口縁部の一部に縱方向の刷毛目が認められ、内面はナデ仕上げがみられる。胎土は2~5mm程度の石英・金雲母・砂粒を多く含む。焼成は良好で、色調は淡赤褐色を呈する。

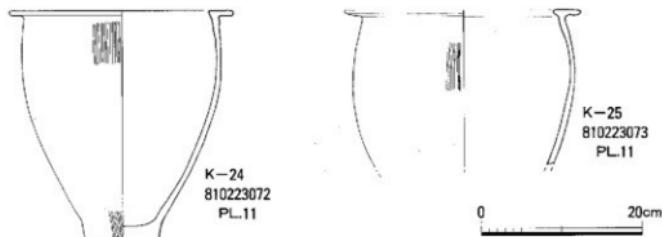
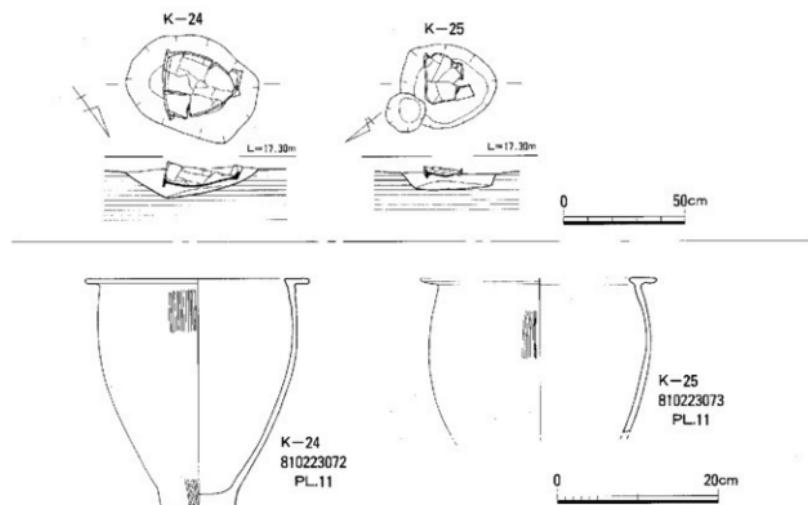
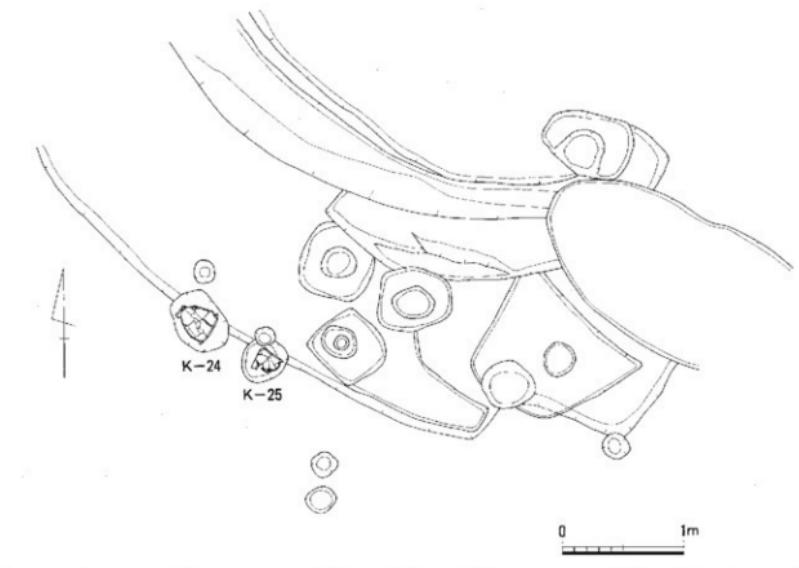


Fig.7 第一次調査II区壺棺墓出土状況・配置・壺棺実測図(縮尺1/6、1/20、1/40)

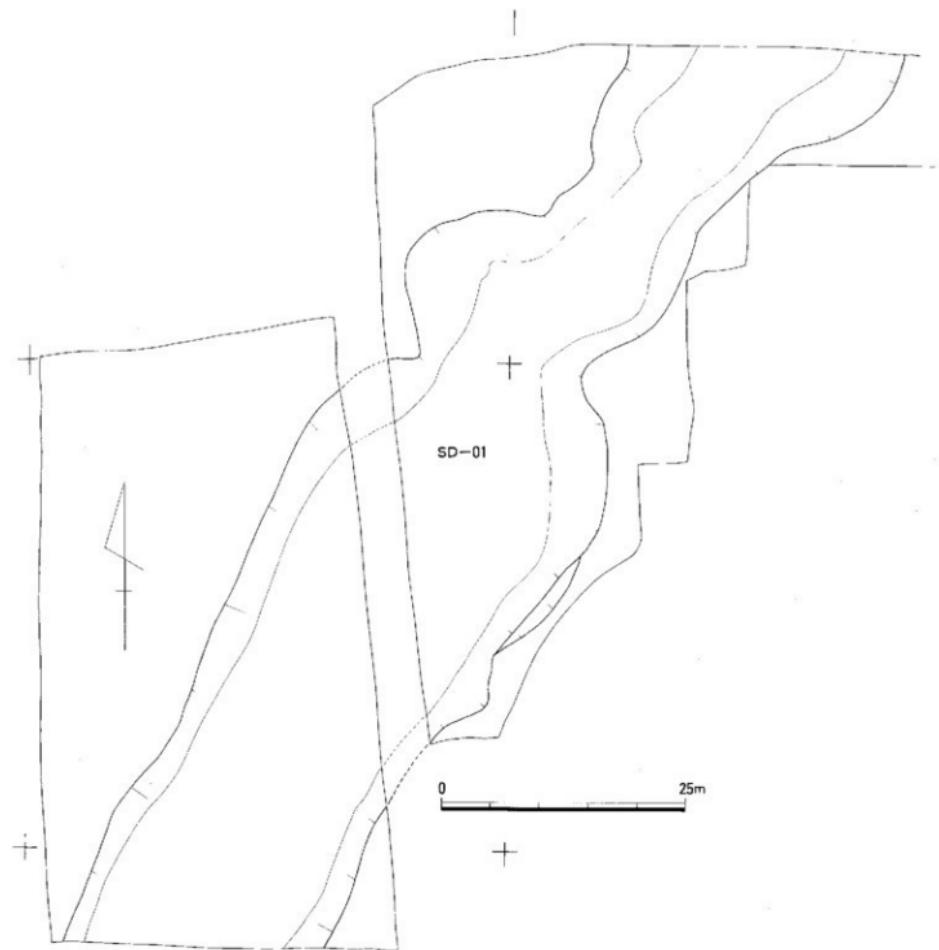


Fig.8 第一次調査Ⅲ区全体図(縮尺1/500)

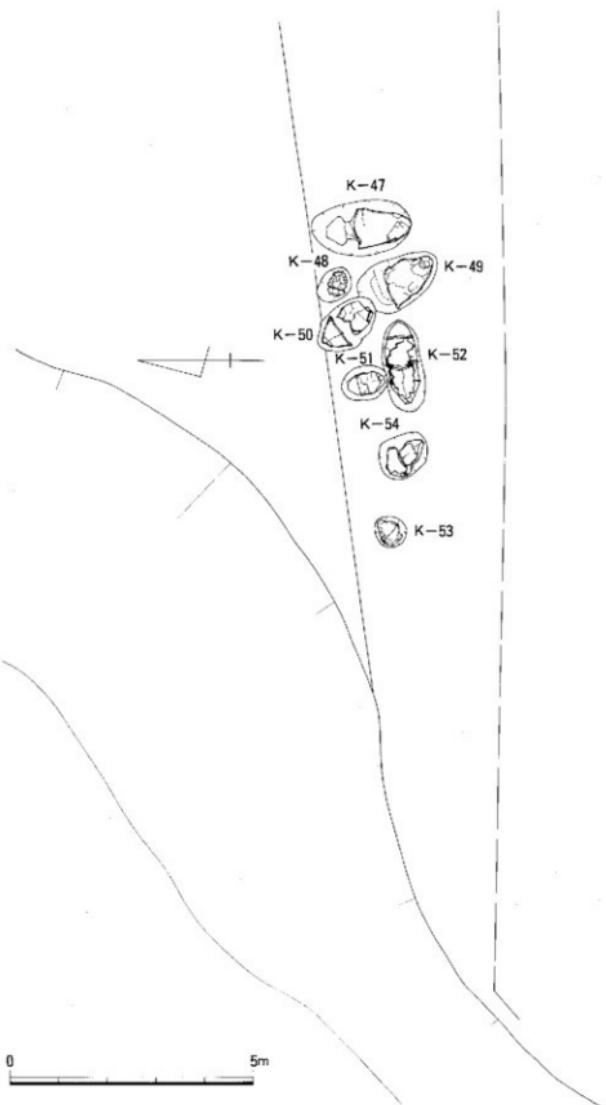


Fig.9 第一次調査用区画検査配置図-1(縮尺1/100)

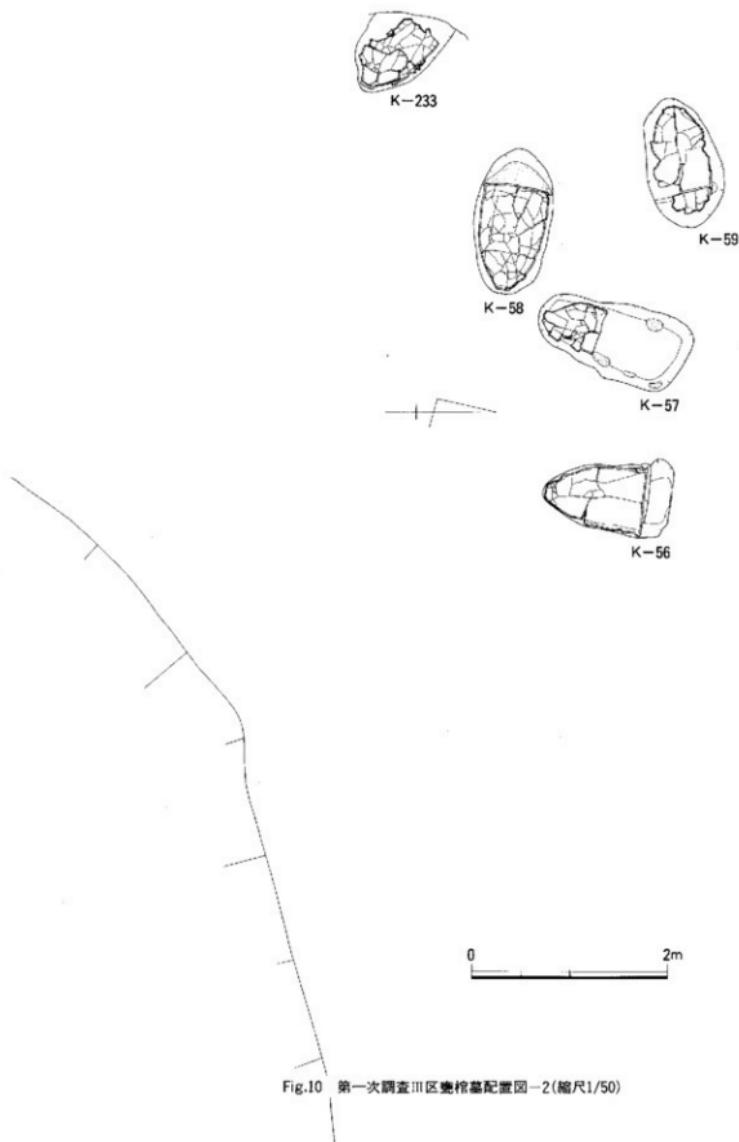


Fig.10 第一次調査III区棗棕基配置図-2(縮尺1/50)

2. III区検出の中期甕棺墓

III区は概要に述べたようにII区の北側部分から東西方方向に幅20m、長さ50mの範囲で破壊される甕棺墓のみを調査し、さらに道路下となる幅50m、長さ60mの4,000m²を調査した。弥生時代中期の遺構は甕棺墓・幅12m~20m、長さ100m、深さ1.5mの大溝を検出した。III区からはK-47-59-233の14基が検出された。

(1) 甕棺墓

III区検出の甕棺墓はSD-01によって二分割される。K-47-55がSD-01の東側、K-56-59-233が西側に位置する。K-47・53-55は1月の暴風の際に遺構実測面を消失してしまった。

K-48(Fig.9-11 PL.1-2) K-48はSD-01の東側から検出され、K-47-50に挟まれた位置にある。その大部分を欠損しており、辛うじて底面近くが検出された。上甕は口縁打ち欠きの丹塗壺形土器で、下甕は甕形土器を使用している小児の呑口式甕棺である。墓壙は不整形を呈し、大きさは87cm×60cm、深さ6cm、墓壙の長軸はN-50°30'-Wを測る。底面に3~5cm程度の暗茶褐色土を敷き詰めている。合口部分と上甕底面に黄褐色粘土を敷いている。

K-49(Fig.9-11 PL.1-2) K-49はK-50によって切られており、K-47・48・50の南側に位置している。形状から成人の单棺と思われ、ほぼ水平に配置されている。口縁部には厚く黄褐色粘土の日貼りを施している。墓壙の遺存状態は約1/2程度で、不整形の楕円形を呈している。墓壙の大きさは178cm×105cm、深さ41cm、墓壙の長軸はN-50°-Wの方向を測り、下甕底部傾斜角度は不明。

K-50(Fig.9-11 PL.1-2) K-50は、48・51に挟まれた位置関係にあり、K-49を切る。鉢+甕のセットで、覆口式成人棺と思われるが、下甕口縁部は、擾乱により取り除かれている。下甕突带上から上甕にかけて暗褐色粘土の日貼りを3cm~10cm程度敷いている。上下とも底部は欠損している。墓壙は145cm×80cm、深さ37cm、墓壙の長軸はN-32°-W、埋土は暗茶褐色土である。

K-51(Fig.9-11 PL.1-2) K-51はK-52の墓壙を切る。鉢+甕のセットで、合口式小児棺である。合口部分と上甕を安定させるために厚く(5×46×8cm)黄褐色粘土を敷き詰めている。墓壙は93cm×74cm、深さ27cm、墓壙の長軸はN-12°-W、下甕底部傾斜角度は95°。

K-52(Fig.9-11 PL.1-2) K-52は、K-49の西側、K-51に切られる位置関係にある。甕+甕のセットで、合口式成人棺である。遺構の遺存状態は約3/4程度である。合口部分の下面では、口縁部が接していないため厚く粘土の日貼りを行っている。埋土は暗黃茶褐色土と茶褐色土のブロックを含む褐色土で、墓壙の大きさは190cm×80cm、深さ55cm、墓壙の長軸はN-87°30'-W、下甕底部傾斜角度は90°を測る。

K-54(Fig.9-11 PL.1-2) K-54は、K-52の西側、K-53の東側に挟まれた地点から検出した。上甕が口縁部・頸部を打ち欠いた壺形土器で、下甕が小型甕形土器の組み合わせの合11式小児棺である。遺構の遺存度は約3/4程度の残りである。接合部分は、器面同士が接していないため目貼りとして黄褐色粘土を厚く敷いている。墓壙の大きさは107cm×90cm、深さ47cm、墓壙の長軸はN-35°-W、下甕底部傾斜角度は79°を測る。埋土は灰褐色土で、地山は砂礫質である。

K-56~59・233はSD-01の西側に位置し、5基で一つのブロックを形成している。

K-56(Fig.10-11 PL.2-3) K-56はブロックの東側から検出された单棺の成人棺である。遺構の遺存状態は約1/2程度しか残っていない。口縁部には厚く日貼りとしての黄褐色粘土が敷かれ、その間に板蓋痕と思われる溝が検出された。墓壙の大きさは131cm×77cm、深さ32cm、墓壙の長軸はN-5°-E、埋土は茶褐色土で若干粘質のある暗茶褐色土を含む。

K-57(Fig.10-11 PL.2-3) K-57はK-56の西側に位置し、K-58に接している。上甕はすでに抜

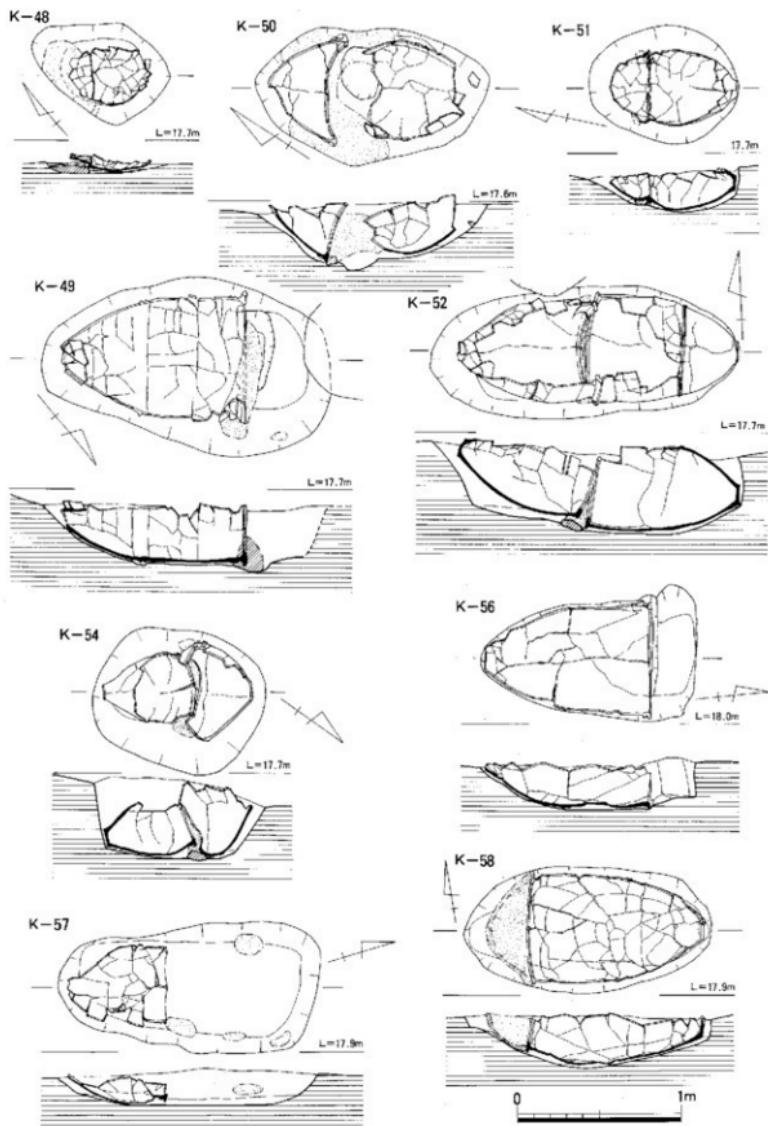


Fig.11 第一次調査III区巣殻基実測図-I(縮尺1/30)

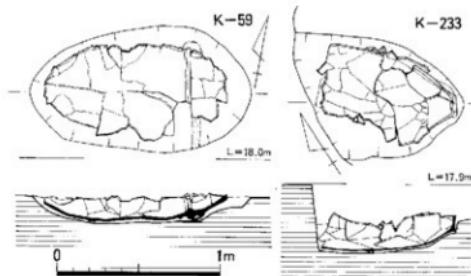


Fig.12 第一次調査Ⅲ区壇棺墓実測図-2(縮尺1/30)

き取られている。上甕の位置に安定させるために粘土塊が4ヶ所配置されている。下甕は、小型の壺形土器を使用しているところから合口式小児棺の可能性が高い。道構の遺存度は悪く約1/3程度しか残っていない。墓壙の大きさは158cm×80cm、深さ22cm、墓壙の長軸はN-17°-Eを測る。

K-58(Fig.10-11 PL.2-3) K-58はK-57の南西側に位置し、上甕は抜き取られているが、土壤の鉢+甕のセットで、合口式成人棺であろう。上甕はすでに抜き取られているが、厚さ1~4cmの白味かかった黄褐色粘土が敷かれており、上甕を据えた痕跡が確認できた。道構の遺存状態は約1/2程度しか残っていない。墓壙の大きさは151cm×78cm、深さ32cm、墓壙の長軸はN-81°-W、下甕底部傾斜角度は83°を測る。埋土は砂礫質の地山に、灰褐色土で砂粒を多く含む。

K-59(Fig.10-12 PL.2-3) K-59はK-58の北側に位置し、鉢+甕のセットで、合口式成人棺である。上甕の口縁部は打ち欠かれており、接合部分には厚く黄褐色粘土で目貼りを施している。道構の遺存状態は、約1/3程度しか残っていない。掘方は上甕部分に段を有し、墓壙の大きさは136cm×78cm、深さ17cm、墓壙の長軸はN-80°-Eを測る。

K-233(Fig.10-12 PL.2-3) K-233は既設の道路下から検出されたもので、下甕口縁部から上は道路建設時に破壊されている。合口か単枕かは不明であるが、大型壺形土器を使用していることから成人棺と思われる。墓壙の大きさは94cm×75cm、深さ42cm、墓壙の長軸はN-57°-W、下甕底部傾斜角度は88°を測る。

(2) 出土遺物

Ⅲ区からは旧河川と思われるSD-01が幅20mで南南西から北北東に向かって流れしており、その両岸に弥生時代中期の壺棺墓14基が検出された。その内訳は、SD-01の東側に8基、西側に5基である。この内、K-47、53の図面が季節はずれの暴風雨のため消失してしまい再度図面を作成することが出来なかった。14基の内、成人棺が8基・小児棺6基である。壺棺墓の内7個体が大型壺形土器を棺として使用し、大型鉢形土器2個体、大型壺形土器2個体が棺として使用されている。小型壺形土器は4個体、小型壺形土器が1個体である。

壺形土器 壺棺墓として使用されている壺形土器の内、2点、又、壺形土器1点を図示した。

K-54(810233012, 810233013)(Fig.13 PL.11)

K-54はⅢ区東側から検出された8基の内の1基である。K-52と53に挟まれた位置から検出された。上棺が口縁打ち欠きの壺形土器(810233013)と下棺の壺形土器(810233012)である。上棺の壺形土器810233013は口縁部・底部を欠損している。底部付近から外反しながら直線的に胴部に達し、胴部上

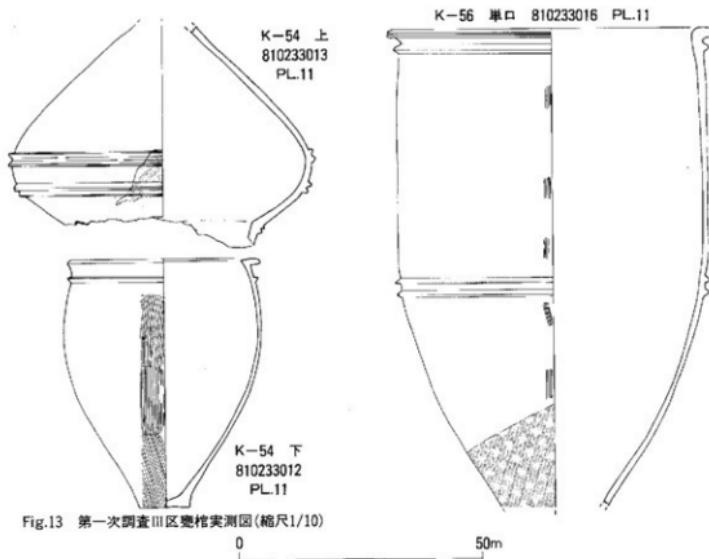


Fig.13 第一次調査III区甕棺実測図(縮尺1/10)

位で最大径を測る。弧を描きながら急激に内向し、頸部に達する。頭部は内向しながら大きく外反するタイプである。胸部中央部上下に二条の三角突帯を2本づつ巡らし、頸部にも二条の三角突帯を2本巡らしている。最大径は胴部にあり、33.2cm、残存高45.5cmを測る。外面は鏡面、内面はナデ仕上げで、外面の一部に黒斑がみられる。胎土は2~3mmの大粒の石英・金雲母・砂粒を多く含む。焼成は良好で、色調は明赤褐色を呈する。

下棺の變形土器810233013は底部が僅かに上底になるタイプで、底部の稜はシャープな造りである。底部からやや外反しながら立ち上がり、胴部最大径が上位にあり、その部分から内湾しながら口縁部に達する。内側口縁端部はシャープにつまみ出され、外側はやや長めに引かれ、端部は丸く收めている。口縁上端部はやや内側に傾斜する。頸部下に1本の三角突帯を巡らす。最大径は、胴部上部にあり41cmを測り、器高51cm、底径10.5cmの變形土器である。調整方法は外面胴部に縦方向の刷毛目を施す。内面はナデ仕上げを行っている。

胎土は2~5mm程度の石英・金雲母・砂粒を多く含む。焼成は良好で、外面に黒斑を有する。内面は明黄褐色を呈する。

K-56 (810233016) (Fig.13 PL.11)

K-56はIII区西侧から検出された5基の内の1基である。K-57の西側、5基が集中している一番東側の位置から検出した。K-56は単棺で、口縁部を北側に向けて検出した。大型の變形土器で、底部は欠損している。底部付近で外反しながら立ち上がり、やや内湾しながら胴部中位の二条の三角突帯まで達する。その上部はほぼ垂直に立ち上がり、頭部で僅かに内向し、口縁部で大きく外に折り曲げている。頸部には一条の三角突帯を巡らしている。口縁内側は鏡ナデにより丸く仕上げており、外側口縁端部は一条の沈線を巡らす。調整方法は、外面に縦刷毛目を施し、内面はナデ仕上げを施している。最大径は口縁部にあり、69.2cm、器高は、底部が欠損しているが、残存高98.5cmで他の成人棺より20cm程度大きい。胎土は3~5mm程度の石英・金雲母・砂粒を多く含む。焼成は良好で、内外面に黒斑があり外面明黄褐色、内面淡茶白色を呈する。



Fig.14 第一次調査IV区遺構配置図(縮尺1/300)

3. IV区検出の甕棺墓と石蓋土壙

調査対象面積は、6,000m²で表土排除作業面積4,500m²である。検出した遺構は、弥生時代前期の竪穴式住居址15軒・溝状遺構一条、弥生時代前期末の甕棺墓24基（金海式甕棺墓）・弥生時代中期初頭～後半にかけての竪穴式住居址8軒・溝状遺構二条、甕棺墓126基・井戸2基・掘立柱建物6棟・中世の溝二条・井戸等を検出した。甕棺墓は165基検出し、その内24基が弥生時代前期末の金海式甕棺墓、3基の木棺墓があり、122基が弥生時代中期、19基が弥生時代後期の甕棺墓である。

(1) 甕棺墓

IV区検出の弥生時代中期甕棺墓は、122基検出したが、五つにグループ分けできる。Aグループが調査区南側に前期の甕棺墓と共に検出された。Bグループは中央部の住居址群及び周辺の住居址を切る形で検出された。CグループはBグループの北側に東西方向に列埋葬される一群。Dグループは調査区の北東隅の一群。Eグループは調査区の北側に位置する一群である。なお1月の暴風の際に遺構実測面(K-153, 187, 192～200, 223)を消失してしまった。

K-61(Fig.15・20 PL.5) K-61はAグループの南側から検出した。墓壙は不整形円形を呈し、西側は二段掘りされている。上下棺とも口縁部は打ち欠かれており、甕棺の大きさ・墓壙の広さから呑口式成人棺の可能性が高い。遺構の遺存状態は非常に悪く、甕棺自体もろい。墓壙は不整形を呈し、大きさは156cm×100cm、深さ25cm、墓壙の長軸はN 78°-Eを測る。下甕底部傾斜角度は86°。

K-67(Fig.15・20 PL.5) K-67は前期甕棺K-66を切る。甕棺墓の遺存状態が悪く、単棺の成人棺と思われる。ただ、別個体の破片があるところから呑口か呑口の可能性も考えられる。墓壙の大きさは100cm×78cm、深さ16cm、墓壙の長軸はN 49°30'-Eの方向を測る。

K-70(Fig.15・20 PL.5・9) K-70もAグループの南西側から検出された。K-70は合口式の成人棺で、接合部分に厚く粘土を目貼りしており前期末から中期初頭に位置づけられる甕棺墓である。甕+甕のセットで、合口式成人棺である。上面は後世の溝によって擾乱されているが、全体的には残りの良い甕棺である。下甕突帯上から上甕にかけて暗褐色粘土の目貼りを敷いている。墓壙は三段掘りされ、146cm×85cm、深さ80cm、墓壙の長軸はN-13°-W、埋土は暗茶褐色土である。下甕底部傾斜角度は44°を測る。

K-71(Fig.15・20 PL.5) K-71はK-72に近接して、Aグループの南側から検出された。下甕部分は後世の溝によって切られ、上甕部分も口縁部・底部を欠損する。甕の下場は小石まじりの暗黒色土によって整形され、さらに突帯部には黄褐色粘土を敷く。形状から成人棺と思われる。墓壙の大きさは、175cm×99cm、深さ36cm、墓壙の長軸はN-35°30'-E、下甕底部傾斜角度は不明。

K-72(Fig.15・20 PL.5) K-72は、K-71の北側に位置し、また、その間が溝によってきられる。そのため上甕K-51に切られる位置関係にある。甕+甕のセットで、合口式成人棺である。遺構の遺存状態は約3/4程度で良い。接合部分には、厚く黄褐色粘土の目貼りを施している。埋土は砂混じりの暗褐色土で、墓壙の大きさは211cm×150cm、深さ50cm、墓壙の長軸はN-37°-E、下甕底部傾斜角度は80°を測る。

K-73(Fig.15・20 PL.5) K-73は、Aグループの西側、K-72の北側から検出した。鉢+甕のセットで、呑口式成人棺である。遺構の遺存度は約3/4程度の残りである。接合部分は、黄褐色粘土の目貼りを施している。墓壙の掘り方は三段掘りで、一段目は深さ25cmの段、二段目は粘土帯を巻くために施され深さ12cmの段を持つ。三段目は下甕を緩やかに設置するために設けられたもので深さ29cmを測る。大きさは148cm×114cm、深さ66cm、墓壙の長軸はN-52°30'-E、下甕底部傾斜角度は68°を測る。

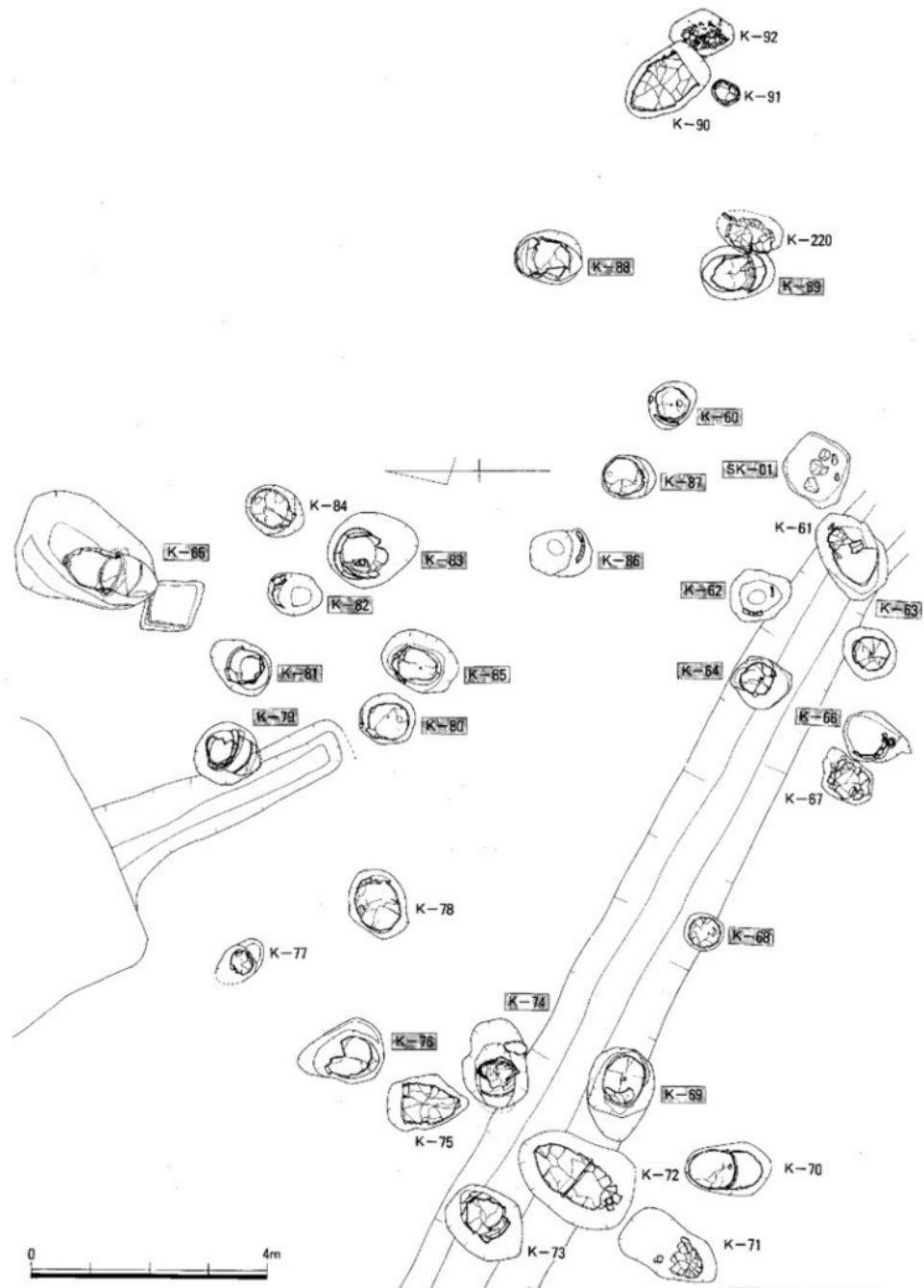


Fig.15 第一次調査IV区壙墓グループ図-1(Aグループ) (縮尺1/80)

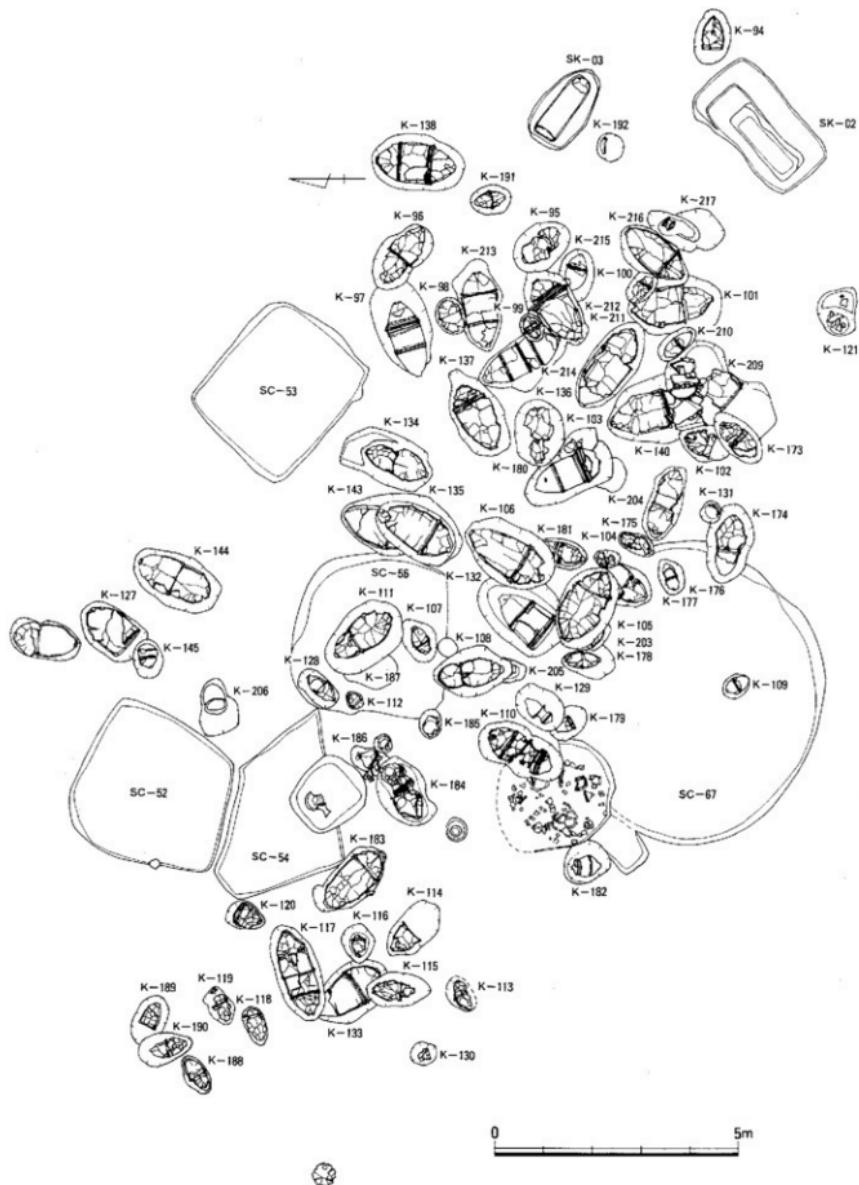


Fig.16 第一次調査IV区発掘墓グループ図-2(Bグループ) (縮尺1/100)

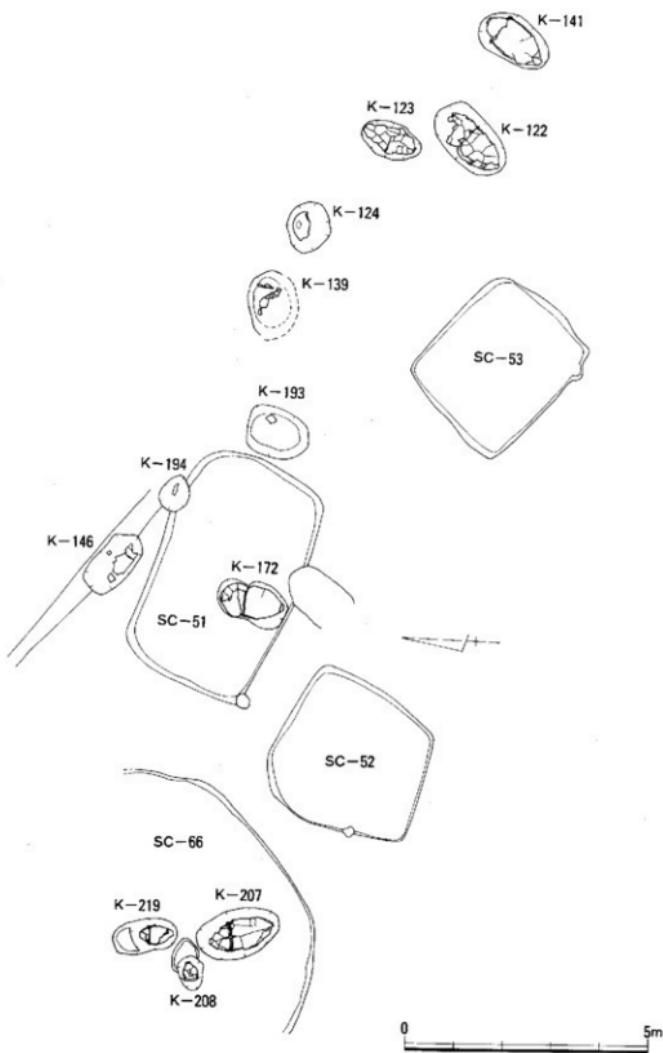


Fig.17 第一次調査 N 区變相基グルーピー図-3(C グルーピー) (縮尺1/100)

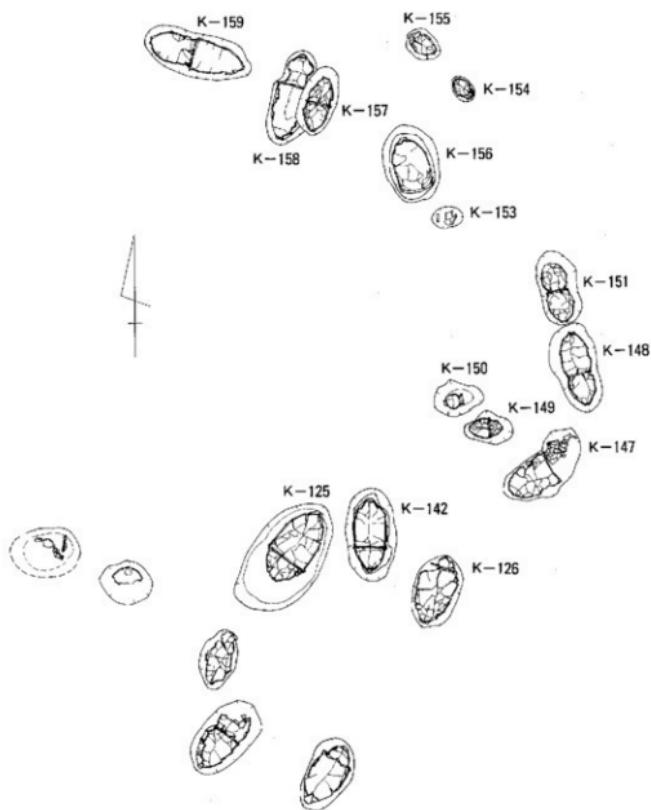


Fig.18 第一次調査IV区発光藻グループ図-4(Dグループ) (縮尺1/100)

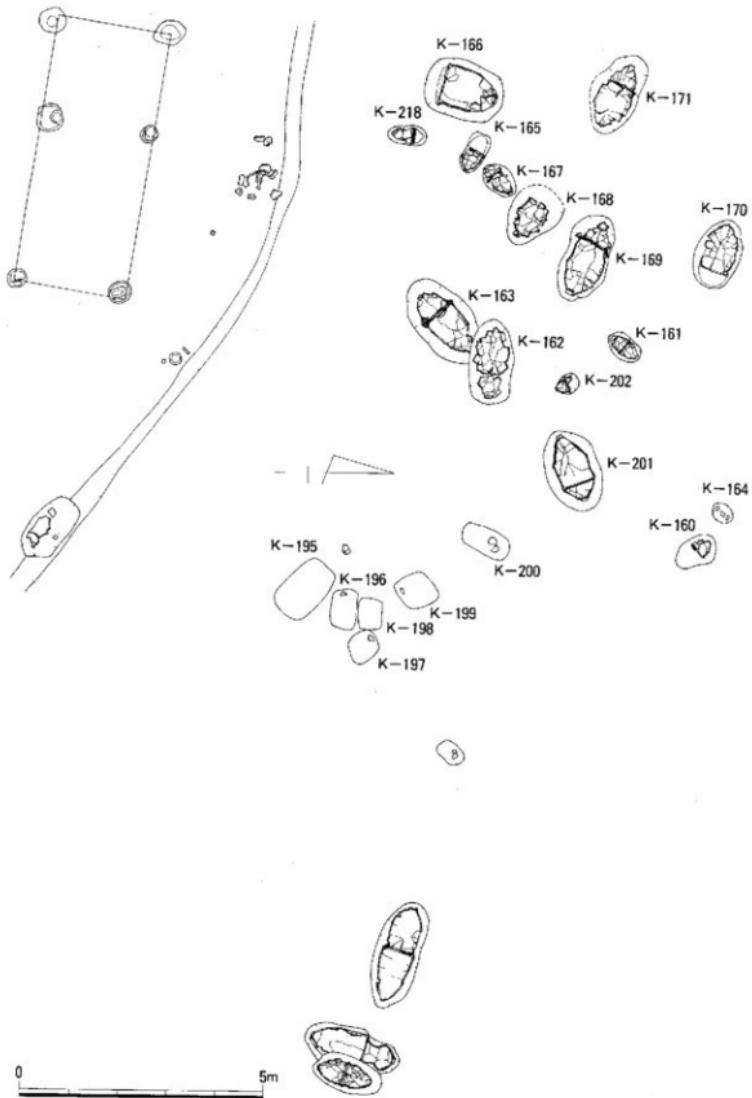


Fig.19 第一次調査IV区麥桿菌グループ図-5(Eグループ) (縮尺1/100)

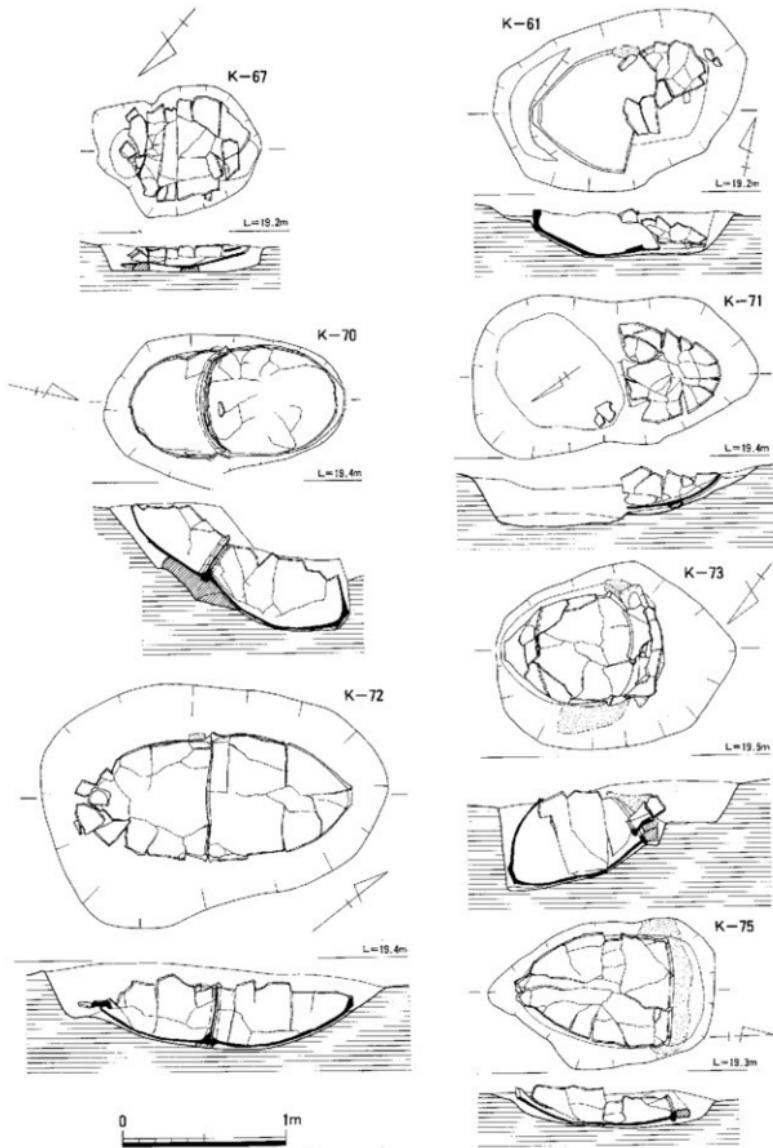


Fig.20 第一次調査IV区甕棺墓実測図-1(縮尺1/30)

K-75(Fig.15・20 PL.5) K-75はAグループの西側、K-74・76に挟まれた位置から検出された單棺の成人棺である。遺構の遺存状態は約1/4程度しか残っていない。口縁部には厚く目貼りの黄褐色粘土が見られ、その間に板蓋痕と思われる溝が検出された。墓壙の大きさは138cm×91cm、深さ22cm、墓壙の長軸はN-1°-E、埋土は茶褐色上で若干粘質のある暗茶褐色土を含む。

K-77(Fig.15・21 PL.5) K-77はAグループに属し、S C-65南西側から検出した。遺構の遺存状態が非常に悪く約1/5程度で、墓壙自体もそのほとんどが削平され、下窓の一部しか残っていない。また内面の剥落が著しい。単口式小児棺と考えられる。掘方はレンズ状を呈し、墓壙の大きさは65cm×74cm、深さ16cm、墓壙の長軸はN-86°-E、下窓底部傾斜角度は58°を測る。

K-78(Fig.15・21 PL.5) K-78はAグループに属し、K-77の南側から検出した。鉢+甕のセットで、呑口式成人棺である。上棺の大部分が欠損している。接合部分には厚く黄褐色粘土の目貼りを巡らす。下窓左側辺部に17cm×10cmの長方形に打ち欠かれた穿孔が認められる。墓壙は甕棺ぎりぎりに掘られ、甕棺との間には淡黒色土を敷き、甕棺の安定を図り、底部附近には黄褐色粘土のブロックを根石状に数個置いている。墓壙は124cm×98cm、深さ50cm、墓壙の長軸N-75°-E、下窓底部傾斜角度39°を測る。

K-90(Fig.15・21) K-90はAグループの南隅に位置し、K-92から墓壙を切られる形で検出された。単口式の成人棺ではほぼ水平に埋置されている。口縁部横には板蓋痕と認められる幅2~3cm、深さ2cmの極めて浅い溝が検出された。遺構の遺存度は約1/3程度である。甕棺との間に薄い黒色土を敷き甕棺の安定を図っている。墓壙は149cm×99cm、深さ31cm、墓壙の長軸N-33°30' W、下窓底部傾斜角度90°を測る。

K-91(Fig.15・21) K-91はAグループの南隅にK-90に接する形で検出された。単口式の成人棺で、壺形土器を使用している。上部が4/5程削平されている。墓壙は38cm×49cm、深さ17cm、墓壙の長軸N-57°-W、下窓底部傾斜角度は不明。

K-92(Fig.15・21) K-92はAグループの南隅に位置し、K-90の墓壙を切る形で検出された。遺構の遺存度が非常に悪く僅かに底面のみが残っていた。形状は合口式小児棺と考えられるが、あまりにも破壊されているため不明確である。墓壙は108cm×77cm、深さ8cm、墓壙の長軸N-14°30'-E、下窓底部傾斜角度は不明。

K-94(Fig.16・21 PL.4・5) K-94はBグループの南東隅に位置し、SK-02の東側から検出された。遺存状態が悪く約1/4程度しか残っていない。上窓と思われる遺物はなく単口式小児棺の可能性が高い。掘方と甕棺の間には、淡い黒色土が敷き詰められており、口縁部付近には目貼りの黄褐色粘土が厚く巻かれている。中央部に外から開けた穿孔がある。墓壙は116cm×74cm、深さ25cm、墓壙の長軸はN-83°30'-W、下窓底部傾斜角度は不明。

K-95(Fig.16・21 PL.4・5・7) K-95はBグループの南東隅に位置し、K-212に近接して検出された。墓壙の遺存状態は非常に良いが、上窓がかなり破壊を受けて検出された。下窓は土圧により潰れた状態であった。鉢+甕のセットである。合口式成人棺で、接合部分に厚く目貼りの黄褐色粘土が認められ、その部分の地山整形も凹凸が認められる。地山と甕棺の間には砂混じりの黒色土が認められる。墓壙は楕円形の掘方で段を有している。墓壙は127cm×88cm、深さ68cm、墓壙の長軸N-38°30'-W、下窓底部傾斜角度55°を測る。

K-96(Fig.16・21 PL.4・5・7) K-96はBグループの北東隅に位置し、K-97との切合い関係を持つ。下窓部分は試掘トレーナによって破壊され、遺構の遺存度は約1/3程度である。甕+甕のセットで合口式成人棺である。接合部分には黄褐色粘土の目貼りが厚く施され、上窓の底面にも黄褐色粘土を

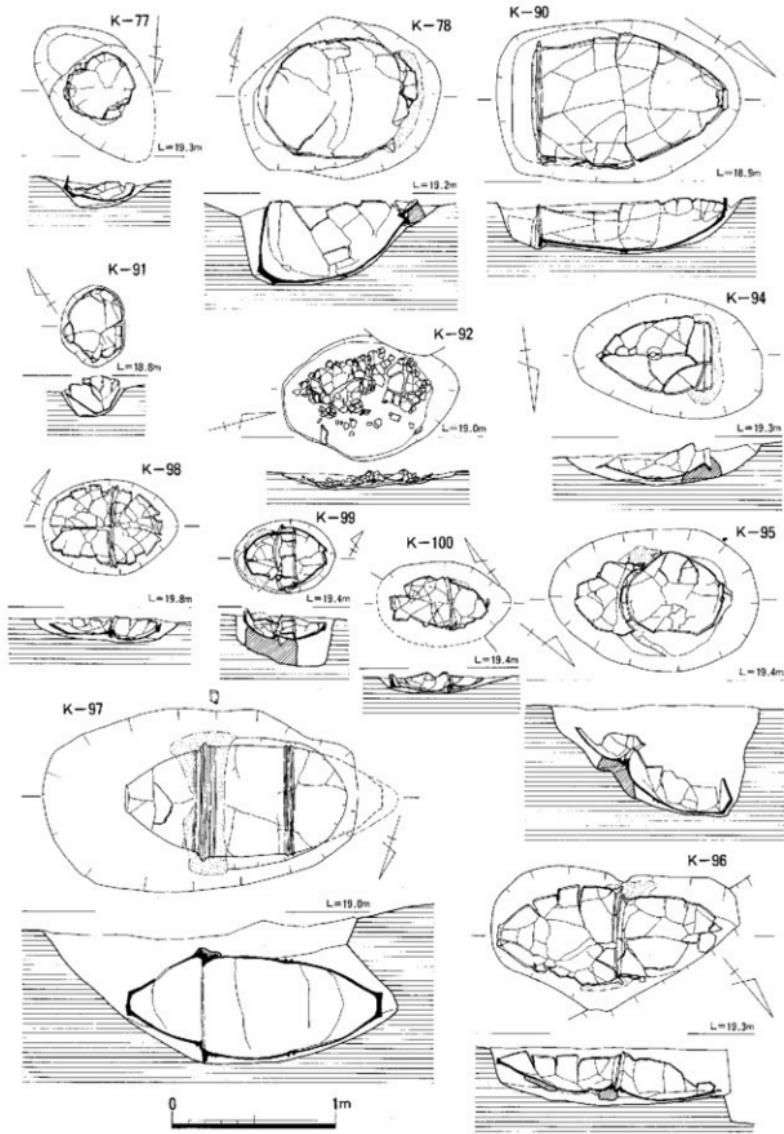


Fig.21 第一次調査IV区発掘墓実測図一2(縮尺1/30)

敷いている。地山と甕棺の間には砂混じりの茶褐色土が認められる。墓壙の大きさは150cm×85cm、深さ35cm、墓壙の長軸はN 50°30'~W、下甕底部傾斜角度は不明。

K-97(Fig.16・21 PL.5~9) K-97はBグループの北東隅に位置し、K-96との切り合い関係を持つ。非常に深く埋置され、完全な形で検出された。下甕の掘り方は挿入式の形状を呈し、上甕部はなだらかな掘方と成っている。鉢+甕のセットで、合口式成人棺である。接合部分には全体に厚さ10cm程度、幅20~30cmに黄褐色粘土の目貼りを施している。掘方底面は棺にそって青灰色土と黄褐色粘土を敷きつめ安定を図っている。墓壙は193cm×110cm、深さ90cm、墓壙の長軸はN 72°~E、下甕底部傾斜角度は90°を測る。

K-98(Fig.16・21 PL.7・8) K-98はBグループの東隅に位置し、K-213の上面に水平に埋置された合口式小児棺である。甕+甕のセットで、遺構の遺存状態は悪く、約1/3程度しか残っていない。墓壙は86cm×56cm、深さ15cm、墓壙の長軸N 66°30'~E、下甕底部傾斜角度は不明。

K-99(Fig.16・21 PL.4・5・7・8) K-99はBグループの東隅に位置し、K-214を切る。甕+甕のセットで、水平に埋置された呑口式小児棺である。墓壙は深く、かなりの厚さの黄褐色粘土を目貼りとして施している。上甕口縁部は下甕内に入り込む形状で検出されている。墓壙は61cm×45cm、深さ31cm、墓壙の長軸N 62°~E、下甕底部傾斜角度70°を測る。

K-100(Fig.16・21 PL.4・5・7) K-100はBグループの南東隅に位置し、K-101を切る。甕+甕のセットで、水平に埋置された合口式小児棺である。遺存状態は、約1/3程度しか残っていない。掘方底面はレンズ状を呈し、接合部分に目貼りの黄褐色粘土を厚く巻く。墓壙は81cm×52cm、深さ11cm、墓壙の長軸N 53°~W、下甕底部傾斜角度は不明。埋土は暗褐色土である。

K-101(Fig.16・22 PL.4・5・7) K-101はBグループの南東隅に位置し、K-100・210・216に切られる。鉢+甕のセットで、水平に埋置された呑口式成人棺である。上甕の口縁部を打ち欠いている。上甕の下には拳大の石を裏込めとして6個配置し、安定を図っている。埋土は淡黄褐色土で若干の灰色を含む黒褐色斑点を含んでいる土を使用している。墓壙は209cm×124cm、深さ62cm、墓壙の長軸N 8°30'~W、下甕底部傾斜角度は不明。

K-102(Fig.16・22 PL.5・7・9) K-102はBグループの南隅に位置し、K-173から切られる。遺構の遺存状態は非常に悪く、約1/3程度の残りである。小型の甕形土器を使用しているところから小児棺と思われる。ただ上甕が抜き取られているところから合口か単口式かは不明。墓壙は浅いレンズ状を呈し、甕棺の下に薄く黄褐色粘土を敷く。墓壙は106cm×78cm、深さ24cm、墓壙の長軸N 18°30'~E、下甕底部傾斜角度は不明。

K-103(Fig.16・22 PL.5・7・8) K-103はK-102・173と同じBグループの南隅に位置する。口縁部付近しか遺存していないが、甕+甕のセットで、水平に埋置された合口式小児棺である。墓壙の掘方は不明瞭で、その規模は不鮮明であるが計100cm×72cm、深さ16cm、墓壙の長軸N 38°~W、下甕底部傾斜角度は不明。

K-104(Fig.16・22 PL.5・7・10) K-104はS C-67を切り、K-105・177との切り合い関係を持ち、Bグループの中央部に位置する。甕+甕のセットで、水平に埋置された合口式小児棺である。遺存状態が悪く、口縁部付近しか残っていない。墓壙は50cm×38cm、深さ12cm、墓壙の長軸N 7°~W、下甕底部傾斜角度は不明。

K-105(Fig.16・22 PL.4・5・7・8・10) K-105はBグループの中央部に位置しK-105が132を切り、132がS C-67を切る。鉢+甕のセットで、呑口式成人棺である。遺構の遺存状態は約1/3程度で、上甕の底部等が欠損している。呑口部分には厚く黄褐色粘土を巻き、密封状態を形成している。墓壙は

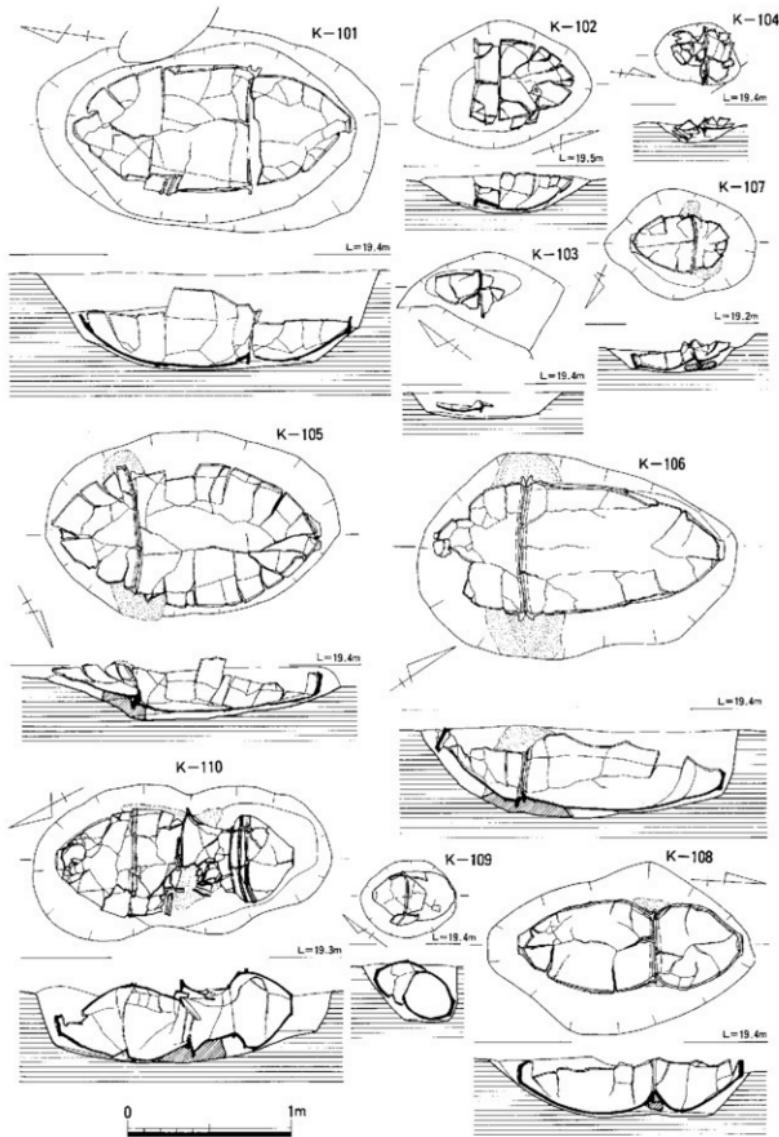


Fig.22 第一次調查IV区捷棺墓実測図-3(縮尺1/30)

180cm×113cm、深さ33cm、墓壙の長軸N-61°-W、下甕底部傾斜角度83°を測る。埋土は灰黄色褐色土で、茶褐色粘質土のブロックを含む。

K-106(Fig.16・22 PL.4・5・7・10) K-106はBグループの中央部に位置し、K-132・181を切る。鉢+甕のセットで、合口式成人棺である。遺存状態は約1/2程度である。接合部分には厚く、幅広く黄褐色粘土の目貼りを施している。墓壙は194cm×126cm、深さ57cm、墓壙の長軸はN-32°30'-E、下甕底部傾斜角度は78°を測る。

K-107(Fig.16・22 PL.4・5・7) K-107はBグループの中央部、S C-56を切る形で検出された。壺+甕のセットで、合口式小児棺である。接合部分には全体に厚く幅広く黄褐色粘土の目貼りを施している。墓壙は92cm×68cm、深さ24cm、墓壙の長軸はN-64°30'-E、下甕底部傾斜角度は不明。

K-108(Fig.16・22 PL.4・5・7) K-108はBグループの中央部に位置し、S C-56を切り、K-107と接する位置関係を持つ。上甕は口縁部が打ち欠かれており、接合部分には厚く黄褐色粘土の目貼りを施す。壺+甕のセットで、水平に埋置された合口式成人棺である。遺構の遺存状態は約1/2程度で、楕円形を呈し、舟底状の傾斜を持つが、上甕部分はその傾斜に合わせ約45°の掘方となっている。墓壙は161cm×101cm、深さ35cm、墓壙の長軸N-4°-W、下甕底部傾斜角度は90°を測る。

K-109(Fig.16・22 PL.4・5) K-109はBグループの南側中央部に位置し、S C-67を切る。壺+甕のセットで、覆口式小児棺である。墓壙は深く、かなりの厚さの黄褐色粘土を目貼りとして施している。上下甕とも口縁部を打ち欠いている。下甕部分に拳大の石を配し固定している。墓壙は58cm×47cm、深さ34cm、墓壙の長軸N-36°30'-W、下甕底部傾斜角度75°を測る。埋土は暗茶褐色土である。

K-110(Fig.16・22 PL.4・5・7・8) K-110はBグループの南側中央部に位置し、S X-55を切る。壺+甕のセットで、合口式成人棺である。遺存状態は、甕棺自体の残りは良いが、墓壙は約1/2程度しか残っていない。掘方は不整形楕円形を呈し、接合部分に厚さ14cm、幅40cmで目貼りの黄褐色粘土を厚く巻く。墓壙は181cm×95cm、深さ47cm、墓壙の長軸N-28°-E、下甕底部傾斜角度は80°を測る。埋土は暗褐色土である。

K-111(Fig.16・23 PL.5・7) K-111はBグループの北側中央部、S C-56を切る形で検出した。壺+甕のセットで、呑口式成人棺である。上甕は胸部中位まで打ち欠き下甕に挿入する形をとる。遺構の遺存状態は約1/2程度である。埋土は暗褐色土で若干の灰色を含む黒褐色斑紋を含んでいる土を使用している。墓壙は183cm×121cm、深さ58cm、墓壙の長軸N-33°-W、下甕底部傾斜角度は79°。

K-112(Fig.16・23 PL.5・7) K-112はBグループの北側中央部にS C-56を切る形で検出した。遺構の遺存状態は非常に悪く下甕の一部しか残っていない。ただ上甕が抜き取られた状態か否かの判断ができないため、複合式か単口式かは不明。墓壙は浅いレンズ状を呈し、甕棺の下に薄く黄褐色粘土を敷く。墓壙は35cm×28cm、深さ6cm、墓壙の長軸N-43°-E、下甕底部傾斜角度は不明。

K-113(Fig.16・23 PL.5・6) K-113はBグループの西側に位置し、S C-55の南側、144の西側に位置し、試掘トレンチにより南側の墓壙を切られている。壺+甕のセットで、合口式小児棺である。墓壙は80cm×43cm、深さ24cm、墓壙の長軸N-62°30'-E、下甕底部傾斜角度は90°を測る。

K-114(Fig.16・23 PL.5・6) K-114はS C-55の南側壁面を切る形で検出された。下甕は抜き取られた状況であるが、墓壙の広さから合口式小児棺の可能性が高い。接合部分と思われる部位に黄褐色粘土の目貼りが見られる。墓壙は139cm×73cm、深さ34cm、墓壙の長軸N-41°-W、下甕底部傾斜角度は不明。

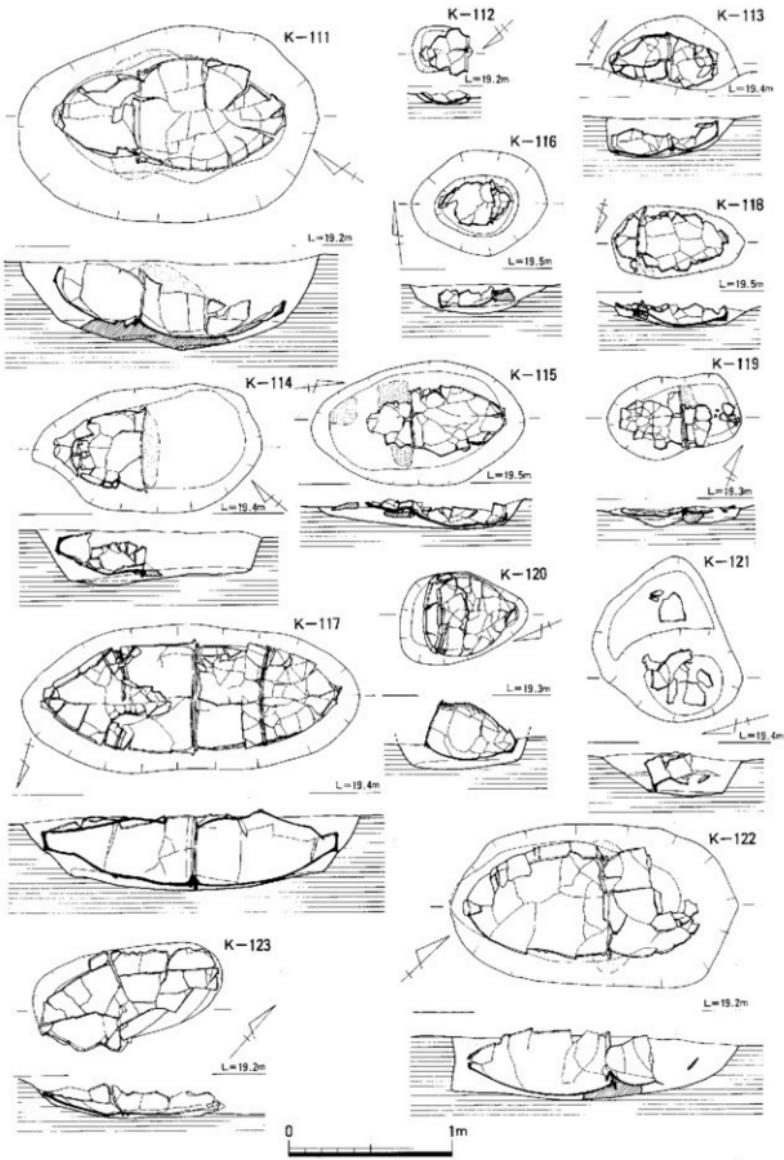


Fig.23 第一次調査IV区塚棺墓実測図-4(縮尺1/30)

K-115(Fig.16・23 PL.5・6) K-115はBグループの西側に位置し、SC-55を切り、K-113・114に接続している。甕+甕のセットで、合口式小児棺である。遺存状態は約1/3程度である。接合部分には黄褐色粘土の目貼りを施し、上甕部にも安定を図るために黄褐色粘土のブロックを置く。墓壙は132cm×76cm、深さ17cm、墓壙の長軸はN-5°-E、下甕底部傾斜角度は90°を測る。

K-116(Fig.16・23 PL.5・6) K-116はBグループの西側、SC-55の中央に埋置されている。遺存状態が悪いため、上甕が口縁部しか残っていない。甕+甕のセットで、合口式小児棺である。接合部分には厚く黄褐色粘土の目貼りを施している。墓壙は83cm×65cm、深さ18cm、墓壙の長軸はN-84°-W、下甕底部傾斜角度は80°を測る。

K-117(Fig.16・23 PL.5・6) K-117はBグループの西側、SC-55の中央部に位置し、55を切る形で検出した。遺存状態は良好で、上部がつぶれた形で検出した。甕+甕のセットで、水平に埋置された合口式成人棺である。形状は楕円形を呈し、舟底状の傾斜を持つ。墓壙は207cm×89cm、深さ44cm、墓壙の長軸N-75°-E、下甕底部傾斜角度は90°を測る。

K-118(Fig.16・23 PL.5・6) K-118はBグループの中央部、SC-55の北西隅壁面を切り、K-119に隣接する。鉢+甕のセットで、合口式小児棺である。墓壙は80cm×44cm、深さ13cm、墓壙の長軸N-73°30'-E、下甕底部傾斜角度83°を測る。

K-119(Fig.16・23 PL.5・6) K-119はBグループの北西側、118の北東側に位置する。遺構の遺存状態は非常に悪く底面しか残っていない。甕+甕のセットで、合口式小児棺である。接合部分に厚く目貼りの黄褐色粘土を巻く。墓壙は82cm×50cm、深さ12cm、墓壙の長軸N-68°30'-E、下甕底部傾斜角度は不明。埋土は暗褐色土である。

K-120(Fig.16・23 PL.5・6) K-120はBグループの北西隅、SC-55を切る形で検出した。住居内覆土と非常に類似しているため、掘方の検出にとまどった。K-120は単口式小児棺か、SC-55出土の遺物か判断がつきかねた。それは目貼りの粘土が全く見あたらず、掘方の形状からも小児棺とは考えにくい検出状態であったが、小児棺として登録していることから一応甕棺墓としておく。掘方は77cm×56cm、深さ19cm、長軸N-22°30'-E、下甕底部傾斜角度は60°を測る。

K-121(Fig.16・23 PL.5) K-121はBグループの南側、SC-58の南側から検出した。壺形土器の口縁部と底部がかけ離れて出土しており、甕棺墓ではなく祭礼遺構の可能性が高い。墓壙は86cm×102cm、深さ26cm、墓壙の長軸N-15°-E、下甕底部傾斜角度は不明。

K-122(Fig.17・23 PL.8) K-122はCグループの南東側から検出した。甕+甕のセットで、合口式成人棺である。上甕は破壊され、胴部しかない。合口部分に灰褐色粘土を巻く。墓壙は176cm×100cm、深さ39cm、墓壙の長軸N-43°-E、下甕底部傾斜角度は88°を測る。

K-123(Fig.17・23 PL.8・9) K-123はK-122の南側に位置し、Cグループに属する。後世の溝SD-04の破壊を受け、口縁部・底部は欠損しており、大型壺形土器であることから成人棺であるが、他は不明。墓壙は115cm×56cm、深さ19cm、墓壙の長軸N-49°-E、下甕底部傾斜角度は不明。

K-124(Fig.17・24) K-124はCグループに属するが、SD-04によってその大部分が破壊され、底部しか残っていない。墓壙の形状及び大型壺形土器を使用していることから成人棺と思われる。墓壙は88cm×106cm、深さ38cm、墓壙の長軸N-13°-E、下甕底部傾斜角度は36°を測る。

K-125(Fig.18・24 PL.9) K-125はDグループの南側に位置する。大きな墓壙を掘り、北側に下甕を配置したために南側がかなり空いている。鉢+甕のセットで、合口式成人棺である。接合部分に厚く目貼りの黄褐色粘土を巻く。墓壙は255cm×148cm、深さ54cm、墓壙の長軸N-37°30'-E、下甕底部傾斜角度は92°を測る。

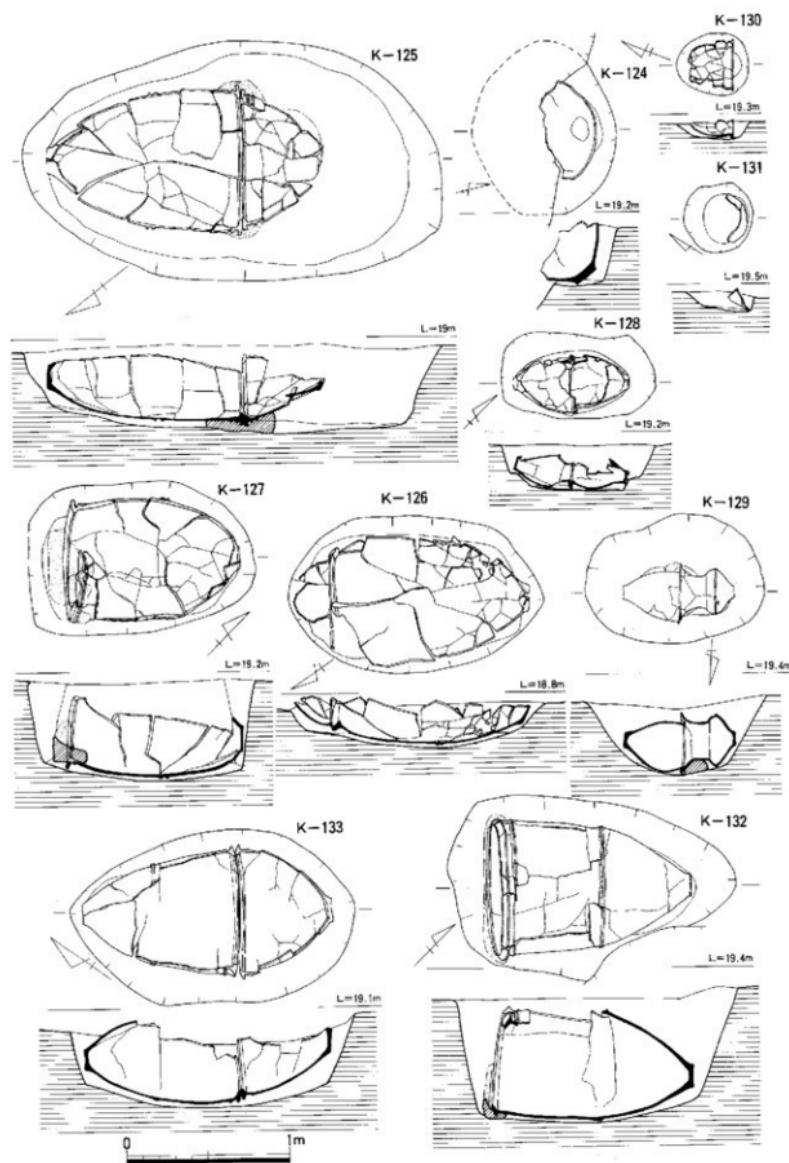


Fig.24 第一次調査IV区巣塊実測図-5(縮尺1/30)

K-126(Fig.16・24 PL.9) K-126はDグループの南側隅から検出した。鉢+甕のセットで、合口式成人棺である。掘方はギリギリに掘られ、遺存状態は約1/3程度である。接合部分及び肩部には厚く、黄褐色粘土の目貼りを施す。墓壙は155cm×96cm、深さ28cm、墓壙の長軸はN-34°30'・E、下甕底部傾斜角度は65°を測る。

K-127(Fig.16・24 PL.8) K-127はBグループに属し、S C-51を切る形で検出された。口縁部には厚く黄褐色粘土が巡るが、甕内部にも上部の粘土が崩落して堆積している。その粘土をはぎ取ると下面からも粘土が認められ、溝状に達む部分が確認できた。このことから板蓋痕と考えられる。板蓋+甕のセットで、単口式成人棺である。墓壙は137cm×94cm、深さ62cm、墓壙の長軸はN-45°・E、下甕底部傾斜角度は90°を測る。

K-128(Fig.16・24 PL.5) K-128はBグループの中央部に位置し、S C-54の東壁に埋置。甕+甕のセットで、合口式小児棺である。遺構の遺存状態は良く、僅かに上面が削平されているにとどまる。墓壙は94cm×52cm、深さ28cm、墓壙の長軸N-45°・E、下甕底部傾斜角度は77°を測る。

K-129(Fig.16・24 PL.4・5・7・10) K-129はBグループの南側中央部に位置し、S X-55の西側に隣接する。甕+甕のセットで、呑口式小児棺ある。墓壙は深く、かなりの厚さの黄褐色粘土を目貼りとして施している。上甕は丹塗り甕で、下甕の上部は上圧によって潰れている。接合部分と上甕の下は黄褐色粘土を敷く。墓壙は110cm×80cm、深さ48cm、墓壙の長軸N-87°・E、下甕底部傾斜角度87°を測る。埋土は暗茶褐色土である。

K-130(Fig.16・24 PL.5・6) K-130はBグループの西側に位置し、K-115に隣接して検出された。遺存状態が悪く底面の一部しか残っていない。このため複合式か単口式かは不明であるが、墓壙から単口式小児棺の可能性が高い。墓壙は45cm×37cm、深さ10cm、墓壙の長軸N-21°・W、下甕底部傾斜角度は不明。

K-131(Fig.16・24 PL.5) K-131はBグループの南側、S C-58の中央部、K-174を切る形で検出した。壺形土器が倒置した形であり、甕棺墓としてはなく祭祀用として埋置されたものとも考えられる。墓壙は42cm×42cm、深さ12cm、墓壙の長軸N-33°30'・W、下甕底部傾斜角度は不明。

K-132(Fig.16・24 PL.4・5・7・8・10) K-132はBグループの中央部、S C-67の壁面を破壊しているが、K-105・106によって墓壙を切られている。遺構の遺存状態は非常に良くほぼ完形で残っている。墓壙の掘方は台形状を呈し、目貼り部分に幅1.5cm前後、深さ2cmの細い溝があり板蓋痕であることが判明したことから板蓋の単口式成人棺である。墓壙は176cm×110cm、深さ83cm、墓壙の長軸N-45°・E、下甕底部傾斜角度は90°を測る。

K-133(Fig.16・24 PL.5・6) K-133はBグループの北西隅に位置するS C-55の西壁を切る形で検出した。K-133の上部にK-115～117が埋置されており、K-133の上部を破壊している。鉢+甕のセットで、合口式成人棺である。掘方は甕棺ギリギリで、裏込めは暗褐色土を詰めている。墓壙は173cm×106cm、深さ54cm、墓壙の長軸N-35°・W、下甕底部傾斜角度は90°を測る。

K-134(Fig.16・25 PL.5・7・8) K-134はBグループの中央部、S C-53・K-135に隣接する位置から検出した。甕+甕のセットで、呑口式成人棺である。呑口部分には広い範囲に黄褐色粘土で目貼りを施している。掘方は上甕部分から二段掘りされている。墓壙は192cm×105cm、深さ55cm、墓壙の長軸N-21°30'・E、下甕底部傾斜角度は100°を測る。

K-135(Fig.16・25 PL.5・7) K-135はBグループの中央部に位置し、K-143を切る形で検出した。遺構の遺存状態は良い方であるが、下甕の底部が後世の擾乱により破壊されている。鉢+甕のセットで合口式成人棺である。接合部の目貼りは黄褐色粘土で密封されている。掘方は甕棺ギリギリに

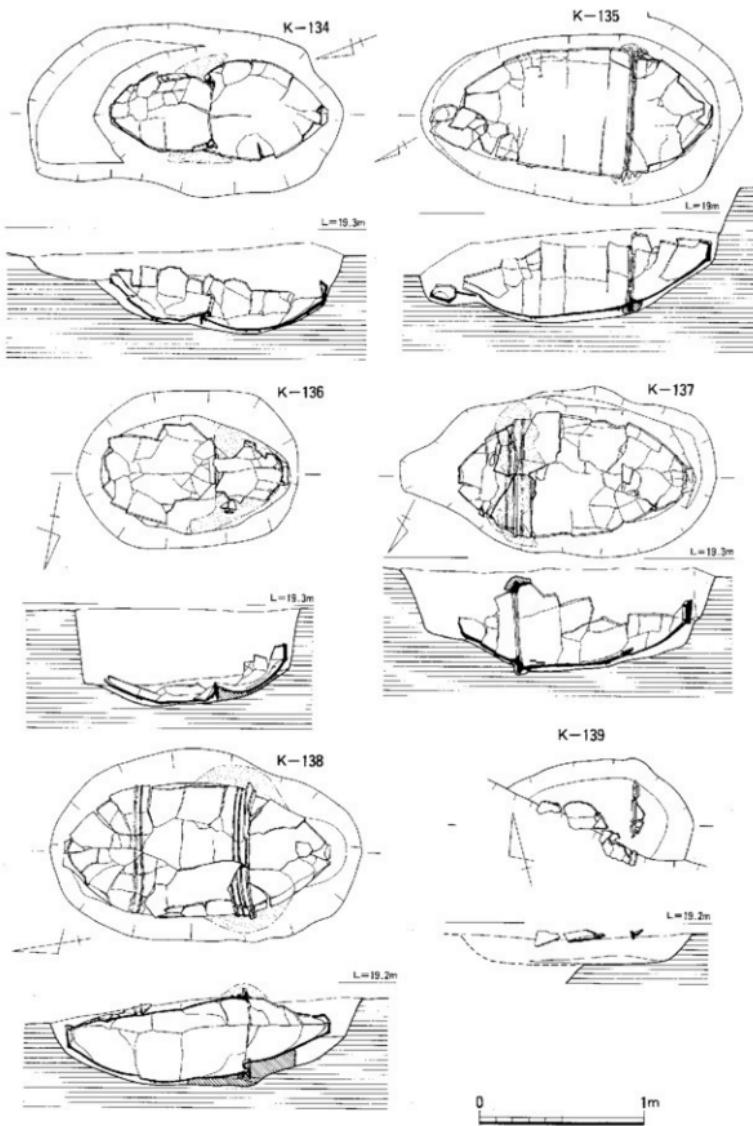


Fig.25 第一次調査IV区塚根墓実測図-6(縮尺1/30)

造られている。墓壙は192cm×105cm、深さ58cm、墓壙の長軸N-60°-E、下甕底部傾斜角度は不明。

K-136(Fig.16-25 PL.5-7-8) K-136はBグループの東側中央部に位置し、K-180を切る。甕+甕のセットで、呑口式成人棺である。上甕は口縁部を打ち欠き、目貼りは黄褐色粘土で、上甕の裏込めに使用しており安定を図っている。墓壙は135cm×97cm、深さ58cm、墓壙の長軸はN-80°-E、下甕底部傾斜角度は不明。

K-137(Fig.16-25 PL.5-7-8) K-137はBグループの中央部、K-136の北側に位置し、鉢+甕のセットで、呑口式成人棺である。掘方は底辺で段を有し、口縁部接合面で下甕部分を詰ませている。接合部分には幅広く厚い黄褐色粘土の目貼りを施している。墓壙は194cm×106cm、深さ65cm、墓壙の長軸はN-65°-E、下甕底部傾斜角度は85°を測る。

K-138(Fig.16-25 PL.4-5) K-138はBグループの東側に位置し、上甕を南側にしてK-191の北側から検出された。上面が潰れた状態で検出したが、遺存度は良く上面の目貼りも厚く施されている。鉢+甕のセットで、呑口式成人棺である。掘方は、椭円形を呈し、合口部分に段を有する。目貼りは黄褐色粘土を施しているが、接合部分のはかに上下甕の胴部近くまで裏込めとして用いている。墓壙は190cm×116cm、深さ54cm、墓壙の長軸N-8°-E、下甕底部傾斜角度は83°を測る。

K-139(Fig.17-25) K-139はCグループの中央部に位置し、SD-04によって切られているためその殆どが破壊されている。鉢+甕のセットで、呑口式成人棺と思われる。墓壙は141cm×96cm、深さ19cm、墓壙の長軸N-75°-W、下甕底部傾斜角度は不明。

K-140(Fig.16-26 PL.7-9) K-140はBグループの南側に位置し、石蓋土壙とK-209に接して検出されており、前後関係は石蓋土壙がK-140・209を切る。上甕は石蓋土壙により底部付近の破壊を受けている。甕+甕のセットで、呑口式成人棺である。目貼りは黄褐色粘土で接合部分と上下甕の胴部付近まで裏込めとして使用している。掘方は二段掘りで、下甕部分に段を有する。墓壙は209cm×142cm、深さ72cm、墓壙の長軸N-14°-W、下甕底部傾斜角度は81°を測る。

K-141(Fig.17-26 PL.8-10) K-141はCグループの東隅に位置し、K-122に隣接する。上甕を北東に向いている。鉢+甕のセットで、呑口式成人棺である。目貼りは黄褐色粘土で、接合部分と上甕裏込めに厚く施されており、さらに数個の小石を配置している。墓壙は153cm×95cm、深さ66cm、墓壙の長軸N-36°-E、下甕底部傾斜角度は86°を測る。

K-142(Fig.18-26 PL.9) K-142はDグループの南側に位置し、K-125・126に挟まれた状態で検出した。鉢+甕のセットで、呑口式成人棺である。目貼りは黄褐色粘土で、接合部分に厚く施す。墓壙は190cm×104cm、深さ57cm、墓壙の長軸N-6°-E、下甕底部傾斜角度は80°を測る。

K-143(Fig.16-26 PL.7-8-10) K-143はBグループの北側中央部、K-135の下から検出したもので、上甕部はK-135によってその殆どが覆われた状態であった。しかしながら遺構の遺存度は良く、上面部分がわずかに破壊されている程度である。鉢+甕のセットで、呑口式成人棺である。目貼りは黄褐色粘土で接合部分に厚く施すが、このほかにも上下甕胴部中位まで裏込めとして使用している。墓壙は171cm×94cm、深さ95cm、墓壙の長軸N-22°30'-E、下甕底部傾斜角度は90°を測る。

K-144(Fig.16-26 PL.8) K-144はBグループの北側中央部に位置し、K-145、SC-51に隣接して上甕を南に向けて埋置している。甕+甕のセットで、呑口式成人棺である。目貼りは黄褐色粘土を接合部分と上甕の安定のため裏込めとして使用している。掘方は深く、他の遺構との切り合い関係はない。口縁部に刻み目があるところから中期初頭に属する。墓壙は190cm×112cm、深さ74cm、墓壙の長軸N-28°-E、下甕底部傾斜角度は90°を測る。

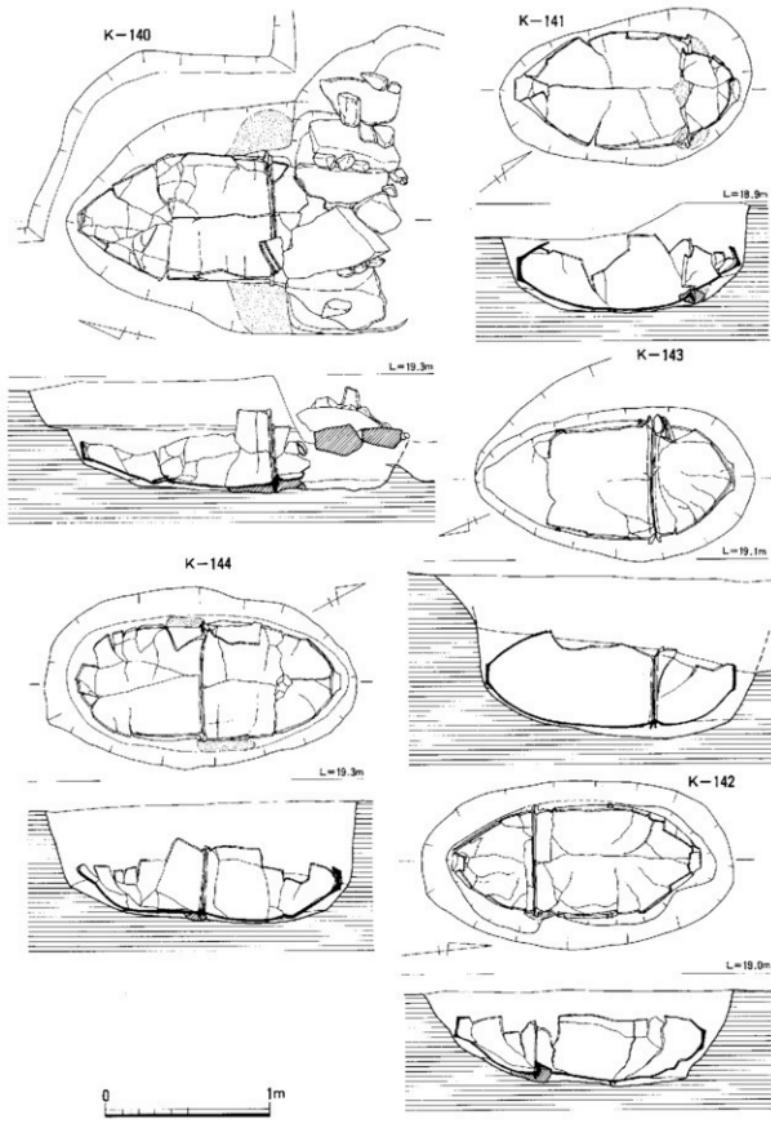


Fig.26 第一次調査IV区塊墓実測図-7(縮尺1/30)

K-145(Fig.16-27 PL.8) K-145はBグループとCグループに接するSC-51の南側壁面を破壊するK-127を切る形で埋置。壺+壺のセットで、覆口小児棺である。上下壺とも口縁部を打ち欠き目貼りは黄褐色粘土で、下面にも裏込めとして使用している。墓壙の掘方は深く90cm×77cm、深さ63cm、墓壙の長軸はN-75°30'-E、下壺底部傾斜角度は70°を測る。

K-146(Fig.17-27) K-146はCグループのSC-51の北側に位置する。SD-04に北半分を破壊されている。壺+壺のセットで、合口式成人棺の可能性がある。墓壙は148cm×82cm、深さ21cm、墓壙の長軸はN-45°-W、下壺底部傾斜角度は不明。

K-147(Fig.18-27 PL.6) K-147はDグループの南東側、K-148・149に隣接する位置で検出した。単口式成人棺と考えられるが、北東側に鉢型土器の破片が散乱しており、墓壙も北側に向きを変えており別の遺構の可能性がある。また墓壙自体も段差があり、この形状からすれば複式棺として呑口式しか考えられない。墓壙は182cm×94cm、深さ37cm、墓壙の長軸はN-87°30'-E、下壺底部傾斜角度は不明。

K-148(Fig.18-27 PL.6) K-148はDグループの東側、K-147の北、151の南側に位置する。壺+壺のセットで、合口式成人棺である。目貼りは黄褐色粘土を施しているが、接合部分のほかに下壺の肩部、上壺の底部まで施している。墓壙は188cm×98cm、深さ47cm、墓壙の長軸N-18°-W、下壺底部傾斜角度は90°を測る。

K-149(Fig.18-27 PL.6) K-149はDグループに属し、K-150の南側に上壺を東に向けて埋置。鉢+壺のセットで、呑口式小児棺である。目貼りは黄褐色粘土を施している。墓壙は98cm×72cm、深さ29cm、墓壙の長軸N-89°-W、下壺底部傾斜角度は90°を測る。

K-150(Fig.18-27 PL.6) K-150はDグループに属し、K-149の北側に位置する。検出された状態は、口縁部が打ち欠かれた壺形土器だけであるが、墓壙の形状及び目貼り等が認められないことから、上壺部分が抜き取られた可能性が高い。墓壙は103cm×76cm、深さ21cm、墓壙の長軸N-82°-E、下壺底部傾斜角度は90°を測る。

K-151(Fig.18-27 PL.6) K-151はDグループに属し、K-148の北側に上壺を北に向けて埋置。壺+壺のセットで、合口式成人棺である。目貼りは接合部分にやや薄く黄褐色粘土を巻き、このほかに下壺部分に裏込めとして敷き安定を図っている。墓壙は153cm×84cm、深さ31cm、墓壙の長軸N-10°30'-W、下壺底部傾斜角度は87°を測る。

K-152(Fig.27) K-152はDグループに属し、K-151の北側から検出した。遺構の遺存状態が悪く、底面しか検出できなかったが、おそらく単口式の小児棺であろう。墓壙は47cm×35cm、深さ10cm、墓壙の長軸N-58°30'-E、下壺底部傾斜角度は不明。

K-153(PL.6) K-153は暴風のため遺構実測図を紛失した。壺棺は取り上げた跡であり、再度図化できなかった。

K-154(Fig.18-27 PL.6) K-154はDグループに属し、上壺を南東に向けてK-155の南東側から検出した。鉢+壺のセットで、上壺の口縁部を打ち欠く合口式小児棺である。墓壙は59cm×39cm、深さ19cm、墓壙の長軸N-36°-W、下壺底部傾斜角度は65°を測る。

K-155(Fig.18-27 PL.6) K-144はDグループに属し、K-154の北側に位置する。上壺に使用しているものは特殊器台杯部のみを打ち欠いて上壺としている。下壺は壺形土器で、特殊器台+壺のセットで、覆口式小児棺である。目貼りは黄褐色粘土で接合部分に薄く施している。掘方は不整形を呈し、墓壙は77cm×56cm、深さ15cm、墓壙の長軸N-50°-W、下壺底部傾斜角度は不明。

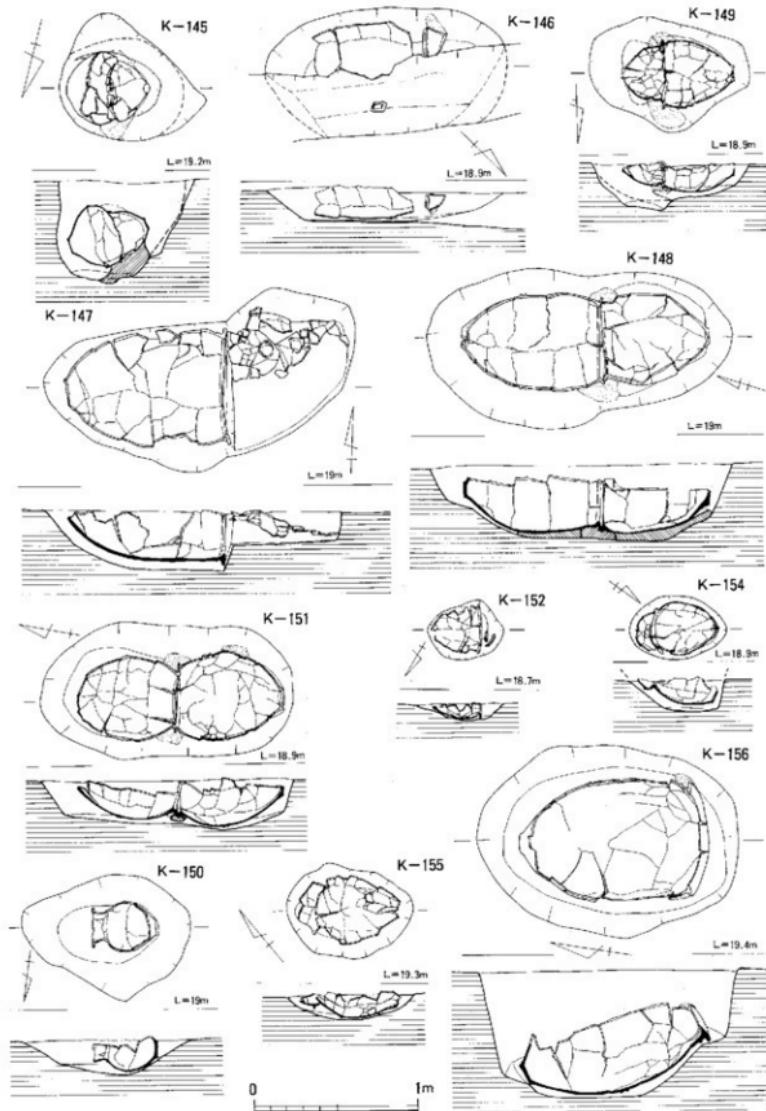


Fig.27 第一次調査IV区発堀墓実測図-8(縮尺1/30)

K-156(Fig.18-27 PL.6-10) K-156はDグループの中央部、K-153の北側に位置する。單口式成人棺で、墓壙は二段掘りを行っている。口縁部には、薄く目貼りの黄褐色粘土を施している。墓壙は160cm×116cm、深さ78cm、墓壙の長軸はN-9°-W、下甕底部傾斜角度は62°を測る。

K-157(Fig.18-28 PL.6-10) K-157はDグループに属し、K-158を切る。甕+甕のセットで、合口式小児棺である。掘方は中央部に凸部を作りだし、甕棺を水平に設置されるように成形している。墓壙は144cm×75cm、深さ26cm、墓壙の長軸はN-16°30'-E、下甕底部傾斜角度は87°を測る。

K-158(Fig.18-28 PL.6-10) K-158はDグループに属し、K-157の下面から上甕を北に向けて検出された。甕+甕のセットで、合口式成人棺である。目貼りは黄褐色粘土を施している。掘方は甕棺ぎりぎりに掘られている。墓壙は200cm×89cm、深さ53cm、墓壙の長軸N-17°-E、下甕底部傾斜角度は84°を測る。

K-159(Fig.18-28 PL.6-10) K-159はDグループに属し、一番北西側に位置し、上甕を東側に向て埋置している。甕+甕のセットで、合口式成人棺である。棺自体の長さは200cmある。掘方は棺ぎりぎりに掘られ、レンズ状を呈する。目貼りは黄褐色粘土で、合口部分のみに施している。墓壙は227cm×93cm、深さ39cm、墓壙の長軸N-72°-W、下甕底部傾斜角度は90°を測る。

K-160(Fig.19-28 PL.4) K-160はEグループの北東側に位置し、K-164の南東側から検出した。遺構の遺存状態が悪く、底面しか残っていないため複合か単棺か不明。しかしながら墓壙の大きさから複合の可能性がある。丹塗り甕形土器を転用している。墓壙は90cm×62cm、深さ13cm、墓壙の長軸N-33°-W、下甕底部傾斜角度は80°を測る。

K-161(Fig.19-28 PL.4) K-161はEグループの中央部、K-169-202に接まれた位置から検出した。甕+甕のセットで、合口式小児棺である。目貼りは黄褐色粘土を厚く巻いているが、上甕裏込めとしても使用している。墓壙は75cm×45cm、深さ21cm、墓壙の長軸N-40°30'-E、下甕底部傾斜角度は92°を測る。

K-162(Fig.19-28 PL.4) K-162はEグループの中央部、K-163を切る形で上甕を東に向けて検出した。削平が著しく、底面近くしか残っていないため明確でないが、上甕の口縁部が認められないことと、下甕の口縁部が残っているにもかかわらず上甕の口縁部がないことから合口かもしくは目貼りによって密封するものと考えられる。目貼りは黄褐色粘土を使用しており幅広く厚く巻いている。甕+甕のセットの成人棺である。墓壙は171cm×90cm、深さ25cm、墓壙の長軸N-86°30'-W、下甕底部傾斜角度は80°を測る。

K-163(Fig.19-28 PL.4) K-163はEグループに属し、K-162から切られ、上甕を南西に向けて検出した。鉢+甕のセットで、合口式成人棺である。目貼りは黄褐色粘土を厚く合口部分に巻いている。裏込めは、暗褐色砂土及び粘土混じりの砂土である。墓壙は186cm×113cm、深さ51cm、墓壙の長軸N-41°30'-E、下甕底部傾斜角度は不明。

K-165(Fig.19-28 PL.4-6) K-165はEグループに属し、K-166-167に隣接する。削平が著しく底面しか残っていない。墓壙の大きさから複合の甕棺と思われるが、上甕の破片が全く見あたらないことから単棺の可能性もある。墓壙は88cm×48cm、深さ13cm、墓壙の長軸N-51°-W、下甕底部傾斜角度は不明。

K-166(Fig.19-28 PL.4-6) K-166はEグループの西側に位置し、口縁部を南に向けて検出した。大型甕形土器の单口式成人棺で、ほぼ水平に埋置されている。目貼りは黄褐色粘土で、口縁部に接して厚く施されているため、板蓋の可能性が高い。掘方は整形の隅丸長方形を呈し、墓壙は164cm×120cm、深さ51cm、墓壙の長軸N-20°-E、下甕底部傾斜角度は82°を測る。

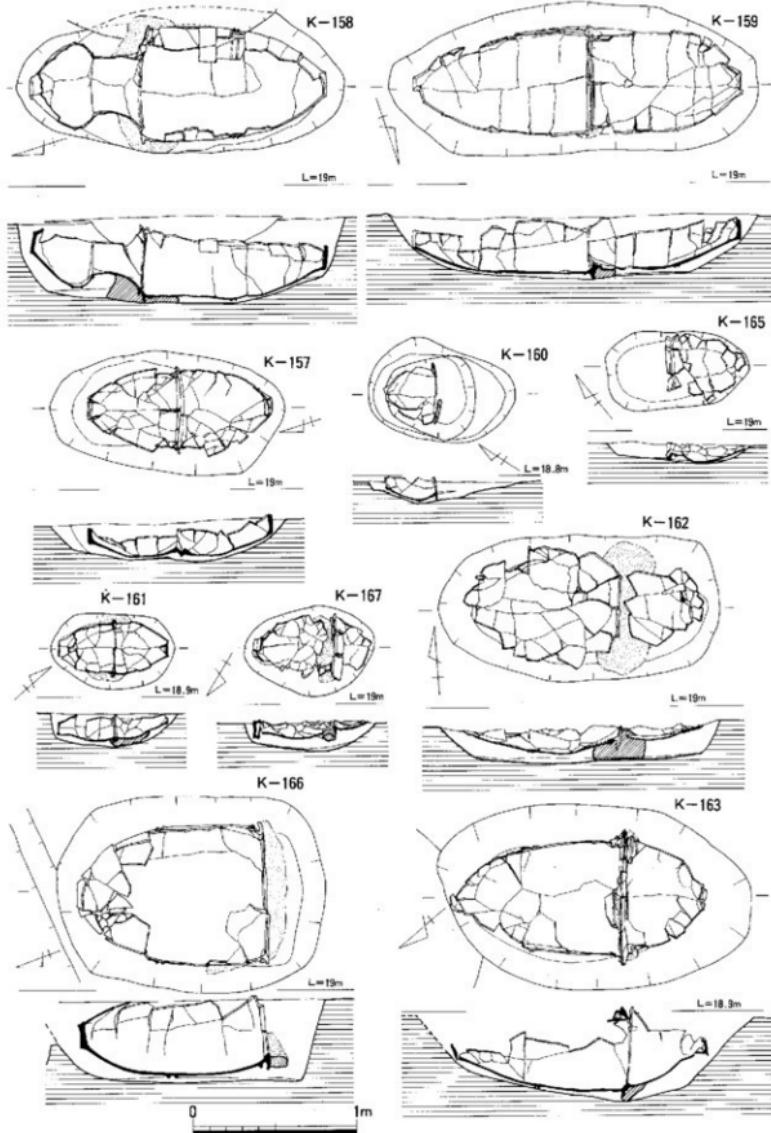


Fig.28 第一次調査IV区棗椎墓実測図-9(縮尺1/30)

K-167(Fig.19・28 PL4・6) K-167はEグループに属し、K-165・168に挟まれて検出された。甕+甌のセットで、合口式小児人棺と思われるが、下甌の口縁部がはずされ、部分的に遺存していた。目貼りは黄褐色粘土を厚く幅広く施している。墓壙は80cm×55cm、深さ18cm、墓壙の長軸はN-47°30' -E、下甌底部傾斜角度は不明。

K-168(Fig.19・29 PL4・6) K-168はEグループの中央部、K-167・169に挟まれた位置から検出された。口縁部付近が搅乱を受けているため、複口か単口かは不明。成人棺であることは大型甌形土器を使用していることから明白である。墓壙は129cm×100cm、深さ37cm、墓壙の長軸N-49°-W、下甌底部傾斜角度は不明。

K-169(Fig.19・29 PL4・6) K-169はEグループに属し、K-168・161に隣接する。上甌を西に向けて埋置している。鉢+甌のセットで、合口式成人棺である。目貼りは黄褐色粘土で、合口部分に厚く施している。墓壙は188cm×96cm、深さ42cm、墓壙の長軸N-59°30' -W、下甌底部傾斜角度は90°を測るが、底部がずれているため正確ではない。

K-170(Fig.19・29 PL4・6) K-170はEグループの北側に位置し、K-169に隣接する。口縁部を東側に向け埋置されている。削平が著しいため造構の遺存状態が悪く、底面しか残っていない。恐らく単口式の成人棺と考えられ、水平に埋置している。目貼りは認められない。墓壙は144cm×96cm、深さ21cm、墓壙の長軸N-62°-W、下甌底部傾斜角度は不明。

K-171(Fig.19・29 PL4・6) K-171はEグループの北西隅に、上甌を北西に向けて埋置している。後世の造構によって切られている。壺+甌のセットで、合口式成人棺で、上甌の壺形土器口縁部は打ち欠いている。掘方は合口部分で二段掘りを行っているが、その上に暗褐色砂質土を裏込めとして使用し、棺の安定を図っている。目貼りは上甌部分を中心に黄褐色粘土を厚く施している。墓壙は175cm×95cm、深さ44cm、墓壙の長軸N-60°-W、下甌底部傾斜角度は78°を測る。

K-172(Fig.17・29) K-172はCグループの中央部に位置し、S C-51の中央部を切る形で、上甌を北に向けて検出した。壺+甌のセットで、合口式成人棺である。上甌の口縁部は打ち欠き、胴部中位が下甌口縁部と接合する。掘方は接合部分を凸状に盛り上げ、目貼りの黄褐色粘土を幅広く厚く巻く。下甌の底部近くには、裏込めに炭化物が混じる暗黒褐色土を敷き詰めている。墓壙は145cm×74cm、深さ74cm、墓壙の長軸N-12°-E、下甌底部傾斜角度は85°を測る。

K-173(Fig.16・29 PL5) K-173はBグループの南側に位置し、S C-58・K-102・209を切る。甌+甌のセットで、合口式小兒（中人）棺である。掘方は深く、埋土は暗褐色土を呈し、上甌の胴部から接合部分にかけて灰黄褐色粘土を目貼り・裏込めとして使用している。墓壙は126cm×66cm、深さ66cm、墓壙の長軸N-45°-E、下甌底部傾斜角度は60°。

K-174(Fig.16・29 PL5・7) K-174はBグループの南側に位置し、S C-67・58、K-131を切る形で検出した。甌+甌のセットで、合口式成人棺である。黄褐色粘土は目貼りと上甌の裏込めとして使用している。掘方はU字形を呈し、造構の遺存状態は良い。墓壙は164cm×96cm、深さ60cm、墓壙の長軸N-80°-W、下甌底部傾斜角度は下甌底部が動いているため不明。

K-175(Fig.16・29 PL5・7・10) K-175はBグループの中央部に位置し、K-174の北側から検出した。造構の遺存状態は良好とはいえない。下棺は丹塗りの甌形土器を使用している。合口部分に厚く黄褐色粘土で、目貼りを施している。墓壙は80cm×39cm、深さ21cm、墓壙の長軸N-32°-E、下甌底部傾斜角度は75°を測る。

K-176(Fig.16・29 PL5・7・10) K-176はBグループの中央部、S C-67を切る形で検出した。上甌が口縁部打ち欠きであり、甌+甌のセットで、呑口式小児棺である。呑口部分に厚く黄褐色粘土

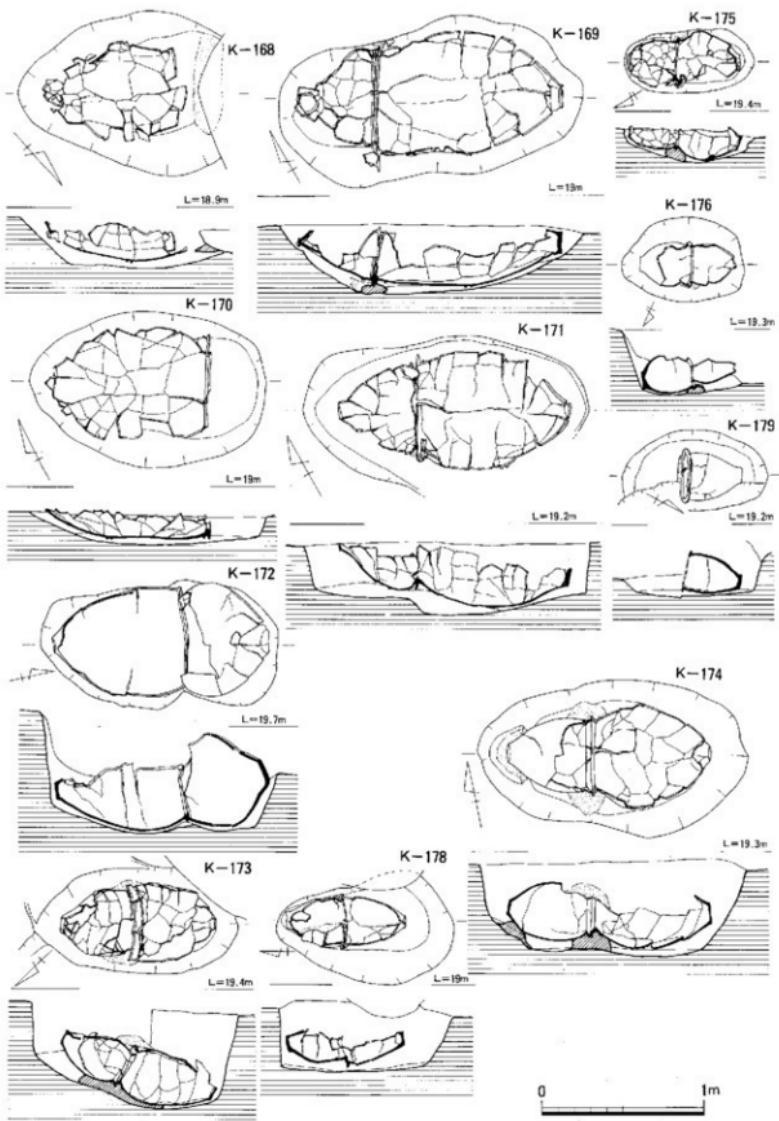


Fig.29 第一次調査IV区発掘墓実測図-10(縮尺1/30)

で目貼りを施す。墓壙は75cm×52cm、深さ39cm、墓壙の長軸N-65°30'-E、下甕底部傾斜角度は78°を測る。

K-177(Fig.16-30 PL.5-7-10) K-177はBグループの中央部に位置し、S C-67を切り、105から切られる。上甕を南西に向けて埋置している。上甕は胴部中位まで打ち欠かれている。甕+甕のセットで、呑口式成人棺である。黄褐色粘土を目貼り・裏込めとして施している。墓壙は142cm×96cm、深さ70cm、墓壙の長軸はN-31°30'-E、下甕底部傾斜角度は90°を測る。

K-178(Fig.16-29 PL.4-5-7-8-10) K-178はBグループに属し S C-67を切り、K-203に切られる形で検出した。遺構の遺存状態は良好である。甕+甕のセットで合口式小児棺である。目貼りは施さない。墓壙は107cm×70cm、深さ43cm、墓壙の長軸N-1°-E、下甕底部傾斜角度は80°を測る。

K-179(Fig.16-29 PL.5-8) K-179はBグループの中央部に位置し、K-108-129に切られる。甕を使用した単口式小児棺である。目貼りの黄褐色粘土中に不鮮明はあるが、浅い溝状が観察され板蓋と考えられる。墓壙は90cm×46cm、深さ20cm、墓壙の長軸N 29°30'-W、下甕底部傾斜角度は80°を測る。

K-180(Fig.16-30 PL.4-5-7-8) K-180はBグループの中央部から検出した。K-136により下甕墓壙部分が破壊を受けている。鉢十甕のセットで、合口式成人棺であり、下甕は107cmとかなりの大きさの甕形土器を使用している。上甕部分に数個の石が入り込んでいる。このため、上甕は殆どが破壊されている。この石は墓標的なものか、後世のものは不明であるが、この他にも同じような状態で検出されているところから墓標の可能性が高い。墓壙の掘方は上甕部分が垂直に掘り込まれ、下甕部分がなだらかな傾斜を持ち、従来の墓壙の掘方とは異なる。墓壙は197cm×90cm、深さ84cm、墓壙の長軸N-26°-E、下甕底部傾斜角度は90°を測る。

K-181(Fig.16-30 PL.5-7-10) K-181はBグループの中央部、K-106に切られた形で検出した。甕+甕のセットで、合口式小児棺である。遺構の遺存状態は良好で、棺自体もほぼ完全な形である。目貼りは黄褐色粘土で、接合部分を厚く覆っている。墓壙は112cm×63cm、深さ61cm、墓壙の長軸N-14°30'-W、下甕底部傾斜角度は84°を測る。

K-182(Fig.16-30 PL.5) K-182はBグループで、祭祀遺構であるS X-55によって切られる。蓋+甕のセットで、合口式小児棺である。上甕一部が破損しているが、ほぼ完形で検出された。地山は灰青色の砂質土であり、埋土は暗茶褐色上で、若干粘質があり、焦げ茶色の斑点を含む。墓壙はレンズ状を呈し、墓壙は93cm×82cm、深さ38cm、墓壙の長軸N-5°-W、下甕底部傾斜角度は75°。

K-183(Fig.16-30 PL.5-6) K-183はBグループの北西側、S C-55-57を切る形で検出した。鉢+甕のセットで、合口式成人棺である。黄褐色粘土の目貼りを接合部分に施すが薄い。下甕は水平に埋置され、上甕はやや傾斜する。墓壙は172cm×84cm、深さ40cm、墓壙の長軸N-41°-W、下甕底部傾斜角度は83°を測る。

K-184(Fig.16-30 PL.5-7) K-184はBグループの北西側、S C-57を切る形で検出した。壺+壺胴部+甕のセットで、三連式成人棺である。上甕の壺形土器底部は伏せた状態で上を向き、中甕上面だけを被せたことが窺える。上・中甕とも丹塗り壺形土器である。上甕の下面には壺を割り、外面を内にして配置されている。目貼りは黄褐色粘土で、下甕口縁部付近から中甕部分まで幅広く厚く施す。墓壙は150cm×103cm、深さ40cm、墓壙の長軸N-65°30'-E、下甕底部傾斜角度は99°。

K-185(Fig.16-30 PL.5-7) K-185はBグループの西側、S C-56の南西隅を切る形で検出した。遺構の遺存状態は悪く、墓壙自体かなり削平を受けている。壺形土器を使用した単口式小児棺と思われる。墓壙は58cm×45cm、深さ10cm、墓壙の長軸N-89°-E、下甕底部傾斜角度は72°を測る。

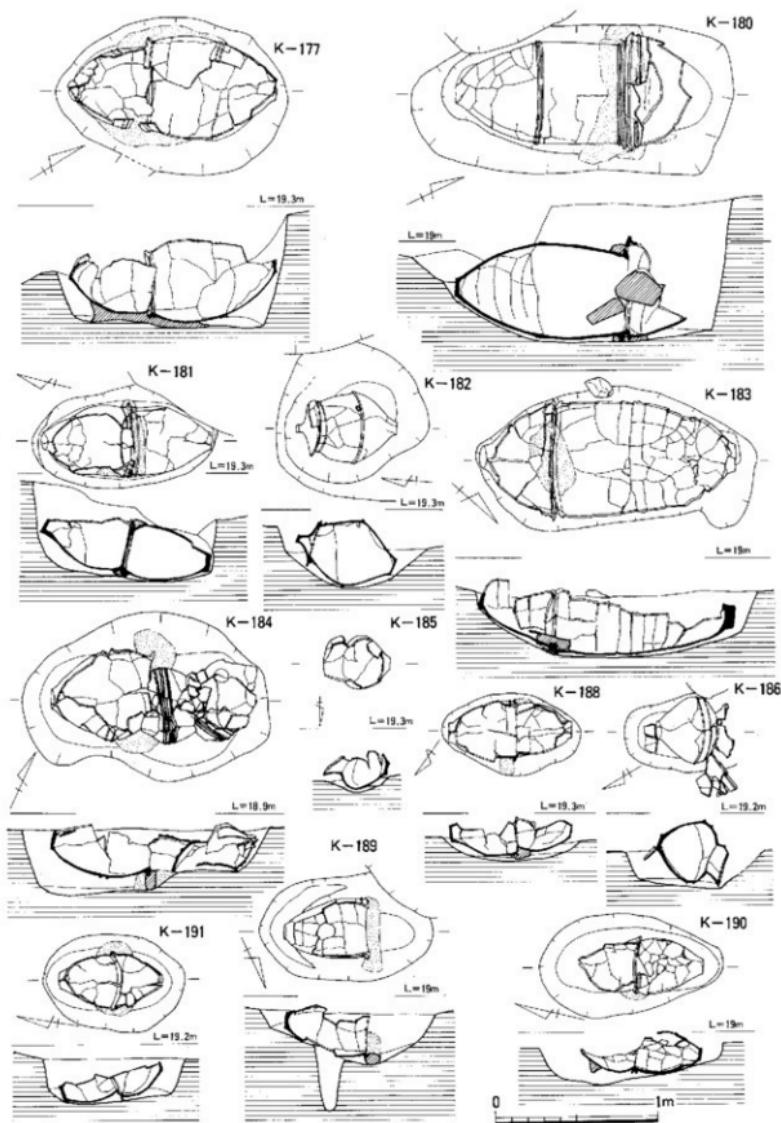


Fig.30 第一次調査IV区漁場墓実測図-11(縮尺1/30)

K-186(Fig.16・30 PL.5・7) K-186はBグループの北西側に位置し、S C-57を切り、K-184によって切られる。しかしながら南側部分の墓壙の掘方が、不明瞭であること、また、周辺部に口縁部等が配置されていることから下層S C-57の遺物とも考えられる。彫形土器の単口式小児棺である。墓壙は $60 + \alpha$ cm×50cm、深さ22cm、墓壙の長軸N-30°30'-E、下窓底部傾斜角度は110°。

K-188(Fig.16・30 PL.6) K-188はBグループの西側に位置し、K-190と隣接して検出した甕+甕のセットで、合口式小児棺である。遺構の遺存状態は悪いが、棺自体は残りが良かった。合口部分に黄褐色粘土の目貼りを厚く施している。墓壙は84cm×50cm、深さ14cm、墓壙の長軸N-54°-E、下窓底部傾斜角度は82°を測る。

K-189(Fig.16・30 PL.6) K-189はBグループの北西部に位置し、190によって切られる。口縁部に黄褐色粘土を目貼りとして厚く巻いているが、その粘土と口縁部との境に板蓋痕を残すことから単口式小児棺である。墓壙下に柱穴が確認できるが、これは柱穴を破壊して甕棺墓が埋置されたものである。墓壙は106cm×65cm、深さ36cm、墓壙の長軸N-64°30'-W、下窓底部傾斜角度は95°を測る。

K-190(Fig.16・30 PL.6) K-190はBグループの北西隅から検出され、K-189を切る。甕+甕のセットで、合口式小児棺である。遺構の遺存状態は約1/2程度で、上窓部分は破壊が著しい。上窓の掘方は深く、砂混じりの暗灰褐色土であるが、一部黄褐色粘土で棺を支えている。墓壙は112cm×63cm、深さ25cm、墓壙の長軸N-13°-W、下窓底部傾斜角度は80°を測る。

K-191(Fig.16・30 PL.4・5・7・8・) K-191はBグループの南東隅に位置し、K-95に隣接する。甕+甕のセットで、合口式小児棺である。上窓は丹塗りの土器を使用している。合口部分に厚く目貼りの黄褐色粘土を巻き、上窓裏込めとして灰青砂質土を使用している。墓壙は86cm×60cm、深さ27cm、墓壙の長軸N-9°30'-W、下窓底部傾斜角度は72°を測る。

K-201(Fig.19・31 PL.4) K-201はEグループの中央部に検出された。鉢+甕のセットで、合口式成人棺である。検出時は完形であったが、上面は崩落してしまった。合口部分には目貼りの黄褐色粘土があるが薄い。墓壙は甕棺ギリギリに掘られ、断面レンズ状を呈する。墓壙は175cm×109cm、深さ54cm、墓壙の長軸N-68°-E、下窓底部傾斜角度は90°を測る。

K-202(Fig.19・31 PL.4) K-202はEグループの中央部、K-161・201に挟まれて検出された。削平され、遺存度が悪く上・下窓の底部は欠損している。甕+甕のセットで、合口式小児棺である。目貼りは施されておらず、やや傾斜を持って埋置されている。墓壙は51cm×36cm、深さ12cm、墓壙の長軸N-26°30'-W、下窓底部傾斜角度は不明。

K-203(Fig.16・31) K-203はBグループの中央部、S C-67の北東部に位置し、K-178を切る。上窓は大型鉢形土器の口縁部を打ち欠き、下窓の洞部まで上から覆う形の鉢+甕のセットで、合口式小児棺である。墓壙は107cm×81cm、深さ36cm、墓壙の長軸N-8°-W、下窓底部傾斜角度は72°を測る。

K-204(Fig.16・31) K-204はBグループの中央部、S C-67の東側で検出された。甕+甕+甕の三連セットで、成人（中人）棺である。下棺の中に底部を打ち欠いた同型の彫形土器を挿入し、その口縁部を接合して三連を形成している。この部分には目貼りとして黄褐色粘土を厚く施している。今回の調査で三連式の甕棺墓は2例目である。墓壙は160cm×70cm、深さ44cm、墓壙の長軸N-67°-W、下窓底部傾斜角度は99°を測る。

K-205(Fig.16・31) K-205はBグループの中央部、S C-67の北側に位置し、K-108により切られる。上窓に相当する部位にK-108の墓壙掘方が当たるため定かではないが、上窓は破壊されている可能性が高い。小型の桶形に近い彫形土器が下窓であることも単口式の可能性は低い。おそらく甕+

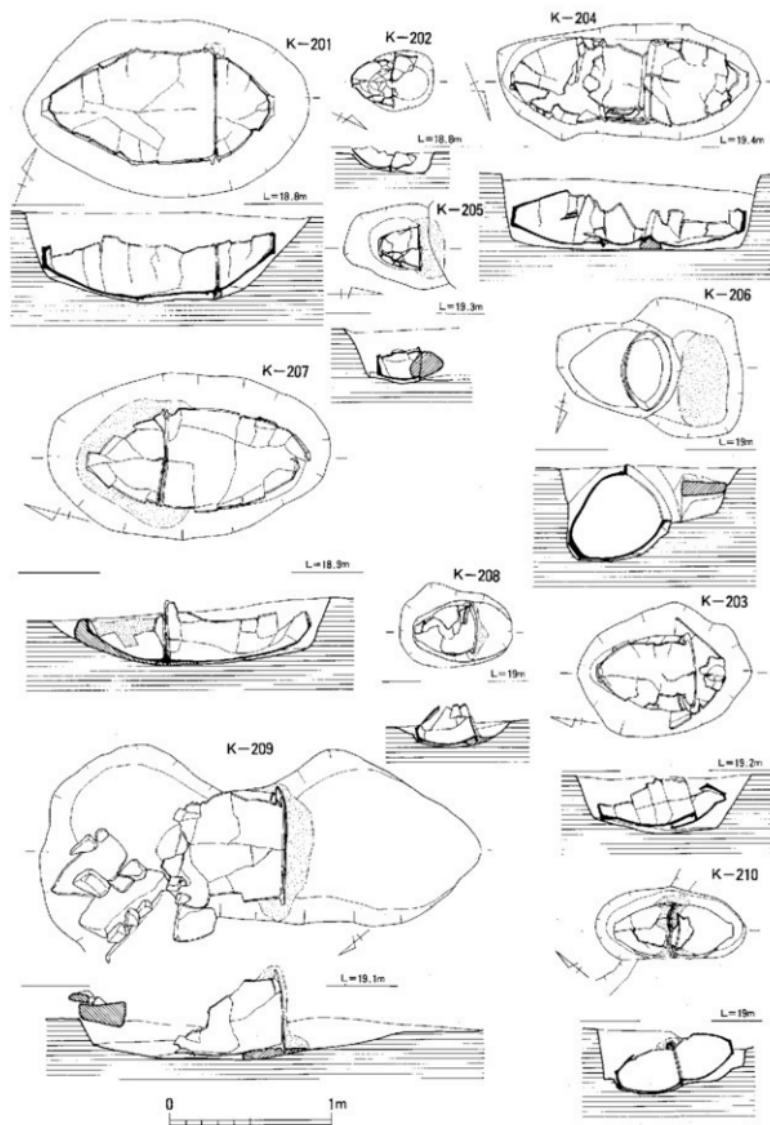


Fig.31 第一次調査 N 区甕棺墓実測図-12(縮尺1/30)

甕のセットで、合口式小児棺と思われる。目貼りは黄褐色粘土で、口縁部付近に厚く施されている。墓壙は $62 + \alpha$ cm×52cm、深さ33cm、墓壙の長軸N-1°-E、下甕底部傾斜角度は83°を測る。

K-206(Fig.16-31 PL.10) K-206はBグループの北側中央部、S C-52の東側から検出した。検出状況は単口式であるが、墓壙の掘方、目貼り等から複棺の可能性もある。ただ下甕内、その周辺からは上甕の破片は認められない。板蓋単口式成人棺としておく。掘方は二段掘りとなっており、段部分に口縁部が位置するように造られている。目貼りは口縁部よりかなり上部の方に、下に砂を敷き厚く施しているが、この状態では意味をなさないことから、口縁部付近は取り除かれている可能性が高い。墓壙は113cm×83cm、深さ59cm、墓壙の長軸N-77°30'-E、下甕底部傾斜角度は55°を測る。

K-207(Fig.17-31) K-207はCグループの西側に位置し、S C-66の中央部に上甕を北西に向けて埋置している。鉢+甕の合口式成人棺で、水平に埋置されている。目貼りは黄褐色粘土で、上甕全体と下甕側部まで覆うように施している。墓壙は172cm×101cm、深さ42cm、墓壙の長軸N-13°30'-W、下甕底部傾斜角度は113°を測る。

K-208(Fig.17-31) K-208は207と同様にBグループの西側に位置し、K-207・219に隣接して検出した。小型甕形土器を使用した単口式小児棺である。墓壙の内外にも上甕の破片は発見できなかった。目貼りは黄褐色粘土+暗褐色粘土で、口縁部付近に厚く施す。墓壙は69cm×50cm、深さ15cm、墓壙の長軸N-81°30'-E、下甕底部傾斜角度は76°を測る。

K-209(Fig.16-31 PL.9) K-209はBグループの南側、S C-58の東に位置し、K-140・石蓋土壙との切り合い関係にある。K-209はK-140を切り、石蓋土壙に切られる。遺構の遺存度は悪く、破壊が著しいため明確ではないが、墓壙から見ると合口式成人棺と思われる。目貼りは黄褐色粘土を口縁部付近に厚く巻いているが、下甕の裏込めとしても使用している。墓壙は267cm×105cm、深さ25cm、墓壙の長軸N-40°30'-E、下甕底部傾斜角度は不明。

K-210(Fig.16-31 PL.6-9) K-210はBグループの南側に位置し、K-101を切る形で上甕を南東に向けて検出した。甕+甕のセットで、合口式小児棺である。遺構の遺存状態は良く、上面が多少潰れた状態で検出した。掘方は下甕ギリギリに掘られ、上甕はやや大きめに掘り込まれている。目貼りは黄褐色粘土を使用しており、幅広く厚く巻いている。墓壙は91cm×43cm、深さ39cm、墓壙の長軸N-39°30'-W、下甕底部傾斜角度は79°を測る。

K-211(Fig.16-32 PL.6-9) K-211はBグループの南側に位置し、K-101・140から切られる。甕+甕のセットで、呑口式成人棺である。上甕は肩部上位を打ち欠き、下甕の内部に挿入する形状を呈する。目貼りは黄褐色粘土を厚く合口部分に巻き、上甕上部まで裏込めとして使用している。墓壙は205cm×97cm、深さ45cm、墓壙の長軸N-53°30'-W、下甕底部傾斜角度は86°。

K-212(Fig.16-32 PL.6-9) K-212はBグループの南側に位置し、K-215によって切られる。甕+甕のセットで、呑口式成人棺である。上甕は壺形土器であるが、胴部上位を打ち欠き、下甕の中に挿入する。目貼りは黄褐色粘土を厚く接合部分に巻き、裏込めは灰黒褐色砂質土に黄褐色粘土がブロックで混入している。墓壙は185cm×95cm、深さ57cm、墓壙の長軸N-56°-E、下甕底部傾斜角度は90°。

K-213(Fig.16-32 PL.9) K-213はBグループの東側に位置し、K-97・214と接近する。K-98が上部に埋置され、上甕部分の墓壙を破壊する。鉢+甕のセットで、合口式成人棺である。目貼りは黄褐色粘土で、下甕の安定のためにも使用している。掘方は上甕部分が垂直に立ち上がり、下甕が緩やかな傾斜を有する。墓壙は197cm×90cm、深さ67cm、墓壙の長軸N-86°30'-E、下甕底部傾斜角度は90°を測る。

K-214(Fig.16-32 PL.6-9) K-214はBグループの中央部、K-99によって切られているが、ほぼ

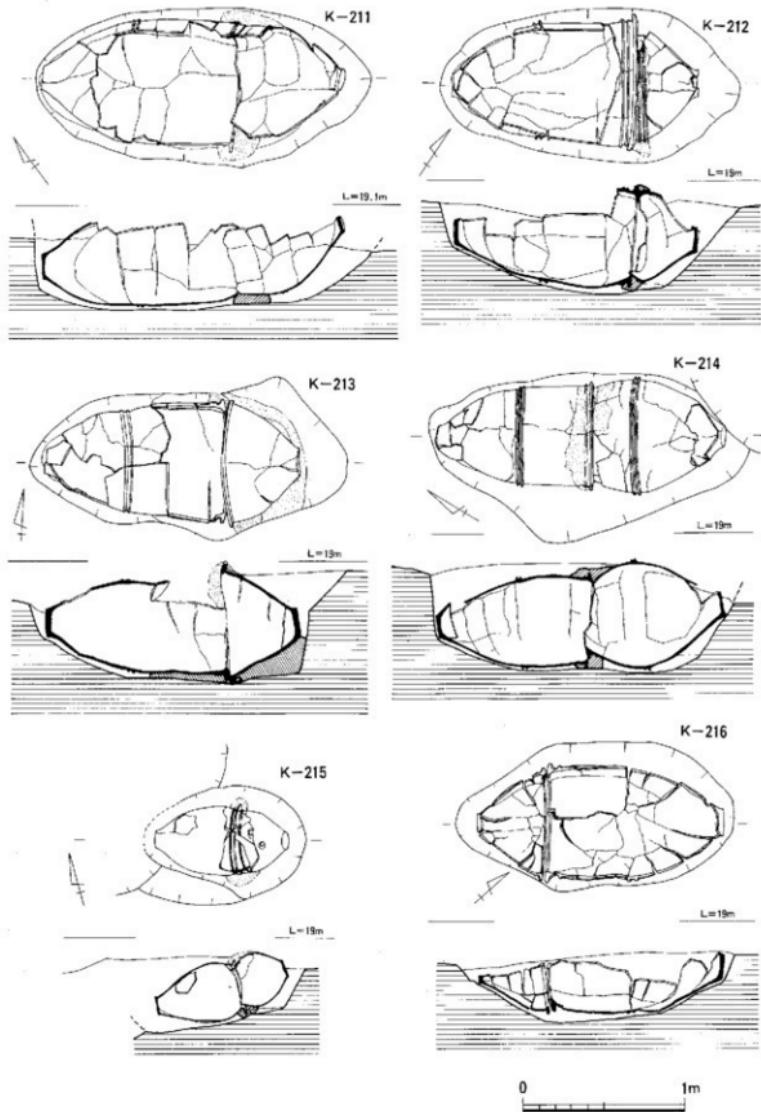


Fig.32 第一次調査IV区甕槍墓実測図-13(縮尺1/30)

完形で検出した。ほぼ水平に埋置された甕+甕の呑口式成人棺である。目貼りは黄褐色粘土で、接合部分に厚く施され、裏込めには粘質の灰褐色土を詰め込んでいる。掘方は、甕棺ギリギリに掘り込まれている。墓壙は193cm×103cm、深さ65cm、墓壙の長軸N-31°30'W、下甕底部傾斜角度は86°を測る。

K-215(Fig.16-32 PL.6-9) K-215はBグループの東側、K-95-214に近接して検出された。また、215は212の墓壙を切る。甕+甕のセットで、呑口式小児棺である。上甕は口縁部を打ち欠き、下甕内部に挿入する形をとる。目貼りは黄褐色粘土で厚く施す。埋土は暗褐色粘質土中に黄褐色粘土がブロック状に混入している。墓壙は100cm×73cm、深さ46cm、墓壙の長軸N-75°W、下甕底部傾斜角度は65°を測る。

K-216(Fig.16-32 PL.6-9) K-216はBグループの東側に位置し、K-100-209に接近し、切り合い関係は216がK-101-217を切る。鉢+甕のセットで、合口式成人棺である。遺構の遺存度は約1/2程度である。掘方は棺ぎりぎりに掘られ、レンズ状を呈する。目貼りは黄褐色粘土で、合口部分のみに施こす。墓壙は170cm×91cm、深さ43cm、墓壙の長軸N-41°E、下甕底部傾斜角度は85°を測る。

K-217(Fig.16-33 PL.6-9) K-217はBグループの東側に位置し、K-216にそのほとんどを切られている。遺構の遺存状態が悪く、残っているのは口縁部のみである。このため複合か単棺か不明。しかしながら墓壙の大きさから複合の可能性もある。丹塗り壺形土器を転用している。目貼りは黄褐色粘土で、厚く施している。墓壙は120cm×59cm、深さ48cm、墓壙の長軸N-45°E、下甕底部傾斜角度は不明。

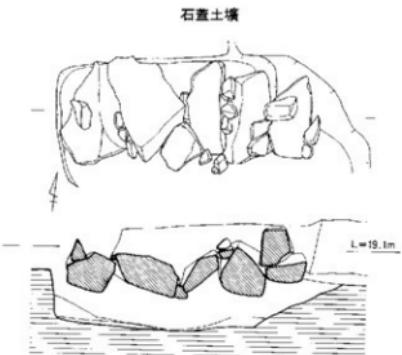
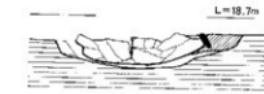
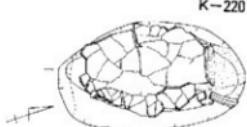
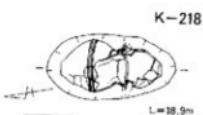
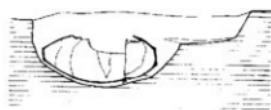
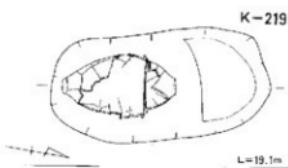
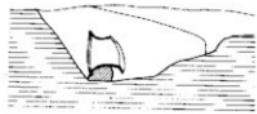
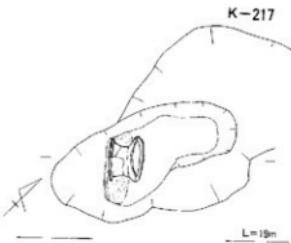
K-218(Fig.19-33 PL.10) K-218はEグループの南側から検出した。鉢+甕のセットで、呑口式小児棺である。目貼りは黄褐色粘土を呑口部分に厚く巻き、裏込めは砂を含む茶褐色土である。下甕は丹塗りの壺形土器を使用している。墓壙は80cm×40cm、深さ31cm、墓壙の長軸N-10°E、下甕底部傾斜角度は80°を測る。

K-219(Fig.17-33 PL.10) K-219はCグループの西側隅、S C-66の中央部を破壊し、K-208との切り合い関係を持ち、上甕部分の墓壙をK-208から切られている。鉢+甕のセットで、合口式小児棺である。遺構の遺存状態は良好で、目貼りは接合部分に黄褐色粘土を巻き、さらに上・下甕の下面にも黄褐色粘土を使用しており、幅広く厚く敷いている。墓壙は134cm×66cm、深さ46cm、墓壙の長軸N-9°W、下甕底部傾斜角度は88°を測る。

K-220(Fig.15-33) K-220はAグループに属し、前期末の甕棺墓K-89を切る形で、検出した。遺構の遺存状態が悪く、底面しか残っていないため詳細は不明である。口縁部付近には黄褐色粘土が認められるが、板蓋痕も認められないところから合口の可能性もある。甕棺下には砂礫に粘土を混合した土を裏込めとして使用している。墓壙は115cm×68cm、深さ21cm、墓壙の長軸N-19°30'E、下甕底部傾斜角度は不明。

(2) 石蓋土壙

石蓋土壙(Fig.16-33 PL.9) 石蓋土壙はBグループの南側、S C-58の壁面を破壊し、さらにK-140-209を破壊して埋置されている。5枚の扁平な花崗岩を配する。墓壙は長方形を呈し長軸180cm、短軸60cm、深さ60cm、墓壙の長軸N-83°30'Eを測る。



0 1m

Fig.33 第一次調査IV区秦棺墓実測図-14(縮尺1/30)

(3) 出土遺物

IV区からは弥生時代中期～後期初期の雙棺墓141基と石蓋土壙1基が検出された。この内、季節はずれの暴風雨のため図面が消失してしまい再度調査作成ができないものが15基ある。雙棺墓の内77個体が大型壺形土器を棺として使用し、大型鉢形土器19個体、大型壺形土器7個体が棺として使用されている。小型壺土器は100個体、小型壺形土器が9個体である。又、蓋1、特殊器台の口縁部のみを使用しているものの1個体、三連式2基がある。このうち29個体分（37個の壺形土器、7個の鉢形土器、6個体の壺形土器、蓋1、特殊器台の11縁部1）を図示した。

K-70(810243037・810243038)(Fig.34 PL.11)

K-70の上下棺に使用された大型壺形土器(810243037)と(810243038)である。810243037は口縁部が「T」字状口縁を呈し、胴部中位に一条の三角突帯を巡らす。最大径は胴部中位にある。底部は平底で、底部から外反しながら胴部中位で立ち上がり、さらにやや内湾しながら頸部でさらに垂直に立ち上がり口縁部に達する。口縁部は、平坦で、両端がつまみ出され端部を丸く納めている。端部には刻み目はない。口径62.4cm、器高82.5cm、底径12.2cm、最大径64cmを測る。風化が著しく調整方法は定かではないが、一部に横・縦方向の範削りが認められ、口縁内面はナデ仕上げである。胎土は3～6mm大の石英・金雲母・砂粒を多く含む。焼成は良好で、外面は赤褐色を呈し黒斑を有する。内面は褐色を呈する。

上棺の大型壺形土器810243038は下棺の壺形土器と同系統の調整・形態を呈する。底部が欠損している。調整方法は、一部に横・縦方向の範削りが認められ、口縁内面はナデ仕上げである。胎土は3～6mm大の石英・金雲母・砂粒を多く含む。焼成は良好で、内・外面に黒斑を有し、外面赤褐色、内面茶褐色を呈する。口径60.1cm、残存高63cmである。

K-72(810243041・810243042)(Fig.34 PL.11)

K-72の上下棺に使用された大型壺形土器(810243041)と(810243042)である。810243041は口縁部が「嘴状」口縁を呈し、胴部中位に一条の三角突帯を巡らす。最大径は胴部上位にある。底部はやや上げ底で、底部から外反しながら胴部上位で立ち上がり、さらにやや内湾しながら頸部に達し、内側口縁部を引き伸ばしながら嘴状に仕上げている。外側口縁部は、内側ほど引き伸ばされずやや外反する。口縁上端は平坦に仕上がっている。端部には刻み目はない。口径69.6cm、器高85.5cm、底径12.6cm、最大径70cmを測る。調整方法は、口縁部内側上部に横・縦方向の範削りが認められ、他の内面はナデ仕上げである。外面は範ナデ、横・縦ナデを施す。胎土は3～6mm大の石英・金雲母・砂粒を多く含む。焼成は良好で、外面は暗黒褐色を呈し黒斑を有する。内面は褐色を呈する。810243042はK-70の上下棺と同じ形態を呈する。口縁部が「T」字状口縁を呈し、胴部中位に一条の三角突帯を巡らす。最大径は口縁部にある。口径65.0cm、器高79.2cm、底径11.4cmを測る。調整方法は、一部に横・縦方向の範削りが認められ、口縁内面はナデ仕上げである。胎土は2～5mm大の砂粒を多く含む。焼成は良好で、外面は暗赤褐色を呈し黒斑を有する。内面は褐色を呈し、黒斑を有す。

K-97(810243058・810243059)(Fig.34 PL.11)

K-97の下棺に使用された大型壺形土器(810243058)と上棺の大型鉢形土器(810243059)である。810243058はIV区内で大きい方の甕棺である。通常80～90cm程度であるから110cmはかなりの大型といえる。底部も13.4cmと他の甕より大きい。底部の棱もシャープな造りである。底部から外反しながら胴部下位で立ち上がり、ほぼ垂直に胴部中位まで達する。頸部まではやや内湾しながら口縁部内・外側に大きくつまみ出している。外側口縁部がやや下がるが「T」字状口縁部の範囲に入る。頸部に二条の先端が潰れた三角突帯、及び胴部下位に二条の三角突帯を巡らす。調整方法は外面が範削毛目

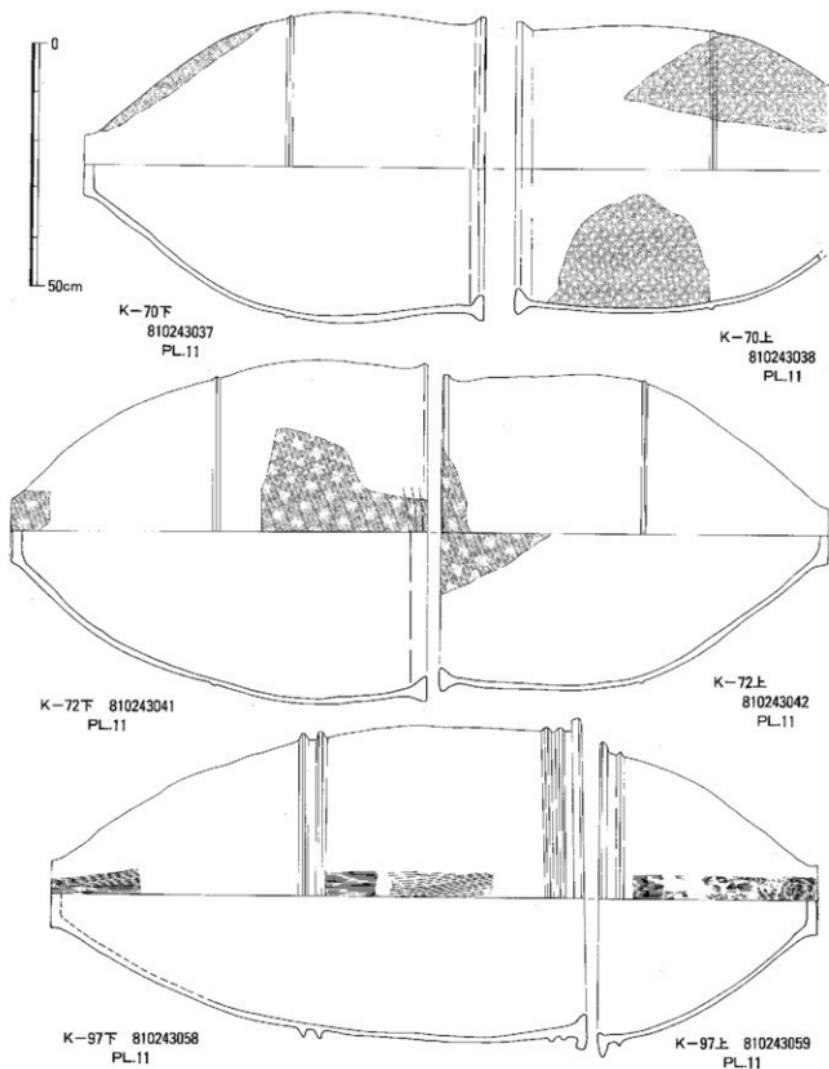


Fig.34 売槍実測図-1(格尺1/10)

黒斑を示す。
 赤色顔松を示す。

を施し、内面は指オサエの後ナデを施している。口径68.4cm、器高110.0cm、底径13.4cmを測る。胎土は3~5mm程度の石英・金雲母・砂粒を多く含む。焼成は良好で、色調は外面が黒班と明褐色、内面が褐色を呈する810243059は大型鉢形土器である。底部は僅かに上げ底で、底部から大きく外反しながら広がり頸部では直立する。口縁部内面のつまみ出しあは小さく、これに反して外側には大きくつまみ出している。口縁上端は平坦面で外側に下がり気味である。頸部下に一条の三角突帯を巡らす。調整方法は、外面に縱・斜めの刷毛目、内面は横ナデを施す。口径64.5cm、器高44.8cm、底径14.5cmを測る。胎土は3~5mm程度の石英・金雲母・砂粒を多く含む。焼成は良好で、色調は外面が黒班と明褐色、内面が褐色を呈する。

K-105(810243073・810243074) (Fig.35 PL.11)

K-105の下棺に使用された大型甕形土器(810243073)と上棺の大型鉢形土器(810243074)である。上下棺ともK-97に非常に類似している。僅かに口縁部と突帯が異なる程度である。810243073は頸部下位に二条の先端丸みを持つ三角突帯、頸部下に一条の「M」字状突帯を巡らす。810243073の口径が72cm、器高は108cm、底径14cmを測る。調整方法は内外面ともナデ仕上げ。色調は外面が黄褐色と黒班、内面が褐色を呈する。810243074は底部が平底を呈し、口縁上端部は平坦である。頸部下に一条の「M」字状突帯を巡らす。調整方法は外面胴部が刷毛目、頸部から上がナデ仕上げ、内面はナデ仕上げ、底面に箒押痕が認められる。口径65cm、器高43.7cm、底径10cmを測る。上下棺とも胎土は2~5mm程度の石英・金雲母・砂粒を多く含む。焼成は良好で、内外面とも明褐色を呈し、外面に黒班を有す。

K-110(810243083・810243084) (Fig.35 PL.11)

K-110は甕+壺のセットである。810243083は壺形土器を包沸させる形態である。この形式の甕形土器を使用している甕棺墓はK-182下棺・214上棺がある。底部は上底で、胴部中位まで外反しながら上上がり、二条の三角突帯を巡らす。胴部中位で大きく内湾し、口縁部に達する。口縁内外端とも水平に引き出し、上面を平坦としている。調整方法は、内外面ともナデ仕上げ。胎土は2~4mm大の石英・長石・金雲母を多く含む。焼成は良好で、色調は内外面とも黄明褐色と黒班を有する。口径が41.8cm、器高は78.5cm、底径11.5cmを測る。810243084は大型甕形土器である。底部は平底を呈し、約45°の傾斜で大きく外反し、胴部上位で内湾し頭部に達する。頭部から大きく外反しながら口縁部に達し、口縁部を内側に「く」字状に折曲げ端部を丸く納める。胴部に二条の「M」字状突帯、頸部に一条の三角突帯を巡らせる。口縁端部に刻目を施す。調整方法は胴部上位に箒ミガキ、下位に横刷毛目を施す。ミガキの後、頸部に黒色顔料を塗った痕跡がある。口縁部・胴部に外からの穿孔が三ヶ所認められる。胎土は1~3mm大の砂粒を多く含む。焼成は良好で、色調は内外面とも暗褐色と黒班を有する。口径が59.6cm、器高は65cm、底径11.8cmを測る。

K-132(810243119) (Fig.35 PL.11)

K-132 810243119は单棺で、IV区検出甕棺中最大である。底部はやや上底で、やや内湾ぎみに外反しながら胴部中位下で垂直に立ち上がり、口縁部まで達する。口縁部内面は、斜め上に立上げ丸く納めるが、外面端部は嘴状を呈する。頸部に一条の三角突帯、胴部中位下に「M」字状突帯を巡らす。調整方法は表面に良質の粘土を塗り、外面ミガキ、内面がナデとミガキを施す。胎土は3~5mm大の砂粒や金雲母を多く含む。焼成は良好で、色調は内外面とも暗褐色を呈し、外面に黒班。口径が84.0cm、器高は119.0cm、底径17.6cmを測る。

K-109(810243081・810243082) (Fig.36 PL.11)

K-109の下棺に使用された壺形土器(810243081)と上棺の壺形土器(810243082)である。両方とも口

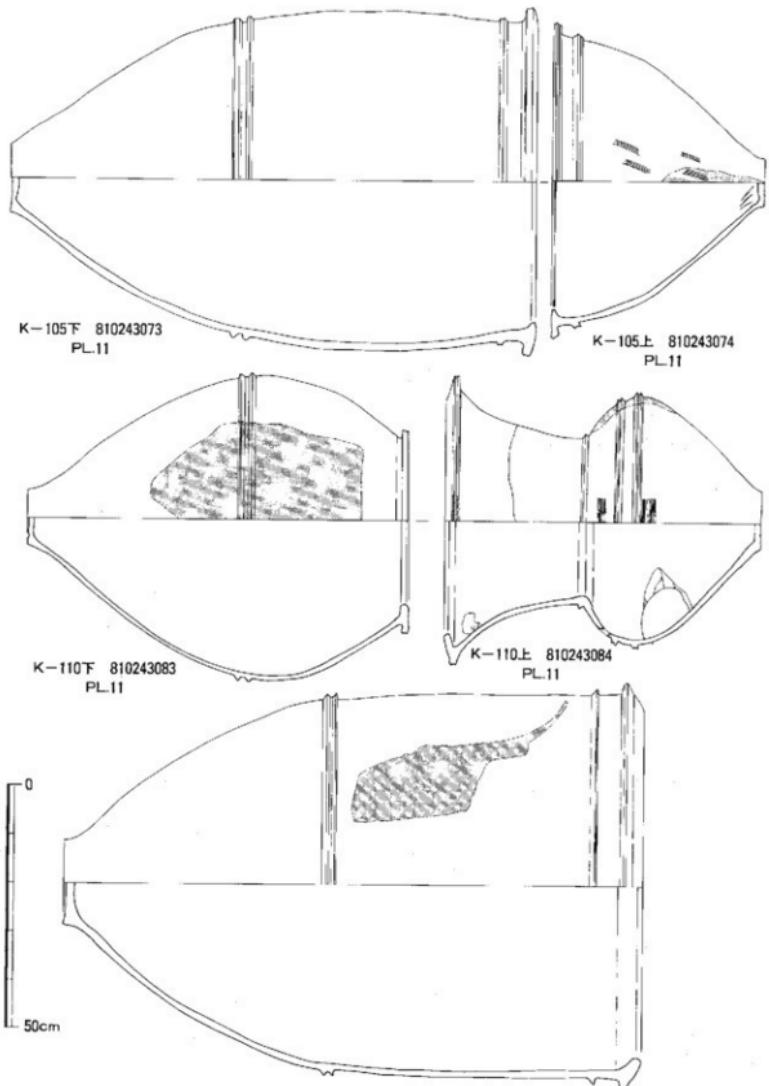


Fig.35 脊椎実測図-2(縮尺1/10)

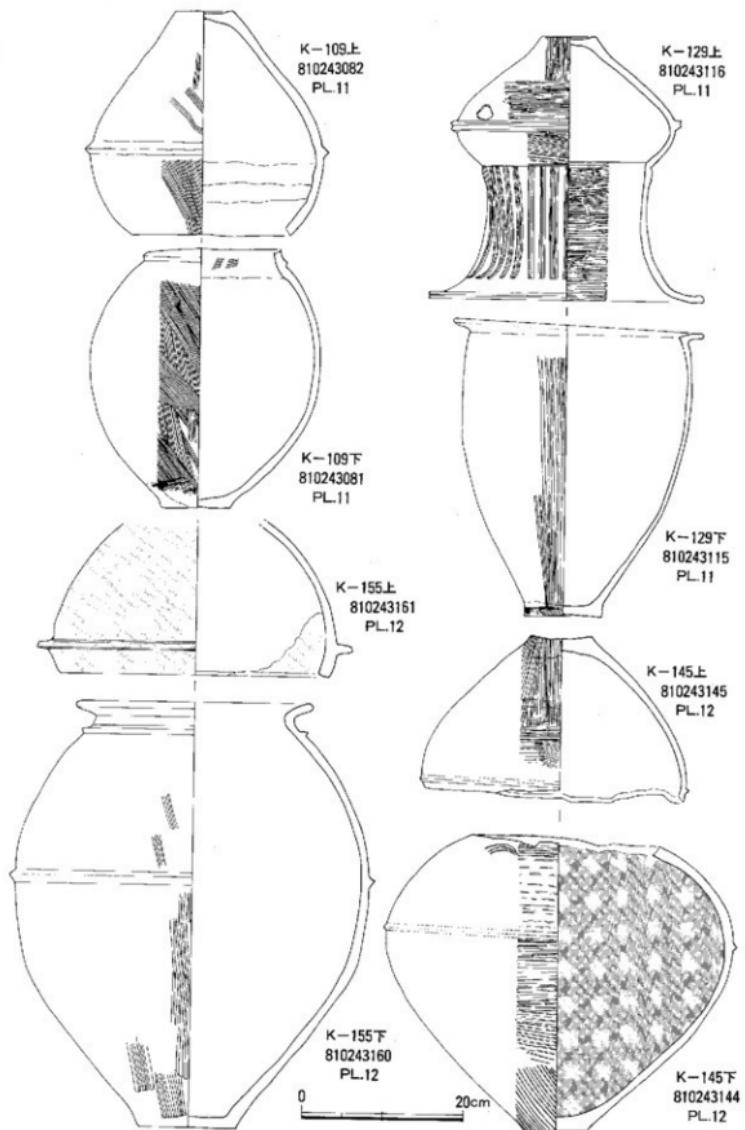


Fig.36 变棺实测图—3(缩尺1/6)

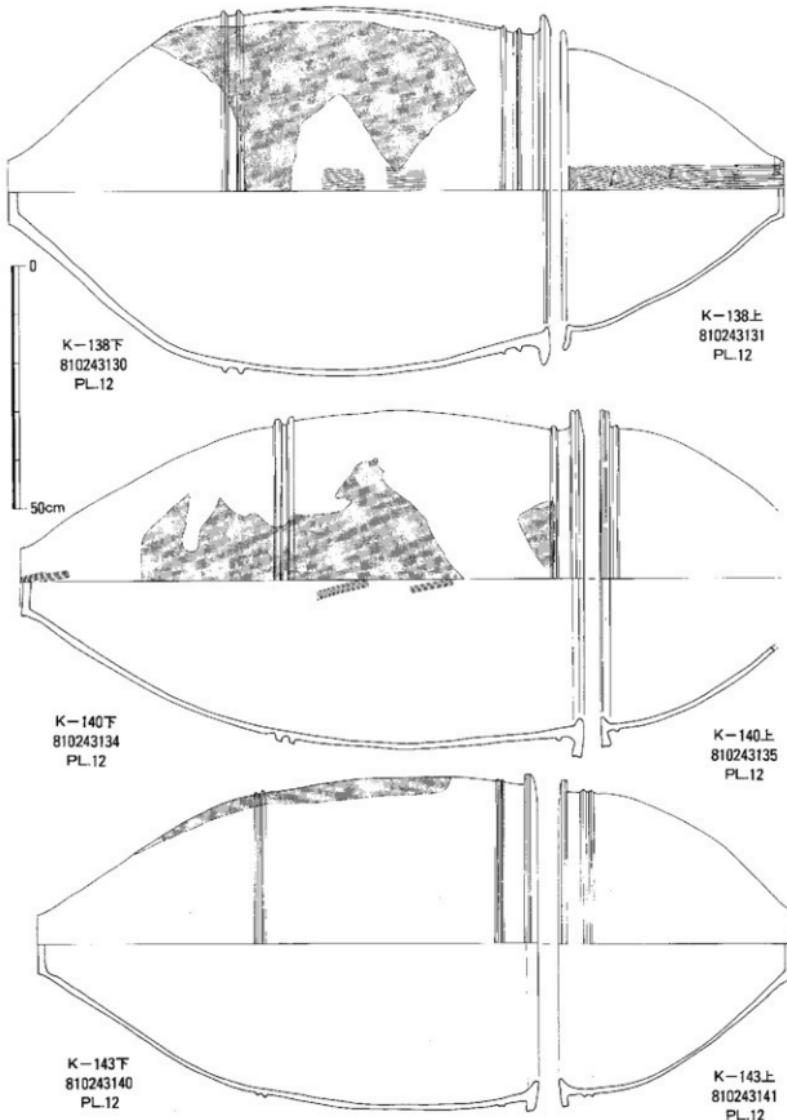


Fig.37 墓棺实测图-4(缩尺1/10)

縁部を打ち欠く。810243081は最大径を胴部中位に持ち、底部は僅かに上底を呈する。頸部に一条の三角突帯を巡らす。調整方法は、外面刷毛目、内面がナデ仕を施す。胎土は1~2mm大の砂粒や金雲母を多く含む。焼成は良好で、色調は内外面とも赤褐色を呈する。最大径28.4cm、底径9cmを測る。810243082は胴部中位に三角突帯を巡らし、調整方法は、外面が刷毛目、内面ナデ仕を施す。胎土は細砂と金雲母を含む。焼成は良好で、色調は赤褐色を呈する。最大径30cm、底径7cmを測る。

K-129(810243115・810243116) (Fig.36 PL.11)

K-129の下棺に使用された壺形土器(810243115)と上棺の壺形土器(810243116)である。810243115の底部は、やや上底であり、稜がシャープな造りである。口縁部は逆「L」字状を呈し、調整方法は外面継刷毛目、内面ナデ仕上げである。口径31cm、器高36.7cm、底径9.7cmを測る。胎土は1~2mm大の砂粒を含む良質の粘土を使用し、色調は内面が茶褐色、外側が淡茶褐色と黒班を有す。

810243116は上底の底部から大きく外反して胴部中位で急に内済し頸部に達する。頸部からほぼ垂直に立ち上がり口縁部付近で大きく外反し端部を丸く納める。胴部中位に「M」字状突帯を巡らせる。頸部には縦暗紋を配する。胴部突帯下に穿孔を有する。調整方法は外面胴部に横刷毛目と箇ミガキを施し、内面は箇ミガキとナデ仕上げ。胎土は2~3mm大の砂粒・金雲母を混入させた良質の粘土を使用している。色調は内外面とも赤褐色を呈する。口径34cm、器高32.7cm、底径6.6cmを測る。

K-145(810243144・810243145) (Fig.36 PL.12)

K-145の下棺に使用された壺形土器(810243144)と上棺の壺形土器(810243145)である。両方とも口縁部・頸部を打ち欠いている。810243144の底部は平底、810243145は上底である。810243144は外面が箇ミガキと刷毛目で部分的に赤色顔料(丹)が残る。胴部上位に一条の三角突帯を巡らす。頸部下に3本の線刻で弧状を描いている。胎土は2~3mm大の砂粒・金雲母を混入させた良質の粘土を使用している。色調は内外面とも赤褐色を呈し外側に黒班を有する。残存器高36.5cm、底径7.6cmを測る。810243145は胴部上位に一条の三角突帯を巡らす。外面は刷毛目と箇ミガキ、内面がナデ仕上げである。胎土は2~3mm大の細砂・金雲母を混入。色調は内外面とも暗褐色を呈し外側に黒班を有する。残存器高20.5cm、底径7.7cmを測る。

K-155(810243160・810243161) (Fig.36 PL.12)

K-155の下棺に使用された壺形土器(810243160)と上棺の特殊器台杯部(810243161)である。810243160は平底の底部を持ち、胴部中位と頸部下に一状三角突帯を巡らす。口縁部は締まった頸部から大きく外反して端部を丸く納め「く」字状を形成する。調整方法は外面が継刷毛目、内面がナデ仕上げである。胎土は2~5mm大の砂粒・金雲母を多量に含む。色調は内外面とも淡明褐色を呈し、口径29.4cm、器高52.5cm、底径12cmを測る。810243161は特殊器台の杯部部分を転用したもので、内外面に丹塗りを施す。口縁下に「コ」字状の突帯を巡らせる。内外面ともナデ仕上げ。胎土は2~5mm大の砂粒・金雲母を僅かに含む。色調は内外面とも赤褐色を呈し、口径33.3cmを測る。

K-138(810243130・810243131) 140(43134・43135) 143(43140・43141) (Fig.37 PL.12)

K-138・140・143は形態的に類似する。この他にK-180・213・214も類似している。K-138は鉢+甕のセットで、下棺の810243130は底部が平底、胴部下位に二条の「コ」字状突帯と頸部下に二条の三角突帯が巡る。口縁部は「T」字状口縁を呈し、外側端部がやや下がり気味である。最大径は胴部中位にある。調整方法は外面が継刷毛目と一部に赤色顔料(丹)、内面がナデ仕上げ。胎土は3~5mm大の砂粒・金雲母を含む。色調は内外面とも淡褐色と黒斑を有し、口径72cm、器高111.5cm、底径13cmを測る。上棺の810243131は鉢形土器で、底部が平底、口縁部がやや逆「L」字状に近い形態を呈する。調整方法は、外面が継刷毛目、一部に赤色顔料(丹)を施す。内面はナデ仕上げ。胎土は3~5mm大の

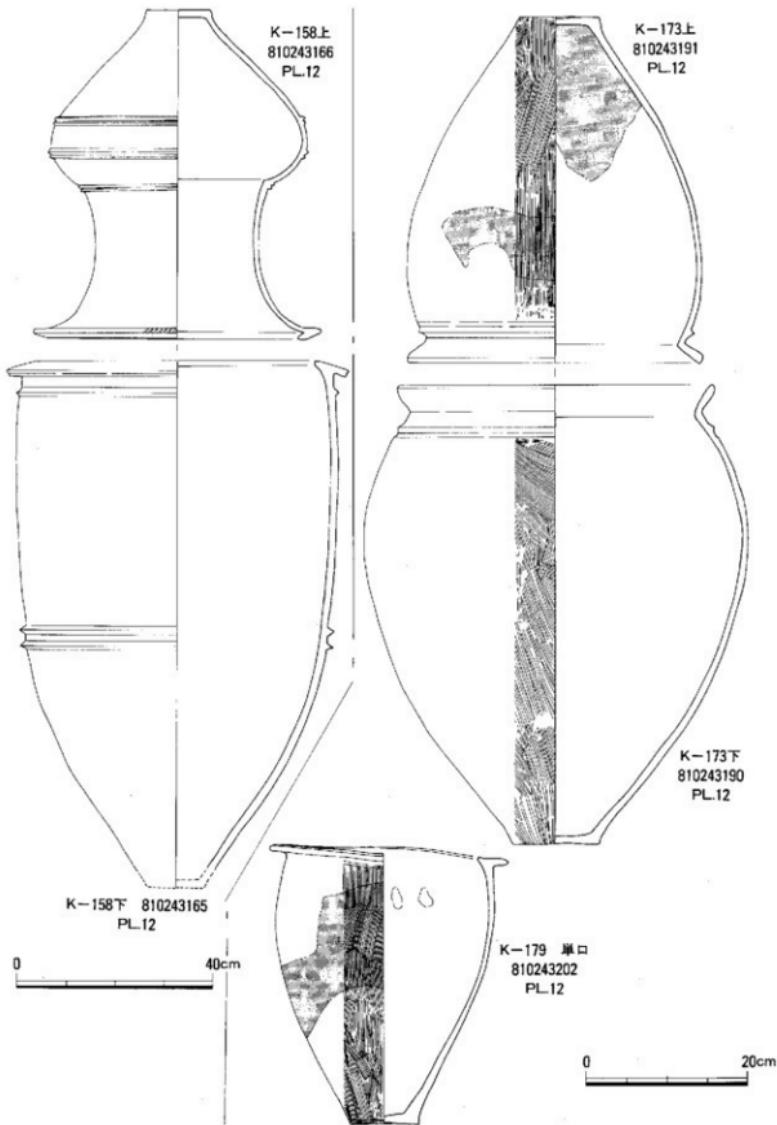


Fig.38 麟格実測図-5(縮尺1/6, 1/10)

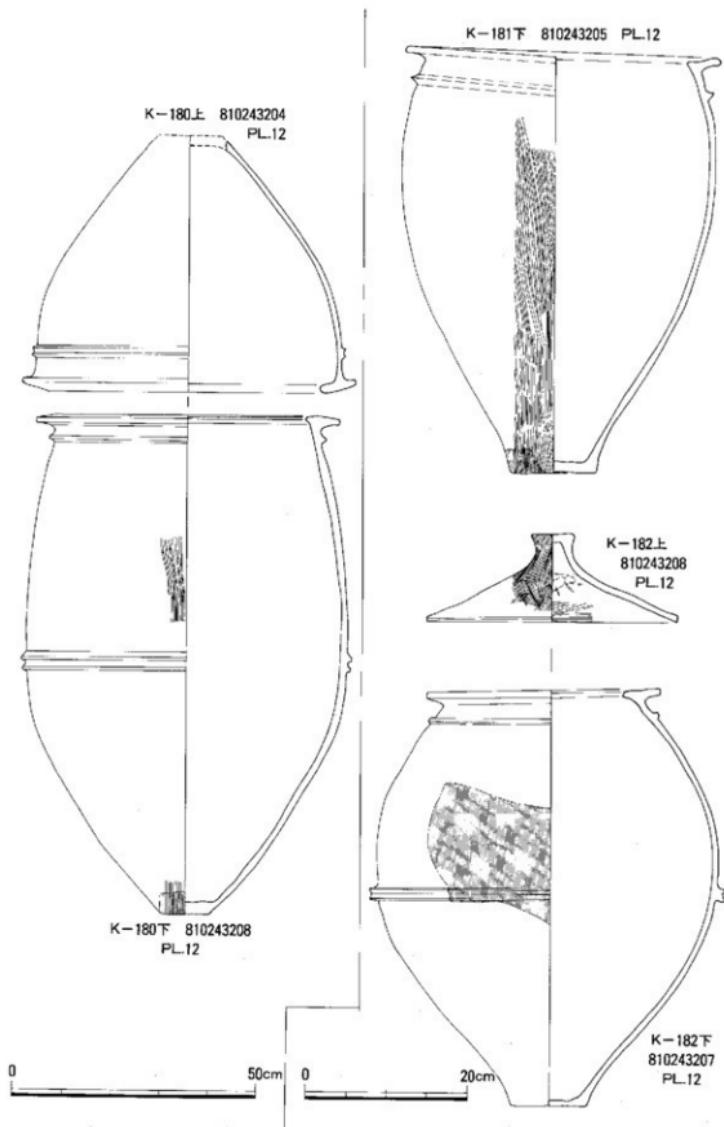


Fig.39 墓棺実測図-6(縮尺1/6, 1/10)

砂粒・金雲母を多量に含む。色調は内外面とも淡明褐色で黒班を有し、口径66cm、器高45.5cm、底径11.2cmを測る。K-140の下棺である810243134は今回検出した甕棺の中で2番目に大きいもので器高が115.3cmもある。底部はやや上底で胴部中位に二条・頸部に一条の「コ」字状突帯を巡らせる。口縁部は「T」字状を呈する。調整方法は内外面とも縱刷毛目とナデ仕上げである。胎土は3~5mm大の砂粒・金雲母を多量に含む。色調は外面が明黄褐色と黒班を有し、口径73.8cm、器高115.3cm、底径14cmを測る。上棺の810243135は底部が欠損している。口縁は810243134と同じ形状を呈し、頸部に一条の三角突帯が巡る。調整方法は内外面ともナデ仕上げ。胎土は2~3mm大の砂粒・金雲母を多量に含む。色調は外面が明茶褐色と黒班を有し、口径69.8cm、残存高35.8cmを測る。K-143の下棺である810243140は底部が平底である。胴部中位に二条の三角突帯・頸部に一条の「M」字状突帯を巡らす。口縁部は「T」字状を呈するが、口唇端部が下がり気味である。調整方法は内外面ともナデ仕上げ、外面一部に赤色顔料が認められる。胎土は3~5mm大の砂粒・金雲母を多量に含む。色調は外面が明赤褐色と三ヶ所に黒班を有し、口径69cm、器高102.5cm、底径12cm。上棺の810243141の底部は平底で、口縁形態は下棺の甕と同じである。内外面ともナデ仕上げ。胎土は2~3mm大の砂粒・金雲母を多量に含む。色調は外面が暗褐色を呈し、口径67cm、器高47.8cm、底径14cmを測る。

K-158(810243165・810243166)(Fig.38 PL.12)

K-158は甕+甕のセットである。下棺の810243165はK-143の下棺と同形態を呈する。底部が欠損しているため定かではないが、推定器高109.1cm(104.6cm)、口径70cmを測る。内外面ともナデ仕上げ。胎土は2~3mm大の砂粒・金雲母を多量に含む。色調は、外面が褐色を呈し黒班がある。上棺の810243166は甕形土器で、底部は平底である。形状はK-110上棺に類似する。胴部下位・中位・頸部下に「M」字状突帯を巡らせる。調整方法は内外面ともナデ仕上げ。胎土は2~3mm大の砂粒を多量に含む。色調は外面が暗褐色と黒班、内面が褐色を呈し、口径58cm、器高68cm、底径13.4cm。

K-173(810243190・810243191)(Fig.38 PL.12)

K-173は甕+甕のセットである。同形態の甕形土器を使用している。このほかにもK-184・215・206の下棺、三連式のK-204がある。下棺の810243190は底部が平底で、胴部上位に最大径を持ち、頸部で縮まり大きく外反して「く」字状口縁を形成する。頸部下に一条の三角突帯を巡らせる。調整方法は内面ナデ仕上げ、外面刷毛目を施す。胎土は2~4mm大の砂粒・金雲母を多量に含む。色調は内外面とも淡白褐色を呈し、外面に黒班を有す。口径69cm、器高57cm、底径10.6cmを測る。上棺の810243191は810243190を小型にしたもので、色調は内面が汚白褐色を呈し、外面が暗褐色と黒班を有す。口径36.4cm、器高42.9cm、底径9cmを測る。

K-179(810243202)(Fig.38 PL.12)

K-179と同型式の甕形土器を使用しているものとして、K-129・188・208がある。特徴はK-129で説明しているため割愛する。胎土は1mm大の砂粒・金雲母を多量に含む。色調は外面が暗褐色、内面が汚黄褐色を呈し、外面に黒班を有す。口径29.5cm、器高34.8cm、底径8.5cmを測る。

K-180(810243203・810243204)(Fig.39 PL.12)

K-180は鉢+甕のセットで、下棺の810243203はK-105の下棺と形式・特徴が非常に類似する。胎土は3~5mm大の砂粒・金雲母を多量に含む。色調は外面が赤黄褐色、内面が暗茶褐色を呈し、外面に黒班を有す。口径62.5cm、器高102.5cm、底径10cmを測る。上棺の810243204もK-105の上棺と形式・特徴が類似する。異なる点は口縁部外側端部が下がり、これに反して内面端部がやや上がり気味となる。色調は外面が赤褐色と煤状の黒褐色(いぶしか?)、内面が明赤褐色を呈す。口径68.5cm、推定器高52.5cmを測る。

K-181 (810243205) (Fig.39 PL.12)

K-181は小兒棺で甕+甕のセットである。下棺のみを図示した。形式・特徴等はK-129に類似するため割愛する。胎土は3~5mm大の砂粒・金雲母を多量に含む。色調は外面が褐色、内面が暗褐色を呈し、外面に黒斑を有す。口径39cm、器高52.8cm、底径10.5cmを測る。

K-182 (810243207・810243208) (Fig.39 PL.12)

K-182は蓋+甕のセットで、下棺の810243207はK-110の下棺と形式・特徴が非常に類似する。頭部と胴部にある突帯に違いがある。K-110は三角突帯で頸部ではない。K-182は頸部下に「コ」字状突帯、胴部に「M」字状突帯を巡らす。口径29cm、器高51.9cm、底径9.2cmを測る。胎土は2~3mm大の砂粒を含む。色調は内面が明茶褐色、外面が暗茶褐色で黒斑が認められる。上棺の810243208は蓋で、笠状の形態を呈する。調整は内外面とも刷毛目を施し、内面に指オサエ、ナデが施されている。口径31cm、器高11cm、つまみ部径5.7cmを測る。胎土は砂粒及び雲母を含み、5mm大の石英・長石が数個混入する。色調は内外面とも赤茶褐色を呈す。

K-184 (810243211・810243213) (Fig.40 PL.13)

K-184は壺+甕のセットで、下棺の810243211はK-155の下棺と形式・特徴が非常に類似する。僅かに口縁形態と胴部にある突帯に違いがある。K-155は三角突帯であるが、K-184の胴部には「コ」字状突帯を巡らす。口径43cm、器高59cm、底径11cmを測る。胎土は2~5mm大の砂粒を含む。色調は内面が淡茶褐色、外面が淡褐色と暗茶褐色（煤）で一部に丹塗りの痕跡と黒斑が認められる。上棺の810243213は口縁部打ち欠きの丹塗り壺形土器で、胴部上位に「M」字状突帯を三条巡らす。胴部下位に穿孔を有し、器高47.5cm、底径8.6cmを測る。

K-188 (810243217・810243218) (Fig.40 PL.13)

K-188は甕+甕のセットで、上下棺ともK-179・181・208の形式・特徴が非常に類似する。口縁部が逆「L」字状を呈する。若干口縁内部が下がり気味のものも含まれる。810243217の口径33.8cm、器高40.2cm、底径9.6cm、810243218が口径29.6cm、器高35cm、底径8.3cmを測る。胎土は両方とも2~5mm大の砂粒を含む。色調は内外面とも淡明黄褐色と黒斑が認められる。

K-208 (810243247) (Fig.40 PL.13)

K-208は単棺でK-179・181・188の形式・特徴が非常に類似する。特に188の上棺810243218と同形式である。口径30cm、器高33.4cm、底径7.8cmを測る。胎土は両方とも2~5mm大の砂粒を含む。色調は内面が黒褐色、外面が暗褐色を呈する。

K-204 (810243239, 810243240, 810243241) (Fig.41 PL.13)

K-204は三連式甕棺で、すべて同形態をとる。またK-173・206・215の形式・特徴が非常に類似する。特に206と同形式である。810243239は口径43.1cm、器高57.5cm、底径10.5cm、810243240は口径38cm、器高51cm、底径11cm、810243241は口径41.8cm、器高58.7cm、底径11.2cmを測る。胎土は3点とも2~5mm大の砂粒を含む。色調は内面が黒褐色、外面が暗褐色と黒斑を有する。

K-190 (810243220・810243221) (Fig.41 PL.13)

K-190は甕+甕のセットで、上下棺とも同形態をとる。またK-210の形式・特徴が非常に類似する。K-208の口縁部が逆「L」字状を呈するのに対して、K-190はやや「く」字状の形態に近い。しかし、後期に見られる完全な「く」字状ではない。底部も平底を呈し、長胴である。調整方法は外面全面に丁寧な繊刷毛目を施している。810243220は口径32.4cm、器高40.4cm、底径7.5cm、810243221は口径30.8cm、器高37.2cm、底径8.4cmを測る。胎土は両方とも3~5mm大の砂粒を含む。色調は内面が明褐色、外面が淡明褐色と上棺の内面に赤色顔料が認められる。

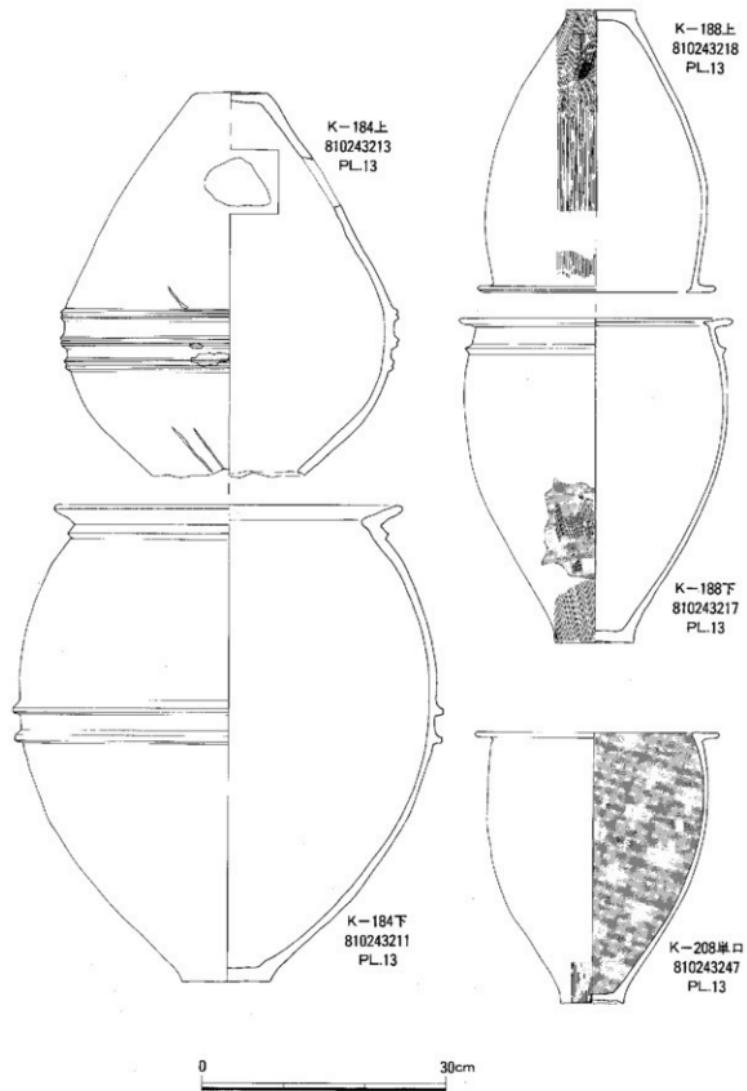


Fig.40 壺棺実測図-7(縮尺1/6)

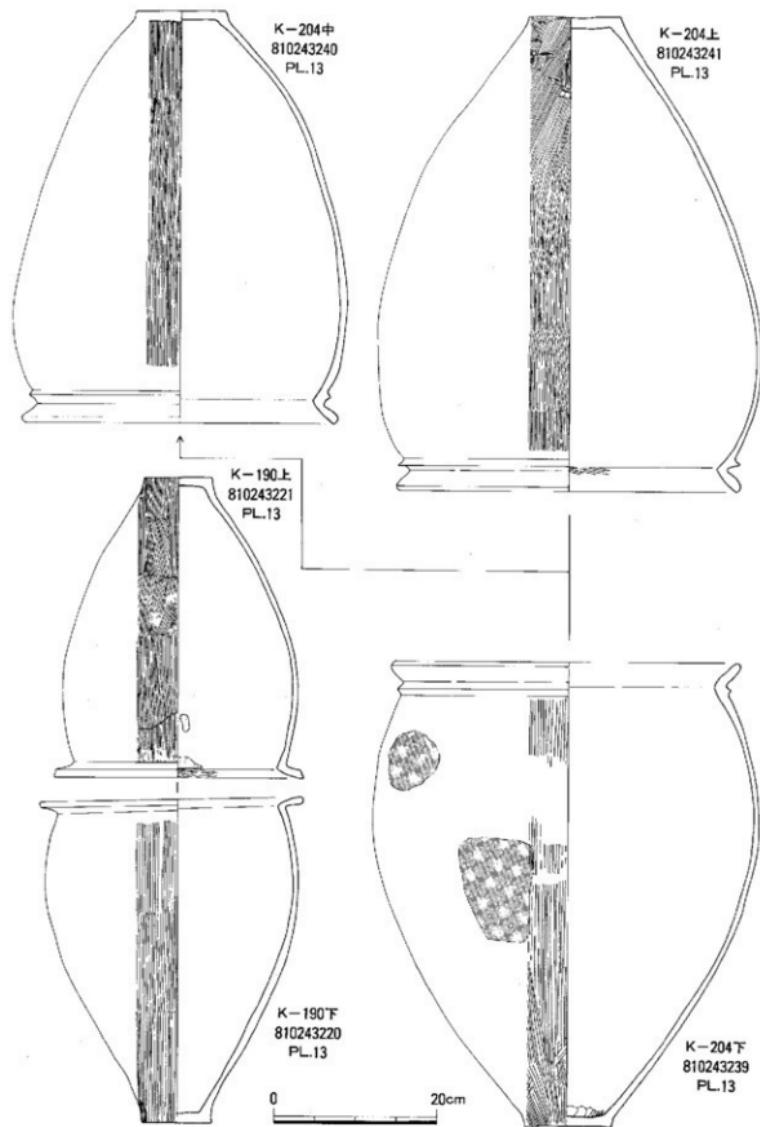


Fig.41 墓棺実測図-8(縮尺1/6)

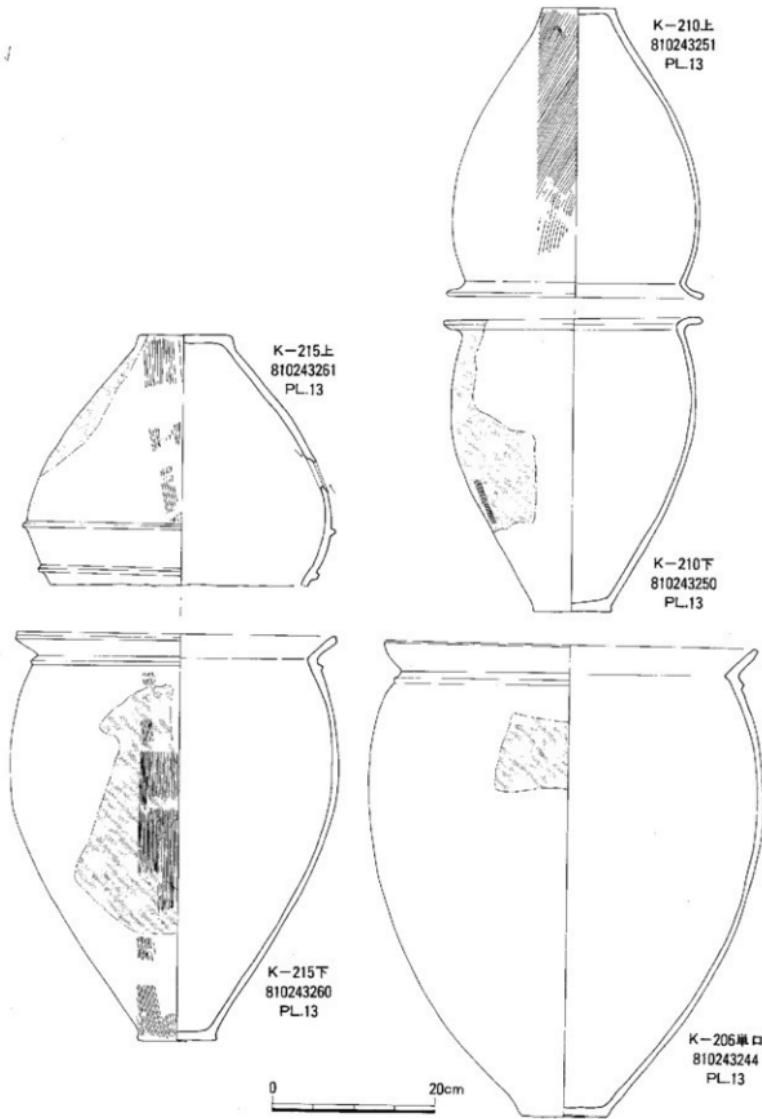


Fig.42 壺棺実測図-9(縮尺1/6)

K-206(810243244) (Fig.42 PL.13)

K-206は単棺で、K-204の形式・特徴が非常に類似する。頸部の突帯の位置が多少下がる程度である。胎土は2~3mm大の砂粒を多く含む。色調は外面が明褐色、内面が暗褐色である。口径48cm、器高58.2cm、底径10.6cmを測る。

K-210(810243250・810243251) (Fig.42 PL.13)

K-210は壺+甕のセットで、上下棺とも同形態をとる。またK-190の形式・特徴が非常に類似する。210の口縁部はやや「く」字状の形態に近い。しかし、後期に見られる完全な「く」字状ではない。底部も平底を呈し、造りもシャープである。K-190は長胴であるが、K-210は胴部が丸味を持つ。調整方法は下棺の810243250が外面に刷毛目を施し、一部磨き部分がある。内面は横ナデを施す。上棺の810243251は外面が斜めの刷毛目を全体に施し、内面は指オサエ後横ナデを施す。上棺の810243250の口径は32cm、器高36cm、底径9.8cm、810243251の口径は31.6cm、器高35.9cm、底径9cmを測る。胎土は両方とも1~2mm大の砂粒を含む。色調は内面が淡赤褐色、外面が淡白褐色で、下棺の外面に赤色顔料と黒斑が見られる。

K-215(810243260・810243261) (Fig.42 PL.13)

K-215は壺+甕のセットである。下棺の810243260は同形態の甕形土器としてK-173・206がある。特にK-204の中甕と同形式であるため詳細は割愛する。810243260の口径は39.4cm、器高50.6cm、底径9.8cmを測る。胎土は0.5mm大の砂粒を多く含む。色調は内面が暗赤褐色と黒斑、外面が暗褐色・暗赤褐色と黒斑を有する。810243261は口縁部を打ち欠いた甕形土器で、底部は平底であるが棱はシャープさに欠ける。胴部中位と上位に「コ」字状突帯を巡らせる。胴部下位に外からの打撃によって穿孔を施す。調整方法は内面が窓ナデ、外面が継刷毛目を施す。残存高31cm、底径11.5cmを測る。胎土は1mm前後の砂粒を多く含み、5mm大の石英粒・金雲母を含む。色調は内面が暗赤褐色、外面が淡赤褐色と黒斑を有する。胴部上位の突帯部分から下に赤色顔料（丹）を施す。

K-213(810243256・810243257) (Fig.43 PL.13)

K-213は鉢+甕のセットである。形態的にはK-97の上下棺と同じで、その特徴・調整方法も同じであるため詳細は割愛する。下棺の810243256は口径92cm、器高109cm、底径16.2cmを測る。胎土は2~3mm大の砂粒を含むが、精製された粘土を使用している。色調は内面が淡赤褐色、外面が淡茶褐色で、内面に赤色顔料（丹）が認められる。上棺の810243257は口径77.2cm、器高45.5cm、底径17.2cmを測る。胎土は2~3mm大の砂粒を含むが精製された粘土を使用している。色調は内外面とも赤褐色で、外面底部に黒斑が認められる。

K-214(810243258・810243259) (Fig.43 PL.13)

K-214は壺+甕のセットである。形態的には下棺がK-213下棺を一回り小さくした感じで、非常に類似している。上棺もK-110下棺と同じである。また、その特徴・調整方法も同じであるため詳細は割愛する。下棺の810243258は口径62.4cm、器高95.4cm、底径13.4cmを測る。胎土は2~4mm大の砂粒を含む。色調は内面が淡赤褐色、外面が明褐色で、外面に黒斑が認められる。上棺の810243259は口径44cm、器高87cm、底径13cm、胴部最大径69cmを測る。胎土は2~5mm大の砂粒及び金雲母を多く含む。色調は内外面とも赤褐色で、外面に黒斑が認められ、外面に赤色顔料を施す。

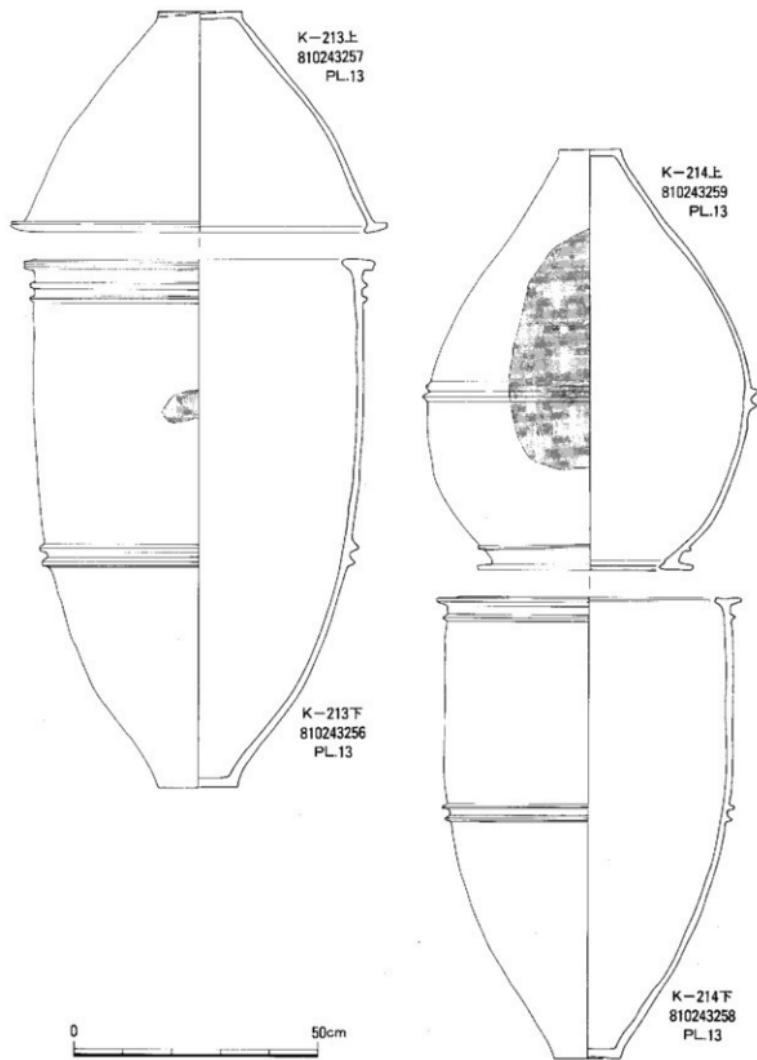


Fig.43 變形実測図-10(縮尺1/10)

第三章 第二次調査－弥生時代の墓地の調査－

第一節 第二次調査の概要

飯盛地区圃場整備に伴う発掘調査

所在地 : 福岡市西区飯盛字本名地区

圃場整備面積 : 61ha

発掘調査対象面積 : 7.8ha

発掘調査面積 : 2.1ha

発掘調査年月日 : 昭和57年9月15日～58年2月15日

試掘調査の結果、約6haに遺構を確認し、その内の約4haについては盛土、2.1haが削平することとなり、発掘調査面積を2.1haとした。調査区は五ヶ所となり、第二次調査はVからX区の調査区を設定した。V・VI区が3,400m²、VII区が3,300m²、VIII区が2,800m²、IX区が7,100m²、X区及び道路・水路部分の調査で4,168m²、計20,768m²を調査した。

V・VI区の調査

検出された主な遺構は、縄文時代後期初頭の貯蔵穴、弥生時代中期の溝・掘立柱建物と奈良時代の溝である。

縄文時代後期の遺構

貯蔵穴を47基検出した。中央部に柱・柱旗を残すものが約半数ある。最大の物はS T-16で、径3.9m、深さ1.6mである。最小のものはS T-38で、径1.9m、深さ1.8mである。形状は壠鉢状やわずかに袋状を呈するもの、ほぼ垂直に立ち上がるものの三種類に大別できる。出土遺物は土器のほか種子(ドングリ等)が約半数の貯蔵穴から出土した。土器形式は後期初頭に比定される鐘崎式土器、北久根式土器を中心に出土している。早良平野で縄文時代後期初頭の遺構が発見されたのは有田遺跡について二例目である。

弥生時代中期の遺構

五条の溝と掘立柱建物一棟を検出した。溝は台地を北西から南東に切断するSD-10にSD-11・12が流れ込む状態で検出された。SD-10の南東端は台地が段落ちする部分まで続く形状を呈する。土器は多量に出土し、特に祭祀用に使用された丹塗りの高杯形土器・甕形土器が多い。

SD-10は幅3m、深さ1.5mの大溝であり、溝より多量の土器と共に三叉鉢・平鉢の柄・用途不明の木器が出土した。SD-11が幅1.9m、深さ0.4m、SD-12が幅2.5m、深さ0.7mである。掘立柱建物は2間×2間の建物で、SD-11に囲まれた中に検出した。

VII区の遺構

弥生時代中期の遺構と中世の遺構を検出した。

弥生時代の遺構

溝五条・甕棺墓1基・掘立柱建物2棟・ピット多数を検出した。溝はSD-14・15・16・17・18が弥生時代中期に属する。SD-14は調査区中央部の約6mに出口が設けられ、両側に巡る環濠である。SD-16はSD-13の下層から検出したもので、二叉・三叉鉢や浮子等が出土した。

甕棺墓はただ1基のみしか検出されていない。時期は弥生時代中期に属する。遺構が散発的にあるため理解しやすいが、甕棺墓が1基だけしか検出されないところが、不可解である。



Fig.44
第二次調査弥生時代遺構配置図(Ⅶ区) (縮尺1/300)

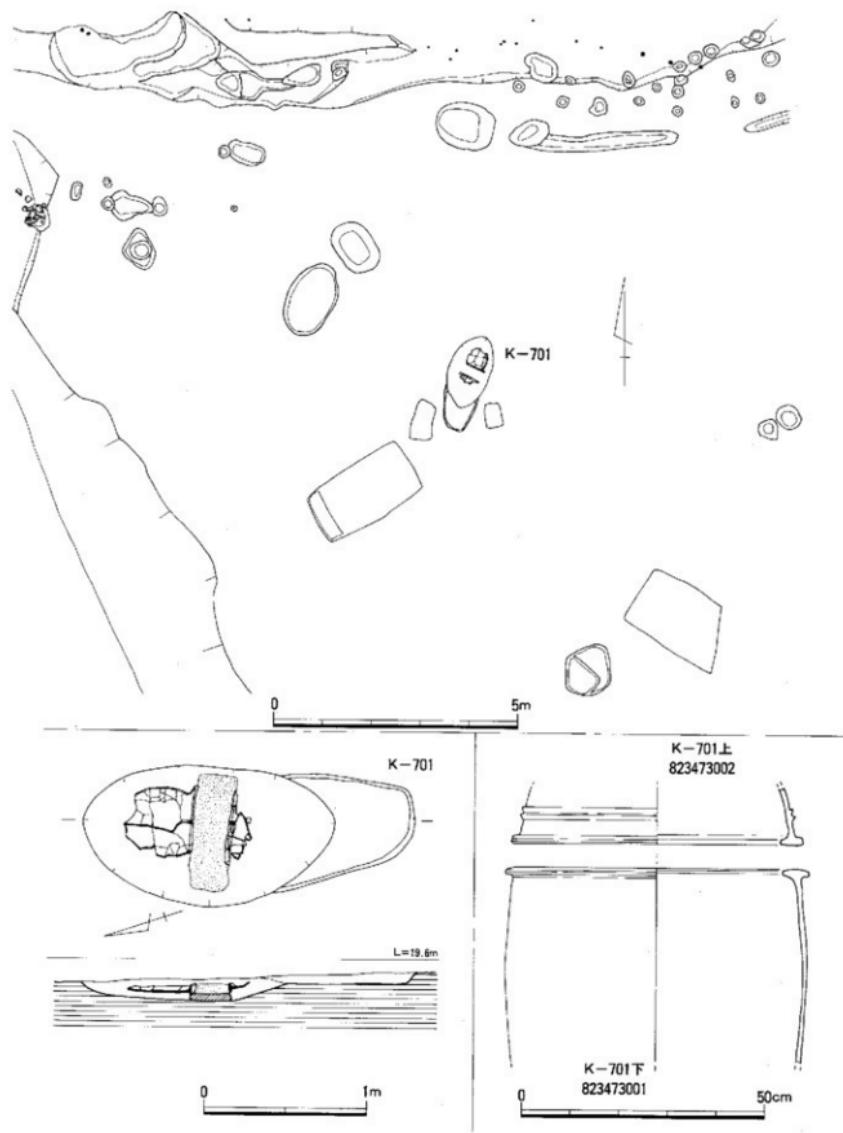


Fig.45 第二次調査帯区斐棺墓配面図・斐棺墓・斐棺実測図(縮尺1/10, 1/30, 1/100)

1. VII区検出の弥生時代遺構

VII区は3,300m²を調査し、検出した遺構は弥生時代・古代～中世にかけての生活遺構であった。弥生時代の生活遺構として溝三条・甕棺墓・掘立柱建物2棟、ビット多数を検出した。SD-14は調査区の北東側から検出した。中央部が約6mの間隔であき、この部分が陸橋となる。両サイドに開く形状を呈し、北側溝（SD-14a）が弧状を描くことから環濠の可能性が高い。その中心部は北東部に位置するものと思われるが、未発掘のため詳細は不明である。北側溝（SD-14a）の幅は2.6m、深さ0.5m、現長25mあり先端部が二段となりやや張り出している。SD-14bの幅は3.0m、深さ0.5m、現長12.5mを測る。この環濠と掘立柱建物（SB-42・43、1×1間、2×2間）2棟・甕棺墓1基は同時期を示すが、環濠の外側に位置する建物・墓の意味がはっきりしない。本来ならば環濠内にあるべき建物が外に位置しているからである。建物・墓自体がほかの溝（SD-15・16）の間に挟まれた（北はSD-15、東はSD-14に閉ざされた）位置にありこの空閒地が弥生時代中期の特別の場所として設定されたとも考えられる。またSD-15は調査区の北側に位置し、東西にやや弧を描く。この溝の北側は次第に段落ちし大溝となることが、試掘調査によって確認されている。SD-15の溝幅は4～8m、現長27mまで確認した。東側ではSD-14と接する様相を示すが、調査区域外であったため確認できなかった。南側は、三ヶ所の濱み部分がある。この部分からスコップ状木製品が出土したが、非常に薄くまた薄いため取り上げることができなかつた。この木製品は一本木造りの製品で、類似品として板付遺跡群第39次調査で出土したスコップ状木製品と非常によく似ている。弥生時代中期の製品であることが、出土土器からも窺える。このほか三叉鍬等も出土した。

(1) 甕棺墓

K-701(Fig.45) K-701は北側のSD-15とSD-14に挟まれた区画から検出した。VII区自体かなりの削平を受けているところから、K-701自体も遺存状態は悪く、約2/3が削平を受け、残っているのは、口縁部・胴部の一部であった。甕+甕のセットで、成人棺である。上棺と下棺は接しておらず幅20cmの間隔が開いている。その部分に目貼りの黄褐色粘土を巻き、甕棺の足りない部分を補っている。さらに上・下甕の下面にも黄褐色粘土を幅広く敷いている。墓壙の長軸はN 18° -Wで底部角度は不明である。墓壙の大きさは156cm×85cmで、深さ13cmを測る。

K-701(823473001, 823473002)(Fig.45)

K-701の下棺に使用された大型甕形土器(823473001)と上棺の大型鉢形土器(823473002)である。73001は口縁部が「T」字状口縁を呈し、胴部下位から底部は欠損している。最大径は胴部上位にある。胴部中位からほぼ垂直に立ち上がりさらにはや内湾しながら頭部に達し、内・外側口縁部をつまみ出し、「T」字状口縫に仕上げている。口縫部は、平坦で、両端がつまみ出され端部を丸く納めている。端部には刻み目はない。口径62.4cm、残存高40.0cm、最大径63.0cmを測る。風化が著しく調整方法は定かではないが、一部に横・縦方向の箇削りが認められ、口縫内面はナデ仕上げである。胎土は3～6mmの大粒の石英・金雲母・砂粒を多く含む。焼成は良好で、外面は赤褐色を呈し、内面は褐色を呈する。

73002は口縫部のみであるが、頭部に二条の三角突帯が巡り、口縫部は「T」字状口縫を呈し、胴部中位から底部は欠損している。最大径は口縫部にある。胴部中位からやや内湾しながら頭部に達し、頭部下に二条の三角突帯を巡らす。口縫部は、平坦で、両端がつまみ出され端部を丸く納めている。端部には刻み目はない。口径60.0cm、残存高12.0cmを測る。口縫内面はナデ仕上げである。胎土は3～6mmの大粒の石英・金雲母・砂粒を多く含む。焼成は良好で、外面は赤褐色を呈し、内面は褐色を呈する。

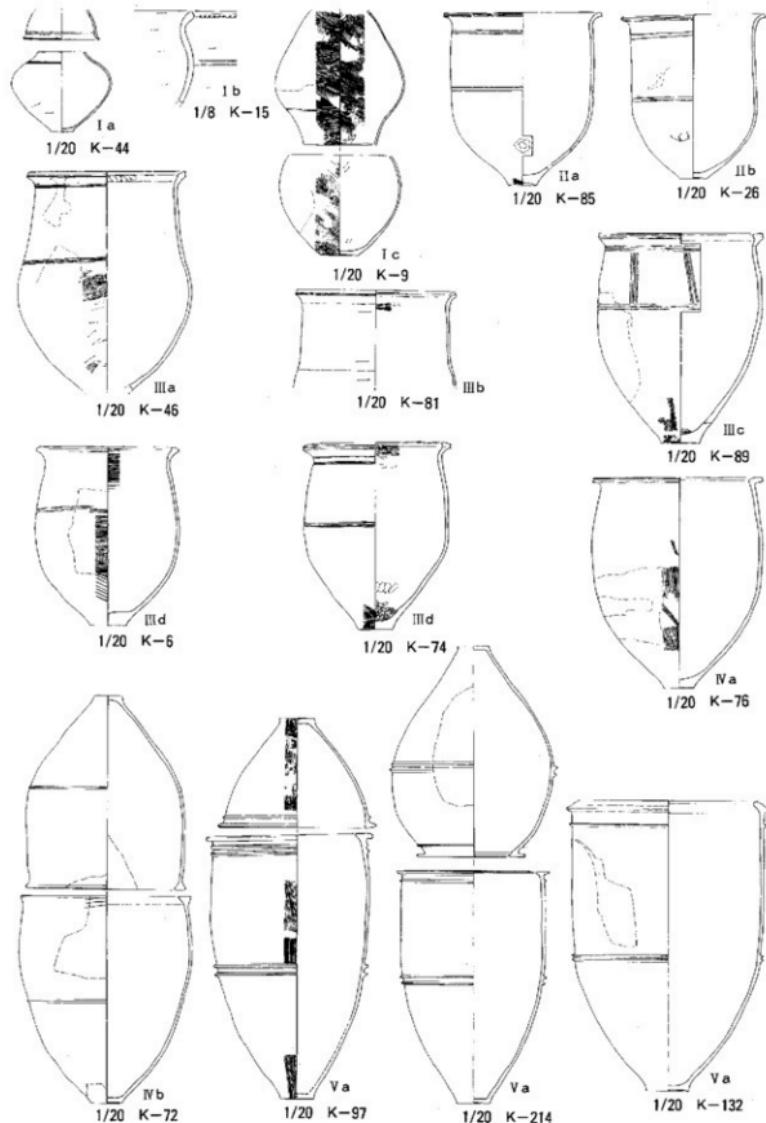


Fig.46 形式分類-1(縮尺1/8, 1/20)

第一・二次調査のまとめ

第一・二次調査検出の甕棺墓について

第一・二次調査から検出した甕棺墓の内、今回と前回報告した甕棺墓に使用された甕形土器・壺形土器の形態分類を行った。形態分類の要素として口縁部の形態、沈線、底部の形状等を主として分類している。I型～VI型まで分類した。

I a型 壺形土器そのもので、口縁部を打ち欠いている。胴部上位に二条の沈線を巡らせる。底部は平底で、最大径は胴部中位にある。K-44下棺に使用されている。K-36下棺もこのタイプである。

I b型 壺形土器の形状を残すもので、頸部がやや縊まり口縁部が外反する如意形を呈する。胴部に二条の沈線を巡らし、口縁部外面下端に刻目を施す。K-15上棺に使用されたタイプである。

I c型 K-9を標準とするタイプで、壺形土器の形状を残し、大型化していく。口縁部は欠損しているが、頸部が縊まる。おそらく口縁部は如意形を呈すると思われる。胴部に一条の沈線を巡らす。II型基本的には如意形口縁を呈し、口唇部の粘土帶は貼り付けない。刻目によりa,bに細分した。

II a型 基本的には、K-85下棺の形式で、底部が上底、胴部がほぼ垂直に立ち上がり口縁部で外反する如意形を呈する。胴部中位と頸部下に各々二条の沈線を巡らす。口縁部外面上下端に刻目を施す。口径60～65cm、器高60～72cm、底径13cm前後。K-3下棺、K-23下棺、K-82・85上棺がある。

II b型 形態的にはIIa型とはほぼ同じであるが、口縁部外面をIIa型より摘み出し端部に刻目を施さない。K-26がその代表である。本来は刻目を施さないだけで、IIa型に属するものである。

III型 如意形の口縁部に粘土帶を貼り付ける形態をIII型とした。貼り付ける部位・形態から4種に分類した。

III a型 如意形の口縁部内側に内向する形で粘土帶を貼り付け、また、外側頸部までに薄く粘土帶を貼り付ける。このため口縁部は厚くなり外側頸部付近に段及び沈線を巡らし、胴部上位にも二条の沈線を巡らしている。口唇部外面に刻目を施す。このタイプに属する甕棺はK-46上棺、K-4副葬品、K-17、60、62、66、86で、このタイプが今回の調査で二番目に多く出土している。

III b型 K-81にみられるタイプで、内側だけに粘土帶を貼り付け、口縁部があまり外反しない。口唇部の刻目もなく、胴部の張りもなく亞の要素をまだ残している。口径64cm、器高90cm程度。

III c型 如意形口縁部の先端に粘土帶を貼り付け端部を平坦にするタイプである。胴部はくびれることがなく内湾しながら頸部まで達し、壺形土器の要素は全く無くなる。底部は僅かに上がるタイプで口径67cm、器高85cm、底径16cm程度が平均である。沈線は頸部下と胴部上位にそれぞれ二～三条巡らす。K-88・89は各々三条づつの横方向の沈線の他に縱方向に四条の沈線を四ヶ所施す。このタイプの棺はK-2下棺、3・65上棺、79・80・84・88・89下棺で、このタイプが一番多く出土している。

III d型 口縁部の粘土帶の貼り付けが上方を向くタイプで、IIIa,cより小型である。内側が嘴状を呈し、底部は平底である。口唇部外面には刻目を施し、胴部・頸部に沈線を巡らせる。K-1・6、16・65・69・74・83の下棺がこのタイプである。(III型までは「吉武遺跡X」1998年に報告)

IV型 IV型は二種類のタイプに細分した。

IV a型 K-76下棺の1個体であるが、口縁部が逆「L」字状口縁を呈するタイプである。口唇部上下端に刻目を施すタイプである。口径70cm前後、器高88cm前後でI～III型より一回り大きい。

IV b型 K-70・72の上下棺を標準とするタイプで、口縁部が「T」字状口縁を呈し、胴部中位に一条の三角突帯を巡らす。口縁部は平坦で、両端がつまみ出され端部を丸く納めている。端部には刻目はない。口径60～63cm前後、器高80～84cm前後、底径11～13cm前後、最大径63～66cm前後である。調整方法は、一部に横・縱方向の範削りが認められ、口縁内面はナデ仕上げである。

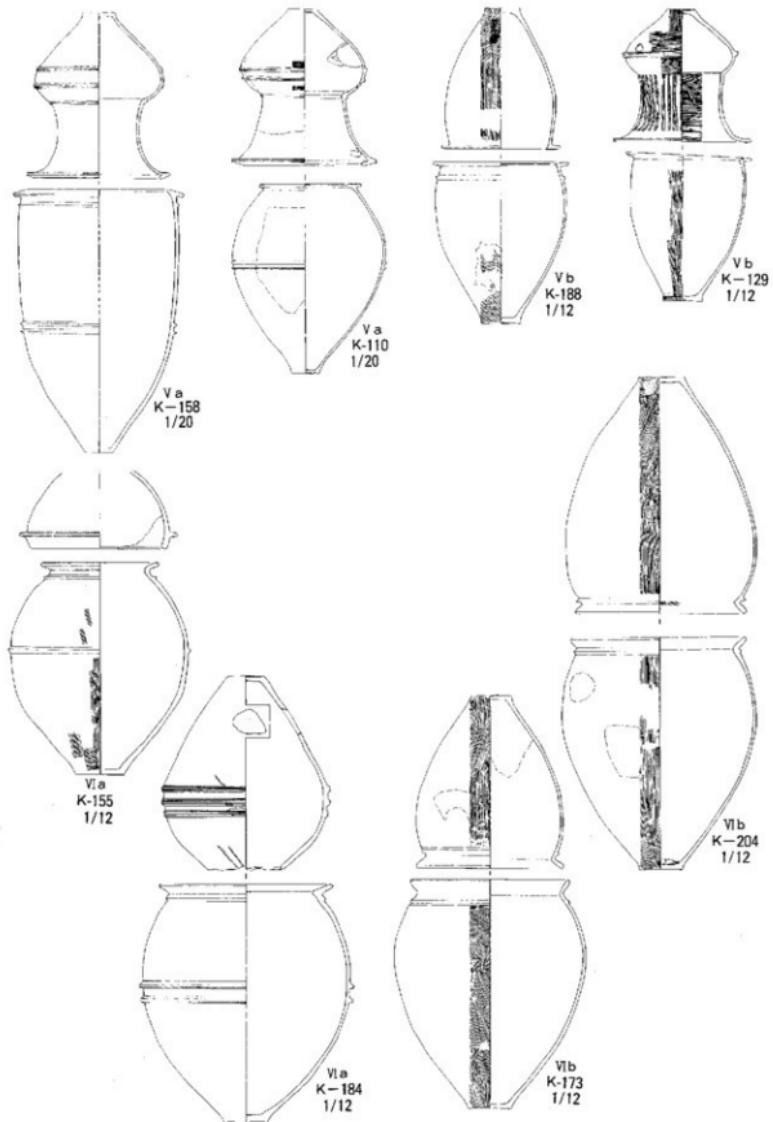


Fig.47 形式分類-2(縮尺1/12, 1/20)

V型 中期中葉にみられる最も壺棺墓が隆盛をきわめた時期に造作された大型壺形土器で、多種多様な形態がある。二種類に大別した。

Va型 K-97に代表されるタイプである。鉢+壺を主体とするが、この他にも壺+壺、大型の壺の単棺等がある。K-97は底部も13.4cmと他の壺より大きく底部の棱もシャープな造りである。頸部まではやや内湾しながら立ち上がり、口縁部内・外側に大きくなつまみ出している。外側口縁部がやや下がるが「T」字状口縁部の範疇に入る。頸部に二つの三角突帯の端部が潰れた形状を呈する突帯を巡らす。胸部下位に二条の三角突帯を巡らす。調整方法は外面が縱刷毛目を施し、内面は指オサエの後ナデを施している。口径60~68cm前後、器高90~110cm前後、底径12~14cm前後である。又、K-110も代表される。壺形土器を彷彿させる形態である。この形式の壺形土器を使用している壺棺墓はK-182下棺・214上棺がある。底部は上底で、胸部中位まで外反しながら立ち上がり、二条の三角突帯を巡らす。胸部中位で大きく内湾し、口縁部に達する。口縁内外端とも水平に引き出し、上面を平坦としている。調整方法は、内外面ともナデ仕上げ。口径が38~43cm前後、器高は70~80cm前後、底径10~12cm前後である。このタイプにはK-116・105・132・138・140・145・158・180・182・213・214・701が上げられる。

Vb型 K-188に代表されるタイプである。壺形土器の底部は、やや上底であり、棱がシャープな造りである。口縁部は逆「L」字状を呈し、調整方法は外面縱刷毛目、内面ナデ仕上げである。口径30~35cm前後、器高35~40cm前後、底径9~10cm前後である。このタイプにはK-129・179・181・188・190・208が上げられる。

VI型 口縁部が「く」字状を呈するタイプで、二種類に大別した。

VIa型 K-155下棺に代表される壺形土器である。平底の底部を持ち、胸部中位と頸部下に一状三角突帯を巡らす。口縁部は締まった頸部が大きく外反して端部を丸く納め「く」字状を形成する。調整方法は外面が縱刷毛目、内面がナデ仕上げである。口径25~30cm前後、器高50~60cm前後、底径10~13cmである。このタイプにはK-155の他にK-184が上げられる。

VIb型 K-204の三連式壺棺に代表される壺形土器である。底部が平底で、胸部上位に最大径を持ち、頸部で締まり大きく外反して「く」字状口縁を形成する。頸部下に一条の三角突帯を巡らせる。調整方法は内面ナデ仕上げ、外面刷毛目を施す。口径65~72cm前後、器高50~65cm前後、底径9~11cm前後である。このタイプにはK-204を始めとしてK-173・206・215・210が上げられる。

第一・二次調査で検出した壺棺墓は合計で232基であるが、この結果弥生時代前期に属する壺棺墓が72基、中期壺棺墓124基、後期壺棺墓18基、暴風のため岡面が行方不明のもの18基である。特にII区は46基中44基が前期末であり、列埋葬である。これに対してIV区では、一ヶ所に埋葬されている。時期的にはIV区が古く、同時期にII区とIV区に埋葬されている所から別々の集落が営まれていたことが窺える。中期はII区には小児棺2基しかなくIII区・IV区に集中的にみられる。後期はIV区に19基検出され散発的な広がりがみられる。

参考文献 金隈遺跡第一次調査概報福岡市埋蔵文化財調査報告書第7集 1970

九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告X X X I 1979 福岡教育委員会 橋口達也

史跡 金隈遺跡－調査及び環境整備－福岡市埋蔵文化財調査報告書第123集 1985

吉武高木－福岡市埋蔵文化財調査報告書第143集 1986

特設展図録 「早良王墓とその時代」 1986 福岡市立歴史資料館編

「弥生人のタイムカプセル」展示図録 1998 福岡市立博物館

第四章 第三次調査—樋渡墳丘墓の調査—

飯盛・吉武地区圃場整備事業に伴う第三次調査(昭和58年度)では、弥生時代中期前葉～中期末にかけての弥生時代墓地が3～4群見つかった。墓地は、北東から南西方向に帶状に分布し、総数では、甕棺墓140基、木棺墓1基、石蓋土壙墓1基、石棺墓1基などが検出された。

このうち墓地群の北端では、5世紀代の前方後円墳墳丘下に東西約25m、南北27m程度の規模の弥生時代中期「墳丘墓」が確認され、樋渡墳丘墓と命名した。ここからは、中期中葉～後期初頭の甕棺墓30基、木棺墓1基、石棺墓1基、土壙1基などが原位置を保って検出された。

樋渡墳丘墓については、1996年に一度報告を行った(福岡市埋蔵文化財調査報告書第461集)が、この報告では主に副葬遺物を出土した厚葬墓7基についてであったので、今回はそのほかの墳丘内に埋葬された遺構について追加的に報告することにしたい。

今回報告では、甕棺墓24基、土壙1基、石棺墓1基がこれに当たるが、既述のように墳丘墓北側は昭和30年代に行われた土取り工事によって大きく削り取られており、原位置より遊離した銅剣なども出土したことからさらに複数の甕棺が存在したことは明らかである。

以下、個別の遺構について説明を加えることにする。

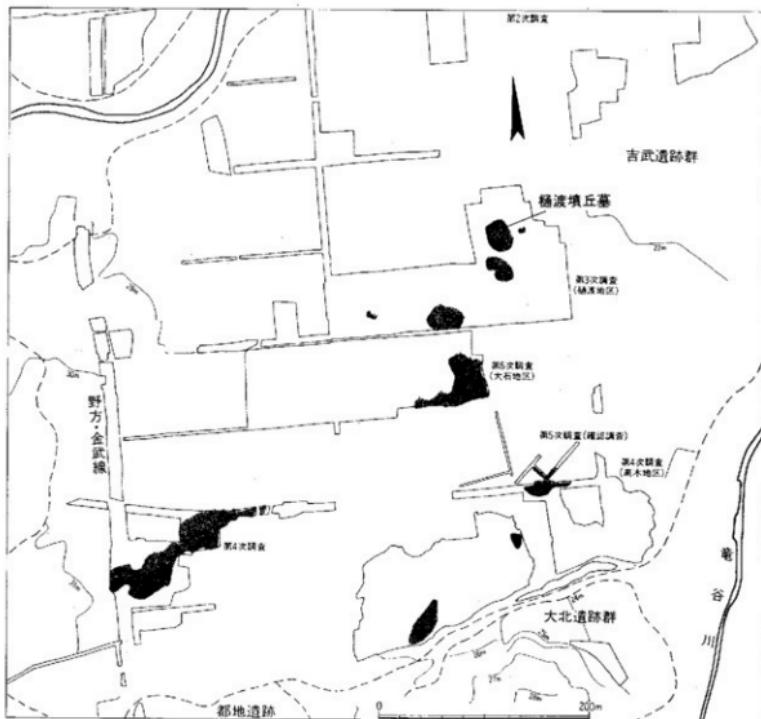


Fig.48 樋渡墳丘墓位置図(1/5,000)

1. 瓢棺墓

墳丘内に残存したその他の瓢棺墓は、総数24基で、大型16基・中型1基・小型7基の構成である。時期的には中期後半のものがほとんどである。いずれも副葬品を持つことがないが、わずかにK79号瓢棺墓のように中型の合わせ甕を使用し、下甕に多くの赤色顔料が残るものも見られる。また、埋葬骨の残存は全くなかった。

大型瓢棺の埋置状態は、全体に傾斜角度の大きいものが多く、墳丘内に収めるための工夫を考えることができる。また、小型棺ではK90号瓢棺墓が墳丘南側の墳頂部近くの土層断面で検出されており、埋置の状態がよく観察できるものである。

1. K01号瓢棺墓(Fig.52・53)

墳丘北側の削平部斜面で検出された瓢棺墓で、からうじて全体の埋葬状態がわかる。この瓢棺が墓地内で最初に注目され、墳丘墓ではないかとの疑惑を抱かせたものである。墓壙掘り方は北東側からなされたと考えられ、わずかに長方形の一部が残る。いずれも大型の甕を使用した接口式の瓢棺墓で埋置角度も大きい。昭和30年代の土取り工事でその大半を失っている。

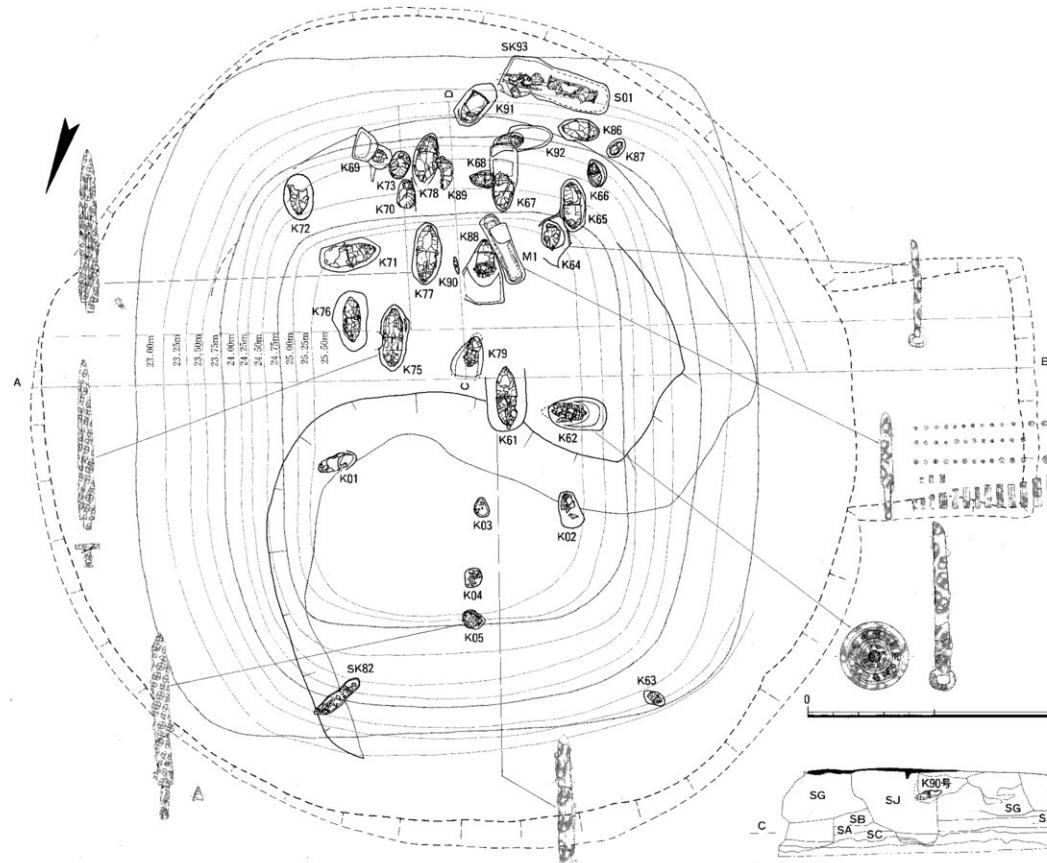
下 棺 大型の甕を使用し、口縁部と底部を失する。器形は、全体に卵形を呈し、胴部の最大径が中央よりやや上部にある。胴最大径部には比較的大型の三角突帯2条を巡らし、口縁部直下にも三角突帯1条を巡らしている。器色は、外面で胴部突帯以上は淡灰褐色、これ以下は赤褐色で、内面は赤褐色を呈する。なお、外面には丹を塗布している。器面調整は、外面にタテ・ナナメ方向の荒いハケ日を施す。工具の小口幅は約1.8cm程度のもので、突帯部付近で顕著に観察できる。また、突帯部付近にはいずれもハケ目調整後に強いヨコナデを施す。胎土は、密で、粗砂を多く混入する。また、焼成は、堅敏である。全体的に器壁は薄く、よく整えられている。

上 棺 大型甕の胴部上半を打ち欠いて使用する。底部を失する。全体器形はうかがえないが、胴部中位付近に断面コ字形で、やや下方にむく突帯1条を巡らす。器色は、外面が淡黄褐色～暗黄褐色で、内面淡褐色～淡赤褐色を呈する。外面突帯上に焼成時の黒斑が残る。器面調整は、外面が荒いタテ方向のハケ目調整で、突帯部は調整後に強いヨコナデを加えている。また、内面は横方向の丁寧なヘラナデが残る。胎土はやや粗で、焼成は堅敏である。全体に薄作りの甕である。

2. K02号瓢棺墓(Fig.52・53、PL.23)

K01号瓢棺墓の西側9mの地点の削平部で検出された。北西側から埋置された瓢棺墓で、大型の甕を使用した単独棺である。墓壙も全体に遺存状況が悪く、堅敏と横穴の殆どを失っている。甕はほぼ水平に埋置され、口縁部に沿って浅い長方形の溝が認められることから、木板若しくは板石による蓋がなされていたと考えられる。

下 棺 大型甕で、口縁部と胴部の接点がなく、個別に図を作成して作図している。口縁部を最大径とする甕で、分厚い平坦口縁の直下に三角突帯1条、また胴部中位付近にやや下方をむく断面コ字形突帯2条を巡らしている。器色は、外面が黒褐色で、丹塗り後に黒色顔料を塗布する。また内面は淡灰褐色を呈し、胴部に一部丹塗りの痕跡が認められる。器面調整は、外面タテ方向のハケ目調整を施し、この後に突帯部付近には強いヨコナデを施す。また内面は丁寧なナデ調整を施す。胎土は密で、粗砂の混入は少ない。また焼成は堅敏である。口径70cm、器高73cm以上、底部径10.8cmを計る。



(凡例)

SA:茶赤褐色～黒褐色粘土 (GS: 細砂子混入)
 SA-C:茶赤褐色砂質土 (SC: 黄褐色砂質土)
 SD:淡黒褐色砂質土
 SE:淡灰色砂
 SE-C:淡灰色砂質土 (SCに似るが全体に淡色である)
 SG: 黒赤～暗茶褐色土 (GS: 門構、素礫土 (SD) アロック少量混入)
 SJ:暗褐色砂土

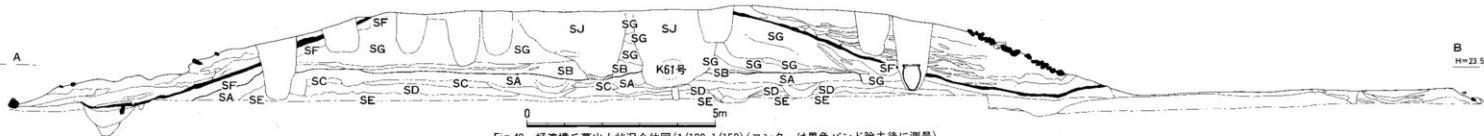


Fig.49 桶渡墳丘墓出土状況全体図(1/100, 1/150)(センターは黒色バンド除去後に測量)

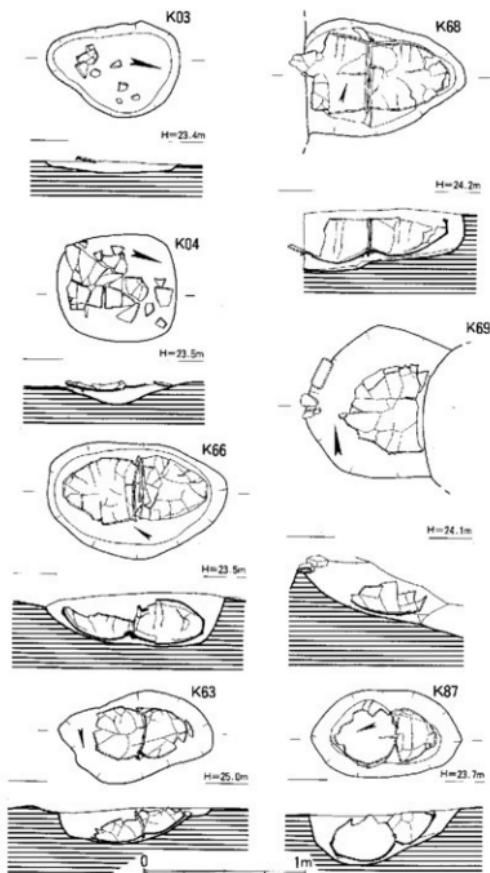


Fig.50 K03・04・63・66・68・69・87号甕棺墓出土状況実測図 (1/30)

3. K03号甕棺墓

(Fig.50・51, PL.27)

K02号甕棺墓の北側4mに位置し、墳丘基底部近くで検出された。非常に浅い長楕円形の土壌から小型甕と鉢の破片が出土し、少なくとも2個分の個体が区別できる。

小型甕破片は、やや内傾する小さなL字形口縁を有するもので、器色は、外面胸部が暗褐色、口縁外面から内面が赤褐色を呈する。器面調整は、荒れが著しく不明である。また胎土は粗で、粗砂の混入が非常に多い。焼成も軟質である。

小型鉢は、口縁外端の短いL字形口縁をなし、素直に底部へとすぼまるもので、底部付近を欠失する。器色は、外面が暗茶褐色、内面赤褐色を呈する。また器面は、内外ともに荒れが著しく、調整は不明である。胎土は、粗い長石・石英砂の混入が多く、焼成はやや軟質である。

口径25cm、残存器高10cmを計る。このK03号甕棺としたものは、明らかに日常生活土器の投入された土壌であり、土器型式からも中期初頭の所産と考えられ、墳丘墓造営前の生活遺構の痕跡を示していると言える。

4. K04号甕棺墓 (Fig.50・51, PL.23)

削平された墳丘の北側でかろうじて残った甕棺で、K02号甕棺の北側5mに位置する。残された破片で判断する限り棺は単独である可能性が高い。棺は、大型の甕を使用し、胴部上半と底部付近を欠失する。甕は、胴部に断面コ字形の突帯2条を巡らしている。器色は、外面が暗褐色、内面が淡褐色を呈し、外面の突帯部以下には焼成時の黒斑が多く見られる。器面調整は、表面が摩滅しているため外面にナナメ方向の粗いハケ目が痕跡的に残る。胎土は、やや粗で、焼成は堅緻である。突帯部最大径55.6cm程度を計るが、やや誤差があるかもしれない。

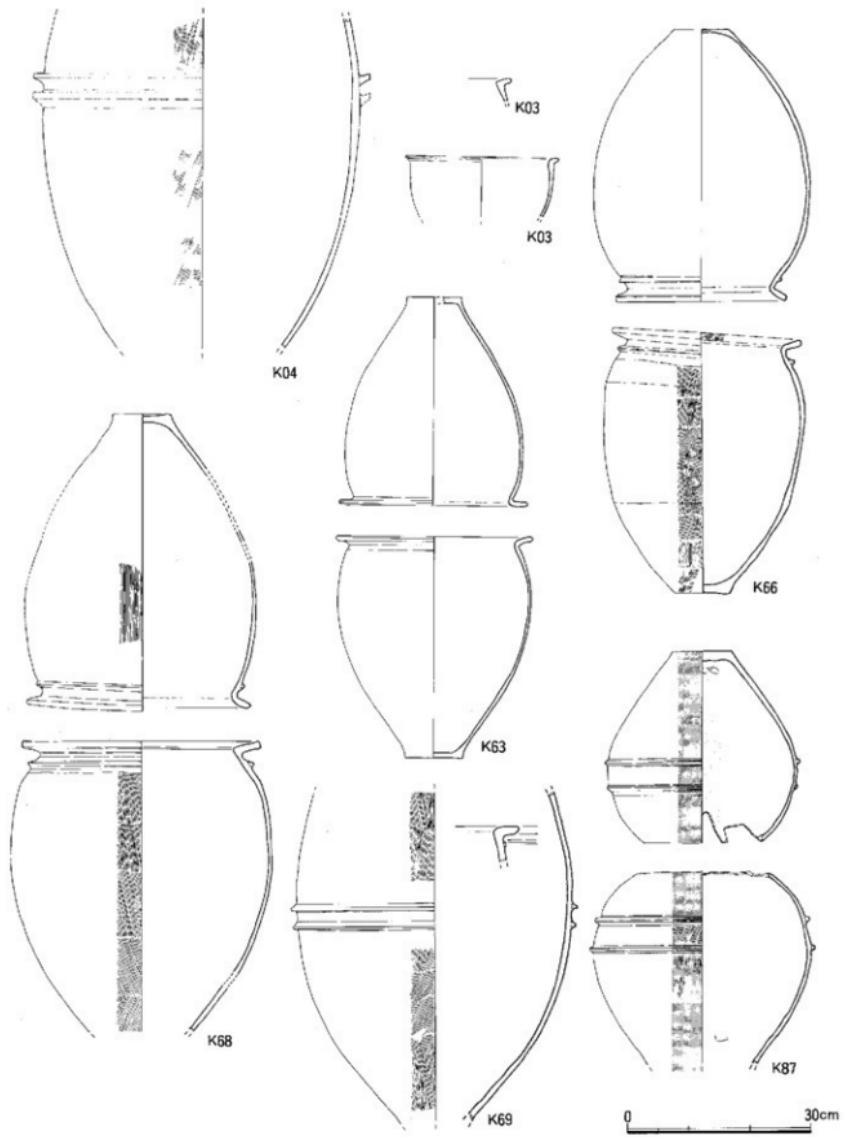
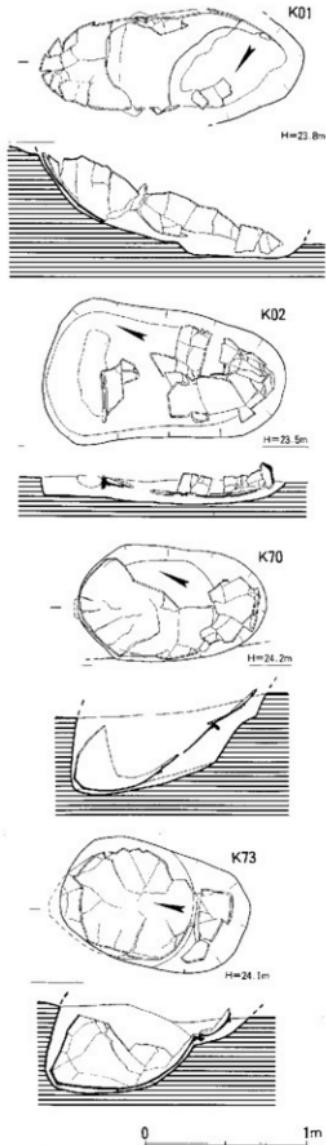


Fig.51 K03・04・63・66・68・69・87号甕棺実測図 (1/8)



5. K63号壺棺墓 (Fig.50・51, PL.20・27)

墳丘の西端部裾に位置し、K02号壺棺墓の西側9mにあたる。墓壇は、不整な長方形を呈し、削平を受けているが、下棺を西側から挿入して埋置されたと考えることができる。上・下棺とともに小型の甕を使用する接口式壺棺墓である。主軸をほぼ東西に向ける。

下棺 口縁が緩く二字形に屈曲する甕で、端部はやや肥厚する。胴部のふくらみは大きく、底部はやや緩い上げ底となる。全体に薄づくりである。器色は、外面胴部が淡赤褐色、口縁上端部が暗灰褐色、内面が淡灰色を呈する。器面調整は、荒れのため不明である。胎土は、やや粗で、石英・長石粗砂を多く混入する。焼成はやや軟質である。口径32.2cm、器高36.3cm、底部径9.5cmを計る。

上棺 下棺とほぼ同一サイズの甕で、口縁が緩く内傾し、内面屈曲部に緩い稜を有する。全体に薄づくりで、胴部の器厚5mm程度を計る精良品である。器色は、外面が淡赤褐色、内面が淡褐色～暗黄褐色を呈する。器面調整は、内外面ともに荒れのため不明である。また、底部外面に焼成時の黒斑が見られる。口径31.0cm、器高34.5cm、底部径9.1cmを計る。胎土はやや粗で、石英・長石の粗砂を大量に含む。焼成はやや軟質である。

6. K65号壺棺墓 (Fig.59・60, PL.23)

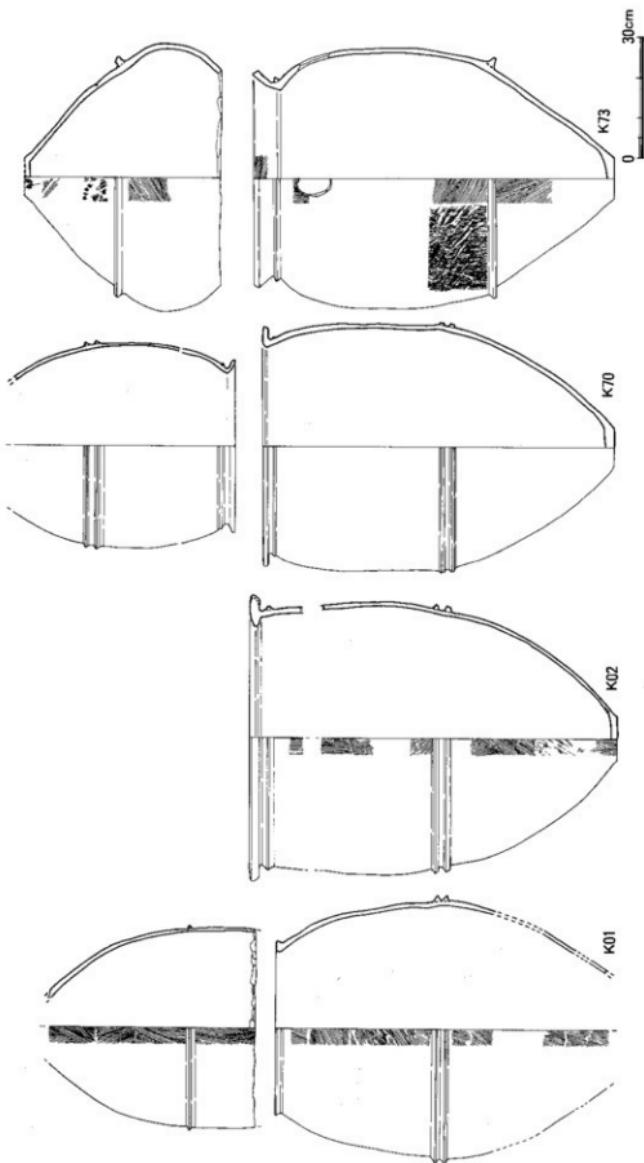
墳丘南西部隅近くで検出された。墓壇は、長方形をなし、挿入は南側からなされている。上下棺ともに大型の甕を使用する接口式の壺棺墓で、埋置角度はほぼ水平に近い。

下棺 やや内面に傾斜する平坦口縁を有し、直下に低い三角突帯1条を巡らす。また胴部中位よりやや下がった位置に断面二字形の突帯2条を巡らすが、上部の突帯は頂部の処理が不完全で、稜線は鈍い。器形はよく均整のとれた甕で、全体的に薄づくりである。器色は、外面淡褐色で、内面暗褐色を呈する。

また、外面には丹塗り後に黒色顔料を塗布する。内面も口縁下25cmの部分まで黒色顔料を塗布する。胎土は密で、焼成も堅緻である。底部付近に細かいハケ目が一部残る。口径63.5cm、残存器高90.5cmを計る。

Fig.52 K01・02・70・73号壺棺墓出土状況実測図 (1/30)

Fig. 53 K01 - 02 • 70 • 73号墓棺内測図 (1/12)



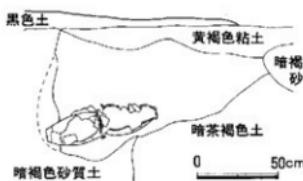


Fig.54 K90号壺棺出土状況実測図 (1/30)

8cm、底部径10.8cmを計る。

7. K66号壺棺墓 (Fig.50・51、PL.27)

K65号壺棺墓の南側に隣接して検出された接口式の小型壺棺墓である。墓壙は長楕円形をなし、掘り方の立ち上がりは北側に緩い。上下棺ともに小型甕を使用する。

下 棺 肥厚するく字形口縁を有し、直下にやや垂れ気味の三角突帯1条を巡らす。全体に器壁の一定しない變である。器色は、外面が暗赤褐色～淡褐色で、内面は黒褐色を呈する。外面は全て黒色顔料を塗布する。器面調整は、突帯部に強い横ナデを施し、口縁内面及び胸部には粗いハケ目が残る。ハケ目工具は幅2cm程度を計る。胎土はやや粗で、焼成もやや軟質である。口径31cm、器高43cm、底部径9cmを計る。

上 棺 下棺と同様に肥厚するく字形口縁を有し、直下に低く、鋭い三角突帯1条を巡らす。全体に薄づくりの甕で、副部外面は斜め方向の丁寧なナデで滑面をなす。外面が淡褐色で、内面は淡褐色～黒色を呈する。口縁内面のみに丹塗りが残る。口径28cm、器高44.8cm、底部径9cmを計る。

8. K67号壺棺墓 (Fig.61・62、PL.23)

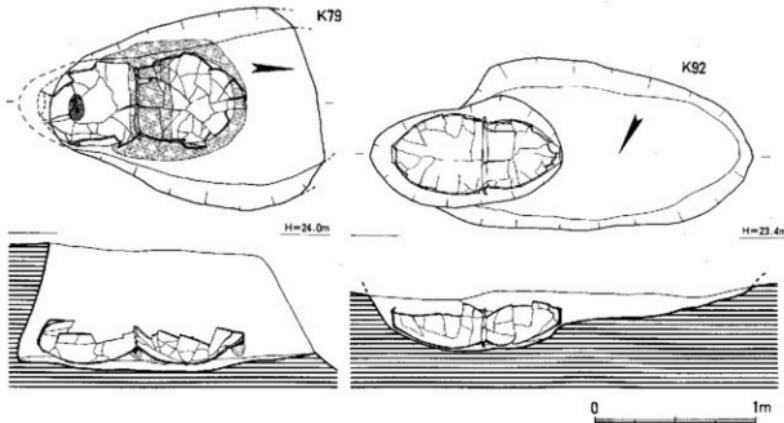


Fig.55 K79・92号壺棺墓出土状況実測図 (1/30)

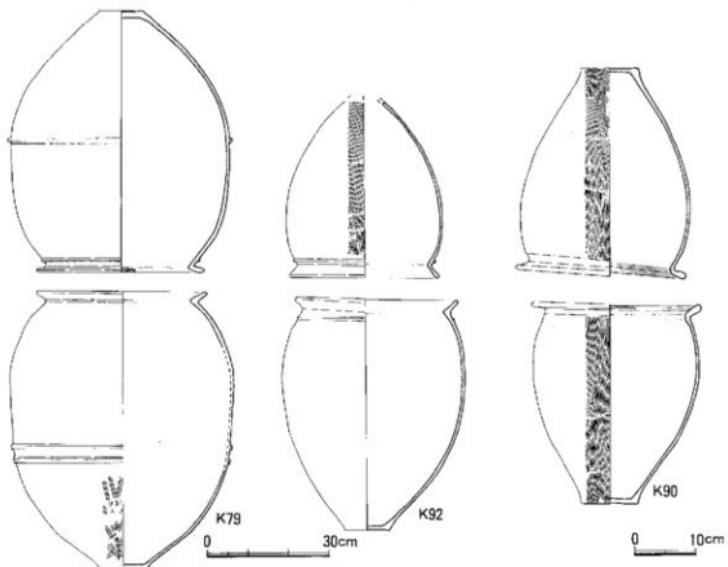


Fig.56 K79・90・92号壺棺実測図 (1/8, 1/12)

墳丘の南側に片寄った位置で長軸をほぼ南北方向に向けて検出された。墓壙は2段掘りの長方形をなし、横穴部は残らないが、南側からの挿入である。下棺に大型壺、上棺に鉢を使用する。

下 棺 口縁部が断面T字形をなす壺で、口縁下に2条の断面コ字形突帯、胴部中位にやや大振りの断面コ字形突帯2条を巡らす。胴部中位以上の器壁はほぼ垂直に立ち上がる。器色は、内外面ともに淡赤褐色を呈し、外面には黒色顔料が塗布されている。全体に摩滅が著しいが、突帯部を主に焼成時の黒斑が残る。胎土は密で、細砂の混入多い。焼成堅緻。口径74.4cm、器高110.9cm、底部径14cmを計る。

上 棺 断面T字形をなす口縁部が大きく開いた鉢で、底部も安定した造りとなっている。器壁の仕上がりは口縁・底部付近が厚く、中位で薄い。器色は、内外面ともに淡赤褐色を呈し、外面に黒色顔料が塗布されている。器面調整は、外面に非常に粗いタテハケ目を施し、内面はヘラナデである。胎土は密で、焼成はやや軟質である。口径67.1cm、器高40cm、底部径12.6cmを計る。

9. K68号壺棺墓 (Fig.50・51, PL.27)

墳丘南側に位置し、K67号壺棺の東側上部で検出された接口式の小型壺棺墓であり、墓壙の切り合いで同壺棺墓より新しい所産である。墓壙の形状から西側より挿入された可能性が高い。上下棺とともに小型の壺を使用する。

下 棺 K66号壺棺の下棺甕とはほぼ同一形態の壺で、やや大型である。口縁下の突帯部上下に強い横ナデを施し、他の外面は粗いタテハケ目が残る。器色は、外面が暗褐色～淡褐色、内面暗褐色～暗

黄褐色を呈し、外面に黒色顔料を塗布する。また、口縁内面のみに丹塗りが施される。胎土は密で、粗砂の混入が多い。焼成は堅緻。口径39cm、残存器高47.2cmを計る。

上 棺 口縁部がく字形に屈曲し、直下に流れる様な低い三角突帯を巡らす壠で、全体に細身で溝づくりである。底部はやや上げ底となる。内外ともに器面の摩滅が著しいが、胴部に細かいタテハケ目が残る。外面には全面に黒色顔料を塗布する。胎土はやや粗で、粗砂の混入が多い。焼成もやや軟質である。口径36.2cm、器高49~48.5cm、底部径9.35cmを計る。

10. K69号壠棺墓 (Fig.50・51, PL.28)

墳丘南側で検出された壠棺墓で、近世墓の土壤によって棺の大半を失っているが、単独棺と考えられる。

棺は、口縁部及び底部を欠き、破片として口縁部の一部が図示できる。胴部は突帶部が最大径となる卵形をなし、やや下向きの低い断面コ字形突帯2条を巡らす。口縁部は、内傾し、内面に鋸い棱を

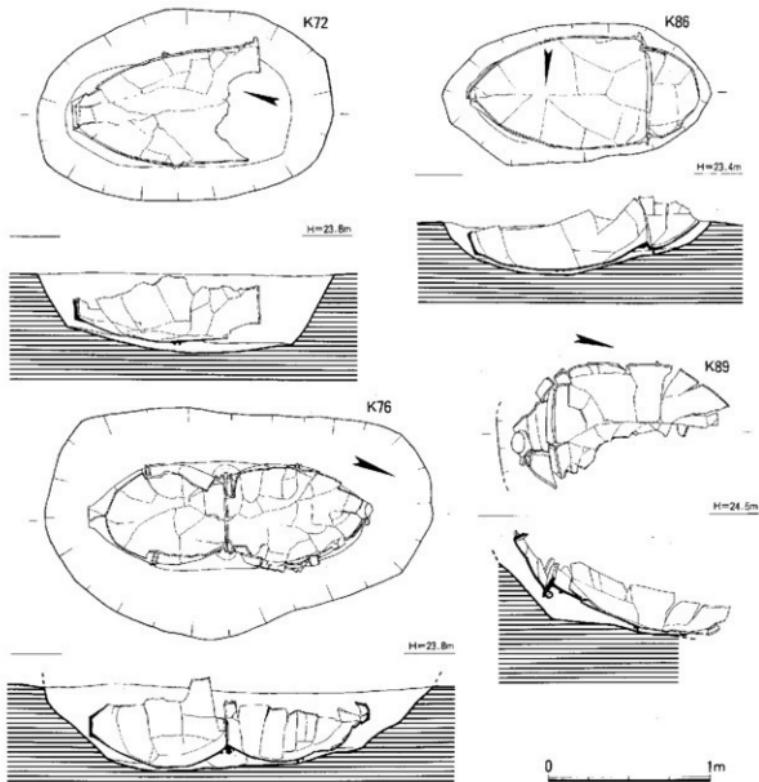


Fig.57 K72・76・86・89号壠棺墓出土状況実測図 (1/30)

持ち、口縁直下に低いコ字形突帯を1条巡らす。また胴部の器色は、外面が淡褐色～暗褐色、内面黒～黒褐色を呈し、外面には黒色顔料を塗布する。また、突帯部付近に焼成時の大黒斑が見られる。調整は、外面に細かいタテハケ目が残る。胎土は密で、焼成も堅緻である。残存器高54.8cmを計る。

11. K70号甕棺墓(Fig.52・53, PL.23)

墳丘南側に位置し、K69号甕棺墓の北側に隣接して検出された。埋置角度は大きく、南側から挿入されている。下棺に大型、上棺に中型甕を使用した接口式甕棺墓である。

下 棺 口縁内面をほぼ丸く収め、口縁が外側に平坦にのびる大型甕で、直下に非常に低いコ字形突帯1条を巡らす。また、胴部中位には不揃いな低い断面コ字形の突帯2条を巡らしている。器色は、外面が淡黄褐色、内面暗褐色を呈し、外面には黒色顔料を塗布する。全体に摩滅が著しく、胴部内面にタテ方向のヘラナデ調整が残る。また、胴部突帯以上に焼成時の大黒斑が残る。胎土は密で、焼成も堅緻である。口径58.5cm、器高86.5cm、底部径9cmを計る。

上 棺 断面がく字形に屈曲する口縁部を有する中型の甕である。口縁直下には鋭い三角突帯1条を巡らし、胴部にも2条の三角突帯を巡らす。口縁下15cm程度のあたりが最大径となり、底部へとすばまっていると思われるが、接点がなく復元的に図示している。器色は、外面が淡赤褐色～暗褐色で、内面は暗褐色を呈する。また、外面には黒色顔料が塗布されている。胴部突帯部付近には焼成時の大黒斑が残る。調整は、突帯部の上下に強いヨコナデを施し、胴部突帯以下にタテ方向のヘラナデが残る。胎土は密で、焼成は非常に堅緻である。口径42cm、残存器高55cmを計る。

12. K71号甕棺墓(Fig.61・62, PL.24)

墳丘東側に位置し、K70号甕棺墓の北東に隣接して検出された。甕棺の挿入は東側からなされ、副葬品を伴った他の甕棺に直交する配置がなされている。上下棺にはいずれも大型の甕を使用した接口式の甕棺墓である。

下 棺 胴部中位以上がほぼ直立し、内面への張り出しが強く、外方に傾斜する分厚い口縁を有する大型の甕で、口縁直下に低い三角突帯1条を巡らす。また、胴部中位の2条突帯はそれぞれ上下方に開く細身のコ字形突帯であり、これから鉢状に急速に底部へとすばまる。器色は、外面が暗褐色を呈し、全面に黒色顔料を塗布する。また、胴部突帯以下は焼成時の大黒斑が見られる。内面は暗黄褐色～淡褐色を呈する。調整は、外面上半にタテ方向の丁寧なヘラナデ、内面口縁以下20cm程度までナナメの粗いタテキ痕、これ以下に粗いタテハケ目が残る。胎土は密で、焼成も堅緻である。口径77cm、器高107.5cm、底部径13cmを計る。

上 棺 口縁が外方に傾斜する丁字形口縁を有する大型甕である。口縁部直下には鋭い三角突帯を巡らし、底部を欠くかほは胴部中位に2条の三角突帯を巡らす。胴部突帯は断面形が不揃いで、上部が大振りである。器色は、外面が黒褐色～暗赤褐色で、内面は暗褐色を呈する。外面の全面に黒色顔料を塗布する。内外面ともに器面の荒れが著しい。胎土はやや粗で、焼成は堅緻である。口径67.6cm、残存器高81cmを計る。

13. K72号甕棺墓(Fig.57・58, PL.24)

墳丘東側隅に位置し、南側から墓壙に挿入された単式の大型甕棺墓である。木製蓋を使用したものと考えられるが、墓壙床面にその痕跡は見られない。ほぼ水平に埋置したものと考えられる。

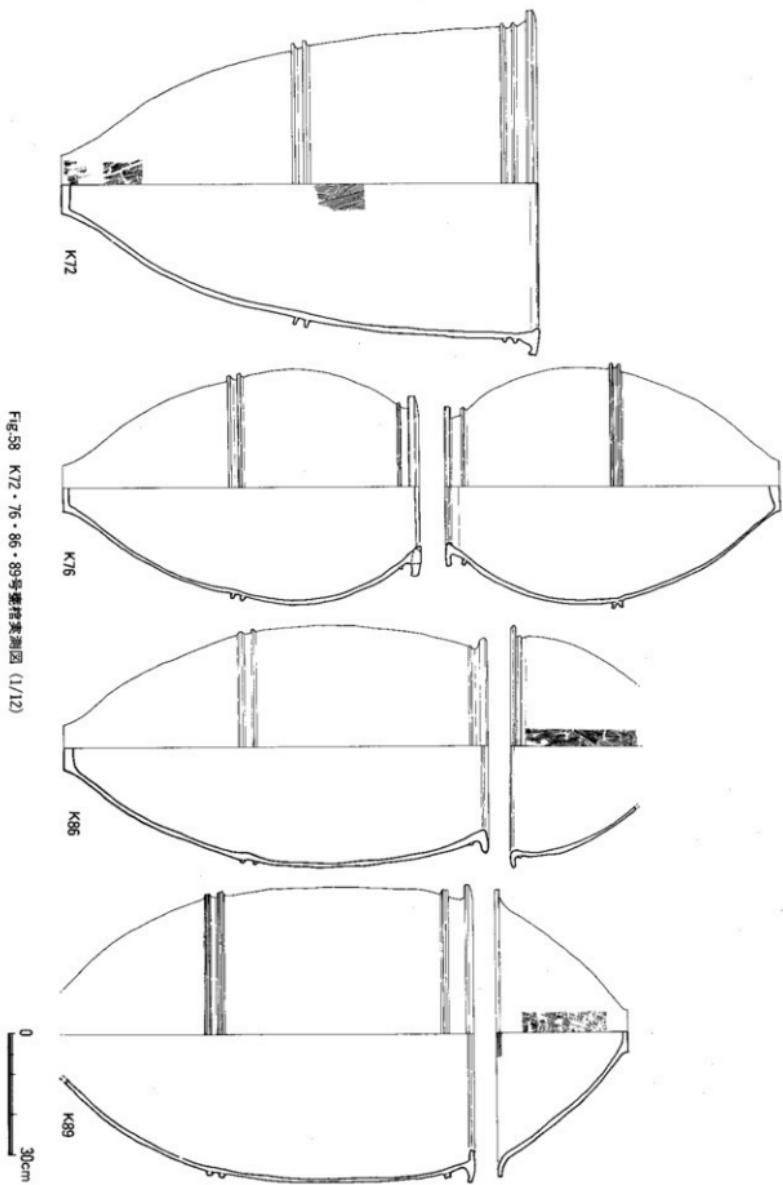


Fig.58 K72·76·86·89号變種測圖 (1/12)

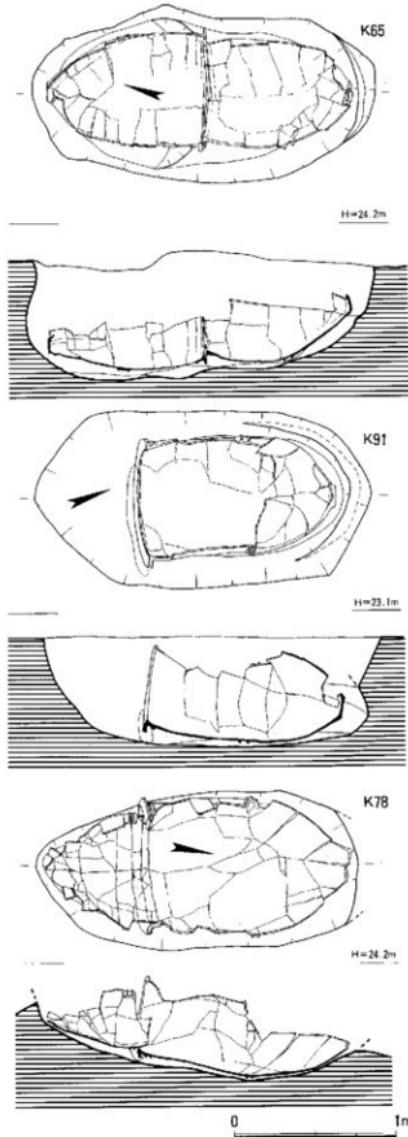


Fig.59 K65・78・91号壺棺墓出土状況実測図 (1/30)

棺使用の大型壺は、最大径が口縁部にあり、口縁下が非常に肥厚し、上端が外方に傾斜するT字形口縁を有する。口縁下にはよく形状のそろった断面コ字形の2条突帯を巡らし、胴部のほぼ中位には隆起が高く、それぞれが上下方向に開く断面コ字形の2条突帯を巡らす。器色は、外面が赤褐色で、内面暗赤褐色を呈する。調整は、底部付近に細かいタテハケ目、内面中位に粗いタテハケ目が痕跡的に残る。胎土は非常に密で、焼成は堅緻である。口径84.8cm、器高117.2cm、底部径14.4cmを計る。

14. K73号壺棺墓 (Fig.52・53、PL.24)

墳丘南側に位置し、K69号とK78号壺棺墓の間に検出された接口式の大型壺棺墓である。壺棺の埋置角度はほぼ30°に近く、墳丘の狭い場所に押し込むように挿入して埋置されている。下棺には大型壺、上棺に大型壺を打ち欠いて使用する。

下棺 頸部のよくしまったく字口縁を持つ大型壺で口縁は外方に長く開く。口縁直下に大型の三角突帯1条を巡らす。腹部は上部で球状に膨らみ、中位よりやや下がった位置で底部に向かって急速に痙攣する。この変換部には下方を向いた大型の鈍い三角突帯1条をタガのようにならす。胸部には口縁下約15cmの内面からの二次穿孔が見られる。径は約8cmを計る。器色は、外面が赤褐色～黄褐色で、内面暗赤褐色を呈する。また、胴部中位には焼成時の大黒斑が残る。外面は丹塗り後に黒色顔料を塗布する。調整は、口縁部突帯下胴部に細かいタテハケ目、これ以下にはナナメ・タテハケ目が残り、胴部の一部にはハケ目調整前のナナメ方向のタタキ痕が見られる。胎土は密で、粗砂の混入が多い。焼成は堅緻である。口径52.8cm、器高88.8cm、底部径10cmを計る。

上棺 大型壺の頸部以上を打ち欠いて使用する。胴部の最大径部より10cmほど下がった位置に下方に垂れるような大型の突帯1条を巡らす。器厚は全体に1cmを優に越し、重量感があ

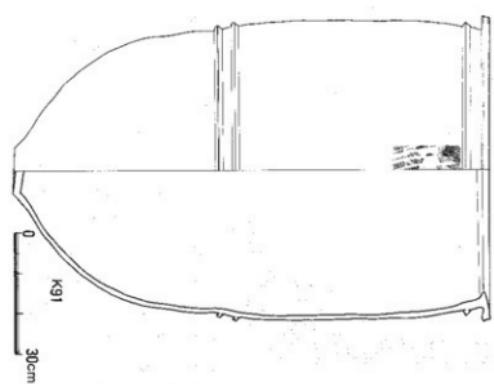
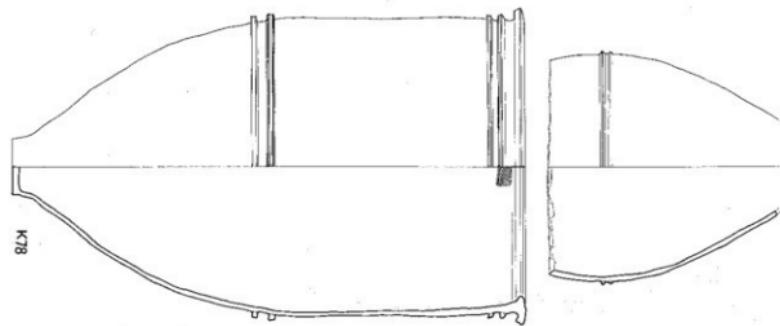
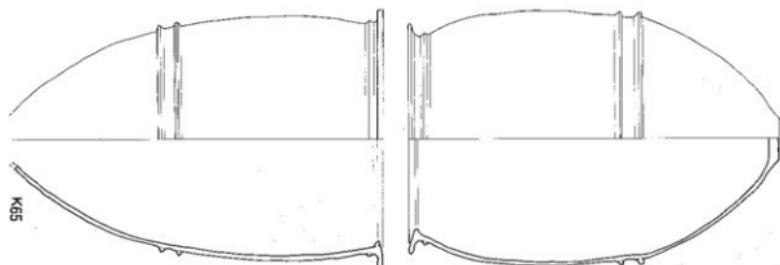


Fig. 60 K65・78・91号壺形測量図 (1/12)

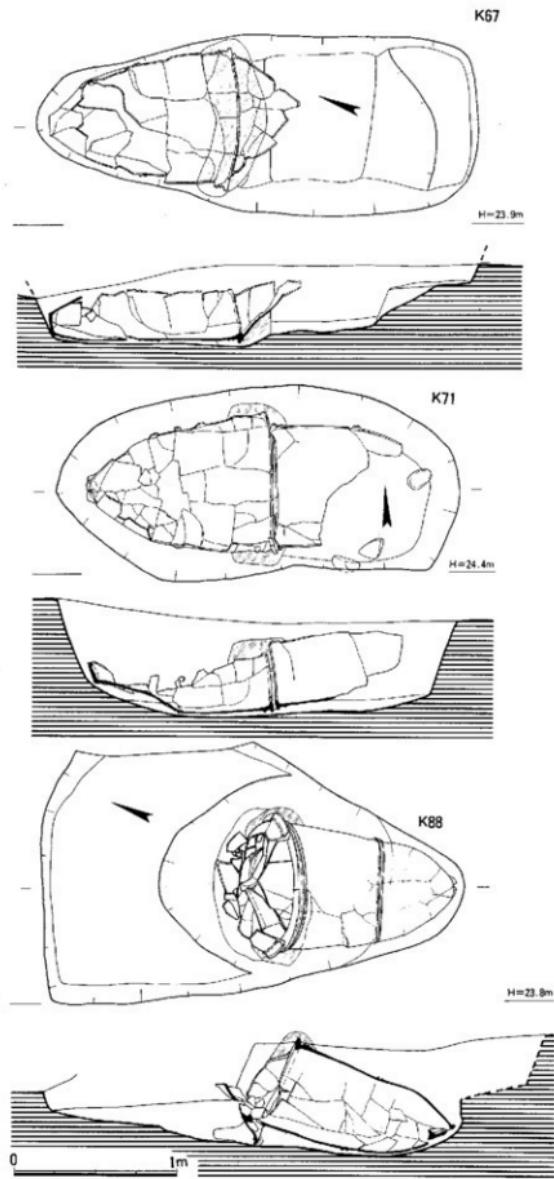


Fig.61 K67・71・88号壺棺墓出土状況実測図 (1/30)

る。底部外面は剥落が多く見られる。器色は、外面で淡赤褐色で、内面暗褐色を呈する。内面には黒色顔料が残る。調整は、胸部外面上半は横方向のヘラナデで、これ以下はナナメ・タテハケ目である。胎土は密で、粗砂を多量に含む。焼成は堅緻である。残存高48.1cm、腹部最大径66.7cm、底部径9.6cmを計る。

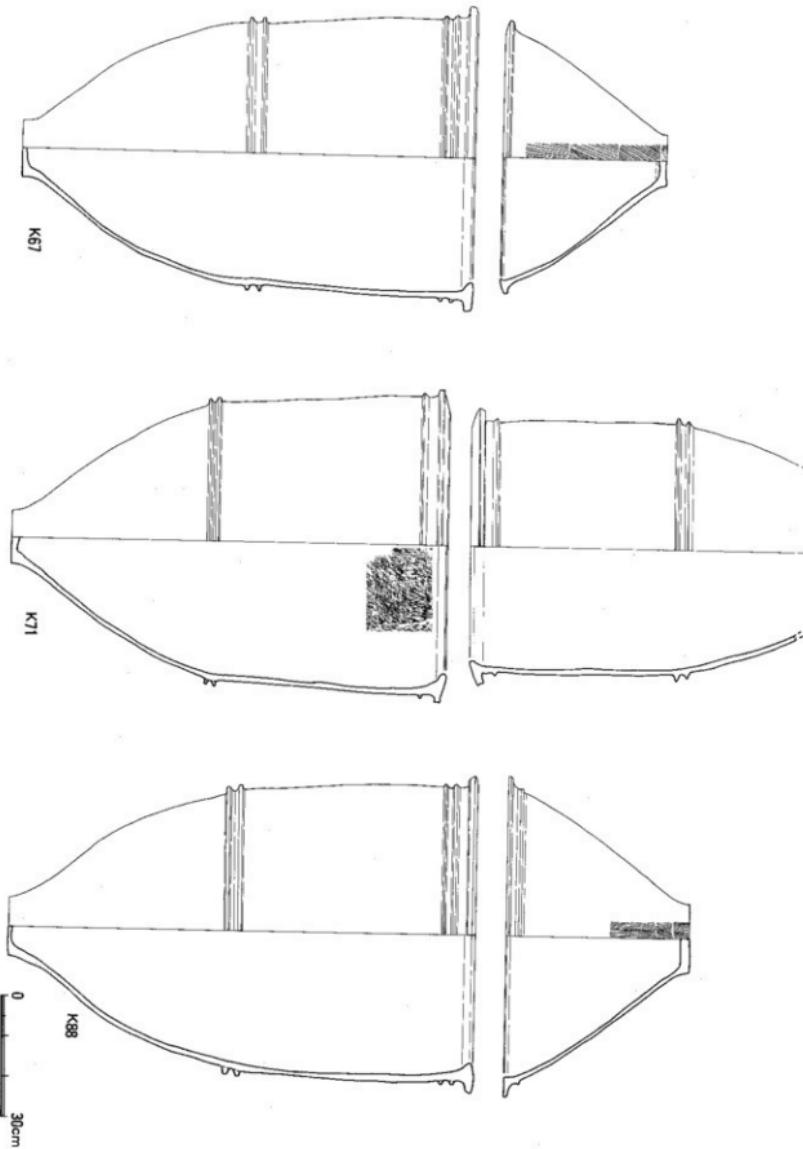
15. K 76号壺棺墓 (Fig.57)

・ 58. PL24)

墳丘東側に位置し、青銅製細形銅劍・把頭飾りを同葬したK75号壺棺墓の東側に平行する位置に埋置される。上下にはほぼ同規模の丸みを帯びた中型壺を使用する。

下 棚 頭部のよくしまった胸部が丸みを持った中型壺である。外方に発達した平坦口縁の直下に低い三角突帯1条を巡らす。また、ややくびれる胸部中位より上がった位置に小型のコ字形二条突帯を巡らす。器壁はよく調整され、全体に薄づくりとなっている。器色は、外面が暗褐色で、内面は暗赤褐色を呈する。外面全体と口縁内部に黒色顔料を塗布する。外面上半部に大黒斑が見られる。調整は、突帯上下部で強いヨコナデが施される。胎土は密で、焼成は堅緻である。口径

Fig. 62 K67 · 71 · 88号墓棺夫測圖 (1/12)



43.5cm、器高87.5cm、底部径11.4cmを計る。

上 棺 下棺と同一の器形で、丸みを帯びた中型甕であるが、全体的に作りが繊細である。よくしまった頸部にはコ字形突帯1条を巡らす。胴部中位には不揃いの断面コ字形二条突帯を巡らす。器色は、外面が暗褐色で、内面淡赤褐色を呈する。外面の全体と内面の一部に黒色顔料を塗布する。調整は、口縁部・突帯部に強いヨコナデが見られ、他は丁寧なナデである。胎土は密で、焼成も堅緻である。口径39cm、器高82.5cm、底部径12cmを計る。

16. K78号甕棺墓(Fig.59・60, PL.25)

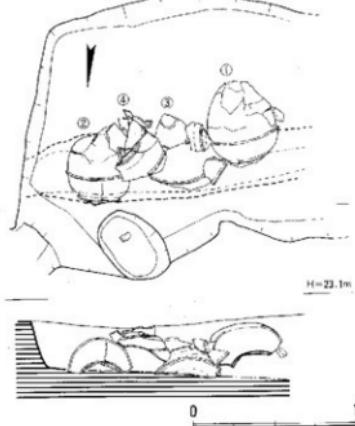
墳丘南側に位置し、細形銅剣類を副葬したK77号甕棺墓の南側にはば長袖を同じくして埋置される。下棺に大型甕、上棺に中型甕の打ち欠いたものを使用する呑口式甕棺墓である。棺の埋置角度はかなり緩く、南側から挿入されている。

下 棺 脇部中位を巡るしっかりした断面コ字形の二条突帯を境に胴部がやや内傾しながら立ち上がる大型甕である。T字形口縁の外端部はやや垂れている。口縁部下には2条の不整な突帯を巡らす。器色は、外面が淡黄褐色、内面暗褐色を呈する。外面は丹塗り後に黒色顔料を塗布する。調整は、口縁部内面に荒い横ハケ目が残る。胎土は密で、焼成も堅緻である。口径78cm、器高125.3cm、底部径14cmを計る。

上 棺 中型甕の打ち欠きを使用し、底部を欠く。胴部に低いいびつな突帯2条を巡らす。器色は、外面が淡褐色、内面淡赤褐色を呈する。外面には殆ど全面に焼成時の大黒斑が残る。外面は丹塗り後に黒色顔料を塗布する。調整は、内外面ともに丁寧なヘラナデである。胎土密で、焼成は非常に堅緻である。突帯部径最大57.6cmを計る。

17. K79号甕棺墓(Fig.55・56, PL.20・25)

墳丘のほぼ中央に位置し、墳丘東西断面でも墳頂部付近からの墓縁線が確認できる。上下棺とともに中型甕を使用した接口式甕棺墓で、北側から挿入されており、副葬品を伴う他の甕棺と平行に埋置される。下棺には多量の赤色顔料が残されていた。



下 棺 口縁部が強くく字形に屈曲する甕で、全体に胴部の膨らみが大きい。胴部の中位よりやや下がった位置に断面M字形の非常に低い突帯2条を巡らす。器色は内外面ともに淡褐色を呈する。外面は丹塗り後に黒色顔料を塗布する。突帯上に大黒斑あり。下胴部に細かいタテハケ目が残る。胎土密で、焼成はやや軟質。口径41.2cm、器高67.8cm、底部径11.6cmを計る。

上 棺 下棺と同様の中型甕であるが、く字形に強く屈曲する口縁下に低い1条の三角突帯を巡らし、胴部のはば中位には1条の低いM字形突帯を巡らす。器色は、外面淡赤褐色～暗赤褐色を呈する。外面は丹塗り後に黒色顔料塗布、内面は黒色顔料のみ塗布する。調整は、口縁部内面に細かい横ハケ目を残す。胎土は非常に密で、細砂の混入が多い。焼成は堅緻

Fig.63 SK93土壤出土状況実測図 (1/30)

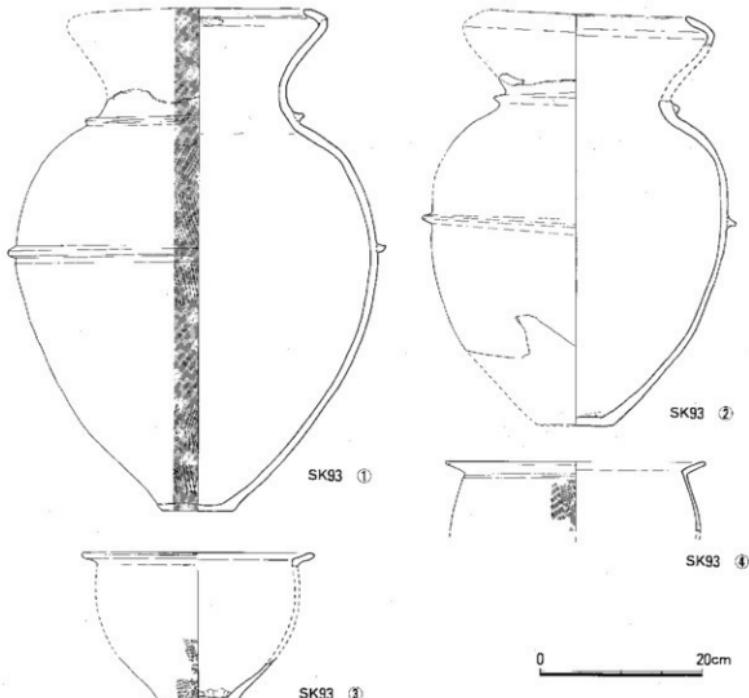


Fig.64 SK93土壤出土土器実測図 (1/6)

である。口径41.3cm、器高63.8cm、底部径10.8cmを計る。

18. K86号甕棺墓 (Fig.57・58、PL.25)

墳丘南西隅に位置し、長軸方向に直角に西側から埋置される。上下棺に鉢・甕を使用した接口式の大型甕棺墓である。

下 棺 全体に細身の甕で、く字形に屈曲する口縁下に非常に小型の三角突帯1条を巡らす。また、胴部中位よりやや下がった位置に非常に低い断面コ字形の二条突帯を巡らす。全体に器壁は1cm以下で、薄づくりである。器色は、外面が淡黄褐色で、内面は淡褐色を呈する。また外面には突帯以上に焼成前の黒斑が見られる。調整は、外面が横方向のヘラナデで、内面タテ方向のヘラナデが残る。胎土は密で、焼成は堅緻である。口径52.6cm、器高104.3cm、底部径11cmを計る。

上 棺 中型の鉢である。底部を欠失する。全体に薄づくりで、肥厚する口縁下に鋭い三角突帯1条を巡らす。内外面とも荒れが著しい。器色は、外面が淡褐色で、内面は淡灰褐色を呈する。口縁上端・突帯部はヨコナデで、他の外面は荒いタテハケ目が残る。胎土は密で、焼成は堅緻である。口径59.6cm、残存器高31cmを計る。

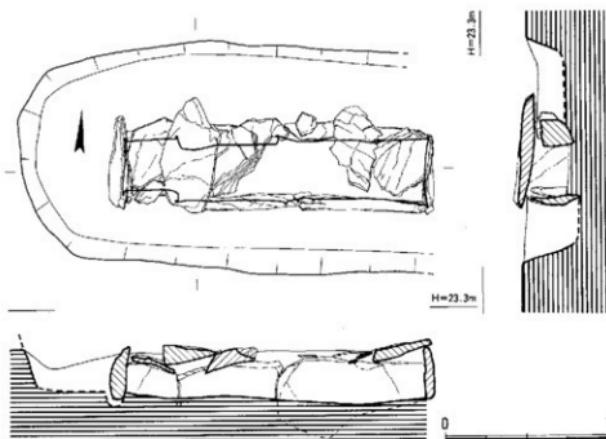


Fig.65 S01 石棺墓出土状況実測図 (1/30)

し、他はナナメのナデ調整。外面に赤色顔料塗布後、黒色顔料を塗布する。胎土密で、焼成堅緻である。残存高31.5cm、下部突堤径37cmを計る。

上 棺 頭部以上を打ち欠く小型甕である。胴部に鈍い三角状突帯2条を巡らす。外面はナナメ・横方向のナデ調整。また、外面には丹塗後、黒色顔料を塗布する。内面は黒色顔料のみ塗布する。胎土は密で、焼成は堅緻である。残存器高31.5cm、底部径9.8cm、胴部最大径31cmを計る。

20. K88号甕棺墓 (Fig.61・62, PL.21・26)

墳丘のほぼ中央近くに位置し、木棺墓M1号に切られる大型甕棺墓である。墓壙は竪坑部と横穴部がよく観察され、棺は北側から挿入されている。上下棺に大型の鉢・甕をそれぞれ使用する。

下 棺 短く肥厚する平坦口縁の直下に低い不揃いなコ字形突帯2条を巡らす。また、胴部中位にはやや上向きの、高いコ字形突帯2条をめぐらす。非常に安定した器形で、外面中位や胴部下端に焼成時の黒斑が見られる。外面は、丹塗り後に黒色顔料を塗布する。内面は黒色顔料のみ塗布する。胎土は密で、焼成は堅緻である。口径78cm、器高114.2cm、底部径14.5cmを計る。

上 棺 底部径の大きい、非常に安定した大型鉢である。口縁部の直下に低い三角突帯1条を巡らす。器色は、外面が暗褐色、内面暗褐色～淡褐色を呈する。外面から内面口縁の一部まで丹塗り後に黒色顔料を塗布する。外底部付近に焼成時の大黒斑がある。胎土は密で、焼成はやや軟質である。口径78.8cm、器高45cm、底部径17cmを計る。

21. K89号甕棺墓 (Fig.57・58, PL.21・26)

墳丘南側に位置し、K78号甕棺墓に隣接するが、墓壙・甕棺とともに遺存状態が非常に悪い。上下棺には大型の鉢・甕をそれぞれ使用する。

下 棺 口縁部口唇が内外によく発達したT字形口縁を有する大型甕で、直下に大振りのコ字形突帯1条を巡らす。また、胴部中位よりやや下位に低いコ字形突帯2条を巡らしている。全体に薄づくりで、外面は丹塗り後に黒色顔料を塗布する。胎土は密で、焼成も堅緻である。摩滅が著しい。口径

19. K87号甕棺墓

(Fig.50・51、
PL.20・25)

墳丘南西隅に位置し、K86号甕棺西側に隣接する小型の接口式甕棺墓である。上下棺共に壺の頸部以上を打ち欠いて使用する。

下 棺 非常に薄作りの壺で、頸部以上を打ち欠いている。

1m 脇部に2条のコ字形突帯を巡らす。外面に細かいハケ目を残す。

Tab.5 桶渡墳丘墓検出遺構一覧表

番号	合口型式	組合わせ		規模	埋置方位	埋置角度	時期 (式)	備考
		上棺	下棺					
K1	接口式	甕	甕	大型	N-58°E	—	中期後半	
K2	単式	甕	甕	大型	N-21.5°W	—	中期後半	
K3	接口式	甕	甕	大型	N-11°W	—	中期初頭	
K4	単式	甕	甕	大型	N-17°W	—	中期後半	
K5	合口式	甕	甕	大型	N-66°W	—	中期末	鉄劍1・鉄鎌1副葬。市埋文報告461集所収
K61	接口式	甕	甕	大型	N-23°W	—	中期中葉	鉄劍1副葬。市埋文報告461集所収
K62	接口式	甕	甕	大型	N-110°W	—	中期後半	赤褐色土刀1・前漢鏡1副葬。市埋文報告461集所収
K63	接口式	甕	甕	小型	N-78°W	—	中期後半	
K64	接口式	甕	甕	大型	N-27°W	—	中期末	漆環頭刀子1副葬。古埋文報告461集所収
K65	接口式	甕	甕	大型	N-23°W	9°	中期後半	
K66	接口式	甕	甕	小型	N-35°W	5°	中期末	
K67	接口式	鉢	甕	大型	N-20°W	10°	中期後半	
K68	接口式	甕	甕	小型	N-72°E	1°	後期前半	
K69	単式	甕	甕	大型	N-82°W	—	中期後半	
K70	接口式	甕	甕	大型	N-25°W	37°	中期後半	
K71	接口式	甕	甕	大型	N-92°E	10°	中期後半	
K72	単式	甕	甕	大型	N-18°W	7°	中期後半	
K73	接口式	甕	甕	大型	N-13°W	29°	後期前半	
K75	接口式	甕	甕	大型	N-17°W	0°	中期中葉	繩形銅劍1・把頭飾1副葬。古埋文報告461集所収
K76	接口式	甕	甕	大型	N-23°W	3°	中期後半	
K77	接口式	甕	甕	大型	N-14°W	0°	中期中葉	繩形銅劍1・鉄1副葬。市埋文報告461集所収
K78	合口式	甕	甕	大型	N-10°W	—	中期後半	
K79	接口式	甕	甕	中型	N-2°W	—	中期末	下甕に多景の赤色顔料が残る。
K86	接口式	鉢	甕	大型	N-83°E	19°	中期後半	
K87	接口式	甕	甕	小型	N-23°E	—	中期後半	
K88	接口式	鉢	甕	大型	N-22°W	23°	中期後半	
K89	接口式	鉢	甕	大型	N-13°W	—	中期後半	
K90	接口式	甕	甕	小型	—	15°	中期後半	埴丘頂上部断面にかかる。
K91	単式	甕	甕	大型	N-21°E	10°	中期後半	
K92	接口式	甕	甕	小型	N-61°E	—	中期末	
M1	—	—	—	—	N-11°W	—	後期	木棺墓。鉄劍1・ガラス小片36・木製算盤下2 粒3・實錠羅天若算盤玉14副葬。市埋文報告461集所収
S01	—	—	—	—	—	—	—	磁石石棺墓
SK93	—	—	—	—	—	—	—	中型甕4個体投入

*K5・S1・62・64・75・77号墳棺墓およびM1木棺墓についての詳細は既報。

「古式通説群 菊・飯盛・吉田某場整備事業関係調査報告書 第2号」(福岡市埋蔵文化財調査報告書第461集1996年) 所収

73cm、残存器高100cm以上を計る。

上棺 比較的浅い大型の鉢で、口縁下に突帯を持たず、口縁端部が外方に開く特徴をもつ。外面黒褐色、内面暗褐色～赤褐色を呈する。外面及び口縁内面の一部にタテ・ヨコ方向の細かいハケ目が残る。胎土はやや粗で、焼成は堅緻である。口径70cm、器高32.3cm、底部径10.4cmを計る。

22. K90号甕棺墓(Fig.54・56, PL.18・27)

埴丘南側のK88号甕棺墓に隣接して検出された小型の甕棺墓である。南北の土層断面にかかり、墓壙が埴丘頂部から掘りこまれているのが明らかに観察できる。

下棺 口縁がく字形に屈曲する小型甕である。器面の荒れが著しい。外面は細かいタテハケ目調査。器色は内外面ともに淡黄褐色で、口縁内面に一部丹塗りが残る。胎土は密で、粗砂の混入が多い。焼成は堅緻である。口径27.8cm、器高32.9cm、底部径9.3cmを計る。

上棺 下棺と同様の特徴をもつ小型甕である。内外面ともに淡黄褐色を呈する。また、口縁部内面一部に丹塗りが施される。外面は細かいタテハケ目である。胎土は密で、石英・長石粗砂を多く混

入する。焼成は堅緻である。口径28cm、器高33.9cm、底部径9.5cmを計る。

23. K91号壺棺墓(Fig.59・60、PL.22・26)

墳丘南端に位置し、南西側から挿入埋置された大型の単独壺棺である。墓壙は長方形をなし、墓壙床面に木蓋の痕跡が残る。

棺は、胸部下半の膨らみが著しい大型壺で、やや内傾する平坦口縁の直下に1条の三角突帯を巡らす。また、胸部のほぼ中位に低い下向きのコ字形突帯2条を巡らす。外面は暗褐色、内面淡灰褐色を呈する。外面の上半に細かいタテハケ目、他はヨコ・ナナメ方向のヘラナナテ調整。外面に黒色顔料を塗布する。胎土はやや粗で、焼成堅緻である。口径74cm、器高116.3cm、底部径11.3cmを計る。

24. K92号壺棺墓(Fig.55・56、PL.20・28)

墳丘南西裾側に位置し、西側から挿入された小型の接口式壺棺墓である。上下棺にはいずれも小型甕を使用する。小型棺のなかでは比較的に墓壙の豊穴・横穴が明らかで、丁寧な埋葬である。

下棺 口縁部が立ち上がり、内面に鋸い稜を有する小型甕で、口縁直下に低い三角突帯1条を巡らす。全体に卵形の胸部となり、安定した底部へと移行する。器面の荒れが著しい。外面暗褐色、内面淡灰白色を呈する。外面下半には大黒斑がある。胎土は密で、粗砂の混入が多い。また、焼成は堅緻である。口径39.5cm、器高57cm、底部径11cmを計る。口縁内面の一部に丹塗りが見られる。

上棺 下棺よりやや口徑の小さい小型甕である。口縁部の立ち上がりは同様であるが、突帯位置は殆ど直下となる。口縁・突帯部は強いヨコナナテで、他は細かいタテハケ目調整。胸部中位に煤？付着する。胎土は密で、粗砂を若干含み、焼成は堅緻である。口径37cm、残存器高43.3cmを計る。

2. 土 墓

S K93土壤墓(Fig.63・64、PL.22・29)

墳丘墓の南側裾部を掘り下げた際に、東西に軸を持つ土壤状の豊穴が検出され、当初土器破片を使用した土器蓋土壤と考えたが、出土土器の構成が大型壺・鉢・甕など多器種にわたることとこの土壤が更に西側に延長しそうだと考えられることからこれは埋葬遺構ではなく、生活遺構と判断した。

出土遺物 ①は、口縁がく字形に屈曲し外側に稜をもつ大型壺である。頸部に1条の高いコ字形突帯、淡赤褐色を呈し、外底部をのぞく外面は丹塗りである。外面には荒いタテハケ目が痕跡的に残る。胎土は密で、焼成堅緻である。口径32cm、器高61.5cm、底部径9cmを計る。②は、①と同様の形態的特徴をもつ中型壺である。不安定な平底を有し、器面は丁寧なナナテ調整を施す。器色は、淡褐色である。胎土は密で、焼成堅緻である。口径24.5cm、器高50.5cm、底部径9.8cmを計る。③は、小型の鉢形土器である。胸部を殆ど失うが、く字形に折れる口縁部を有する。外面淡赤褐色、内面暗黄褐色を呈する。外面には細かいハケ目で、内底に指押さえがある。口径28.5cm、器高18.8cm、底部径9.3cmを計る。④は、口縁がく字形に折れる薄びくりの甕破片である。器色は、外面淡赤褐色、内面暗黄褐色を呈する。外面に弱いタテハケ目が残る。胎土は密で、焼成堅緻である。口径31.8cmを計る。

3. 石棺墓

S01石棺墓(Fig.65、PL.22)

墳丘墓南側裾でS K93土壤に近接して検出された石棺墓である。出土状況からS01石棺墓はS K93

Tab.6 塗丘墓出土器物量表

番号	器種	法量(cm)				実測		時期	備考
		外口径	器高	鶴巣大径	底部径	縦本数	画面形状		
K1上棺	甕	?	51	48.8	—	1以上	コ字形	中期後半	打ち引き、底部欠損
K1下棺	甕	42.5	81.2	62.9	—	3	三角形	—	外型丹塗
K2(米粒)	甕	70.0	73	67.3	10.8	3	三角形・コ字形	中期後半	丹塗り後漆塗り
K3上棺	甕	—	—	—	—	—	—	中期初頭	生活遺物である
K3下棺	甕	25.0	10	24.0	—	—	—	—	—
K4(米粒)	甕	?	55	52	—	2以上	コ字形	中期後半	—
K5上棺	甕	50.4	—	—	—	1以上	二角形	中期末	—
K5下棺	甕	—	63.2	68.0	12.6	2	二角形・コ字形	—	黒塗り
K61上棺	甕	75.6	116.6	64.0	15.0	4	コ字形	中期中葉	黒塗り
K61下棺	甕	74.4	116.8	67.4	16.0	2	三角形	—	黒塗り
K62上棺	甕	53.0	76.0	55.0	10.8	3	三角形・コ字形	中期後半	黒塗り
K62下棺	甕	70.0	105.0	74.0	13.0	3	三角形・コ字形	—	黒塗り
K63上棺	甕	31.0	34.5	29.3	9.1	—	—	—	中期後半
K63下棺	甕	32.2	36.3	31.8	9.5	—	—	—	—
K64上棺	甕	—	—	—	—	—	—	中期末	—
K64下棺	甕	50.0	93.6	64.6	10.4	3	三角形・コ字形	—	黒塗り
K65上棺	甕	56.2	90.8	62.9	10.8	3	三角形・コ字形	中期後半	丹塗り
K65下棺	甕	63.5	90.5	60.1	—	3	三角形・コ字形	—	黒塗り
K66上棺	甕	28.0	44.8	35.6	9.0	1	三角形	中期末	丹塗り
K66下棺	甕	31.0	43.0	33.0	9.0	1	二角形	—	黒塗り
K67上棺	甕	67.1	40.0	—	12.6	—	—	中期後半	黒塗り
K67下棺	甕	74.4	110.9	68.4	14.0	4	コ字形	—	黒塗り
K68上棺	甕	36.2	49.0	37.6	9.35	1	三角形	後期前半	黒塗り
K68下棺	甕	39.0	47.2	42.7	—	1	三角形	—	黒塗り
K69(米粒)	甕	—	54.8	45.0	—	3	コ字形	中期後半	黒塗り
K70上棺	甕	42.0	55.0	50.1	—	3	コ字形	中期後半	黒塗り
K70下棺	甕	58.5	86.5	60.5	9.0	3	三角形	—	黒塗り
K71上棺	甕	67.6	81	62.1	—	3	三角形	中期後半	黒塗り
K71下棺	甕	77.0	107.5	73.2	13.0	3	三角形・コ字形	—	黒塗り
K72(米粒)	甕	84.8	117.2	76.5	14.4	4	コ字形	中期後半	—
K73上棺	甕	?	48.1	66.7	9.6	1	コ字形	後期前半	黒塗り
K73下棺	甕	52.8	88.8	63.8	10.0	2	二角形	—	月塗り後漆塗り
K75上棺	甕	76.0	113.0	71.0	14.0	3	二角形・コ字形	中期中葉	黒塗り
K75下棺	甕	72.0	117.6	70.0	14.8	4	コ字形	—	黒塗り
K76上棺	甕	39.0	82.5	57.9	12.0	3	コ字形	中期後半	黒塗り
K76下棺	甕	43.5	87.5	57.3	11.4	3	二角形・コ字形	—	黒塗り
K77上棺	甕	73.6	114.6	66.4	17.2	3	三角形	中期中葉	黒塗り
K77下棺	甕	70.8	103.8	64.0	17.6	3	三角形・コ字形	—	黒塗り
K78上棺	甕	52.7	56.5	55.8	—	2以上	コ字形	中期後半	丹塗り後漆塗り
K78下棺	甕	78.0	125.3	73.8	14.0	4	コ字形	—	黒塗り
K79上棺	甕	41.3	63.8	53.6	10.8	2	M・三角形	中期末	丹塗り後漆塗り
K79下棺	甕	41.2	67.8	54.6	11.6	2	M字形	—	黒塗り
K86上棺	鉢	59.6	31.0	54.3	—	1	三角形	中期後半	—
K86下棺	甕	52.6	104.3	59.5	11.0	3	三内形・二字形	—	—
K87上棺	甕	—	31.5	31.0	9.8	2	二角形	中期後半	月塗り後黒塗り
K87下棺	甕	—	31.5	35.8	—	2	コ字形	—	月塗り後黒塗り
K88上棺	鉢	78.8	—	55.0	17.0	1	二角形	中期後半	月塗り後黒塗り
K88下棺	甕	78.0	114.2	73.1	14.5	4	コ字形	—	黒塗り
K89上棺	鉢	70.0	32.3	—	10.4	0	—	中期後半	—
K89下棺	甕	73.0	100	72.6	—	3	コ字形	—	丹塗り後黒塗り
K90上棺	甕	28.0	33.9	28	9.5	0	—	中期後半	一部丹塗り
K90下棺	甕	27.8	32.9	27.2	9.3	0	—	—	一部丹塗り
K91(米粒)	甕	74.0	116.3	72.9	11.3	3	三角形・コ字形	中期後半	黒塗り
K92上棺	甕	37.0	43.3	38.5	—	1	三角形	中期末	—
K92下棺	甕	39.5	57	44.6	11.0	1	三角形	—	—

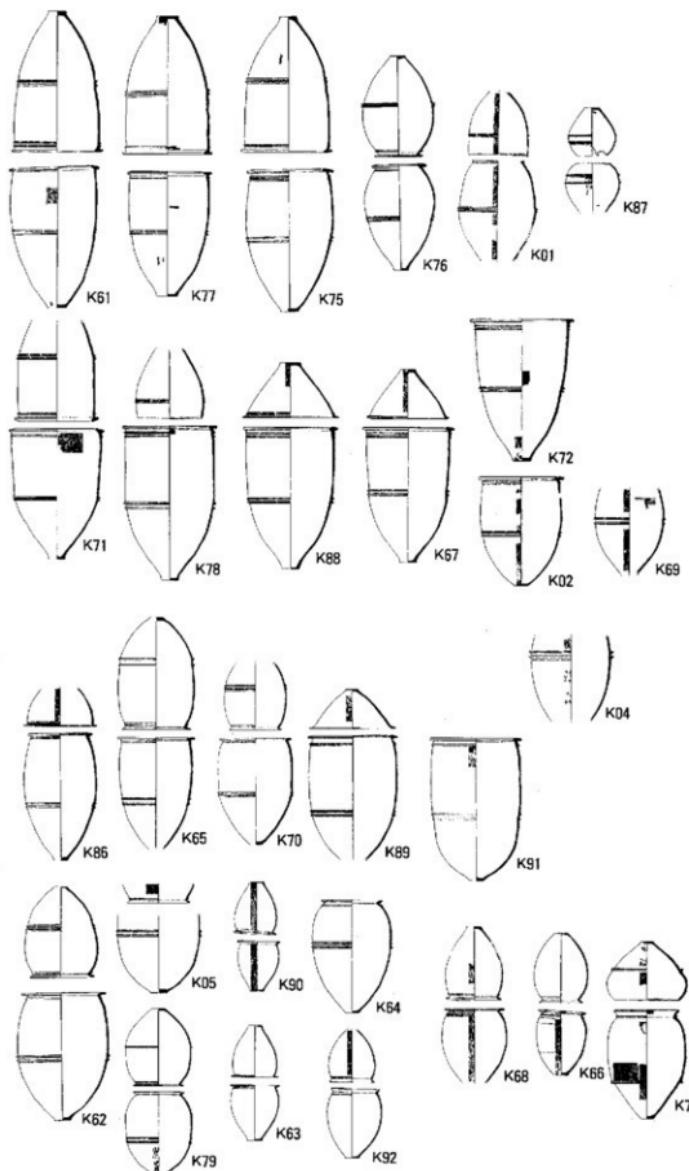


Fig.66 填丘墓出土樂鐘一覽圖

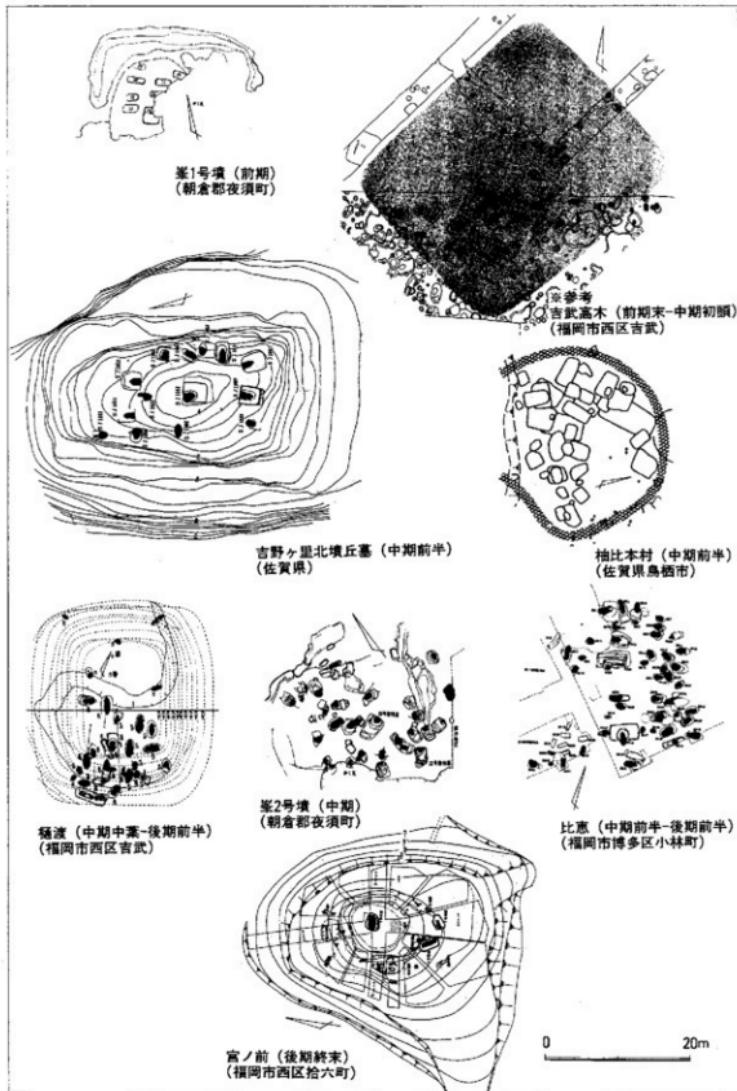


Fig.67 九州発見墳丘墓集成

土壌より新しい時期の所産である。墓壙は、確認部で長さ250cm、幅140cm、深さ35cmを計る隅丸長方形である。また石棺は、変成岩板石を使用した箱式棺で、内法規模が長径186cm、短径38cm、高さ32cmを計る。蓋は両小口部付近に多く残り、中央部は欠落していた。石棺床面の形状から頭部は東側を向いていたと考えられる。石棺に伴うと考えられる遺物は出土しなかった。

4. おわりに

以上では桶渡墳丘墓で検出された埋葬甕棺墓30基のうち副葬遺物を持たない24基について個別に説明を加えてきた。このうちK03号甕棺墓としたものは、墳丘墓構築前の中期初頭段階の生活遺構であるので甕棺墓としては除外できよう。以下では桶渡墳丘墓についての情報を再度記載して若干のまとめとしたい。

1. 墳丘の形状と規模 墳丘はかって後世の5世紀に造営された桶渡古墳の後円部にすっぽり覆われて遺存していたものと判断できるが、18世紀初頭の墳頂部の共同墓地化さらには昭和30年代の土取りによる墳丘北側部分の破壊などがあって、墳丘の全体が残っていないが、墳丘の東西南北に設定した土層バンドの等高線記録や甕棺墓の全体分布から判断して墳丘は東西約25m、南北27m、高さ約2m規模の南北に長い長方形墳丘と考えられ、墳頂は平坦面をなしたと考えられる。

2. 構築方法及びその利用 墳丘の構築は、東西方向の土層断面図(Fig.49)の中でS Aとした土層が暗茶褐色～黒褐色粘質土が弥生時代前期末～中期初頭の生活面であるが、この土層の東西は削り取られたように上層が切断され、この上面に暗茶褐色砂質土(S B)を薄くのせる。更にこの土層上に墳丘の大半を占める黒褐色～暗茶褐色土を厚く盛り上げるが、版築を意識させるようなタキシメた状態は観察できない。そして最後に墳丘裾部に淡褐色土(S F)をかけて仕上げる。

次に、墳丘の利用であるが、この墳丘墓で検出された甕棺墓等は時期的に弥生時代中期中葉から後期前半に及ぶ(Fig.66)と考えられるが、その埋葬順序には一定の方向がありそうである。それは造営最初の埋葬から大型棺は墳丘の長軸に沿い、墳頂部平坦面中央に埋置される点である。しかもこれらは副葬品を伴っている。これは時期が下降しても同様の傾向であろう。そして同時期でも副葬品を持たない大型棺は墳頂部平坦面周辺に配置され、墳丘長軸と直交方向に埋置される。このことは中期前半を主体とし、比較的短時間に利用された佐賀県吉野ヶ里北墳丘墓(Fig.67)でもよく知られる。

3. 副葬遺物を出土した墳墓 副葬品を出した墳墓は、弥生時代中期中葉～後期にわたる甕棺墓6基、木棺墓1基である。甕棺墓では、K75号甕棺墓(細形銅劍1・把頭飾り1)・K77号甕棺墓(細形銅劍1・鋸1)・K61号甕棺墓(鉄劍1)～中期中葉・K62号甕棺墓(鉄素環頭太刀1・前漢重闕文星雲鏡1)～中期後半・K5号甕棺墓(鉄劍1・鐵織1)・K64号甕棺墓(素環頭刀子1)～中期末、また、木棺墓では、M1木棺墓(鉄劍1・水晶製算盤玉2・碧玉・凝灰岩製管玉16・ガラス小玉36)～後期～があるが、墳丘北側の破壊部では遊離した銅劍などが見つかっており、更に複数の副葬品を持つ墳墓が存在したと考えられよう。

4. 黒塗りの甕棺について 墳丘内甕棺墓29基に使用された甕棺について観察を行ったが、Tab.6に見るように器面の摩滅などの悪条件のある資料を除くと殆どの甕棺が埋葬時に黒色顔料を塗布されていることがわかる。そして丹塗りを行った場合はその後の塗布作業となっている。前出吉野ヶ里北墳丘墓でも全ての甕棺が黒塗りとされる。この黒色顔料の正体についても追究が必要である。

以上で桶渡墳丘墓の調査成果の簡単なまとめとしたいが、古武遺跡群の中后期以降の墓地の中心はこの墳丘墓を北端として南西方向に450m以上延びる甕棺ロードにあり、詳細は次回の報告で行いたい。

第五章 第六次調査（大石地区）

昭和60年が明けて、高木地区の甕棺墓地から豊富な青銅器や玉類が発見された。春日市の須玖岡本遺跡や前原市三雲遺跡のように、副葬品が1基の甕棺墓に集中しているわけではなく、8基の甕棺墓と4基の木棺墓が“分散所有”していた。しかし、両遺跡よりも時期がさらに古く、またあたかも甕棺墓と木棺墓が一対になったような埋葬法、しかも標石のような大石を被せるという墓地の姿は、私たちが初めて目にする弥生墓地であった。

「最古の弥生墳墓」とか「早良王墓発見」の見出しでマスコミに取り上げられ、学界や歴史ファンのみならず市民の高い関心をよび、奴国・福岡・伊都國の糸島平野に挟まれてそれまで注目されることのなかった早良平野が一躍脚光を浴びることになった。

飯盛吉武地区土地改良組合の役員各氏の理解と地元の協力を得ることができ、圃場整備の設計変更をして保存することになったことは、きわめて幸いなことであった。

第6次調査は、その話題が一段落し、年度も変わった昭和60年の7月から発掘調査を開始した。第6次は飯盛吉武地区圃場整備に伴う発掘調査としては最終年度に当たり、西の第18号用水路、東の第1号幹線道路、北の第7号支線道路、南の第2号用水路に囲まれた約106,000m²が調査対象地であり、第5次調査区の北側に接して、東西に長い長方形のX面である。

第6次で確認した甕棺墓地については、これまでの報告書で記したように、発掘区中央の2号支線道路部と東端の大石地区の2か所で確認した。いずれも私たちが“甕棺ロード”あるいは“甕棺ベルト”と呼んだ共同墓地の一部である。このうち大石地区については、第461集と第580集の2回に分けて報告している。しかし、整理期間や整理場所、そして報告書印刷費などの関係から第461集では、青銅器や石剣、石鎚などの遺物が発見された甕棺墓11基と木棺墓4基を、第580集では、弥生時代前期末から中期前葉の甕棺墓11基にとどまった。

甕棺ベルトの全容だけでなく、高木地区の“王墓”との関係など弥生時代墳墓や社会構造の解明には、残りの甕棺墓を早急に報告する必要があるのだが、整理体制や環境が好転していない現状では、今回21基の甕棺墓を報告するのが精一杯の努力結果であった。

これまで報告した甕棺墓については、その都度一覧表を掲載してきたが、未報告である残りの甕棺墓も合わせて一覧表を作成した。合わせ口の方法は、上棺から見て接口、覆口、挿入式に分けている。また複棺で水平に埋葬されていると、上棺と下棺の区別が困難であるが、合わせ口の方法や墓壙での埋置位置などで判断し、最初に埋置された方を下棺としている。また時期については、弥生時代前期末～中期初頭、中期前葉、中期中葉、中期後葉と大きく分けた。おおむね金海式、城ノ越式、波田式、須玖式、立岩式に該当する。ただし、これは最終案ではない。甕棺墓研究の進展に合わせてその都度、精査と検討を重ねていく必要があろう。

（1）甕棺墓

大石地区的共同墓地は、甕棺墓202基、木棺墓8基、土壙墓13基と5基の祭祀土壙で構成されている。もちろんこれだけで完結、独立するものではなく、“甕棺ロード”、“甕棺ベルト”と私たちが呼んだ長さ約500mにおよぶ長大な共同墓地の一角を占めるに過ぎない。南西のN-17グリッドから北東のG-13グリッドに向けて緩やかにカーブしながらのびており、未掘部を加えると甕棺墓の総数は千基をはるかに超すものと想像される。大石地区では、時代が新しくなるに従って、分布の中心が次第に北に

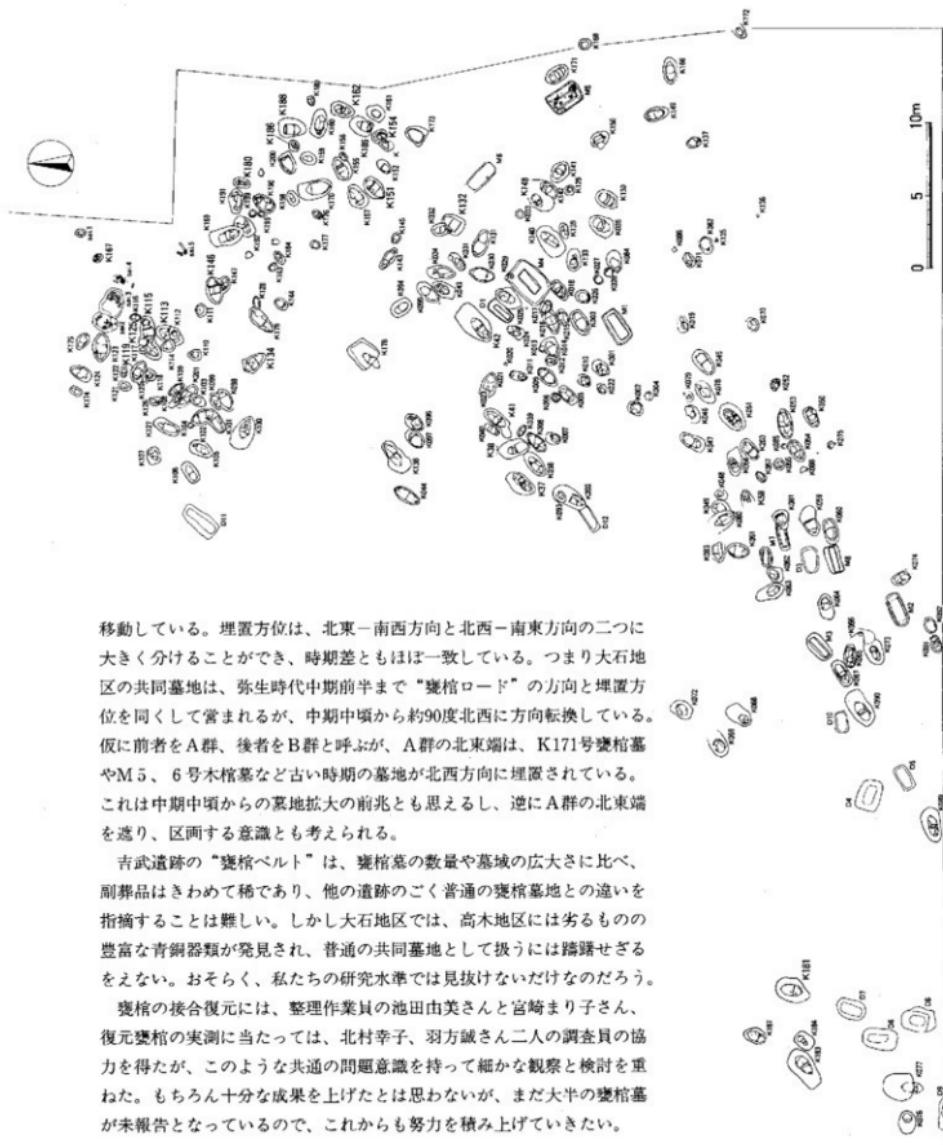


Fig. 68 大石地区弥生墓地平面図
※太字は本圖に報告した墳墓墓

移動している。埋置方位は、北東—南西方向と北西—南東方向の二つに大きく分けることができ、時期差ともほぼ一致している。つまり大石地区の共同墓地は、弥生時代中期前半まで“甕棺ロード”的方向と埋置方位を同様にして営まれるが、中期中頃から約90度北西に方向転換している。仮に前者をA群、後者をB群と呼ぶが、A群の北東端は、K171号甕棺墓やM5、6号木棺墓など古い時期の墓地が北西方向に埋置されている。これは中期中頃からの墓地拡大の前兆とも思えるし、逆にA群の北東端を逃り、区画する意識とも考えられる。

吉武遺跡の“甕棺ベルト”は、甕棺墓の數量や墓域の広さに比べ、副葬品はきわめて稀であり、他の遺跡のごく普通の甕棺墓地との違いを指摘することは難しい。しかし大石地区では、高木地区には劣るもの豊富な青銅器類が発見され、普通の共同墓地として扱うには躊躇せざるをえない。おそらく、私たちの研究水準では見抜けないだけなのだろう。

甕棺の接合復元には、整理作業員の池田由美さんと宮崎まり子さん、復元甕棺の実測に当たっては、北村幸子、羽方誠さん二人の調査員の協力を得たが、このような共通の問題意識を持って細かな観察と検討を重ねた。もちろん十分な成果を上げたとは思わないが、まだ大半の甕棺墓が未報告となっているので、これからも努力を積み上げていきたい。

吉武遺跡第六次調査出土變棺墓一覧

番号	編號	形 式			埋 込み合せ	埋 設 方 位	埋 設 角 度	時 期	備 考	番号	形 式			埋 込み合せ	埋 設 方 位	埋 設 角 度	時 期	備 考					
		横 径	覆 口	合 口							横 径	覆 口	合 口										
1		○柄	實	實	大型	N-47-北47	北47	直掘木	繩野御手の城 片1	26	○	實	實	大型	N-47-北47	北47	直掘木	上壁は跡か?					
2		○柄	實	實	大型	N-47-北47	北47	直掘木	下壁は口縁部 打ち欠きか?	27	○	實	實	小型	N-47-北47	北47	直掘木	下壁側面に穿 孔					
3		○	實	實	大型	N-47-北47	北47	直掘木	長筒円形の轟 桶	28	○	實	實	小型	N-47-北47	北47	直掘木	上壁部打ち欠 く					
4	○				實	大型	N-47-北47	北47	直掘木	底板のみ残る	29	○	實	實	小型	N-47-北47	北47	直掘木	大きさ防ぐ				
5	○				軸	軸	N-47-北47	北47	直掘木	ほぼ水平に埋 置	30	○	實	實	大型	N-47-北47	北47	直掘木	木蓋使用か?				
6	○				軸	軸	N-47-北47	北47	直掘木	下壁の風景の み	31	○	實	實	小形	N-47-北47	北47	直掘木	妻は脚部を打 ち欠く				
7	○?				軸	軸	N-47-北47	北47	直掘木	? 程度不明	32	○	實	軸	小形	N-47-北47	北47	直掘木	其他円形轟桶				
8	○				軸	軸	N-47-北47	北47	直掘木	? 並列? 並列りはない	33	○	實	實	小形				倒置				
9	○柄				實	實	N-47-北47	北47	直掘木	土台の目張り	34	○	實	軸	人型	N-47-北47	北47	直掘木	3個の妻を持つ など				
10	○				實	實	N-47-北47	北47	直掘木	大きく削平、 直壁式石版!	35	○	實	軸	人型	N-47-北47	北47	直掘木	基盤は傾斜性 い。				
11	○				軸	軸	大型	N-47-北47	北47	直掘木	上壁の一部のみ	36	○	軸	軸	人型	N-47-北47	北47	直掘木	上壁は小型			
12	○				軸	軸	大型	N-47-北47	北47	直掘木	一端だけが残 る	37	○	實	軸	人型	N-47-北47	北47	直掘木	ほぼ同じ大き さ			
13	○				軸	軸	小形	N-47-北47	北47	直掘木	K14を傷む	38	○	實	軸	大型	N-47-北47	北47	直掘木	上壁が少々小 さ			
14		○			軸	軸	大型	N-47-北47	北47	直掘木	K12, 13に切 られたる	39	○	實	實	小型	N-47-北47	北47	直掘木	ほぼ水平に埋 置			
15	○				軸	軸	大型	N-47-北47	北47	直掘木	半折か?	40	○	實	實	小形	N-47-北47	北47	直掘木	上壁に縫合し てある			
16	○				軸	軸	大型	N-47-北47	北47	直掘木	K15とK17を 切る	41	○	軸	軸	人型	N-47-北47	北47	直掘木	草色油付			
17		○			軸	軸	大型	N-47-北47	北47	直掘木	K16より切ら れる	42	○	實	軸	大型	N-47-北47	北47	直掘木	草葉の方に 片寄して垂直			
18	○				軸	軸	大型	N-47-北47	北47	直掘木	直壁式半球 を打ち欠き	43	○	實	實	大型	N-47-北47	北47	直掘木	上壁の卜字形 を打ち欠く			
19	○				軸	軸	大型	N-47-北47	北47	直掘木	上挖開し半球 を打ち欠き	44	○	實	軸	人型	N-47-北47	北47	直掘木	下壁は一段高 く盛りする			
20	-						N-47-北47	-		- 破片のみ	45	○	實	軸	人型	N-47-北47	北47	直掘木	繩形鉢形I、 II、III				
21	○				軸	軸	大型	N-47-北47	北47	直掘木	穴あきか?	46	○	實	軸	大型	N-47-北47	北47	直掘木	大きさ相手			
22	○				軸	軸	小型	N-47-北47	北47	直掘木	ほとんど削平	47	○	實	實	大型	N-47-北47	北47	直掘木	下壁側面に穿 孔			
23	-				-	-	N-47-北47	-		- 破片のみ	48	-	實	實	-	N-47-北47	-	-	形状不明				
24		○			○	●	實	實	中型	N-47-北47	北47	直掘木	縄縛りと深い 溝をもつて直壁 式を覆置している	49	○柄	實	實	軸	大型	N-47-北47	北47	直掘木	大きさ相手
25	○				實	實	大型	N-47-北47	北47	直掘木	轟桶は2段差 り	50	○柄	實	實	大型	N-47-北47	北47	直掘木	上壁は削平			

丸括弧内数字は今回報告の要数

番号	品種	空式		組み合せ式		葉形	葉色	葉位置	葉裏	葉期	参考
		葉	柄	葉	柄						
51	○粘	葉	葉	葉	葉	大型	洋銀	洋銀	洋銀	初期	細胞網目、葉、茎下部、根毛
52	○	葉	葉	葉	葉	大型	洋銀	洋銀	洋銀	初期	細胞網目、葉、茎下部、根毛
53	○粘	葉	葉	葉	葉	大型	洋銀	洋銀	洋銀	初期	細胞網目、葉、茎下部、根毛
54	○	葉	葉	葉	葉	大型	洋銀	洋銀	洋銀	初期	細胞網目、葉、茎下部、根毛
55	-	葉	葉	葉	葉	大型	洋銀	洋銀	洋銀	初期	細胞網目、葉、茎下部、根毛
56	○	葉	葉	葉	葉	大型	洋銀	洋銀	洋銀	初期	細胞網目、葉、茎下部、根毛
57	○	葉	葉	葉	葉	大型	洋銀	洋銀	洋銀	初期	細胞網目、葉、茎下部、根毛
58	-	葉	葉	葉	葉	大型	洋銀	洋銀	洋銀	初期	細胞網目、葉、茎下部、根毛
59	○	葉	葉	葉	葉	大型	洋銀	洋銀	洋銀	初期	細胞網目、葉、茎下部、根毛
60	○粘	葉	葉	葉	葉	大型	洋銀	洋銀	洋銀	初期	細胞網目、葉、茎下部、根毛
61	○	葉	葉	葉	葉	大型	洋銀	洋銀	洋銀	初期	細胞網目、葉、茎下部、根毛
62	-	○粘	葉	葉	葉	大型	洋銀	洋銀	洋銀	初期	細胞網目、葉、茎下部、根毛
63	○	葉	葉	葉	葉	大型	洋銀	洋銀	洋銀	初期	細胞網目、葉、茎下部、根毛
64	○	葉	葉	葉	葉	大型	洋銀	洋銀	洋銀	初期	細胞網目、葉、茎下部、根毛
65	-	○	葉	葉	葉	大型	洋銀	洋銀	洋銀	初期	細胞網目、葉、茎下部、根毛
66	-	-	-	葉	葉	-	-	-	-	-	小破片
67	○粘	葉	葉	葉	葉	大型	洋銀	洋銀	洋銀	初期	細胞網目、葉、茎下部、根毛
68	○	葉	葉	葉	葉	大型	洋銀	洋銀	洋銀	初期	細胞網目、葉、茎下部、根毛
69	○	葉	葉	葉	葉	大型	洋銀	洋銀	洋銀	初期	細胞網目、葉、茎下部、根毛
70	○	葉	葉	葉	葉	大型	洋銀	洋銀	洋銀	初期	細胞網目、葉、茎下部、根毛
71	○	葉	葉	葉	葉	大型	洋銀	洋銀	洋銀	初期	細胞網目、葉、茎下部、根毛
72	○	葉	葉	葉	葉	大型	洋銀	洋銀	洋銀	初期	細胞網目、葉、茎下部、根毛
73	-	○	葉	葉	葉	大型	洋銀	洋銀	洋銀	初期	細胞網目、葉、茎下部、根毛
74	○粘	葉	葉	葉	葉	大型	洋銀	洋銀	洋銀	初期	細胞網目、葉、茎下部、根毛
75	-	-	-	葉	葉	-	-	-	-	-	形態不明
76	?	-	-	葉	葉	大型	洋銀	洋銀	洋銀	初期	細胞網目、葉、茎下部、根毛
77	○粘	葉	葉	葉	葉	大型	洋銀	洋銀	洋銀	初期	完全に残る
78	○?	葉	葉	葉	葉	大型	洋銀	洋銀	洋銀	初期	上葉は口縁部を打ち欠く
79	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	葉片のみ
80	-	○	葉	葉	葉	大型	洋銀	洋銀	洋銀	初期	上葉は口縫部を打ち欠く
81	-	○	葉	葉	葉	大型	洋銀	洋銀	洋銀	初期	細胞網目、葉、茎下部、根毛
82	○?	葉	葉	葉	葉	大型	洋銀	洋銀	洋銀	初期	葉片の可動性
83	○	葉	葉	葉	葉	大型	洋銀	洋銀	洋銀	初期	上葉は口縫部を打ち欠く
84	○?	葉	葉	葉	葉	大型	洋銀	洋銀	洋銀	初期	上葉は口縫部を打ち欠か?
85	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	葉部のみ残る
86	?	葉?	葉?	葉?	葉?	X-銀	青銀	青銀	青銀	初期	葉部のみが残る
87	-	-	-	-	-	X-銀	青銀	青銀	青銀	初期	葉部のみ残る
88	-	-	-	-	-	X-銀	青銀	青銀	青銀	初期	形態不明
89	○	葉	葉	葉	葉	大型	洋銀	洋銀	洋銀	初期	上、下葉は口縫部を打ち欠く
90	○粘	葉	葉	葉	葉	大型	洋銀	洋銀	洋銀	初期	上、下葉は口縫部を打ち欠く
91	○	葉	葉	葉	葉	大型	洋銀	洋銀	洋銀	初期	上葉は口縫部を打ち欠く
92	○	葉	葉	葉	葉	大型	洋銀	洋銀	洋銀	初期	下葉のみ残る
93	-	○	葉	葉	葉	小型	洋銀	洋銀	洋銀	初期	下葉は月牙型
94	○粘	葉	葉	葉	葉	大型	洋銀	洋銀	洋銀	初期	下葉は月牙型
95	-	○	葉	葉	葉	大型	洋銀	洋銀	洋銀	初期	上葉がやや小さくなる
96	○?	?	葉	葉	葉	大型	洋銀	洋銀	洋銀	初期	上葉は大きく縮む
97	○粘	葉	葉	葉	葉	大型	洋銀	洋銀	洋銀	初期	下葉は口縫部を打ち欠く
98	○	葉	葉	葉	葉	大型	洋銀	洋銀	洋銀	初期	上葉は水没する
99	○	葉	葉	葉	葉	小型	洋銀	洋銀	洋銀	初期	下葉は口縫部を打ち欠く
100	○	葉	葉	葉	葉	大型	洋銀	洋銀	洋銀	初期	大きな事象
101	○	葉	葉	葉	葉	大型	洋銀	洋銀	洋銀	初期	K107を打ち欠く
102	○	葉	葉	葉	葉	大型	洋銀	洋銀	洋銀	初期	K107を打ち欠く

番号	半径	渠式		組み合わせ		規則	底面 方位	底面 角度	時期	備考
		渠	渠	渠	渠					
103	○?			渠	小型	半径R=10m	直角	垂直	嘉慶の頃は半 年に一度貯水する	
104	○?			渠	小型	半径R=10m	直角	垂直	小半径渠(10m) に切られる	
105	○		渠	渠	大型	半径R=10m	直角	垂直	10mは水深に相 當	
106	○		渠	渠	大型	半径R=10m	直角	垂直	下渠がわざか に大きい	
107	○		渠	渠	小型	S-4-E	直角	垂直	上渠は口端部 を打ち欠く	
108	○?		渠?	渠?	小型	S-4-E	直角	垂直	横幅が?	
109	○		渠	渠	小型	S-4-E	直角	垂直	水引に削りさ れる	
110	○?		渠	渠	小型	S-4-E	直角	垂直	渠幅の大きさ から采掘とし た	
111	○?		渠	渠	小型	S-4-E	直角	垂直	渠幅の大きさ から横幅と利 用	
112	○		渠?	渠	小型	S-4-E	直角	垂直	上渠は開削大 きい	
113	○		渠	渠	大型	S-4-E	直角	垂直	K114から切ら れる	
114	○		渠	渠	小型	S-4-E	直角	垂直	渠幅の大きさ から単純とし た	
115	○		渠	渠	大型	S-4-E	直角	垂直	K125、K117 に切られる	
116	○		渠	渠	小型	S-4-E	直角	垂直	わずかに傾く	
117	○		渠	渠	小型	S-4-E	直角	垂直	K125の上部 に横幅	
118	○		渠	渠	小型	S-4-E	直角	垂直	K115に切られ る	
119	○		渠	渠	大型	S-4-E	直角	垂直	K115、K126に 切られる	
120	○		渠	渠	小型	S-4-E	直角	垂直	大きく傾斜	
121	○		渠	渠	小型	S-4-E	直角	垂直	渠幅の大きさ から単純とし た	
122	○		渠	渠	小型	S-4-E	直角	垂直	わずかに傾く	
123	○		渠	渠	大型	S-4-E	直角	垂直	長方形の渠 幅	
124		○	渠	渠	大型	S-4-E	直角	垂直	上渠の下半分 にく	
125	○		渠	渠	大型	S-4-E	直角	垂直	K115に切る K117より切ら れる	
126	○		渠	渠	小型	S-4-E	直角	垂直	3個の渠幅 をつなぐ	
127	○		渠	渠	大型	S-4-E	直角	垂直	渠幅は横幅と 相当渠幅の 構造は二つ	
128	○		渠	渠	小型	S-4-E	直角	垂直	上渠だけが残 る	
129	○		渠	渠	中型	S-4-E	直角	垂直	渠幅は下渠 に入り込む	

番号	季節	種類		種類		位置 方位	位置 角度	時期	備考
		陸上	下枝	樹皮	葉片				
155		○	實	實	大型	N-DF-E	樹皮	中期	K165を認る
156	○			實	小型	N-DF-E	-	中期後	小範片となる
157	○		葉	葉	大型	N-DF-E	樹皮	中期後	上枝剥が開く
158	○		葉	葉	小型	N-DF-E	樹皮	中期後	葉は水平に張る
159	○		葉	葉	小型	N-DF-E	樹皮	中期後	丁枝の葉は緊密 節を打ち欠く
160	○		葉	葉	大型	N-DF-E	樹皮	中期後	3個の傷つ ない
161	?		葉	葉	小型	N-DF-E	樹皮	中期後	上枝は葉が落 り去っている
162	○		葉	葉	大型	N-DF-E	樹皮	中期後	上、下枝は日 向側で大きさ
163	○		葉?	葉?	小型	N-DF-E	樹皮	中期後	上枝は伸張り
164	○		葉	葉	小型	N-DF-E	樹皮	中期後	わざわざに傾斜
165	欠								
166	○H		葉	葉	大型	N-DF-E	樹皮	中期後	上枝は大半が 削平
167	○		葉	葉	小型	N-DF-E	樹皮	中期後	上下とも月量 少
168	○		葉	葉	中型	N-DF-E	樹皮	中期後	下枝の駆逐部 が丸
169		○	葉	葉	大型	N-DF-E	樹皮	中期後	下枝の下部 が欠損
170	○		葉	葉	大型	N-DF-E	樹皮	中期後	深い基部が残 る
171	○		葉	葉	大型	N-DF-E	樹皮	中期後	上枝はごく少 なく、下枝 新芽に早め
172	?		葉	葉	中型	N-DF-E	樹皮	中期後	横性の可能性
173	○		葉	葉	大型	N-DF-E	樹皮	中期後	木基少?
174	○		葉	葉	小型	N-DF-E	樹皮	中期後	上枝は削平
175	○		葉	葉	中型	N-DF-E	樹皮	中期後	上枝は頭部を 打ち欠く
176	○		葉	葉	小型	N-DF-E	樹皮	中期後	上枝は削平
177	?		葉	葉	中型	N-DF-E	樹皮	中期後	下枝は口輪部 を打ち欠く
178	○		葉	葉	大型	N-DF-E	樹皮	中期後	K127より切 られる
179	○		葉	葉	大型	N-DF-E	樹皮	中期後	上、下枝とも 削れあり
180	○		葉	葉	小型	N-DF-E	樹皮	中期後	上枝と中期後 葉のみに剥み 目

番号: 単位	季節	種類		種類		位置 方位	位置 角度	時期	備考
		陸上	下枝	樹皮	葉片				
181	○			葉	葉	大型	N-DF-E	樹皮	中期後 葉は小さい
182	○枝			葉	葉	大型	N-DF-E	樹皮	上葉の駆逐部を 火く
183	○			葉	葉	大型	N-DF-E	樹皮	中期後
184	○		葉	葉	小型	N-DF-E	樹皮	中期後	葉面を下枝とし た
185	○			葉	葉	大型	N-DF-E	樹皮	本苔?
186	○		葉	葉	小型	N-DF-E	樹皮	中期後	上枝は木盛り
187	○		葉	葉	大型	N-DF-E	樹皮	中期後	上葉は口輪部 を打ち欠く
188	○					大型	N-DF-E	樹皮	葉面の中央に 斑紋。大きさで ある?
189	○		葉	葉	中型	N-DF-E	樹皮	中期後	葉面の大さき から草盛りとし た
190	○		葉	葉	大型	N-DF-E	樹皮	中期後	下枝の下部 を打ち欠く入 れ
191	○		葉	葉	大型	N-DF-E	樹皮	中期後	トゲを削平
192	○			葉	葉	大型	N-DF-E	樹皮	木基か
193	○		葉	葉	小型	N-DF-E	樹皮	中期後	枝は水平に現 る
194	○		葉	葉	小型	N-DF-E	樹皮	中期後	葉面打ら欠 け
195	○			葉	葉	小型	N-DF-E	樹皮	葉柄に羽の様 な構造がある
196		○	葉	葉	小型	N-DF-E	樹皮	中期後	下枝は駆逐部を 打ち欠く
197	?		葉	葉	小型	N-DF-E	樹皮	中期後	葉柄が
198	○		葉	葉	小型	N-DF-E	樹皮	中期後	葉柄は2段階 なり
199	○		葉	葉	小型	N-DF-E	樹皮	中期後	大きさがち れる
200	○			葉	葉	大型	N-DF-E	樹皮	葉面に凹凸な い
201	○枝			葉	葉	大型	N-DF-E	樹皮	上枝に赤色斑 跡?
202	○			葉	葉	大型	N-DF-E	樹皮	D1を認る
203	○		葉	葉	大型	N-DF-E	樹皮	中期後	上枝口被影下 葉のみに剥み 目

K37号壺棺墓

K37号壺棺墓は、A群の北東端北側に位置し、K36号壺棺墓とはほぼ並んでいる。長楕円形の墓壙に、同じような大きさの甕を、ほぼ水平に埋置している。墓壙の壁は斜めに掘り込まれ、北東側は一部二段掘りとなっている。下棺の区別が困難であるが、墓壙のレベルを比べると、図の左棺がわずかに深いこと、底部側に余裕が少ないとなどから、最初に埋置された可能性が強く、下棺とした。いま口縁部が離れて開いているが、元は接口式だったのであろう。

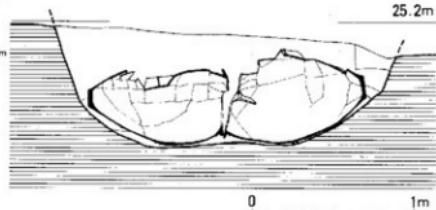
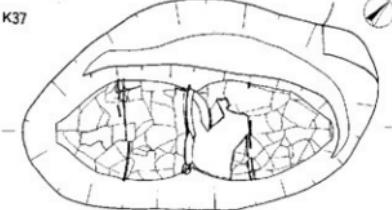
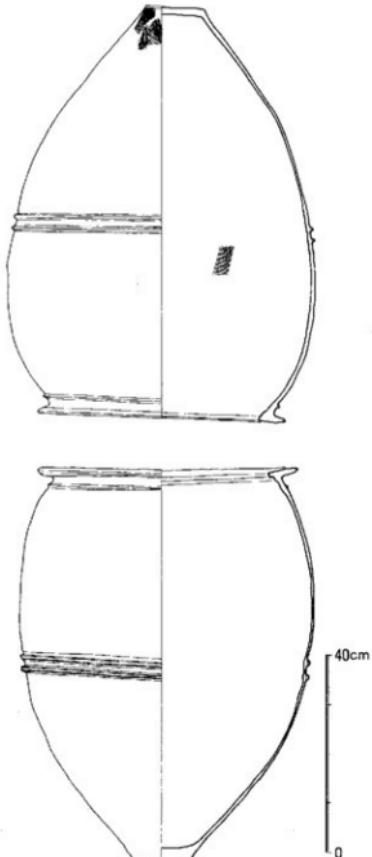


Fig.69 K37号壺棺墓出土状況図 (1/30)

上 棺 口縁部がよく締まって、胴部最大径の位置が上方にある倒卵形をしている。口径38.0cm、器高85.6cm、底径12.6cm。口縁部下の突帯は断面三角形、胴部中位の突帯部は断面台形である。色調は赤褐色である。

下 棺 上棺とよく似た形状をしているが、わずかに大きく、調整など微妙な違いがある。口径53.7cm、器高78.5cm、底径12.4cm。口縁部の締まりが弱いので胴部の最大径の位置がやや下方にあり、きれいな倒卵形ではない。く字形の口縁部の上面は、水平ではなく強く内傾し、内端部は断面方形である。口縁直下に巡る1条の突帯は、背の低い三角形断面である。胴部中位の突帯の断面は台形で、貼りつけの際に強く横ナデされて、上向きになり、かつ口唇状になっている。底部は、厚さ2.5cmを超える分厚い作りで、外面中央は、上げ底ではないが、わずかに凹んでいる。胎土に1~2mmの大粒、長石粒を多く含み、色調は、外面上部が淡い赤褐色で、下部に移行するに従って黄白色に変化している。内面は淡い黄白色を呈する。外面の口縁部と体部中央の突帯部の2か所にやや大きめの黒斑が認められる。器面の調整はナデであるが、突帯の剥離部を観察すると、縫ハケの後に突帯を貼りつけ、その上下をナデ消している。

◀Fig.70 K37号壺棺実測図 (1/10)



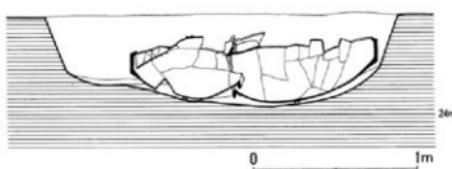
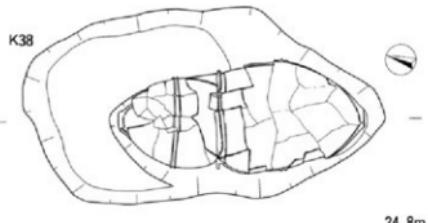


Fig.71 K38号甕棺墓出土状況図 (1/30)

上 棺 口径76.6cm、器高67.2cm、底径11.3cmあり、整った倒卵形をした中型の甕である。底部の割れ方から、作り方をよく観察する事が出来る。

下 棺 口径53.1cm、器高87.8cm、底径12.6cmなので、K37号甕棺下棺よりも約10cm高いが、口径はほぼ。上棺が整った形状をしているのに対し、中心等しく、スマートな形状ではあるが、中心軸が傾き左右対象となっていない。く字形に内傾する口縁部は、外端は肥厚し、内端は丸く尖っている。突帯は口縁部直下に1条、胴部中位に2条巡らしているが、どちらも大きく、貼りつけ後の横ナデも確かである。胎土に石英、長石粒を含んでいるが、大きさ、量ともに通常と変わりがない。色調は、内、外面とも黄褐色を帯びた茶色である。器面の凹凸からすると、粘土帶は9~10段だったと思われる。

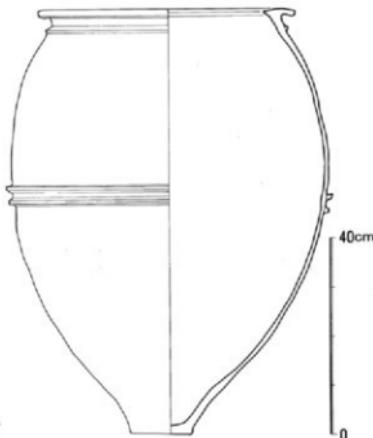
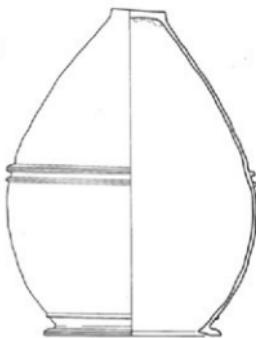


Fig.72 上棺の底部

Fig.73 K38号甕棺実測図 (1/10)▶

K38号甕棺墓

K37号甕棺墓の東約2mにあるが、近くの甕棺墓の多くが北東方向をとるのに対し、埋置方位が異なる。墓壙は、北側上棺部が隅丸方形で、下棺部が尖り気味の橢円形となっている。倒卵形の大小の甕を用いており、その順序は下棺となる大きめの甕を墓壙の南端に寄せて水平に置き、小さめの上棺を差し込んでいる。上棺の小さな分、北側の墓壙に空間ができたようである。



K41号壺棺墓

K38号壺棺墓の北東約2mに接するように位置し、すぐ横に中期中頃のK40号壺棺墓が同じ方向で並んでいる。墓壙は200cm×90cmの長椭円形で、壺棺の形状に合わせて掘り込んだのか、隙間が少ない。底面も同じように水平でなく中央を窪めている。下棺は大型壺、上棺は鉢を用い、ほぼ水平に埋置しているが、底面より12cm上に浮いている。埋置する段階で、底面に土を埋め戻し、安定を図ったのであろう。両棺の合わせ部に、粘土による目張りはない。墓壙の南西側の一部は、後世のピットで切られている。

Fig.74 K41号壺棺墓出土状況図 (1/30) ▶

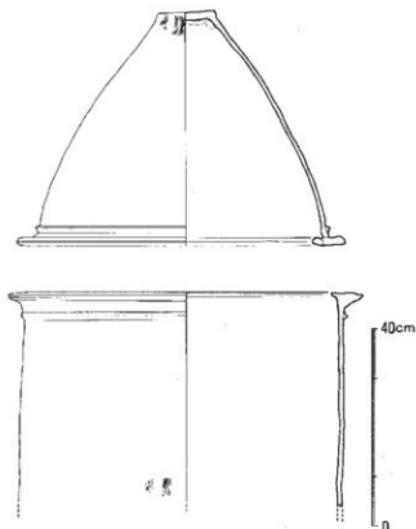
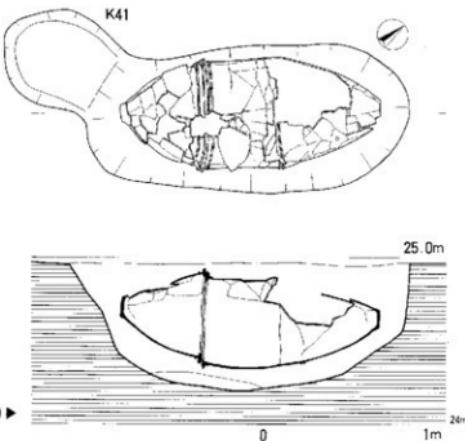


Fig.75 K41号壺棺実測図 (1/10)

上棺 平底から大きく開き、T字形の分厚い口縁部がつく鉢。口径77.7cm、器高48.5cm、底径12.2cmを測る。底部は整正ではなく、わずかに椭円となっている。口縁部直下の断面三角形突帯は、強く横ナデされて、やや下方に重れている。口縁端部も横ナデで口唇状になっている。胎土に1~2mm大の砂粒を含み、焼成はよい。色調は、内外面とも橙色を帯びた灰色を呈する。黒斑が底部外周と肩部下半にかけて見られる。器面の調整は外面はヘラナデで、底部近くにはハケ目が施されている。いま口縁部の一部を欠いているが完形品に近く、重量は14kgである。

下棺 口径72.9cm、砲弾形をした大型の壺であるが、胴下半部が割れて細かな破片となっているために、どうしても接合、復元できなかった。T字形の口縁部は、分厚いが内側への張り出しは弱い。上面は横ナデで微妙な凹凸があり、外端部は小さく上方に突出している。胎土の砂粒は多めで、焼成はよい。下棺は茶褐色であるが、上棺の色調と極端に異なり、この壺棺墓の特徴ともいえる。接合出来なかつた胴下半部は、焼成が悪いせいか。内面を黒塗りした可能性がある。

K42

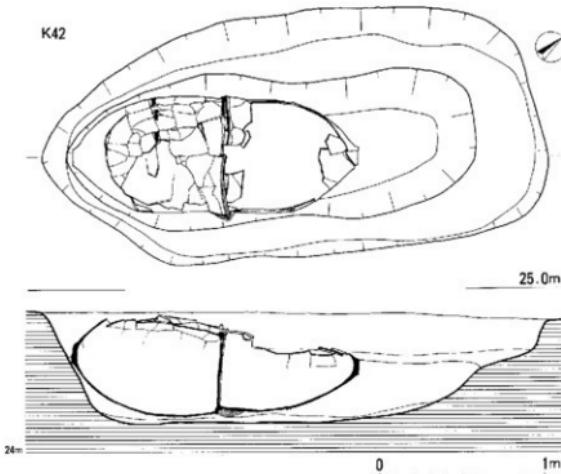


Fig.76 K42号壺棺墓出土状況図 (1/30)

K42号壺棺墓

A群の北東端部にあり、D1号土壙基と並んでいる。墓壙の平面形は長楕円形で、北東部は隅丸方形に近い。墓壙は二段掘りされ、この墓壙の南東間に片寄せて、やや大きさの異なる甕を合

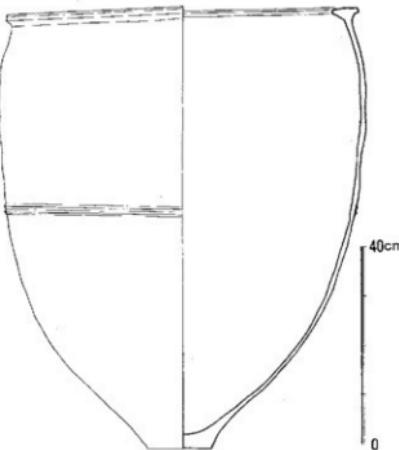
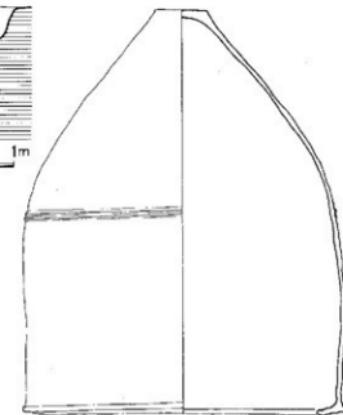


Fig.77 K42号壺棺実測図 (1/10)▶

わせ口にして埋置する。二つの甕の長さが174.7cmなのに対し、墓壙長軸は312cmもあり、その比は1:1.78である。下棺を水平に据えるときに、甕の底部を墓壙底面に横たえるだけでなく、下棺の底部を墓壙の壁に接して水平と安定を確保しようとしている。

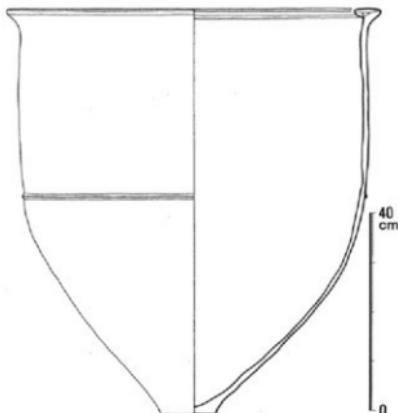
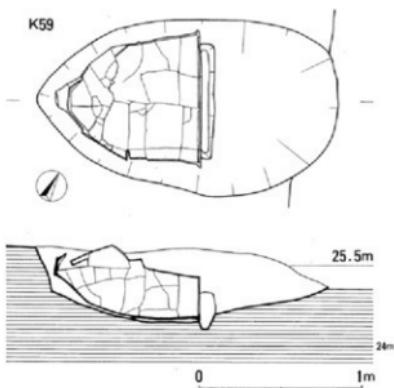
上 棺 下棺に比べてやや小さい甕で、口径66.2cm、底径10.8cm、器高83.5cm。胴部の形状は砲弾形であるが、中位からまっすぐにのびた上半部は口縁部近くでわずかに内側している。口縁部は、内側へ長く突き出している。胴部中位に巡る2条の突帯は、背は低く、横ナデも弱い。黒斑が外側に2か所、内側に1か所ある。器壁の凹凸から10段の粘土帯を積み重ねている。内外面とも明るい黄褐色。

下 棺 口径71.9cm、底径19.3cm、器高91.2cm。上棺の形状とよく似ているが、細かく見ると微妙に異なる。胴下半部は膨らみがあり、胴上半部も外に湾曲しながらのびているので全体に丸みのある形状となっている。口縁部は、内、外端に張り出し、断面方形のおさめている。三角突帶を胴部中位に2条巡らしており、上棺よりも明瞭な棱を持っている。外面の2か所に大きめの黒斑。色調は、黄褐色で外面はやや赤色を帯びる。粘土帯は10段を観察できる。

K59号甕棺墓

磨製石剣を出したK60号甕棺墓とK81号甕棺墓に挟まれた場所にある。墓壇北東側は後世の溝で切られて、立ち上がりは不明だが、186cm×109cmの楕円形墓壇か。大型甕1個を南西側に寄せて水平に埋置している。口縁部に接して、深さ8cmの溝が長さ70cm掘られていることから、おそらく木製の蓋が被さっていたのであろう。K60号甕棺墓とK81号甕棺墓が金海式であるに対し、K59号甕棺墓は、後続する特徴を持った甕で、大石地区ではこの時期まで、遺物を出す甕棺墓がある。

Fig.78 K59号甕棺墓出土状況図 (1/30) ▶



单 棺 口径77.0cm、底径11.5cm、器高83.8cm。全体に磨耗しているので調整痕の残りは悪いが、全体に丁寧な作りとなっている。胴部中位から直にのびて砲弾形の形状となるが、口縁部下でいったん内傾した後、小さく外湾して肥厚した口縁部へと続く。口縁部の断面から、粘土接合のようすを観察する事が出来る。外反した胴部端部の内側に断面三角形の粘土を貼りつけ、さらに上面に厚さ7mm前後の板状粘土帯を乗せて、幅5.5cmの口縁部を作っている。外端部は横ナデで丸みがあるが、内端部は鈍い稜があり、断面方形に近い。胴中位の突帯は、背の低い三角形である。内外面とも明るい赤褐色。胴部は9段の粘土帯を積み上げている。

◀Fig.79 K59号甕棺実測図 (1/10)



Fig.80 大石地区的発掘作業 (正面が飯盛山)

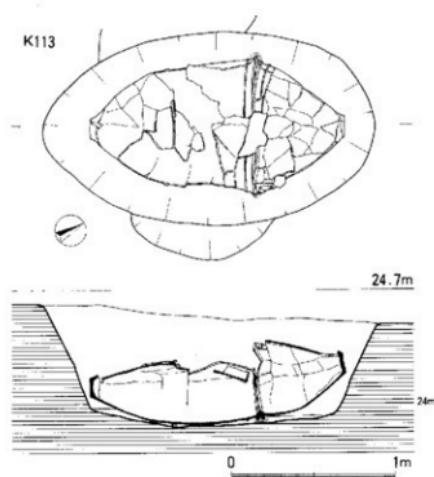


Fig. 81 K113号墓出土状況図 (1/30)

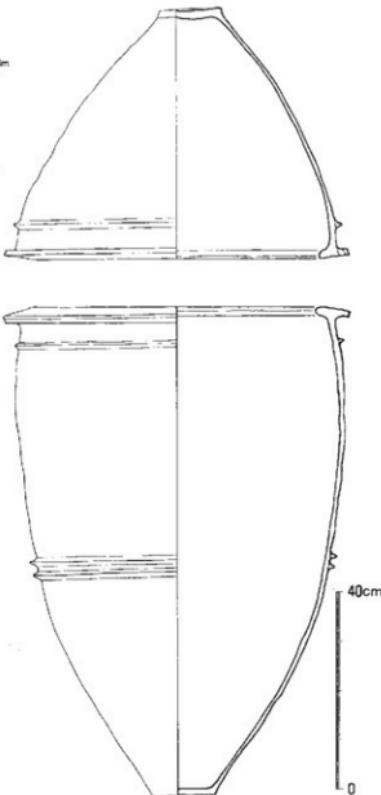
上 棺 口径71.0cm、底径12.7cm、器高52.0cm。八字形に聞く鉢であるが、底部から直線的ではなく緩やかに湾曲しながらびている。底部は、わずかに上げ底状に盛み、外面に星型の黒斑がある。口縁部は、内、外方に強く張り出してT字形となる。横ナデ調整で内端部は丸みがあるが、外端部は断面方形で口脣状となる。胎土に石英、長石砂粒を多めに含んでいる。焼成はよく、明るい茶褐色をしている。器面の調整は、底部内面がナデ、胴部は横ナデ。底部、口縁部を除くと8段の粘土帯の積み上げと思われる。口縁部直下には、背の高い三角形突帯部を1条巡らしている。

下 棺 口径71.1cm、底径12.5cm、器高105.8cm。背の高い砲弾形の大型甕で、胴部上部でわずかに締まっている。口縁部はT字形で、上面はわずかに外に傾いている。断面三角形の突帯を、口縁部下に1条、胴部中位よりやや下方に2条巡らしているが、どちらも横ナデで上向きになっている。胴部の粘土帯は10段。内外面とも明るい赤褐色を呈する。黒斑が胴上半部に3か所ある。

Fig. 82 K113号墓実測図 (1/10) ▶

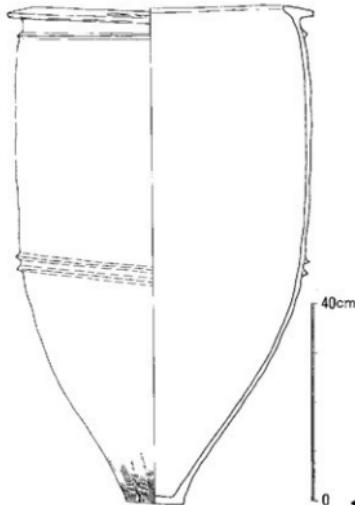
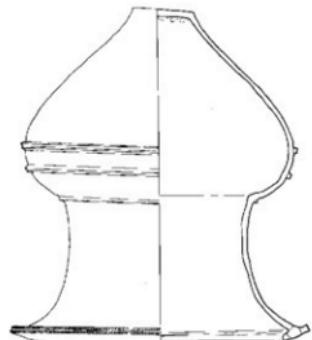
K113号甕棺墓

B群の北西端の小群にあり、K112号甕棺墓とK114号甕棺墓が上部に乗っていることから、埋葬時期はこれらよりも古い。墓壙は両甕棺墓から切られているが、204cm×118cm、深さ65cmの整った長楕円形である。大型甕と鉢を組み合わせて水平に埋置しているが、墓壙はその形に合わせて斜めの壁となっており、余分な空間を残していない。両棺の接口部には灰白色の粘土で目張りをしている。



K115号甕棺墓

K113号甕棺墓の北に接し、上部にK117号甕棺墓とK125号甕棺墓がある。その順序はK115→K125→K117である。二つの甕棺墓に切られているためにはこれらよりも古い。墓壙は向堀塚墓から切られ原形ではないが、205cm×103cmの楕円形である。下棺に大型の甕、上棺に広口壺を組み合わせて水平に埋置している。



K115

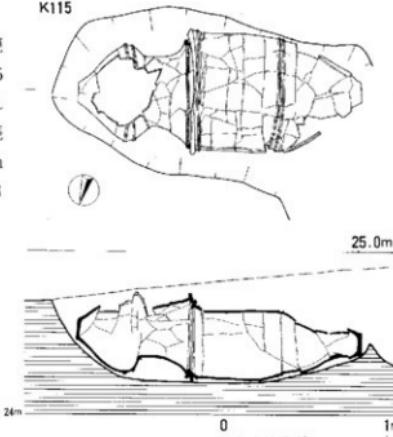
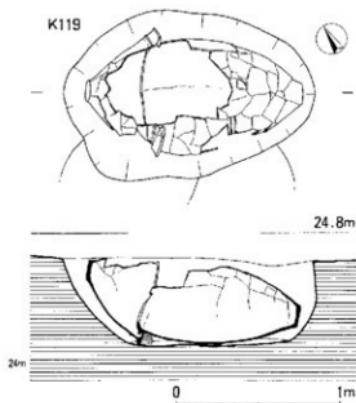


Fig.83 K115号甕棺墓出土状況図 (1/30)

上 棺 口径61.4cm、底径12.7cm、器高69.8cm。平坦な底部から内湾しながらび、逆球根状の胴部となる。その最大径部に2条の交帯を間隔をおいて巡らしている。断面はM字形(口唇状)である。頸部は直にのび、上半部で強く外湾して口縁部につながる。口縁部は、両端の張り出しが強く、上面は外に傾いている。内端部は、横ナデで丸い断面となっているが、外端部はM字形の断面で、縦の刻み目が施されている。胎土は1mmの大砂粒をわずかに含んでいるが、緻密である。器面の調整は、胴部はヘラナデを縦と斜め方向に繰り返している。頸部下半は縦方向のヘラナデ、上半部は横のヘラナデ。色調は、灰色を帯びた茶褐色を呈する。

下 棺 口径62.9cm、底径11.7cm、器高103.0cm。口縁部は整円ではなく長径は66cmあり、岡は短径側を実測している。胴上半部と下半部のバランスが悪く、あるいは上半部の粘土積み上げが、相当時間を経過してからなされた結果であろうか。底部近くに縦のハケ目が残っている。胴下半部に大きめの黒斑があり、その上部に小さな黒斑が2か所についている。焼成時に丸太棒などで支えた痕跡か。黄色を帯びた茶褐色を呈する。

◀Fig.84 K115号甕棺実測図 (1/10)



K119号墓

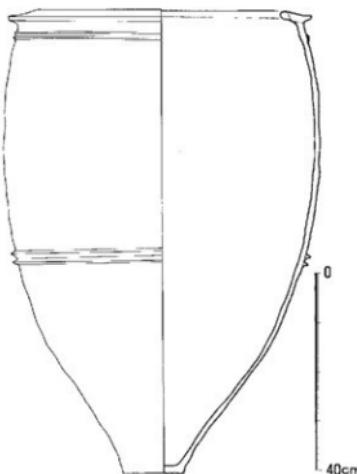
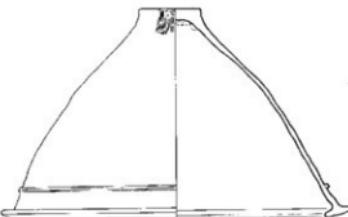
K115号墓の西にあり、K118号墓とK120号墓が上部に乗っている。埋置方位はN-61-W。墓横は154cm×102cmの楕円形で、深さは54cmを測る。上棺側がやや幅広く、下棺底部側は上部が削平されているので明瞭ではないが、壁を斜壊ぎみに掘り込んでいる。下棺は大型甕であるが、上棺に口径の大きい鉢を用いたために、下棺をわずかに斜めに起こして被せていている。その分隙間が出来ているが、灰白色の粘土を詰めて目張りとしている。ただ粘土は下部のみで一周していない。

◀Fig.85 K119号墓出土状況図 (1/30)

上棺 全体の半分を欠いているが図のよう
に復元した。口径72.0cm、底径12.7cm、器高
43.4cm。大型の鉢で、胴部はハ字形に開いてい
るが、中位でわずかに膨らんでいる。口縁部は、
幅7cmの粘土帯を乗せているので、内、外側に
よくのびた大きめのT字形となる。上面は横ナ
デで微妙な凹凸があり、外に開いている。口縁
部より約4cm下に1条の突帶を巡らしている。
断面は垂れ気味の台形となる。器面の調整はヘ
ラナデ、底部近くは縦のハケ目。内面に指圧痕
が見られる。胎土に1~1.5mmの大砂粒を含む。
焼成はよく、赤色を帯びた茶褐色を呈する。黒
斑は、胴部外面の中位と底部付近の2か所に付
いている。

下棺 口径62.9cm、底径12.4cm、器高
96.1cm。砲弾形の胴部は、口縁部下と底部付
近で締まっているので、縦に長い丸みのある器
形となっている。T字形の口縁部は、内端部が
肥厚し丸みがあるのに対し、外端部は断面方形
に近い。色調は赤褐色で、K113号墓とよく
似ている。胴部の凹凸から10段の粘土帯の積み
上げであろう。黒斑は胴上半部に大小3個。三
角突帶部は、口縁部下と胴部に各2条を巡らす。
いずれも接近し、胴部の突帶は背が高い。

Fig.86 K119号墓実測図 (1/10) ▶



K125号甕棺墓

B群の北西端部は、大小の甕棺墓が密集し、最も切り合が激しい。K125号甕棺墓は、K115号甕棺墓を切り、K117号甕棺墓が上に乗っている。大型甕と大型鉢を198cm×109cmの長楕円形の墓壙に水平に埋置している。いま両方の口縁部が開いているが、もとは接口式だったのである。ただ粘土の目張りはない。切り合による削平は軽度で、上下棺ともほぼ完全に接合復元できた。上棺の底部下で、磨製片刃石斧が出土している。

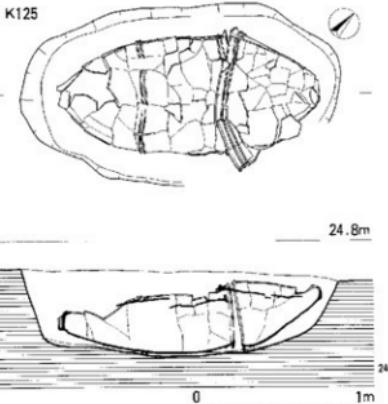
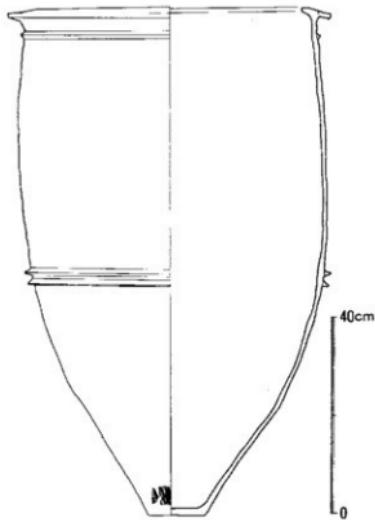
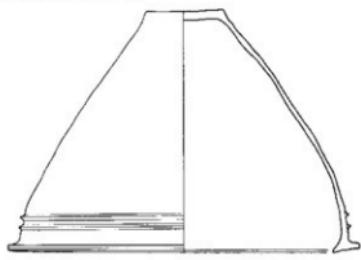


Fig. 87 K125号甕棺墓出土状況図 (1/30)

上 棺 先に埋葬されたK115号甕棺墓は、広口壺と大型甕の組合せであるが、K115号甕棺墓は、大型鉢と大型甕を組み合わせている。鉢の大きさは、口径73.0cm、底径15.9cm、器高50.3cmを測る。胴部はハ字形に開いているが、口縁部近くでわずかに立ち上がり、II縁部につながっている。このため口径の割に器高が高く、深みのある形状となっている。II縁部はT字形で、平坦な上面は外側に傾いている。口縁部下に巡る2条の突帯は、断面三角形で2cmの間隔がある。底部の内外面に黒斑が付いている。色調は、黄色を帯びた灰色を呈する。

下 棺 口径66.4cm、底径12.0cm、器高105.0cmなので、K115号甕棺墓の下棺と同じような大きさであり、また形状もよく類似している。2条の突帯が、砲弾形の胴部の中位よりやや下方に巡っているために、よく整ったスマートな印象を与える。こT字形の口縁部の両端は、断面方形に近い。上面は、上棺の鉢と同じような角度で外に傾いている。色調は内外面とも明るい黄褐色を呈し、黒斑は、外面の底部と胴上半部に付く。内面にも薄いが広い黒斑がある。

◀Fig. 88 K125号甕棺実測図 (1/10)

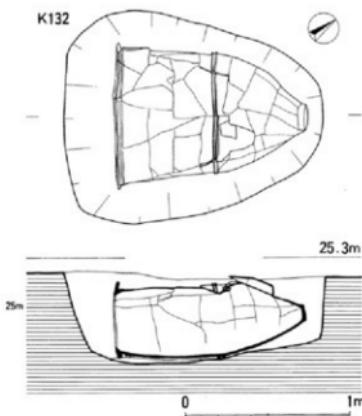


Fig. 89 K132号壺棺墓出土状況図 (1/30)

K132号壺棺墓

A群とB群が接する場所にあり、大型甕の單棺である。方位は南西側を頭位とするN-37°Eである。墓壙は大型甕に合わせて、口縁部側を幅広くした不整構円形である。墓壙底面には、K59号壺棺墓のような細い溝はないので、木製蓋があったと断定はできない。また墓壙の中央に大型甕を据えているために、遺体を入れ込む余裕はない。遺体を入れたまま壺棺墓を据えたとは思えないでの、埋葬するときに大型甕を斜めにしたのだろう。

單棺 口径76.6cm、底径11.5cm、器高113.0cm。胴部は中位から直にのび、砲弾形の形状をしている。口縁部は、内側への張り出しあなく、L字形をしており、その断面から、粘土の貼りつけ方法を知ることができる。口縁外端部は、粘土貼り合わせ痕が残り、口唇状になっている。口縁部下と胴部中位に突帯が各々2条巡っている。口縁部下の突帯は、上下がくっつきM字形の断面となる。胴部中位の突帯は、断面台形で下向きに垂れている。胎土には、石英、長石砂粒を含むが、量は少ない。焼成はよく、内外面ともわずかに黄色を帯びた灰色を呈する。胴下半部から中位にかけて大きめの黒斑がある他に、口縁部近くには斑点状の黒斑が3か所にある。胴部の粘土帶の積み上げは、凹凸の観察から11段と思われる。

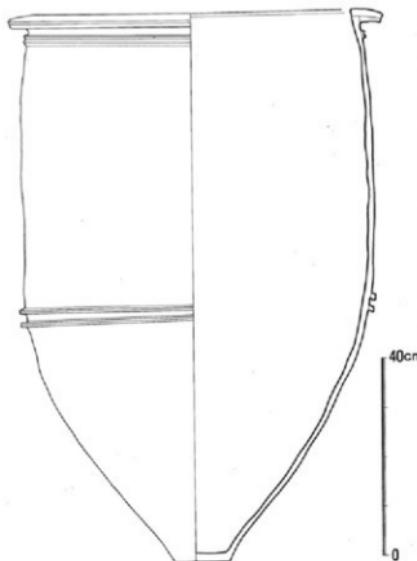


Fig. 90 K132号壺棺実測図 (1/10)



Fig. 91 K132号壺棺出土状況

K134号甕棺墓

B群北西端の一群よりやや南側に離れた場所にある。大型の鉢と甕の複合であるが、墓壙は甕棺の形状に合わせて無駄なく掘り込まれている。長軸は178cm、最も幅のある部分で119cmである。墓壙の底面も、甕棺の微妙な湾曲に見事に合っている。深さは60cmもあることから、甕棺は保護され、完全に復元できた。検出時には、上部が陥没していたが、埋葬後に相当な時間が経過して、内部に土が詰まってから潰れたようで、途中で破片が止まっている。接口式であるが、鉢の口縁部が甕よりも11.4cm小さいので、完全に密着してはいない。

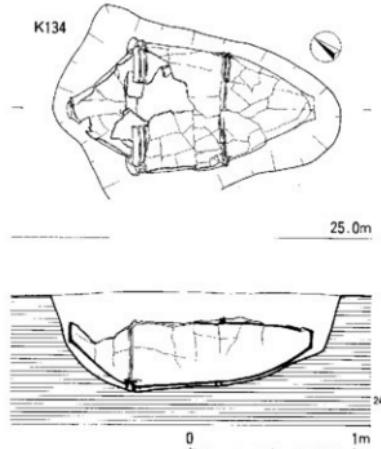
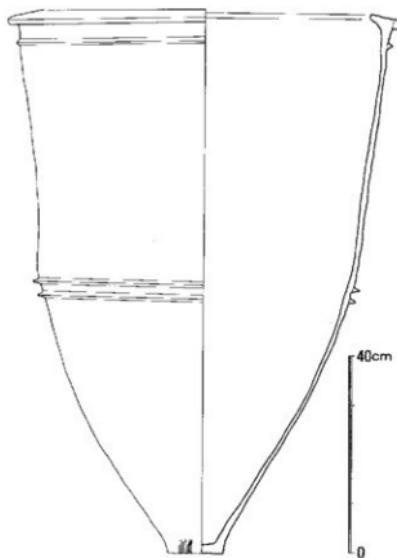


Fig.92 K134号甕棺墓出土状況図 (1/30)



单 棺 今回、大型鉢と甕の組合せた甕棺墓を8基を図化したが、その中では最も直線的に開いたハ字形をした鉢である。口径69.5cm、底径12.6cm、器高39.6cm。口縁部の断面は、上に粘土を乗せるのではなく、内側に断面三角形の粘土紐を、外側には断面長方形の粘土紐を挟むようにしてT字形の口縁部を作る。底部、口縁部を除くと粘土帯の積み上げは4~5段か。焼成はよく、堅い。色調は外面が黄色を帯びた灰茶色、内面は明るい黄褐色である。黒斑は、胴部下半と内面にあり、内面のは灰色と薄い。口縁部の下に突帯がないのも特徴。

下 棺 口径80.9cm、底径11.5cm、器高113.8cm。胴部は泡弾形ではあるが、中位の突起部より上方が内渦気味にのびており、胴部の最大径の位置が口縁部直下にある。T字形の口縁部は、外側に強く傾いている。外面には底部近くに大きめの黒斑がある。粘土帯は12段か。内外面とも黄色を帯びた灰色。

◀Fig.93 K134号甕棺実測図 (1/10)

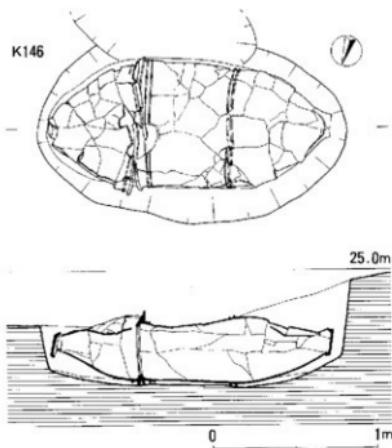


Fig.94 K146号甕棺墓出土状況図 (1/30)

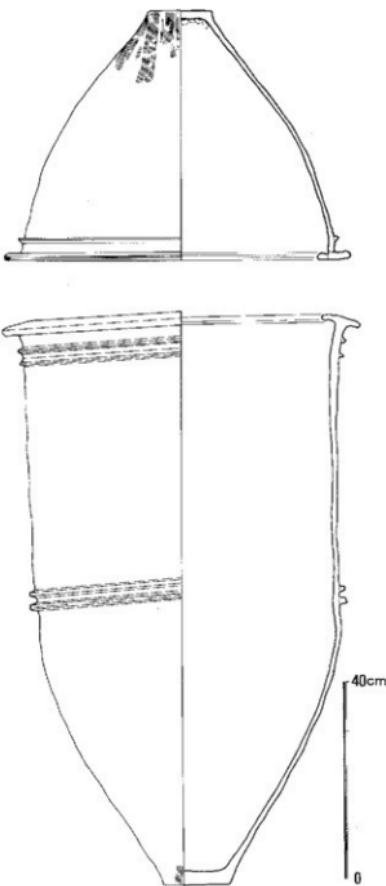
上 棺 大型甕の胴下半分に口縁部をつけたような丸みのある形状をした鉢である。大きさは、口径71.6cm、底径13.3cm、器高51.6cm。平底から内湾気味にのび、口縁部近くでさらに強く起るので、上面が水平なT字形口縁となっている。丁寧に横ナデが加えられて、両端は丸みのある断面となっている。口縁部直下の突帯は1条で、断面方形。やや下方に垂れ気味。胎土には砂粒を多く含み、焼成はよい。色調は内外面ともに橙色を帯びた茶灰色を呈する。器面の調整は、外面はナデ。底部の近くには粗いハケ目が残っている。内面のナデ調整は、外面に比べて雑である。

下 棺 口径71.6cm、底径13.3cm、器高120.1cm。胴部突帯から上方に直に立ち、口縁部近くでわずかに外に開いている。口径に対して異様に背の高い形状である。口縁部も両端が突き出し、8cmという幅広さである。突帯は、口縁部下と胴部中位よりやや下に各2条巡る。どちらも断面台形であるが、胴部の突帯は、大きく堅牢である。胴部の粘土帶は12段か。7~12cmの幅がある。色調は、黄色を帯びた灰色。

Fig.95 K146号甕棺実測図 (1/10) ▶

K146号甕棺墓

南東から北西方向にのびるB群のほぼ中央に位置する。北西約6mにK125号甕棺墓があるが、この周辺はまばらで、ここを境にして南東と北西の甕棺墓では方位もやや異なることから、A群を2分出来るかも知れない。K147号甕棺墓の中型棺を切っている。墓壙は整った楕円形で、両端に隙間が均等になるように大型の鉢と甕を組み合わせている。



K148号甕棺墓

A群とB群が接する位置にあり、金海式のK142号甕棺墓を切っている。墓壙の全形は残っていないが、176cm×125cmの大きさか。壁から底面にかけて丸く掘りこまれているので、壁と底面の明瞭な境はない。上棺に頭部打ち欠きの壺と下棺の甕を接口式にして、墓壙の北東側に片寄せて埋置している。埋置角度は39度。壺の打ち欠き部径と甕の口径がほぼ一致し、ここに粘土で目張りをしている。甕の形状の特徴から金海式より新しい中期前葉の時期であるが、大石地区ではこの時期以降、水平に埋置される甕棺墓が多くなる。水平に埋置すると、長楕円形の墓壙になり、結果的に大きくなるが、埋置角の大きい前期末～中期前葉の甕棺墓も、なぜか墓壙は必要以上に大きいので、墓壙の大小だけで時期を判断することは出来ない。

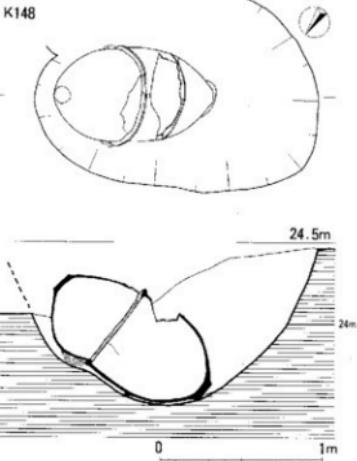


Fig.96 K148号甕棺墓出土状況図 (1/30)

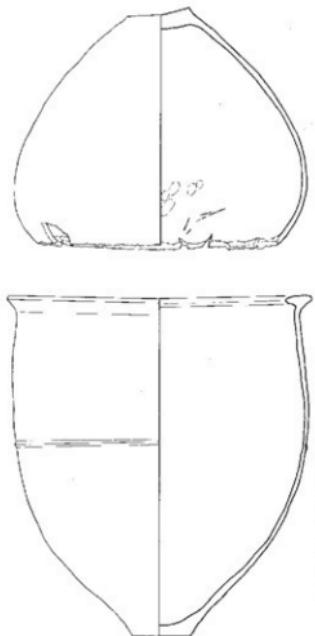


Fig.97 K148号甕棺実測図 (1/10)

上 棺 頭部で打ち欠いているので、全体の形状は不明。いま胴部の最大径は、60.3cm、底径13.6cm、器高50.0cmである。底部は、わずかに上げ底氣味で、3.5cmと分厚く作り、丸みを持ちながら外反し、高さ33cm付近で内湾している。胎土に石英、長石粒を含み、焼成はよい。色調は外面が茶褐色、内面は黄色を帯びた茶褐色を呈する。外面の3か所に斑点状の黒斑がある。外面の調整は、胴部下半が縱と斜めのナデ、一部にハケ目が残っている。中位が横と斜めのナデ、打ち欠き部近くは、丁寧なナデが施されミガキ風の効果が出ている。内面は下半が斜めのナデ、上半は横ナデ。ナデ調整には、板状の工具が用いられたようで、内面にはその傷状の痕跡がある。また中位には指圧痕が見られる。

下 棺 上径62.5cm、底径12.0cm、器高70.6cm。口径の割に背が低く、胴の最大径は中位よりわずかに上にあり、口径と大差がないので、膨らんで丸みのある胴部となっている。口縁部は如意状に外反する内側に逆三角形の粘土を貼り合わせたのか、分厚い作りである。胎土に石英、長石砂粒を多めに含んでいるが、粒子は大きい。粘土帶は9段か。色調は、内外面とも赤色を帯びた茶褐色。

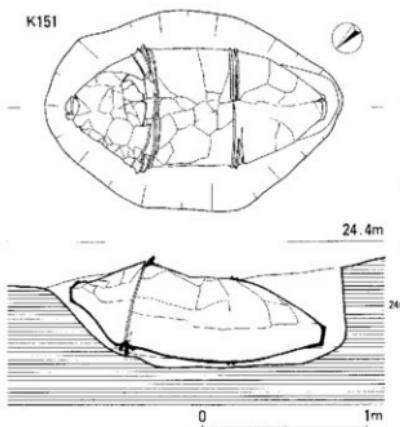


Fig.98 K151号甕棺墓出土状況図 (1/30)

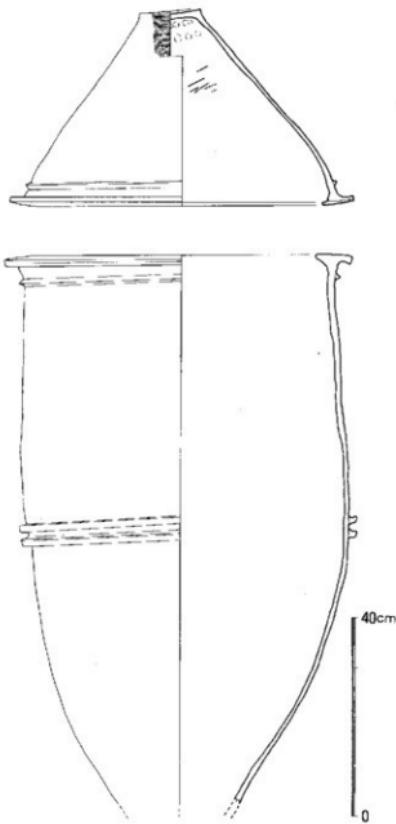
上 棺 径12.3cmの底部は、わずかに凹み上げ底となっている。胸部は、直線的に大きく外に開き、口縁部近くで屈曲したように立ちあがっている。口径71.0cm、T字形の口縁部は外側へ強く張り出し、上面は4.5cmの幅広の平坦面となっている。内、外端部の断面は、方形で鈍い棱がある。器高40.2cm、中心軸は垂直ではない。胎土に砂粒を含んでいるが、多くはない。焼成はよく、色調は内外面とも黄褐色で、底部の一部は赤褐色を呈している。黒斑が底部近くにある。器面の大部分は、ナデ調整。底部近くは縦のハケ目。底部内面に指圧痕があり、その上方にはナデ工具と思われるキズがある。

下 棺 取り上げの際は底部まで揃っていたが、どうしても接合復元出来なかった。口径92.6cm。器高は125cm前後か。細長い砲弾形の胸部は、突帯より上方が内側に傾いてのびている。T字形の口縁部は、外端側がわずかに下方に垂れ気味。口縁部下の突帯部は、断面三角形で1条。胸部中位の突帯は、断面台形で上向き。色調は明るい茶褐色。黒斑は、胸部の3か所に見られる。底部より40cm上に穿孔か？

Fig.99 K151号甕棺実測図 (1/10)▶

K151号甕棺墓

B群の南東端の小群の中にあり、K157号甕棺墓とK152号甕棺墓の間に挟まれて並んでいる。墓壙は182cm×121cmの橢円形で、深さは58cm。上棺は大型の鉢、下棺に大型の甕を使った複棺で、接口式にしてわずかに傾けて埋置している。墓壙の壁は、上棺側が鉢の形状に合わせて斜めに掘られているのに対し、下棺底部側は垂直となっている。合わせ口部には、粘土の目張りは認められない。



K154号甕棺墓

B群の南東端、K151号甕棺墓の東3mに位置し、K153号甕棺墓を切る。墓壇は112cm×85cmと円形に近い。上棺は鉢、下棺に甕を用いた複棺で、小児用であろう。方向は、N-24-W。南南東側を頭位にして、25度の傾斜角で埋置している。いま上部が削平されて両棺の口縁部がずれているが、口径がほぼ等しいことから、埋葬時は接口式だったのだろう。もちろん、両棺の口縁部は、く字形になっているので、密着するのではなく、上棺の鉢を挿入する方法である。

上 棺 口径43.6cm、底径9.0cm、器高30.5cmの鉢。底部は削平されて失われているので、底径、器高は復元推定値である。底部から胴部は湾曲してのび、上端で内側に傾き、く字形の口縁部がつく。胴部器壁の厚さは7mm前後と薄いのに対し、口縁部は12mmと分厚い作りである。頸部直下に巡る突帯部は、断面三角形で頂点はシャープな稜となる。焼成はよく、内外面ともに明るい赤褐色を呈する。胎土には、石英、長石の砂粒がやや多めに含まれている。胴部の調整は、外面が継のハケ目、内面は横ナデ、口縁部近くには指圧痕が間を開けて横に並んでいる。胴部の粘土帯は、7段か。突帯部下の2か所に黒斑がある。

上 棺 口径46.7cm、底径12.0cm、器高66.8cm。倒卵形の胴部に、く字形の口縁部がついた甕。底部は胴部と同じような厚さで、平底ではあるが少し膨らんでいる。口縁部は、強く屈曲し、その外側に断面三角形の突帯を1条貼りついている。色調は外面は明るい赤褐色、内面は黄色を帯びた茶褐色。胎土には、石英、長石砂粒を含む。胴部外面に大きめの黒斑が2か所にある。胴部外面に継のハケ目が部分的に残る。

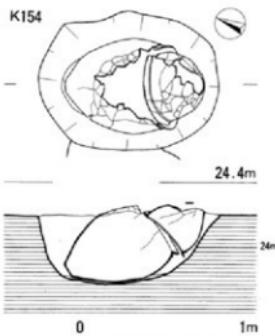


Fig.100 K154号甕棺墓出土状況図 (1/30)

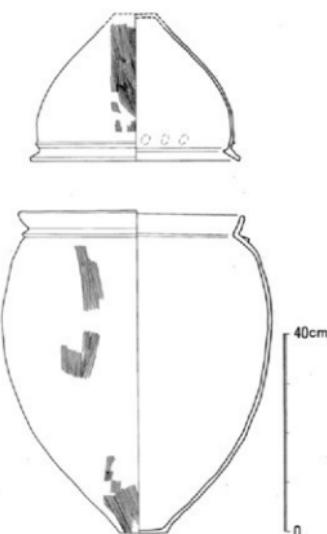


Fig.101 K154号甕棺実測図 (1/10)

◀Fig.102 甕棺墓の実測作業

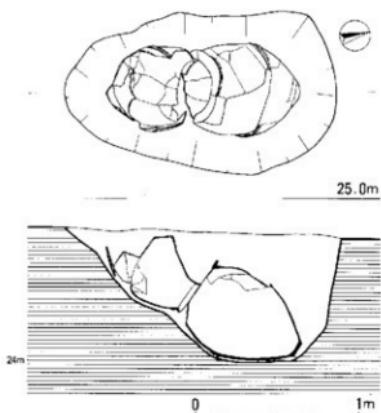


Fig.103 K162号甕棺墓出土状況図 (1/30)

上 棺 口径38.5cm、底径8.0cm、器高62.7cm。底部が残っていないので、底径、器高は推定値である。胴部の最大径の位置は、胴部の中位にあるが、口縁部と底部に向かってよく縮まっているので、全体としては倒卵形の形状となっている。く字形口縁部の屈曲内面は、鋭い稜ではなく、丸みがある。口縁部直下に1条、胴部中位に2条の断面三角形の突帯が巡る。胴部の突帯は、幅広で鈍い。胴上半部の器壁が通常の厚さであるのに対し、下半部は異様に薄い作りである。焼成はよく、色調は外面とも明るい赤褐色で、一部が黄褐色となっている。胴部の両側に真っ黒な黒斑がついている。胴部の調整はナデ。

下 棺 上棺と同じような形状であるが、胴部上半に張りがあり、美しさに欠ける。口径38.5cm、底径8.0cm、器高62.7cm。胴部の凹凸から、粘土帶は9段と判断した。口縁部は上棺以上に屈曲が強く、K37、38号甕棺の口縁部のように、内側に突き出していない。胴部の突帯は、中位よりやや下方に巡り、断面は垂れ気味の台形となっている。外面とも黄色を帯びた灰茶色。底部近くの縦ハケ目は、逆時計回り方向に施している。

K162号甕棺墓

B群の南東端にあり、K154号甕棺墓の北東2mに位置する。方向は、N-15°~E。南南西を頭位にして、30度という角度で埋置している。この周辺の甕棺墓は、同じように南西-北東方向をとるものが多い。168cm×86cmの楕円形墓壇は、下棺側が97cmと幅広になっており、底面は平坦ではなく、斜めに掘り込み、かつ甕胸部の形状に合わせて微妙な凹凸がある。上棺と下棺は、よく類似した立岩式の甕で、器高差は推定で12.3cm、口径差は6.8cmしかない。接口式であるが、下棺の口縁部が、一部失われており、組合せ時に打ち欠いた可能性もある。下棺の底部寄りで赤色顔料がわずかながら検出された。

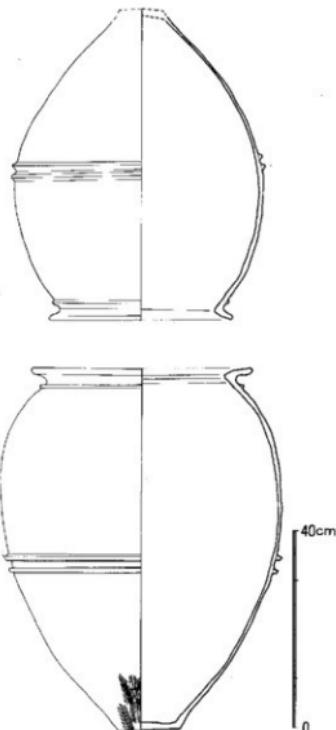


Fig.104 K162号甕棺実測図 (1/10)▶

K180号斎棺墓

B群のはば中央、北縁部に位置する。北側を頭位置とし、N-10°-Eの方向で埋置している。墓壇は、127cm×69cm、深さ38cm。この中央に二つの広口壺を接口式にして、ほぼ水平に納めている。両棺を合わせた長さは、88cmもないので小児を埋葬した斎棺墓である。両棺とも胴部に小孔があるが、上棺の小孔は通常のように底面側ではなく上方にあり、大石地区ではきわめて珍しい例である。

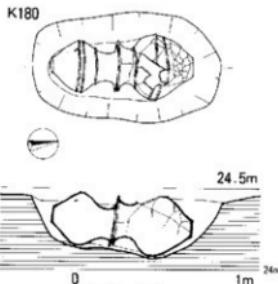
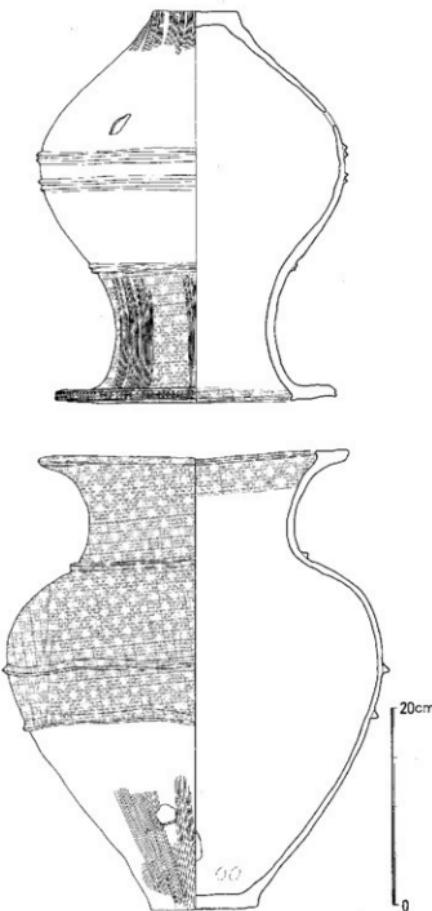


Fig.105 K180号斎棺墓出土状況図 (1/30)

上 棺 下棺とも小型壺なので縮尺は1/5に図化している。胴部は中位に最大径があり、玉葱状の器形。頸部は内側に渦曲しながらのび、4.8cmと幅広の口縁部を作る。上面は水平ではなく、わずかに下方に傾いている。口唇状の外端部には、縦の刻み目が施され、小さく上方に突き出している。口縁部上面は横ナデ後にミガキ、頸部は横のヘラナデ後に、縦の細かいミガキ、さらに丹塗りを施しているので、暗文風な効果が出ている。突帯は断面M字形で、頸部への移行部に1条、胴部中位に2条巡らしているが、直線的ではなく精緻な印象ではない。胴部の調整は丁寧で、上半部が横ナデ、下半部が縦ハケ目の後に縦のヘラナデを加えている。胎上に1mm大的砂粒をわずかに含んでいるが、精良土と言えよう。

下 棺 口径31.9cm、底径11.1cm、器高47.3cm。胴部の最大径は上方にある形状をなす。口縁部の幅は3.6cmで、ほぼ水平。外端の断面は、丸みのある方形。内側は小さく突き出して三角形断面となる。頸部に1条、胴部中位に間隔を開けて2条の断面三角形の突帯が巡っているが、直線的ではなく、雑な貼り付けである。胴部下半部には、縦のハケ目が残る。器面の調整も丁寧とは言えない。底部近くの両側に焼成後に穿たれた小孔がある。

Fig.106 K180号斎棺実測図 (1/5)

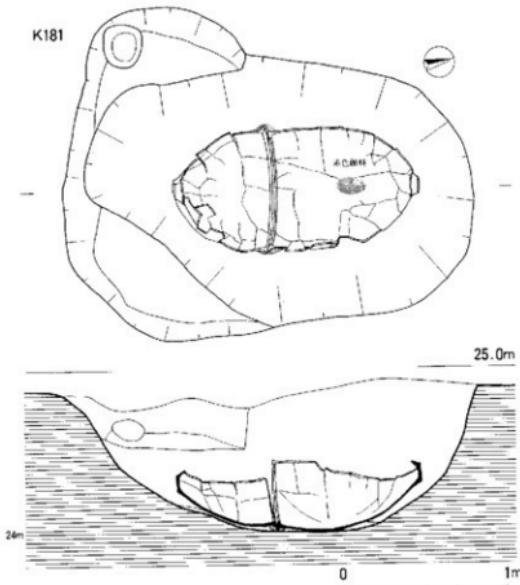


Fig.107 K181号壺棺墓出土状況図 (1/30)

上 棺 口径67.5cm、底径10.0cm、器高57.8cm。大型甕の胴下半部に口縁部をつけたような形状で、口径、器高とも十分な大きさをもつ鉢。L字形の口縁部は、粘土板を2層重ねており、断面は背の高い三角形となっている。口縁部の下方5cmに2条の断面三角形帯が巡っているが、きわめて背が低い。焼成はよい。胎土の砂粒は少ないが、器面が消耗しているので露出して目立つ。色調は外表面が明るい赤褐色。内面はやや黄色を帯びている。底部近くに黒斑がつく。器面の調整は、内外面とも縱、横のナデを繰り返している。底部近くに縦のハケ目、その上に1条の沈線を1周させている。

下 棺 口径68.9cm、底径11.2cm、器高89.3cm。胴部の最大径は72.5cmあり、口径よりも大きく、横幅のある凸弾形をしている。T字形の口縁部は、厚みのある作りであるが、両端への発達は弱い。突帶は、胴部中位に断面三角形を2条巡らしており、小さく、かつ連接している。口縁部下に突帶部はない。焼成はよく堅い仕上がりである。色調は内外面とも赤褐色。小さな黒斑が胴部の3か所についている。

K181号壺棺墓

A群の南西端に4基の土壙墓と6基の壺棺墓からなる小群があり、K181号壺棺墓はこの中に含まれる。A群からやや離れており、また前期末から中期前葉の壺棺墓を主にしていることから、A群から分離すべきかもしれない。墓壙は250cm×173cmと大きな楕円形で、90cmと深さもある。大型の甕と壺を接口式にして水平に埋置している。下棺から赤色顔料を検出した。

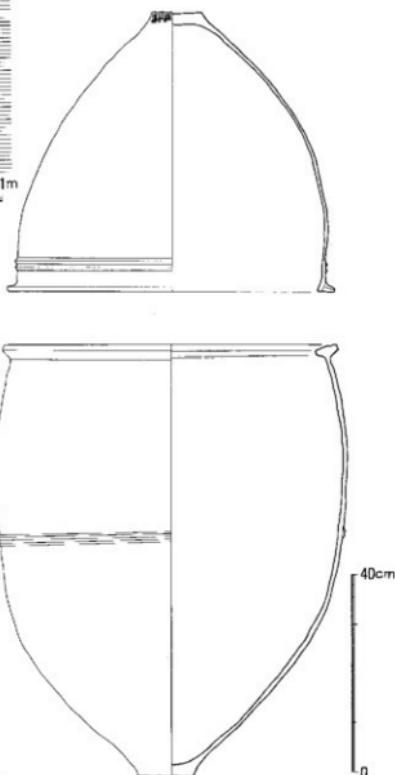


Fig.108 K181号壺棺実測図 (1/10) ▶

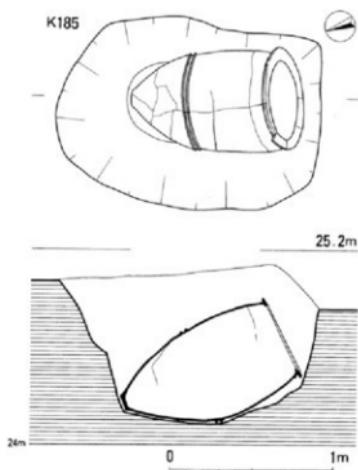


Fig.109 K185号壺棺墓出土状況図 (1/30)

K185号壺棺墓

B群にある。墓壠の長軸は163cm。幅は118cm。中央に大型甕を24度に傾けて埋置している。墓壠の平面形は、甕の底部側が丸く、口縁部側は直線的である。93cmと深く、壁は直に近い。痕跡は止めていないが、木製の蓋があったのであろう。

單棺 口径58.2cm、底径10.5cm、器高103.0cm。胴部は砲弾形であるが、口縁部近くで内側に彎曲しているので背が高い割りには丸みがあり、ドングリ状となっている。口縁部内端は断面方形で、突き出しは弱く、T字形よりもL字形に近い。口縁部直下に1条の断面三角突帯、胴部中位よりやや下方に断面台形突帯を2条巡らす。胴部には凹凸が少なく、粘土帶の積み上げ数を正確に判断できないが、11段前後か。胎土には石英、長石砂粒を通常よりやや多めに含む。色調は、内外面とも赤褐色を呈する。胴上半部に、赤色顔料と思われる径4mm大の赤い斑点が散らばっている。器面の色調は、内外面とも明るい赤褐色を呈する。

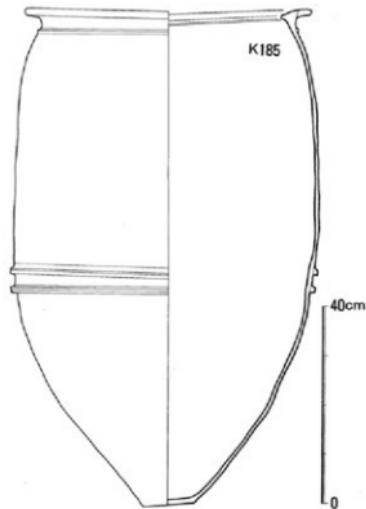


Fig.110 K185号壺棺実測図 (1/10)



Fig.111 K185号壺棺墓出土状況

K186号壺棺墓

B群の南東端の一組内にあり、あたかも横にそよううにK188号壺棺墓とK200号壺棺墓の大型壺棺墓が接近している。墓壇は小さな楕円形で、85cm×72cmを測る。上棺に小型甕、下棺は広口壺を用いている。広口壺は、頸部より上を打ち欠き、部分的に残った頸部の一部が上棺に入り込んでいる。上棺からすると覆口ともいえるが、ここでは接口式としている。

上 棺 両棺とも縮尺は1/5である。外面に丹塗りが施された小型甕で、胴部の上位に張りがある。口径は31.8cm。底部が削平されているが、底径9.5cm、器高35.0cmと推定した。口縁部は、丸みをもって屈曲し、水平ではなくやや外に開いている。外端部の断面も丸みがある。突帯は、口縁部直下に1条、胴部上半部に2条巡っている。細かく見ると断面は中央がわずかに凹んだM字形をしている。貼り付けは雄で、きれいな平行関係はない。内面の色調は、赤みを帯びた茶褐色。焼成はよく、胎土の砂粒は少ない。内面の調整はナデ、数か所に外面の舟が付着している。外面の横のミガキ、底部近くは縦のミガキ。

下 棺 頸部上方が打ち欠かれているので、全形を知りえないが、残った破片からすると、頸部は直に立ち上がった後に口縁部で大きく開くのであろう。胴部の最大径は、中位よりやや上方にあり、36.3cmを測る。胎土の砂粒は少ないが、精良土ということではない。色調は、内外面とも明るい赤褐色。内面はわずかに黄色を帯びている。突帯は頸部との境と胴部最大径のやや上方に2条巡っている。上棺よりも一層雑な貼り付けである。胴部の凹凸から、7段の粘土帶積み上げと判断した。器面の調整はナデ。胴部下半には、ハケ目をナデ消している。8×6cm大の縫に長い孔があるが、埋葬時の穿孔か不明。突帯部に黒斑がある。

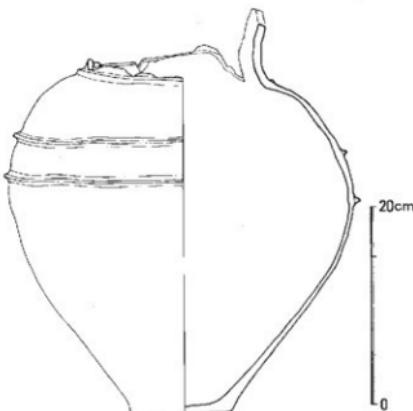
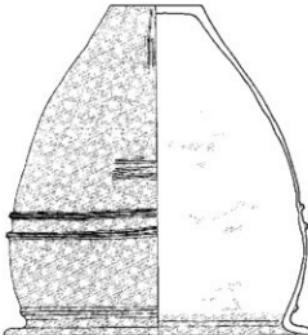
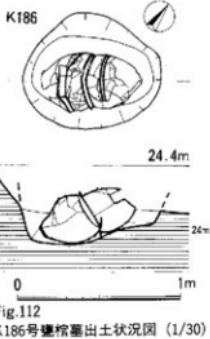


Fig.113 K186号壺棺実測図 (1/5)

K188

K188号甕棺墓

K186号甕棺墓の東側に近接する。193cm×133cmの大きな墓壇に、大型甕を北を頭位にして14度の傾斜で埋置している。口縁部側にも空間があり、大型甕を据えてから遺体を埋納するには十分である。木製の蓋が被さっていたと思われるが、積極的に裏付ける痕跡は認められない。

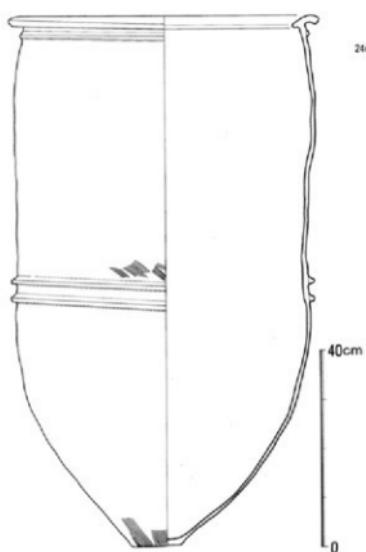


Fig.115 K188号甕棺実測図 (1/10)

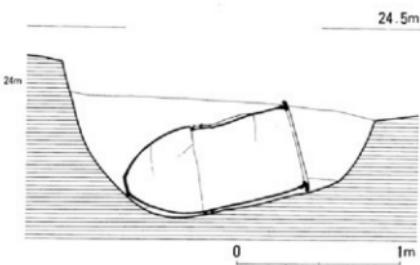


Fig.114 K188号甕棺墓出土状況図 (1/30)

單 棺 B群のK186号甕棺墓の東横に接近している。器高109.5cm。K151号甕棺について背が高い大型甕である。細長い砲弾形の胴部は、何度も凹凸を繰り返しながら立ち上がり、口縁部につながる。この甕棺墓の特徴は、分厚く作られた口縁部であろう。T字形であるが、上面は内側に強く内傾し、外端部は、口縁部直下の突帯を巻き込むように湾曲している。焼成はよく、堅い。色調は黄色を帯びた灰色。胴部の粘土帶積み上げは、底部、口縁部を除くと13段であろう。胴部中位の上と底部近くにハケ目が残る。



Fig.116 保存のため埋め戻し作業

大石地区甕棺墓については、第461集に前期～中期初頭、中期前葉、中期中葉、中期後葉の4時期に分けた分布変遷図を掲載している。その後、時期を訂正した甕棺墓もあったので、今回すべての甕棺墓一覧表と合わせて分布変遷図を作成した。もちろん、分布の傾向は、第461集のものと大きく変わるものではない。

大石地区では、11基の甕棺墓と4基の木棺墓から、青銅製や石製の武器類、そして玉類などの遺物が出土した。これらは激しく破損したものが多く、宝器的な副葬品として取り扱われたとはとても思えない。これまで、学界や市民、そして地元の関心を集めて保存、活用を図りたいという発掘担当者としての素朴な目的から、高木地区との質的な違いを“王墓”と“戦士墓”という階層的な差として解釈し、説明をしてきた。

しかしながら高木地区“王墓”的副葬行為は、中期初頭で終わるのに対し、大石地区“戦士墓”では、副葬とは断定できないがK53、71号甕棺墓のように中期前葉まで残っている。また大石地区は共同墓地ゆえか中期前葉の甕棺墓が多く、そのまま中期中葉、中期後葉と引き継がれていくのが特徴である。極渡地区の中期後葉の埴丘墓まで有力者層たちは、どのような成長を遂げるのか、なぜ“戦士”墓だけが存続しているのか、、、。まだまだ検討、究明することは多い。

平成10年秋に永眠された森貞次郎先生には、何度も発掘現場で丁寧なご指導をいただき、高木地区に加えて大石地区も保存することができました。発掘担当者一同、感謝するとともに、ご冥福をお祈り致します。（力武）



Fig.118 視察中の森貞次郎先生

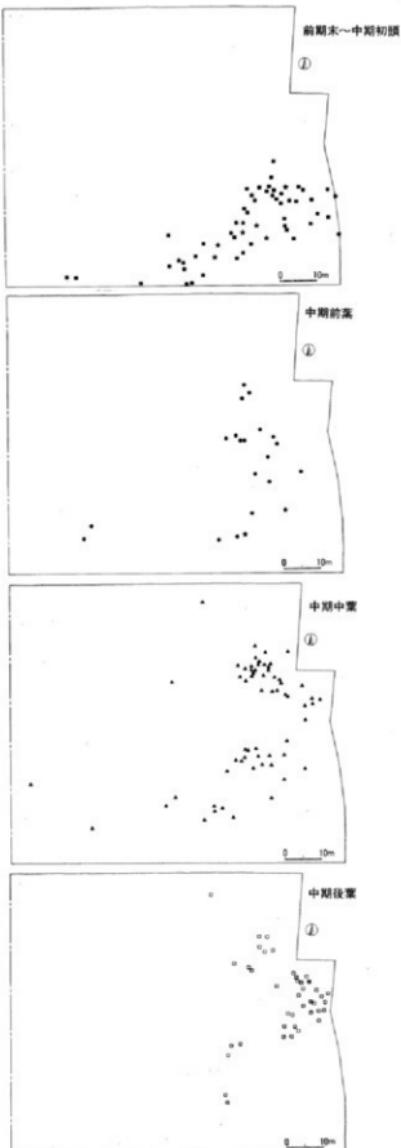
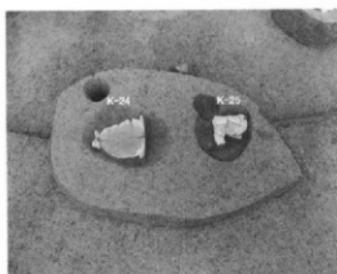


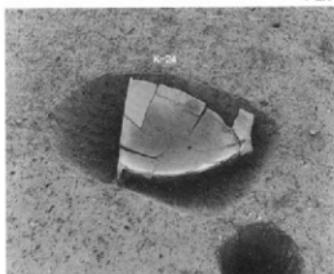
Fig.117 大石地区弥生墓地の変遷
星印は遺物を出した甕棺墓

図 版

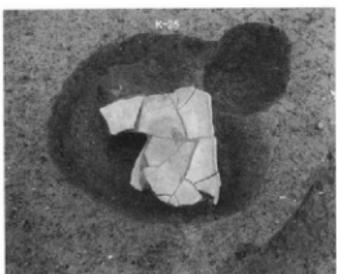
P L A T E S



1 第一次調査Ⅱ区K-24・25検出状況 689



2 第一次調査Ⅱ区K-24近景 692



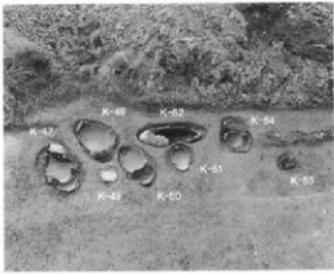
3 第一次調査Ⅱ区K-25近景 691



4 第一次調査Ⅲ区全景（北から） 515



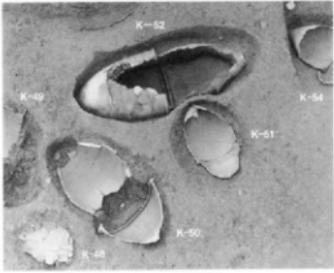
5 第一次調査Ⅲ区全景（南から） 514



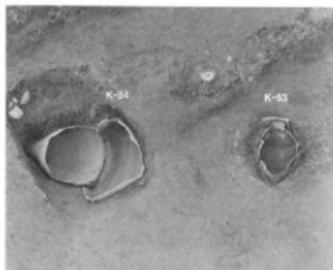
6 Ⅲ区K-47~54検出状況（北から） 533



7 Ⅲ区K-47~52検出状況（北から） 565

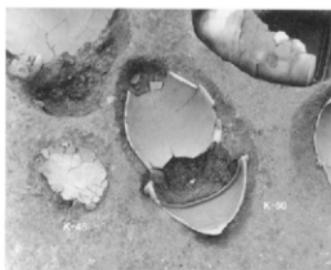


8 Ⅲ区K-48,50~52,54近景 540



9 Ⅲ区K-53・54近景

538



10 Ⅲ区K-48・50近景

536



11 Ⅲ区K-51・52近景

537



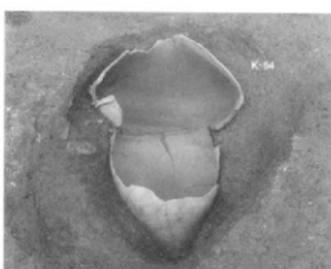
12 Ⅲ区K-47,48近景

569



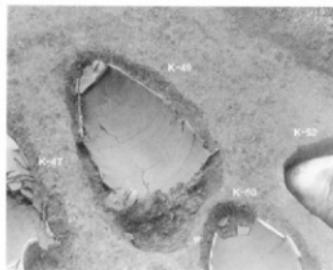
13 Ⅲ区K-53近景

567



14 Ⅲ区K-54近景568

568



15 Ⅲ区K-49近景

535



16 Ⅲ区K-56～59・233全景（南から）

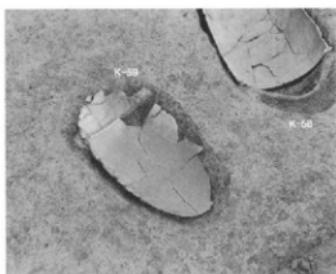
516



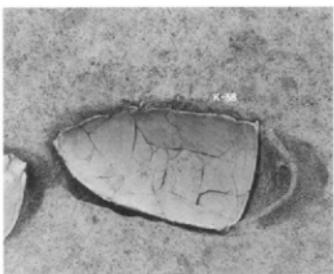
17 Ⅲ区K-56~59検出状況（北から） 518



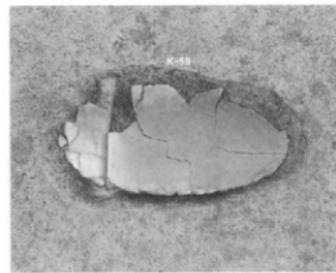
18 Ⅲ区K-56~59近景 532



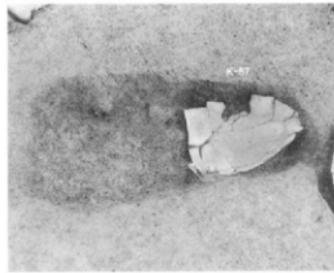
19 Ⅲ区K-58,59近景 526



20 Ⅲ区K-58近景 529



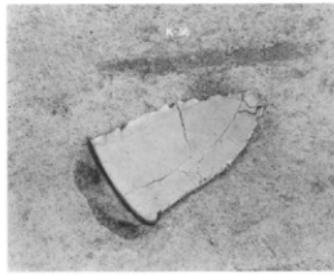
21 Ⅲ区K-59近景 527



22 Ⅲ区K-57近景 530



23 Ⅲ区K-233近景 507



24 Ⅲ区K-56近景 531



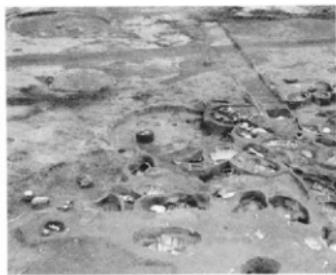
25 N区全景（西から）

172



26 N区Bゴケイ-ジ（北から）

381



27 N区Bゴケイ-ジ（北から）

313



28 N区全景（東から）

169



29 N区全景（南東から）

168



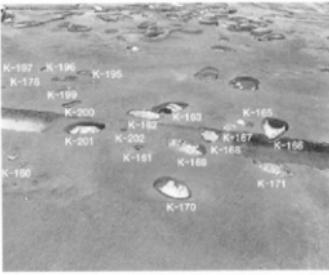
30 N区Bゴケイ-ジ（東から）

253



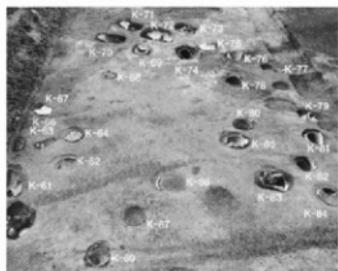
31 N区Bゴケイ-ジ（北から）

382

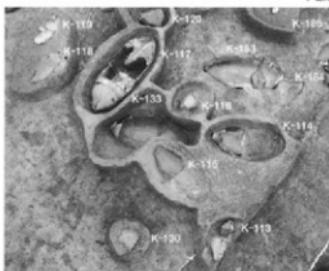


32 N区Eゴケイ-ジ（南から）

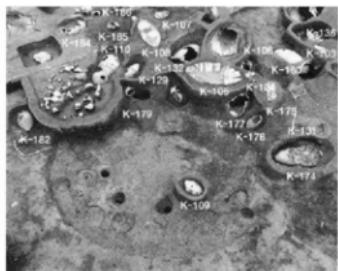
121



33 N区Aケル-7' K-60~63他 303



34 N区Bケル-7' K-113~120他 211



35 N区Bケル-7' 中央部付近（南西） 178



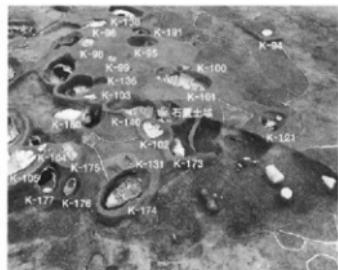
36 N区Bケル-7' K-94~101他 53



37 N区Bケル-7' 中央西南部 215



38 N区Bケル-7' 中央北側（北から） 391



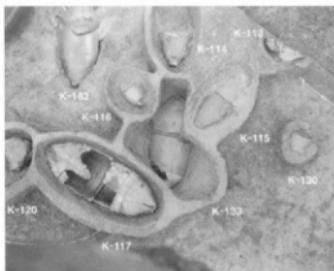
39 N区Cケル-7' K-94~96他 393



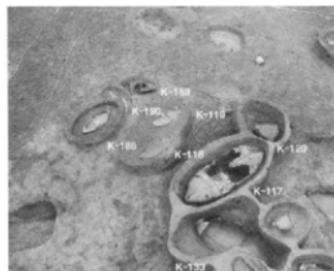
40 N区Bケル-7' K-114~116他 213



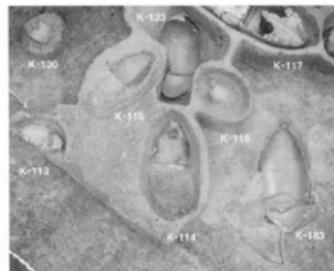
41 IV区 Bケル-7 K-210~212他 414



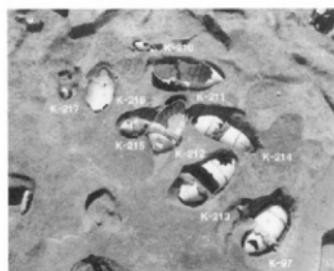
42 IV区 Bケル-7 K-113~117他 417



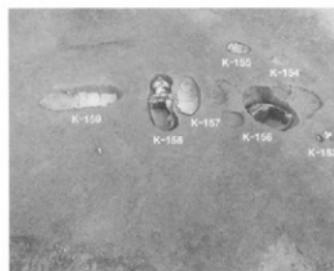
43 IV区 Bケル-7 K-114~120他 418



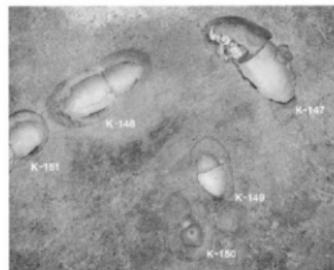
44 IV区 Bケル-7 K-113~117~183他 420



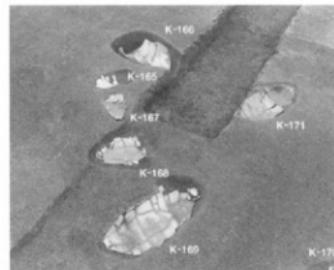
45 IV区 Bケル-7 K-210~217他 155



46 IV区 Bケル-7 K-153~159他 96



47 IV区 Dケル-7 K-147~151他 430



48 IV区 Eケル-7 K-165~171他 432



49 M区Bケルア K-140他

200



50 M区Bケルア K-95・96他

400



51 M区Bケルア K-105他

395



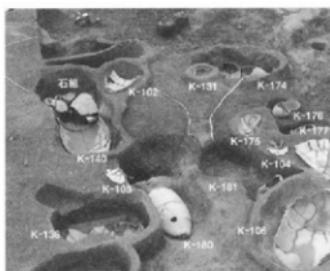
52 M区Bケルア K-111他

207



53 M区Bケルア K-108他

406



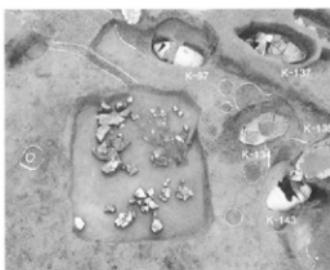
54 M区Bケルア K-180付近

202



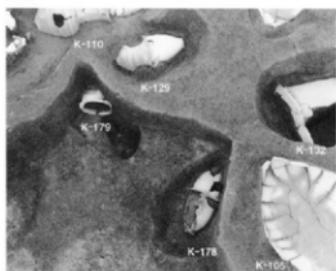
55 M区Bケルア K-96他

404



56 M区Bケルア SC-53付近

52



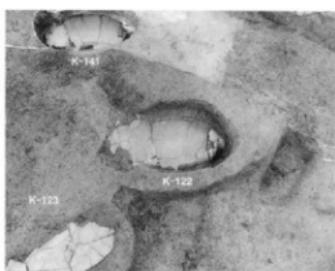
57 IV区Bケル-7 K-105他 269



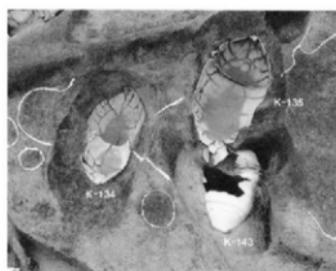
58 IV区Bケル-7 K-97他 396



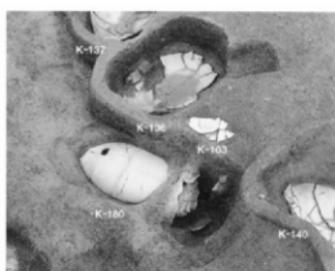
59 IV区Bケル-7 K-137他 402



60 IV区Cケル-7 K-122他 426



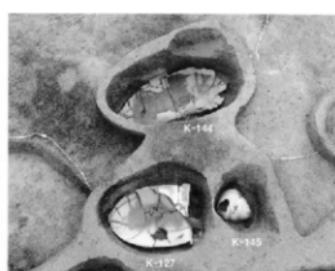
61 IV区Bケル-7 K-143他 199



62 IV区Bケル-7 K-136-138他 401



63 IV区Bケル-7 K-96他 403

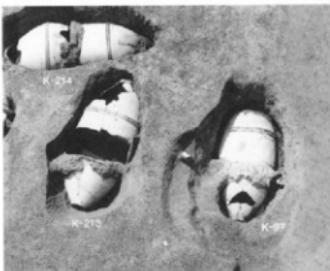


64 IV区Bケル-7 K-127他 71



65 IV区Bケル-7 K-212他

411



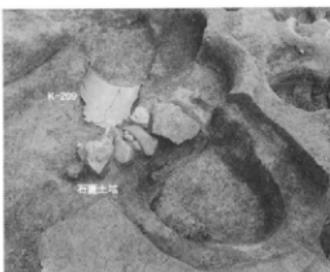
66 IV区Bケル-7 K-213他

408



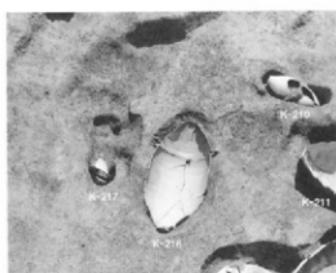
67 IV区Bケル-7 K-102-140

405



68 IV区Bケル-7 K-209

135



69 IV区Bケル-7 K-216他

413



70 IV区Dケル-7 K-126-142

429



71 IV区Aケル-7 K-70

438



72 IV区Dケル-7 K-125他

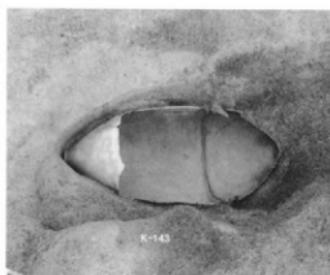
428

DI 1a



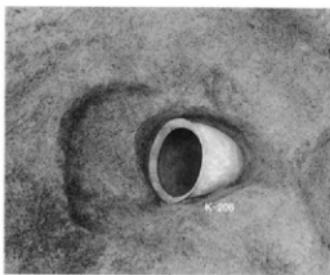
73 IV区Cケ'室-7' K-141

120



74 IV区Bケ'室-7' K-143

335



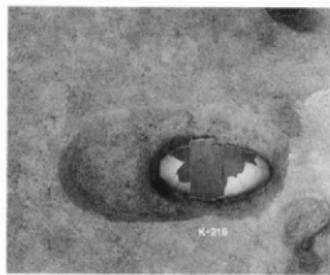
75 IV区Bケ'室-7' K-209

371



76 IV区Dケ'室-7' K-157~159

443



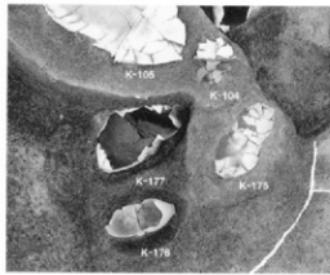
77 IV区Cケ'室-7' K-219

25



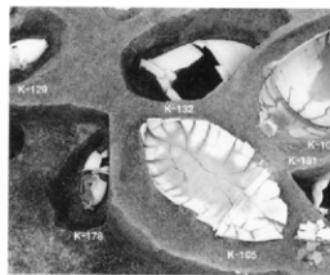
78 IV区Eケ'室-7' K-219

24



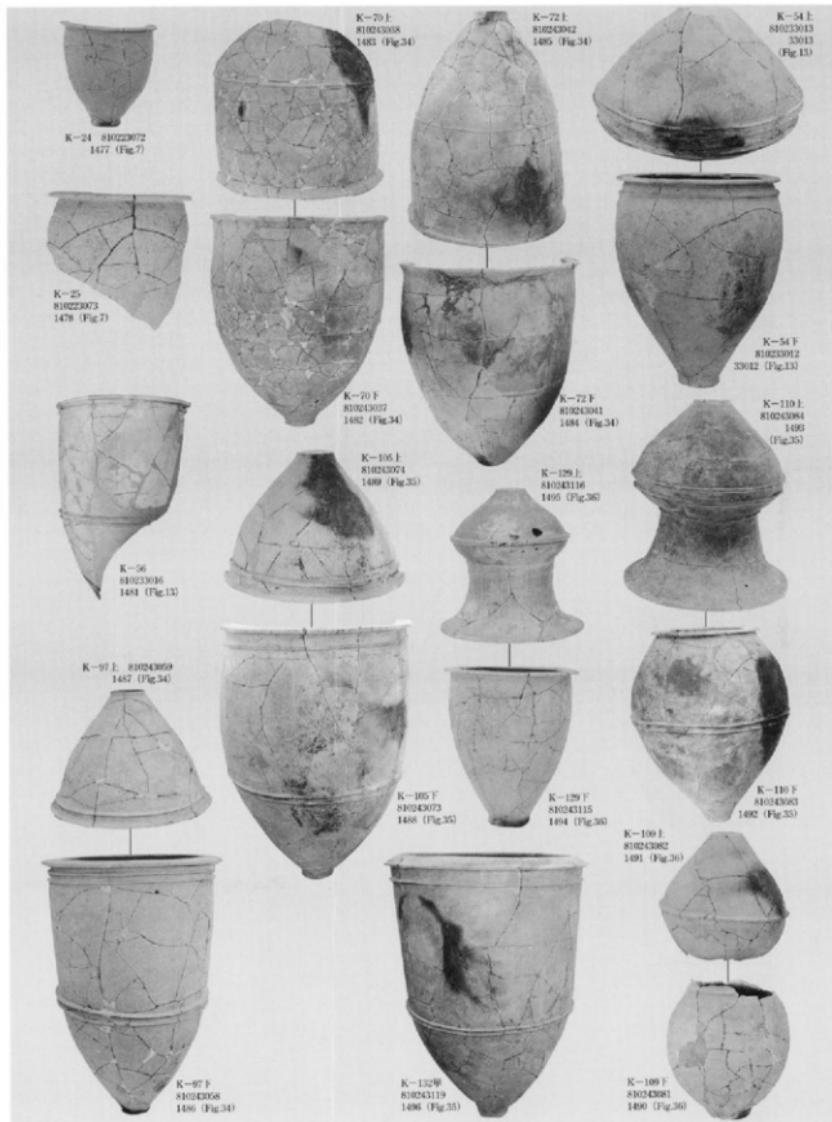
79 IV区Bケ'室-7' K-175他

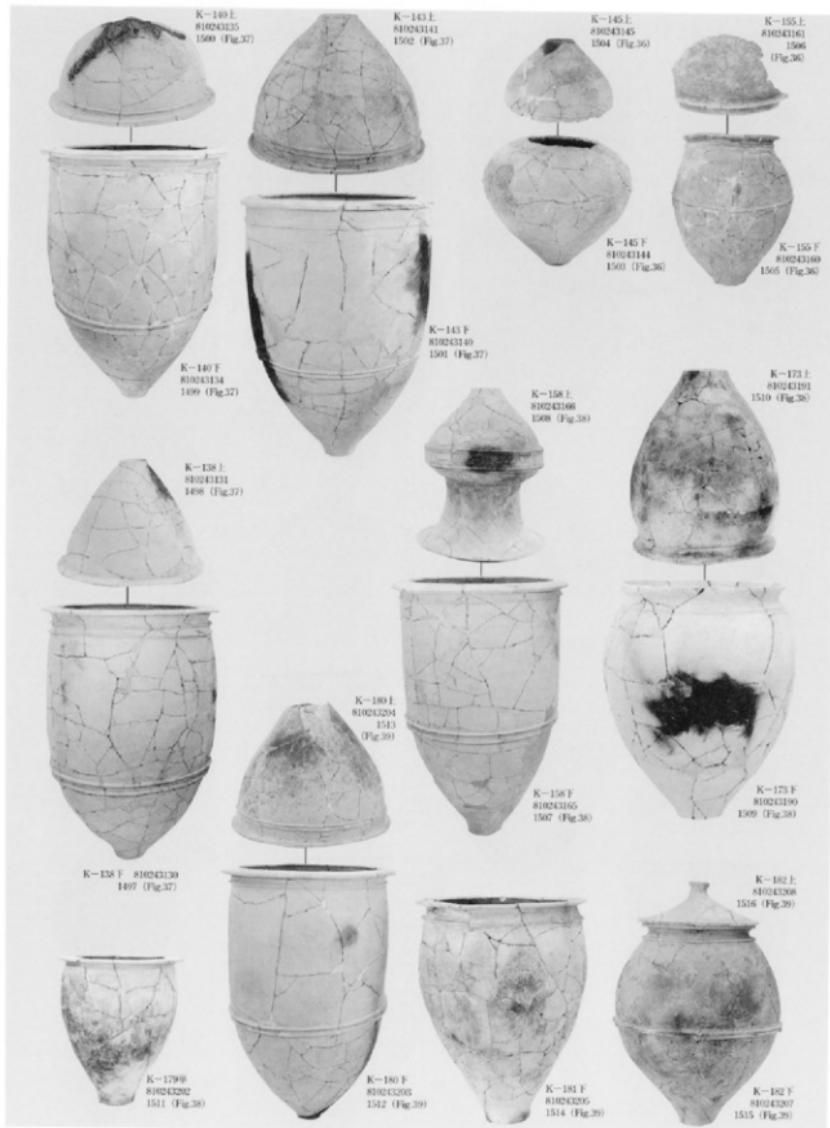
190

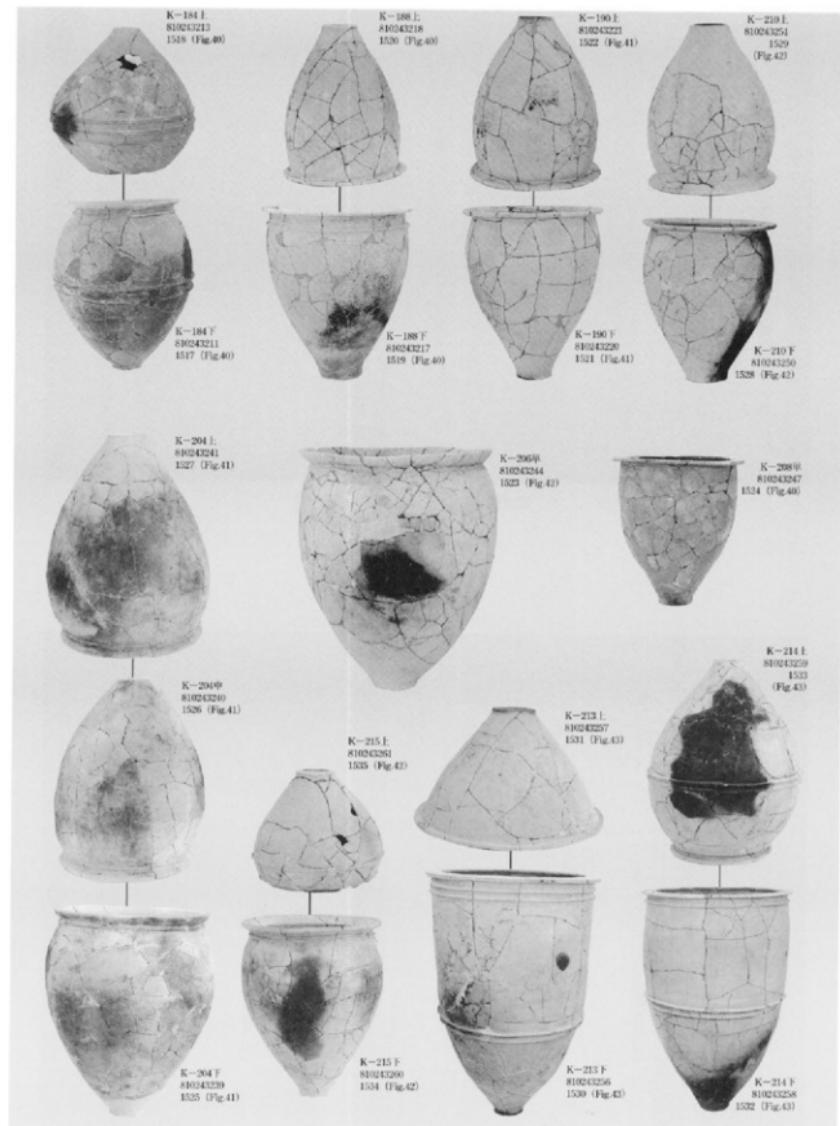


80 IV区Bケ'室-7' 中央部K-105

394









1. 調査前の樋渡墳丘墓全景（東から）



2. 樋渡墳丘墓検出状況（東から）



1. 楠渡墳丘墓周辺空撮（北西から）



2. 楠渡墳丘墓全景（北から）



1. 横渡填丘墓遠景（南から）



2. 横渡填丘墓東西土層断面（北から）



3. 横渡填丘墓西側土層断面（南西から）



1. K64～68号壺棺墓・木棺墓出土状況（南から）



2. K69～73号壺棺墓出土状況（東から）



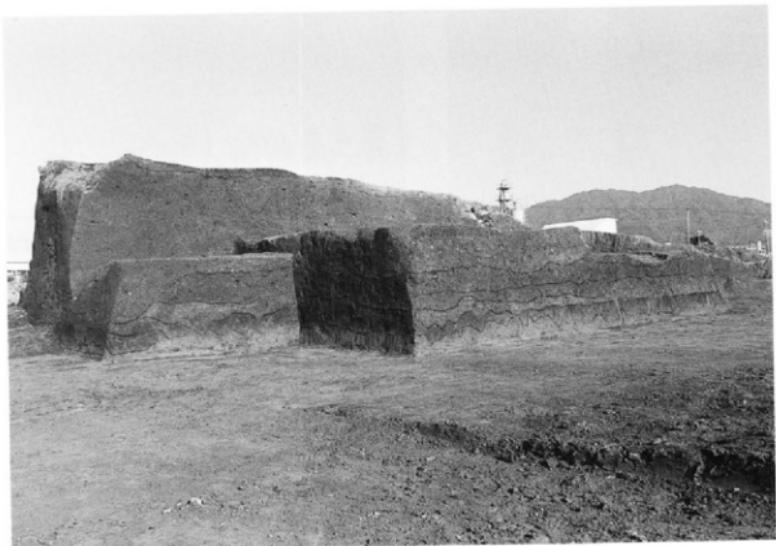
1. K77号墓出土状況（東から）



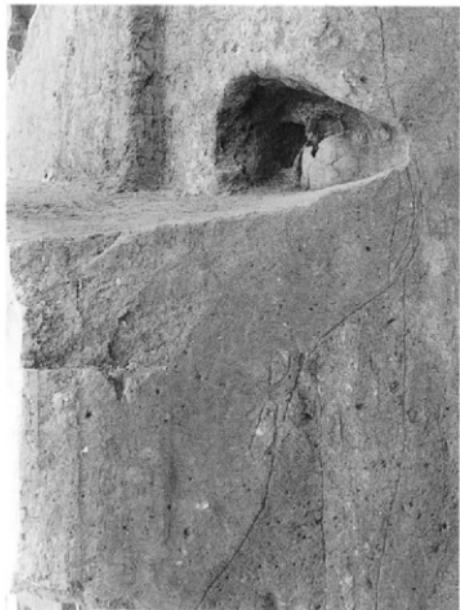
2. K90号墓出土状況（西から）



1. K77号墓出土状況（南から）



2. 硬波塙丘墓西側土層断面（北西から）



2



4



1

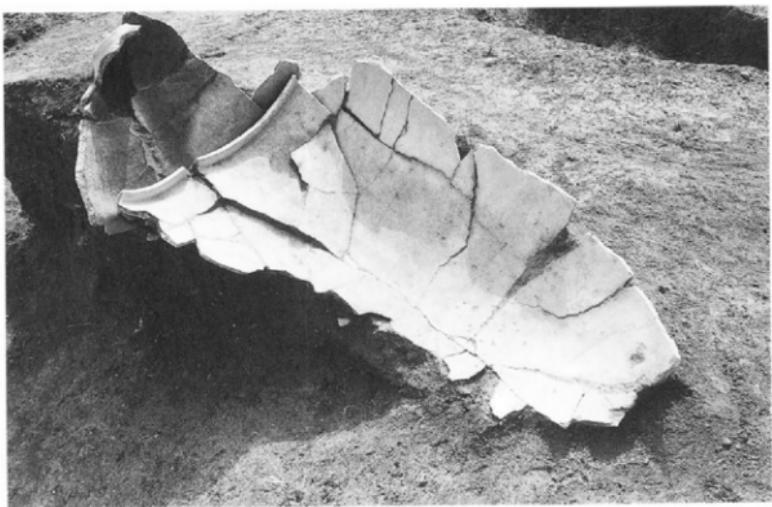


3

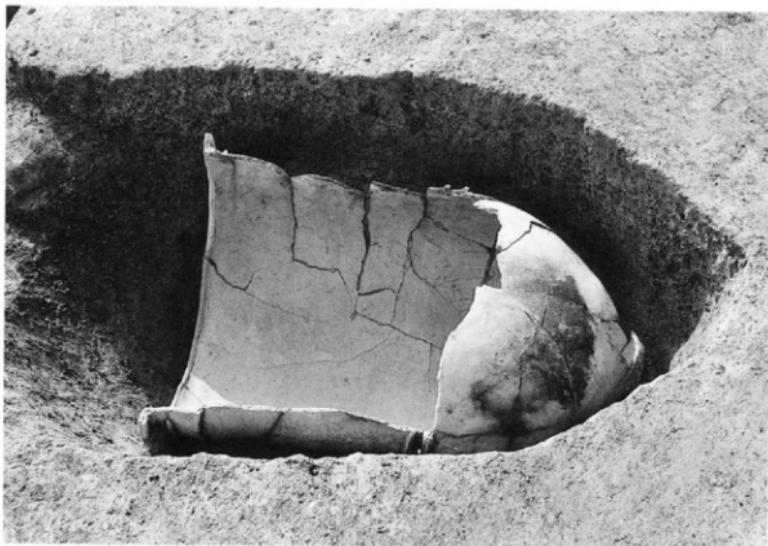
1. K63号墓棺墓出土狀況（北から）
2. K79号墓棺墓出土狀況（北から）
3. K87号墓棺墓出土狀況（西から）
4. K92号墓棺墓出土狀況（南から）



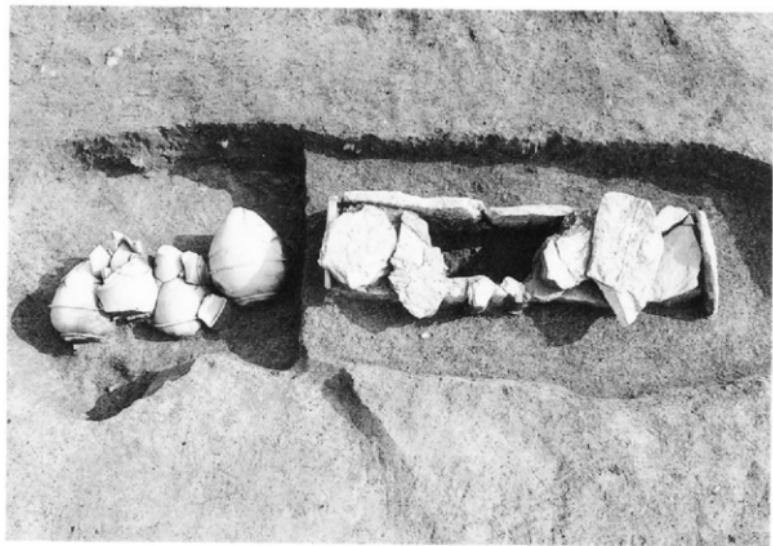
1. K88号壺棺墓出土状況（西から）



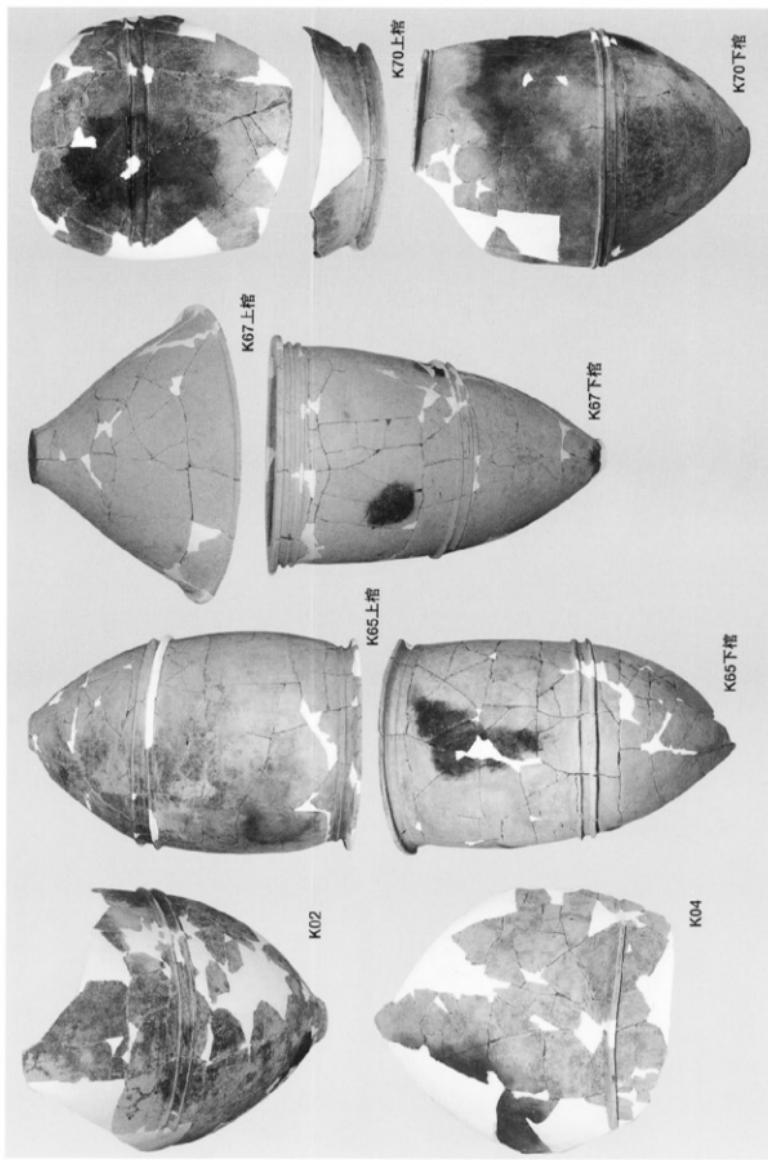
2. K89号壺棺墓出土状況（東から）



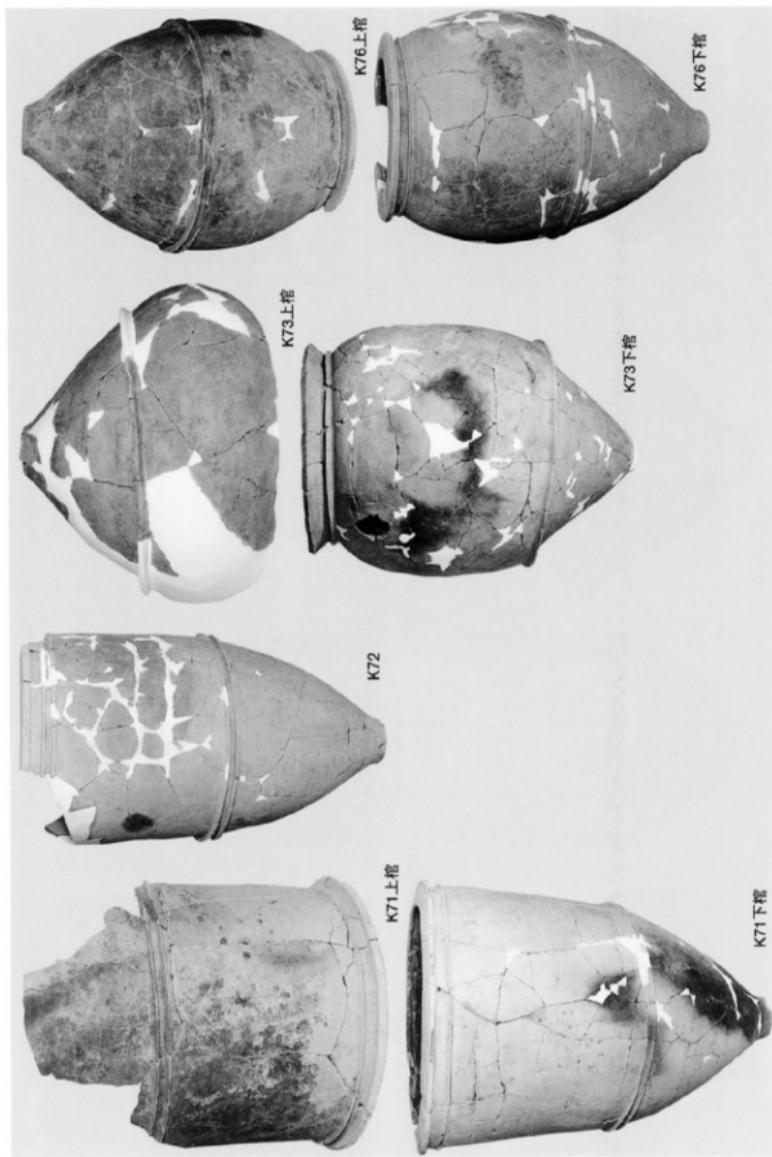
1. K91号鹿棺墓出土状況（東から）



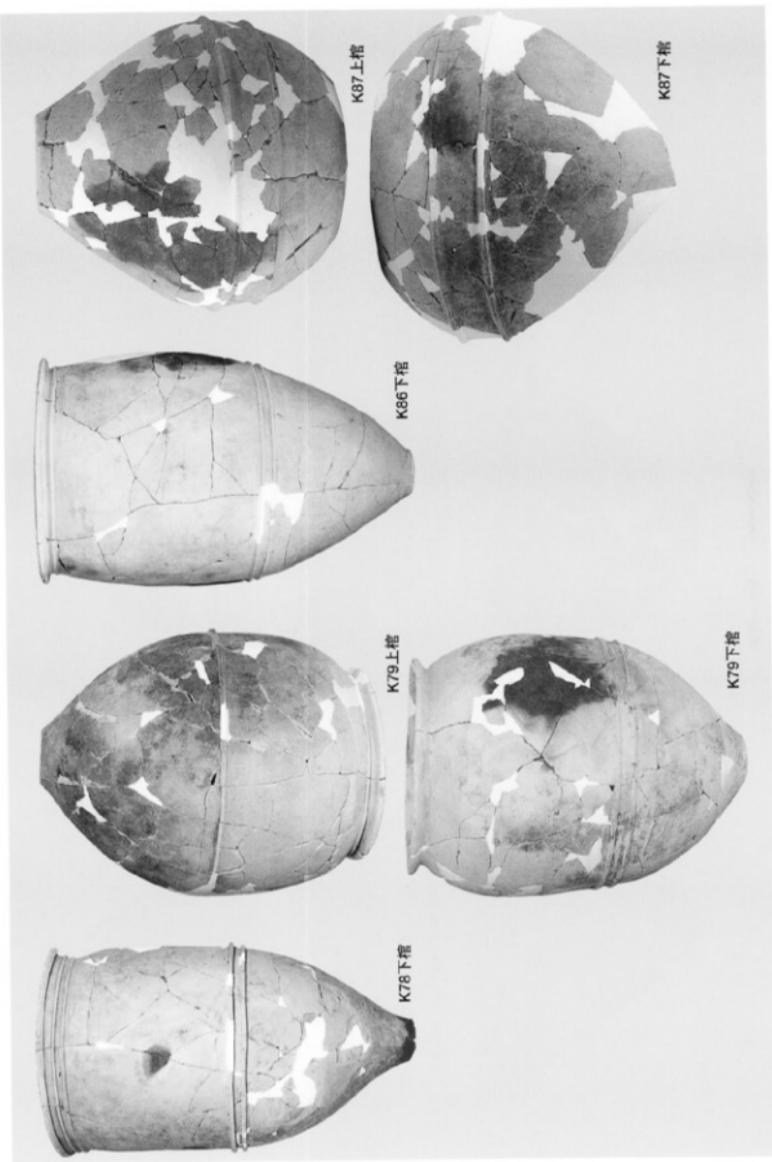
2. S01石棺墓及びSK93土壙出土状況（北から）



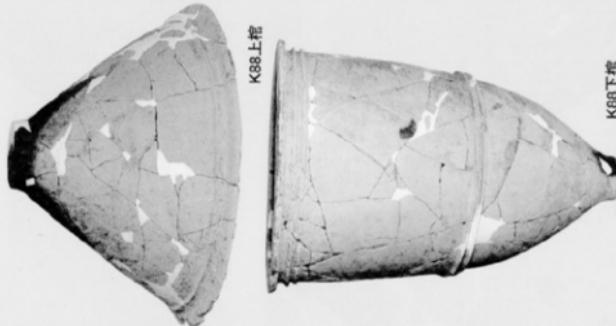
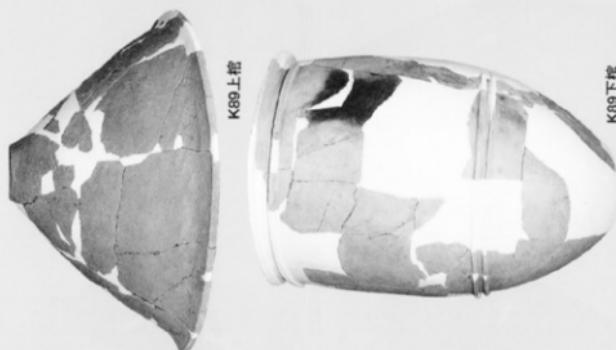
K02 • 04 • 65 • 67 • 70号墓棺



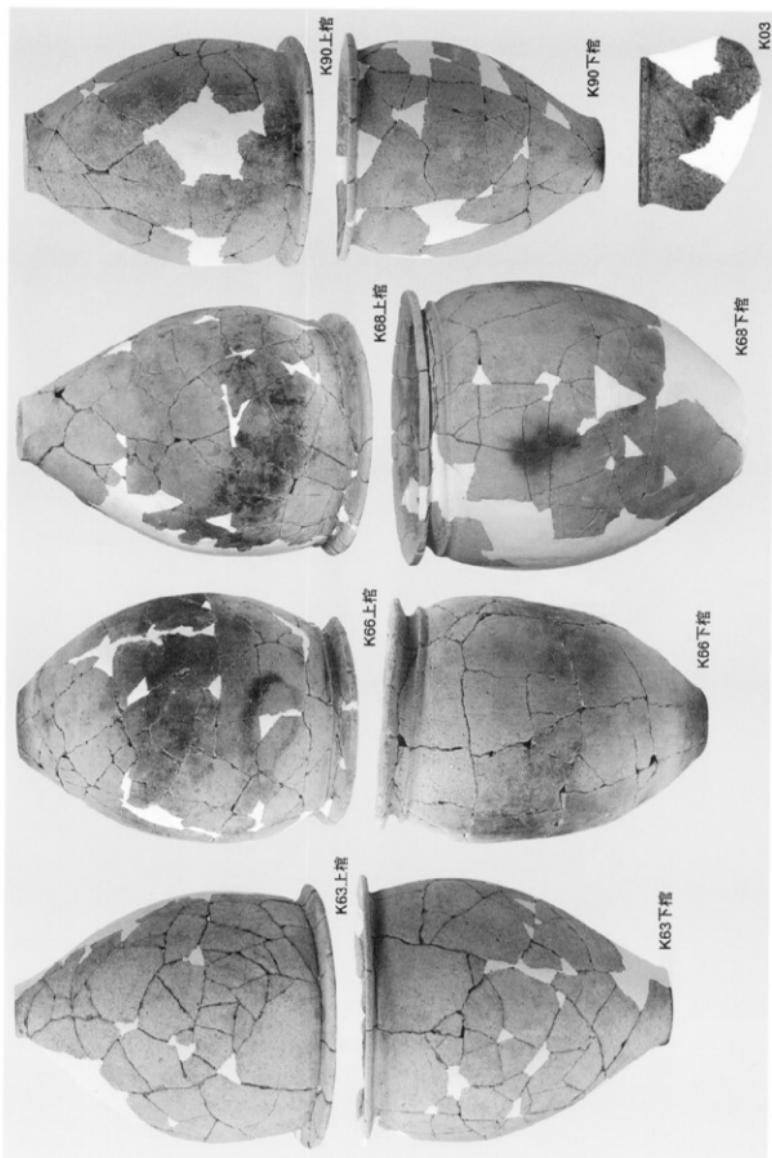
K71 · 72 · 73 · 76号墓棺



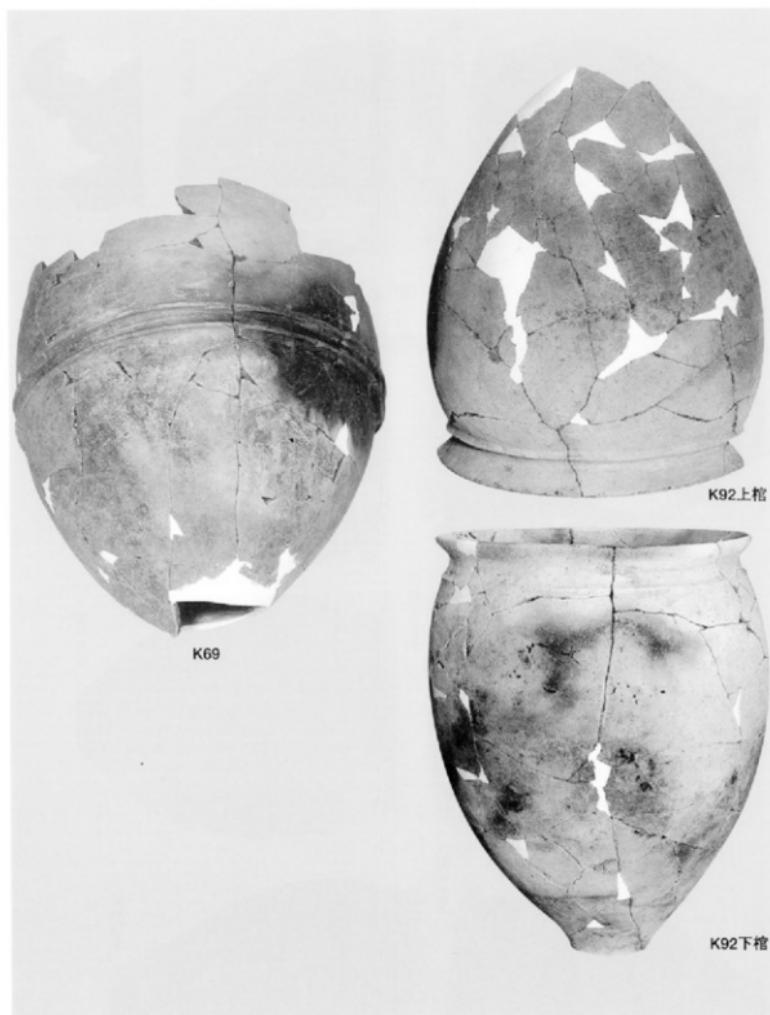
K78・79・86・87号墓棺



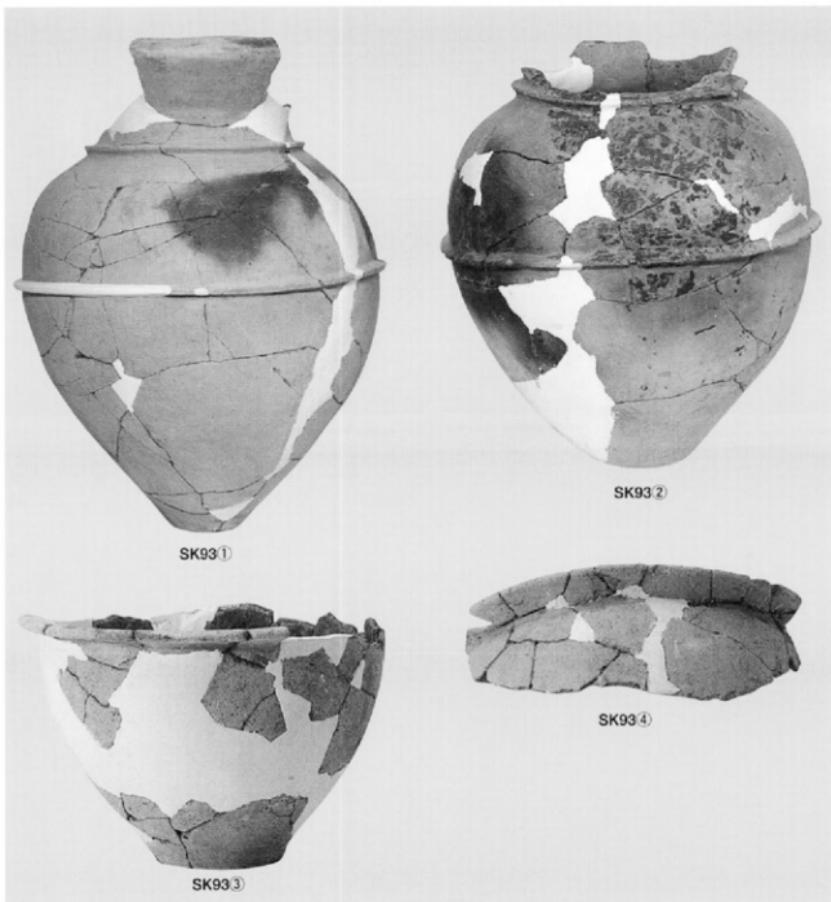
K88・89・91号櫛棺



K63 • 66 • 68 • 90 • 03号墓棺



K69 · 92号壺棺



SK93出土土器



発掘調査前の大石地区（白線内が下の写真範囲）



大石地区弥生墓地



K37



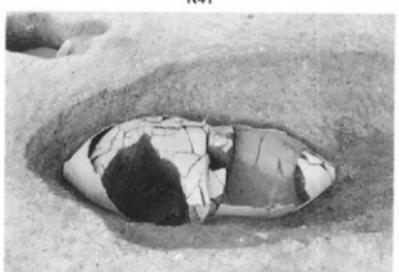
K38



K41



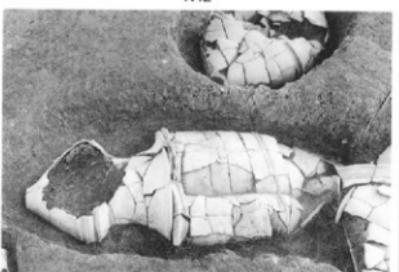
K41



K42



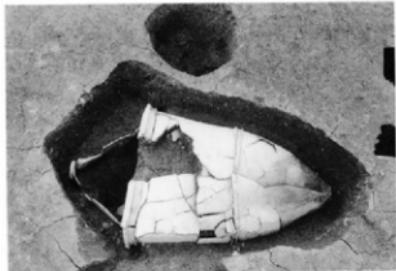
K113



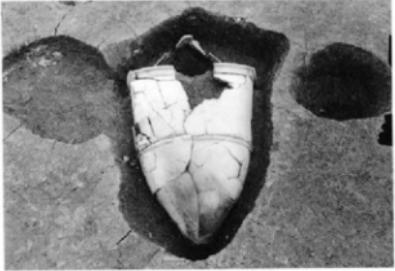
K115



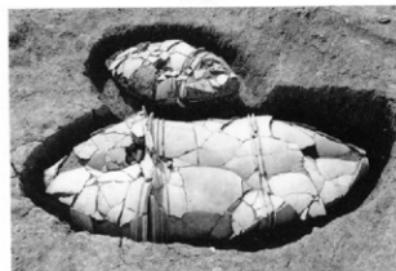
K125



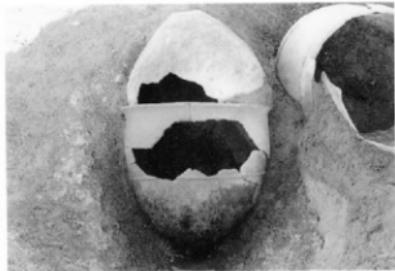
K134



K134



K146



K148



K151



K181



K182



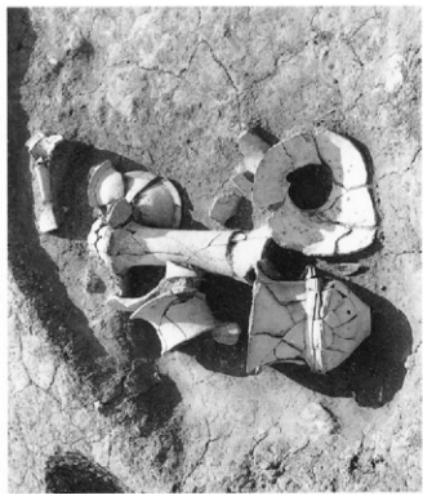
K186



2号



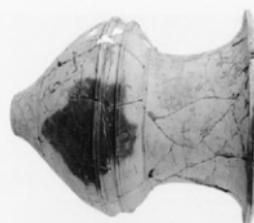
4号



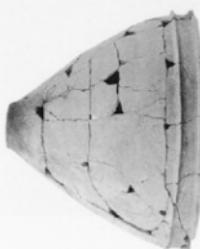
3号



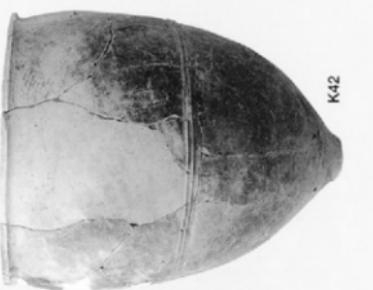
5号



K115



K113

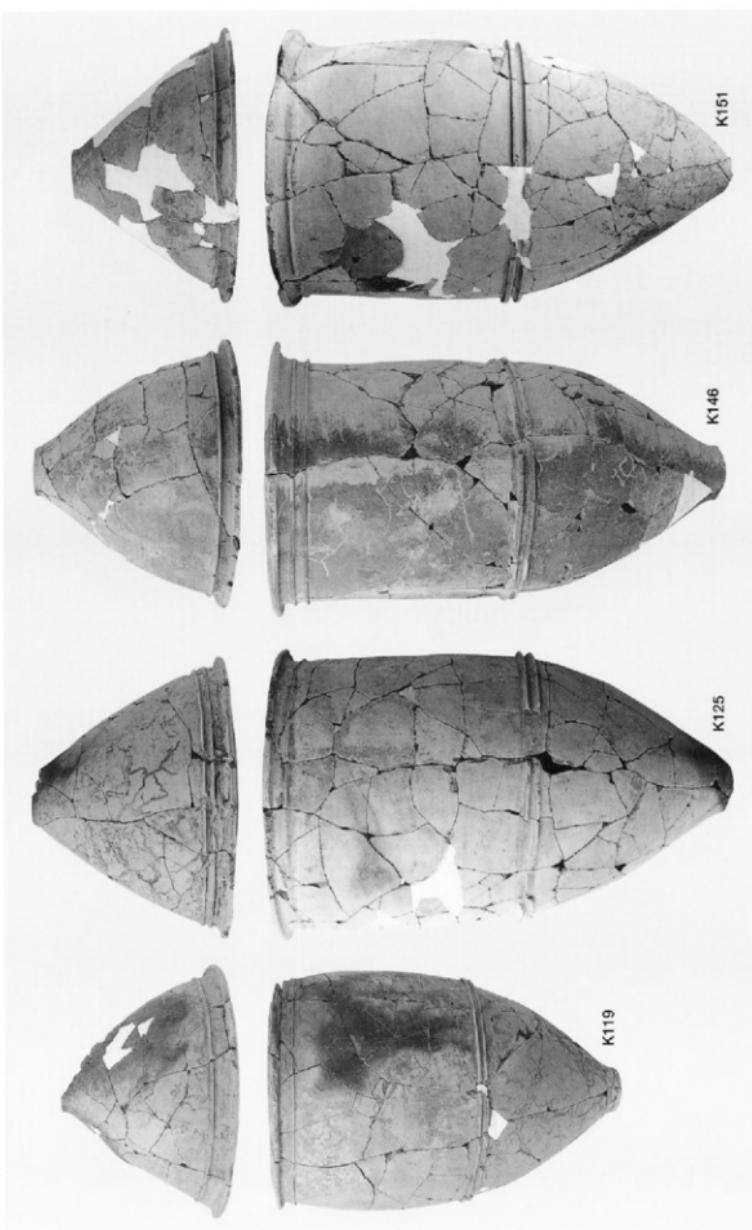


K42

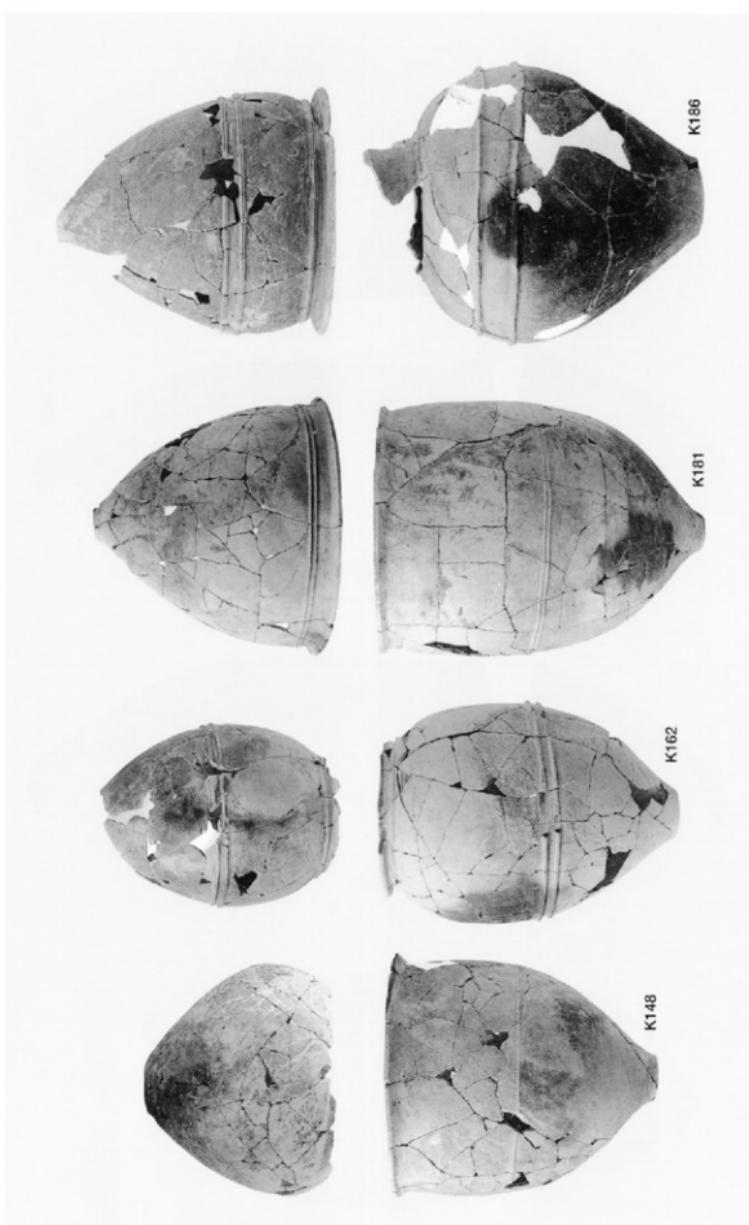


K38

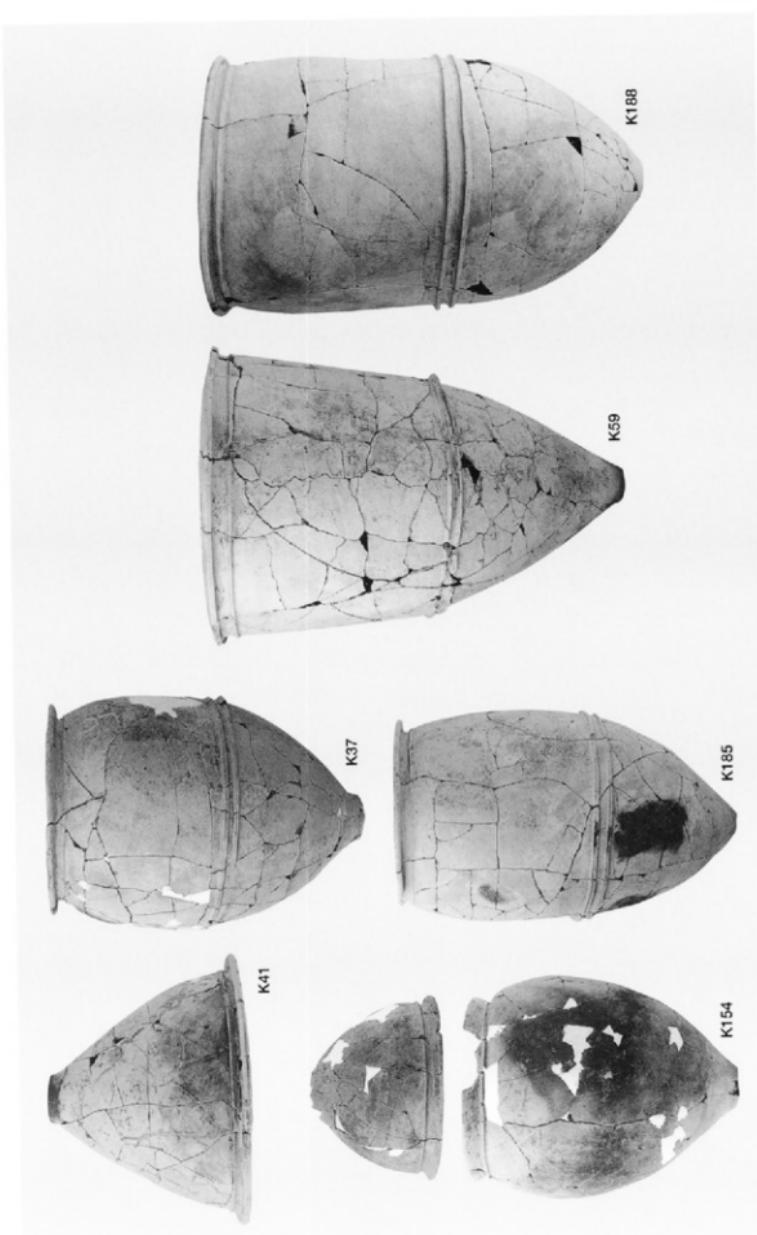
K38 K42 K113 K115



K119 K125 K146 K151



K148 K162 K181 K186



K37 K41 K59 K154 K185 K188

吉武遺跡群 XI

—弥生時代墓地の調査報告2—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第600集

1999年3月30日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号
印刷 セントラル印刷株式会社
福岡市中央区大宮1丁目5番13号

吉
武
遺
跡
群

XI

福岡市埋蔵文化財調査報告書第六〇〇集 一九九九年

福岡市教育委員会